
銀色の虹の果てに

ペンギ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀色の虹の果てに

【Nコード】

N5423Q

【作者名】

ペンギ

【あらすじ】

かつての世界崩壊の危機より生き残った世界、エルスペロ。その中心に存在する『学びの庭』^{ガーデン}に通う少年と少女はある日、一人の少女と出会った。

共にガーデンに通う事になった彼らは、様々な場所で、様々な出会いを遂げ、やがて運命という名の糸に絡め取られていく。その果てに待っているものは希望か、それとも絶望か…

かなりありきたりな設定です。

主人公最強モノではありません。

『始まりの始まり』 1 - 1 (前書き)

処女作ですので、誤字脱字、表現が不自然な部分などのご指摘、ご感想、批評などを頂けると幸いです。是非とも今後の参考とさせていただきますので、宜しくお願い致します。

むかーし昔、人が生まれるよりもずっと昔、世界は一つの大
陸でした。

世界は楽園エデンと呼ばれ、聖の神様が創った生き物と魔の神様が創つた生き物が、平和に暮らしていました。

ところがある日、一人の頭の良い魔の生き物が、聖と魔、両方の神様の力を持った魔神・レブルスを創ってしまいました。

二つの神様の力を持ったレブルスはその強大な力に耐えられず、やがて世界を滅ぼし始めました。

これを止める為に、聖と魔の神様たちは激しい戦いの末、なんとかレブルスを世界の中心に封じ込めました。

しかし、その時には既に世界の半分が滅んでしまい、それはレブルスを封印した後も止まりませんでした。

神様たちは楽園を半分に分け、滅んだ世界をさらに半分に分けて自らが支える事によって、ようやく世界の死を抑える事に成功したのです。

神様たちは、聖の神様が管理する世界をエルセイン、魔の神様が管理する世界をエルノワール、生き残った世界をエルスペロと呼び、エルスペロの中心に生命いのちの樹を植える事で、エルスペロの生命の力を滅んでしまった二つの世界に少しずつ分けるようにしました。

さらに、二つの神様たちはエルスペロの生命の力を少しでも取り戻す為に、力は弱いけれど賢い知恵を持った「人」という新しい生命を創り、ほんの一握りの者たちに加護を与えて世界を繁栄させるように言い、精霊の王たちにそれを見守るように言いました。

そして多くの力を使った神様たちは、いくつかの種族と共に滅んだ世界を支える為に去っていったのでした。

そうやって生き残った世界は、神様たちの加護を授かった数少ない人々の力と、その他の多くの人々の知恵によって、少しずつ繁栄していきました。

しかし、長い時間が経ったある日、突然大きな地震と共に大陸が五つに分かれてしまいました。世界を分けた時の力に耐えられなかったのです。

火山が噴火し、海が荒れ、大雨が降ったかと思えば、何日も暑い日が続きました。そして、急に変わった土地や気候に耐えられず多くの生命が失われ、それでも生き残った生命たちは、それぞれが住みやすい土地へ移っていきました。

かつてエルスペロを任された精霊の王たちは、神様の加護を授かった人々を多く失い絶望していた人々を不憫に思い、生き残る為に精霊の加護を授け、再び世界を繁栄させるように言いました。

生き残った人々は精霊たちを敬い、感謝の気持ちを込めて、五つの大陸に精霊たちの神殿を創りました。

そしてそこで、いつの日か世界が元に戻ることを祈りつつ、再び世界を繁栄に導いていくのでした

「…………おしまい」

小さな明かりのみが点いた暗い部屋の中、パタン、と本を閉じながら、長くて綺麗な黒髪を持った女性が言った。

「かごって何なの？」

隣に寝転がっていた男の子が、暗い部屋でも一目で判る金色の髪を揺らしながら尋ねた。

「うーん、そうねえ。たとえば……」

傍らの女性 セフィーナは、そう言いながら男の子の金色の髪を撫でる。艶があつて、先程丁寧に通してあげたのにもう所々が撥ねている。そんな髪を見て、良く見知った人物を思い返しつつ話を続ける。

「……アレンのこのきれいな金色の髪は、光の精霊にすごく愛されている証なの。この世界の人たちはみんな少しずつ精霊の加護を授かっているんだけど、その中でも特に強い加護を授かった人たちの髪や瞳は、アレンみたいにその精霊を象徴する色になるの。アレンなら光の精霊、シャルちゃんなら火の精霊みたいだね」

「シャルもなの？じゃあ、お母さんも？」

「ええ、そうよ。お母さんは闇の精霊の加護を強く授かっているの。だから、アレンのきれいな金色の髪と瞳は、お父さんに似たのね……どうかしたの、アレン？」

柔らかくてサラサラな自分の髪を優しく触りつつアレンに目を向けると、何故か少しだけ拗ねたような顔をしていた。それをおかしく思い、何か変な事でも言ったかと考えてみるが、特に思い当たる節は無い。

「……お母さんに似たところもあつたら良かったのに」
その言葉に少しだけきよんとして、しかしすぐに柔らかな笑みを浮かべる。父親の事が嫌いなのではなく、両親を同じだけ愛しているからこそ、片方にだけ似た事が不満のようだ。

そんな想いを感じて、さらに愛しくなる我が子をそっと抱き寄せる。

「あら、お母さんはアレンがお父さんに似てくれてとっても嬉しいわよ？それに目や鼻の形はお母さんにそっくりって、この間シャルちゃんのお母さんも言ってたんだから」

そう言つと、むくれた顔が笑みに変わった事を感じる。その様子がまた愛しく感じられ、同時に解り易い子だとも思う。

「さ、今日はもう遅いから寝なさい」

「はい。おやすみなさい」

「おやすみなさい、アレン」

セフィーナは明かりを落とし、目を瞑る。そうして意識を闇に傾けていると、

「……あっ、あといつこだけ気になったんだけど」

そんな言葉が聞こえたので目は開けず、耳だけを傾ける。しかし、
「ほろんじゃった世界に行った神様たちって、いまはどうしてるの？」

という子供の誰もが疑問に思い、且つ誰も答えられない事を聞いてきたので、寝たフリをする事に決めた。

「……っていつのを昔聞いたことがあるよ？」

「ふーん……でも、その割にはそこまで他の子たちと違う感じはあんまりしないわね」

「でもシャルはもう初級魔法使えるでしょ？」

「あんなの、まだ簡単な魔法しか習ってないし、そもそもアレンだって使えるじゃない」

「でも他に使える子ってそんなにいないと思うけど……」

「わたしとしてはもっとこう、他の子に比べて魔力が異様に高いとか、上級魔法も詠唱なしで唱えられるとか、そういうのが欲しいのよ」

わかってないわね、と言って、燃えるような緋色の髪をポニーテールにした少女 シャルは、テーブルの上に置いてあるクッキーを一つ取る。

そんな無茶なと思いつつも、その後にごうなるかが解っているの
でアレンは口には出さない。代わりに自分も一つ取って口にする
と、キッチンの方から声が聞こえた。

「そういうのはね、シャル。具体的に実感するようになるのは十三

歳くらいからなのよ。お母さんもそうだったしね」

そう言つてオープンキッチンに向こう側から、シャルと同じ緋色の髪に、髪と同色の瞳を持ったシャルの母親 フェルナが顔を出す。アレンの母とは違い力強く、それでいて長く美しい髪を後ろに流し、カチューシャをしている。その整った顔立ちは、まさにシャルの数十年前を彷彿させる。

「じゃあ、お母さんは具体的にどんな感じだったの？」

シャルは自分の母親と同じ色の瞳で視線を向けた。

「それはその時のお楽しみでしょ」

ニヒヒ、と悪戯つ子のような笑みを浮かべる自分の母親に、シャルはむつとする。いつもこれではぐらかされているのだ。

「でもシャル、精霊の加護っていうのは結構重要なのよ？」

「何に？冒険？」

まだむつとしているシャルはつつけんどんに返した。

「それもあるけど、なんてったって恋愛するうえで結構関わってくるのよ、これが」

「……」

真面目な顔して何を言っているのかと呆れながら、何も言わずに傍らに置いてあったジュースを飲むが、

「おばさん、どうということなの？」

「あら、アレン君気になる？ははーん、さては気になる子でも出来た？」

「　　っ！？」

などと言い出し、思わず噎せてしまった。

「じゃ、シャル！？だいじょうぶ！？？」

「ゴホッ、ゴホッ………なんでもない」

慌てるアレンから顔を背け、顔が赤くなっていない事を祈りつつ話の続きを促す。

「それで、どうということなの？仕方ないから聞いてあげる」

その様子にフェルナは素直じゃないなと苦笑しつつ、同時にそこ

ら辺は完全に父親に似たのだと確信して、もう少し素直になって欲しかったなあ、と内心で肩を落とす。しかし、これはこれで面白いから良いやと一人で納得する。

「この世界には大きく分けて六つの属性の精霊達がいる、つてのは学校で習ったわよね？」

その言葉にアレンとシャルは頷く。それは基礎学院の一年生で習った事なので、既に四年生の二人は当然知っていた。

フェルナはテーブルの椅子に腰掛けると、紙とペンで図を描き始める。

「六つの属性には相性と眷属けんぞくっていうものがあって、相性は、四大元素の火、風、地、水を円にして考えると、火は風に強く、風は地に強く、地は水に強く、水は火に強いっていう風になるの。もつともただの原則であって、実際は相性の悪い属性でもより強い魔法を使えば克服は出来るんだけど」

「光と闇は？」

「光と闇はお互いが同じくらい強いんだけど、この二つは特別。何でだと思う？」

言ったところで二人は視線を下に向けて考える。が、答えは出ないので視線を戻した。

「ホントのところを言うと、大本おもとの属性はこの二つだけなのよ。光は聖の神、闇は魔の神から創られて、そこから四大元素、さらにその下に森や氷みたいな派生属性が生まれたの」

「魔の神って魔物の神のことでしょ？」

と、シャルが顔を顰しかめながら言った。

「そうだけど、魔ってというのは別に邪悪って事じゃないの。魔物にも色々いて、確かに知能の低い魔物は人を襲う事が多いけど、ドラゴンみたいな人よりも優れた知能を持った魔物もいるし、ドワーフなんかは今でも街に自分達で作った物売りにくるのよ？それこそ、世界が一つだった頃は全ての生き物が共存してたんだし」

「へえー」

アレンは今まで知らなかった事を知る事で未知の世界が広がっていくのを感じて、何だか楽しくなってきた。

「それじゃあ本題ね。さつきも言ったけど、元々は光と闇しかなくてそこから他の属性が生まれたわけだけど、光と闇の精霊王達はそれぞれが四大元素を二つずつ生み出して、自分の下に置いたの。これが眷属ね」

フェルナはそう言ってまた新たに図を描いていき、

「光は火と地、闇は風と水。それぞれの精霊達はその眷属との相性が凄く良いの。そしてこれは人にも言える事よ」

いつの間にか聞き入っている二人の顔を見る。

「同じ属性もそうだけど、この眷属の関係にある属性同士の人は自然と惹かれ易いの。必ずしもそうってわけでも無いんだけど、その法則で一緒になる人達が殆どってわけ。だから、貴族なんかはそれを重要視する家が多いのよ」

聞き終わって、アレンはふと疑問に思った。

「あれ？でもうちのお父さんとお母さんは光と闇で正反対だよ？これも例外ってこと？」

それを聞いてシャルも確かにと思う。眷属やら相性やらを考えると、光と闇は合わないのでは無いか。

しかし、フェルナはそれに顔を綻ばせる。

「それはね、あんたんとこの親は本当にお似合いだったって事よ」「どういうこと？」

いまいち要領を得ない答えに、シャルは訝いぶかしんだ。

「光と闇の精霊王っていうのはね、仲の良い夫婦なの。セフィーナ達は本当に仲が良かったから、まさしくお似合いだったってわけ。

あんたが生まれてからも本当に幸せそうにしてたし、それは今も同じ。それに、眷属以外とは仲が悪いわけじゃなくて、ただ単に眷属同士の方が惹かれ易いってだけなの。火と水だって仲は良いのよ？」

それを聞いて、アレンは何だか安心した。幼いなりに心のどこかでセフィーナが寂しい思いをしているのでは無いかと心配していた

のだ。

「それから精霊の加護の事だけど、どれほど魔法を上手く扱えてもそれを自分一人の力だなんて思っちゃ駄目よ？これは私の師匠せんせいが仰つてた事なんだけど、私達は、常に精霊達に見守られているの。

この生命を授かった時から、再び大地に還つたその後まで。だから、どれ程小さな加護でもそれを感謝し、精霊達の言葉に耳を傾けなさい。そうすれば、おの自ずと彼らは私達に力を貸してくれるわ」ってね

「……良くわかんないんだけど？」

「まあ、あんた達もいつか解るようになるわ」

「いまいち良く解っていない二人に苦笑しつつ、フェルナはその頭に手を置く。

「以上で終わりっ。それにしても良かったわねえ、シャル？」

「何が？」

不思議に思うシャルに、フェルナは意地の悪い笑みを浮かべた。

「そりやあもちろん、アレン君と相性が良い事よ。光と火なんて、まさにお似合いじゃない」

「なっ！？」

途端にシャルの顔が髪と同色になった。

「アレン君もこんな子で良かったらいつでも言っつてね。どこへなりとも連れてって良いから」

「ちよっ、お母さん！？」

「あら、何かしらシャーロットちゃん？」

当の本人を前にしてアレンにまで話を振るフェルナを止めるべく口を挟むが、否定したくないけど認めたくもないという何とも言えない状態に陥ってしまった。せめてもの報復にとキツと母親を睨むが本人は不敵な笑みを浮かべていて、こうなってしまうては口では勝てないと解っているの、

「知らない！」

結局逃げるように席を離れるしか、選択肢が残されていなかったのであった。

「あつ、シャル待つてよ！」

アレンも急いで立ち上がるが、

「おばさん、ごちそうさまでした」

きちんとお礼を言うのも忘れない。

自分の娘と違いすっかりしている少年を見て、フェルナは顔を綻ばせた。

「またいらっしやい。シャルー！今日はどこまで行くのー？」

「いつもの神殿前の広場！アレン早くしなさいよ！」

「今行くよ！それじゃおばさん、おじゃましました」

「あつ、アレン君！」

言つて、フェルナは駆け出そうとする少年を引き留めた。

「さっきの相性の話なんだけど、何も恋愛に限った事じゃないの」「言いつつ立ち上がつてそのまま近付き、

「多分これから先、いろんな人と出会う事になると思うわ。その中で、やっぱり相性の良い子達は自然とあなたに惹かれて来ると思うの」

まだ小さなその手をしっかりと握り、しゃがんで、その金色の瞳に視線を合わせた。

「その子達はもちろん大切にしておいて。でも、それ以外の子達とも、分け隔てなく接して欲しいの」

そして、まだ穢れを知らないその純粋な心に、想いを託す。

「光と闇の精霊王は夫婦だけど、本当に仲の良い親友でもあるの。あなたにもきつとそういう人が現れるから。ううん、もしかしたら、もうすぐ傍にいるのかも知れないわ。それに、二人にとって、他の精霊達は子供のようなものだから」

最後に、太陽のように眩しい金色の髪をクシャツと撫でた。

「それから、シャルの事、これからもよろしくね。あの娘は確かに強い娘だけど、いざという時は護つてあげてね」

「うん！」

少年は、幼くも力強い瞳でそれに応えた。

「よろしい！」

ニカツと笑って立ち上がると、玄関から声が聞こえた。

「アレーン？置いてくわよー？」

その声には、若干の苛立ちが籠っている感じがした。

「そろそろ行かないと。後で何言われるかわかんないし」

そう言いつつも、既に文句を言われるのは確定しているので後は程度の問題である。

「いってらっしゃい」

そう言って、今度こそ駆け出した少年を我が子のように優しく見送った。

「……要らない心配だったかな」

フェルナは一人残ったリビングでそう呟きながら、少年のまっすぐな瞳を思い出し、

「ホント、どっちにもそっくりよね」

親友たちの顔を頭に思い描きながら、上機嫌に家事を再開するのであった。

『始まりの始まり』 1 - 1 (後書き)

はじめまして。

読んで頂きありがとうございます。

何年も前から寝るときの暇つぶしで考えていた話なのですが、思い切って書いてみました。

一度に何話か作ってからUPするので、更新は不定期になります。

「待つてよ、シャル！」

フェルナと話し終えて外に出たらシャルは既に大通りに出る所で、急いで走りようやく追いついたアレンは息を切らしながらも一言文句を言ったが、

「……遅い」

対するシャルはまだ不機嫌なままだった。

そんなに恥ずかしかつたのだろうかと先程の会話を思い返してみても、アレンからしてみればフェルナがアレンの事でシャルを弄るのはいつもの事だったので、本人は全く気にしていなかった。シャルの事も大切だとは思っているものの、生まれた時からずっと一緒なので変に意識した事は無かったし、フェルナの冗談を態々（わざわざ）本気で受けるつもりは無いのだった。

実はそれこそがシャルの不機嫌の理由の一つで、あの問答の際にアレンは一言も発しなかったのだが、せめて何か反応でも示してくればシャルとしては不本意でも先に進めるといふものだった。しかし、残念ながらこの金髪の少年にそういう事を期待するのはどうやら不毛な願いらしい。

そんなシャルの葛藤は露程も知らず、煉瓦で綺麗に整えられた街道を呑気に歩いていたらアレンだったが、ふとパン屋が目に残り立ち止まる。

「ねえ、広場に行くんならここらへんでお昼ご飯買つといた方が良いんじゃない？」

いつもなら昼食を取って外に出るのだが話に夢中でその時間を過ぎてしまい、さらにシャルが飛び出してしまった為弁当すら貰っていなかったのだ。神殿の近くにも飲食店はあるのだが、子供だけに入れるようなところでは無いのでここで買わないと後でまた戻らな

くてはならず、それは正直面倒だ。

シャルも同意見らしく、既に肩に下げた白いポーチから財布を取り出していた。

「それもそうね。今日は特にいるだろうし……」

「今日は？」

少し気になる言い方だったが、シャルはさつさと店内へ入ってしまった。

「いらっしやい。ああ、アレンとシャルちゃんか」

店に入ると、四十代前半の男の店主が声を掛けてきた。

「こんにちは、おじさん。いつものセットと、今日は余分に二つずつくらいパンが欲しいんだけど……」

「はいよ、ちよっと待つときな」

店主はそう言うのと店の奥に引つ込んだ。

ここは昼食を取る前に出掛けた時に寄るパン屋の一つで、二人はすっかり常連客になっていた。

しばらくすると店主が手に二つの袋をぶら下げて戻ってきた。シャルはそれを貰うと代わりにアレンの分も含めて何枚か銅貨を払い、笑顔でお礼を言った。勿論アレンの分のお金は事前に貰っている。

「ありがとう」

「まいど。今日も広場に行くのかい？」

「ええ。でも、今日はいつもとちよつと違うことをするつもりなの。おつ、なんだか楽しそうじゃないか。なんだい？」

「それはもちろんヒミツよ。じゃあまた来るわね、おじさん」

「さようなら」

シャルが悪戯っぽい笑顔を向け、二人はすっかり顔馴染みになった店主に別れを告げて店を後にした。

「いつもと違うことって？」

「だからヒミツよ。心配しなくても後でちゃんと教えてあげるから、早く行くわよ」

そう言っつて結局その時に実際体験するまで教えてくれないのだから

ら、シャルはやっぱりフェルナの娘であると思いつつ、アレンは後を追った。

生き残った世界、エルスペロには、現在五つの大陸が存在し、南に火の大陸、西に風の大陸、北に水の大陸、東に地の大陸、そして中央に光と闇の大陸と、各属性のうちで最も強く授かっている加護に因ちなんだ呼び方をされている。各大陸には独自の気候と文化が存在し、その土地の精霊を奉った神殿が存在する。これは、嘗ての大陸分断の際に精霊から加護を授かった人々が、感謝と尊敬の意を込めて建てた物だった。

光と闇の大陸の中心にはセフィロトと呼ばれる生命いのちの樹があり、滅んでしまった世界、エルセイんとエルノワールに、生命の力を送っていると言われている。

アレン達が住んでいるこの街は「学ガデーびの庭」と呼ばれる巨大な学園都市で、セフィロトの周囲を囲うように建っている。その起源は今から約五千年前、ちょうど大陸が五つに分かれた直後からで、当時、突然の大陸分断に絶望していた人々が、再び世界に繁栄を取り戻す為にと設立した事から始まる。

ガーデンは基礎学院、上級学院、研究院に分かれており、二人は現在基礎学院の四年生で、今は夏休みのちょうど後半に差し掛かったところだった。

基礎学院は七歳になる年から通う事になっており、主に一般常識として現代語や数学、歴史などを学ぶ他、四年生から六年生を終える頃までには初級魔法全般と護身程度の武術を習う事になっていて、先程の話も、ようやく習い始めた魔法に深く関わる精霊の加護が、具体的にどういったものなのかをシャルが口にした事が発端であった。もつとも、結局肝心な部分は聞けず終いだっただが。

閑話休題。

基礎学院のうちに各大陸から学びにやってくる子供達はガーデン内で暮らしている家庭にホームステイするのだが、殆どの場合各大陸に数多く存在する基礎学校を卒業した後に^{のち}ガーデンの上級学院に進学する。中には上級学院には進まずにそのまま稼業を手伝う者や、基礎学校の代わりに神殿騎士団付属の教育施設に通う者もいる。上級学院からは魔法学部、技術学部、芸術学部、医学部、武術学部があり、生徒達は各学部の必修科目とそれぞれが選んだ選択科目を学び、実習や研究などを数多く行っている。勿論学ぶ意志さえあれば学部を越えて授業を受ける事も出来る。上級学院は生徒数かなり多い為、各授業には一から順にクラスが存在している。

研究院は、上級学院を卒業した後にさらなる研究を行う生徒が通う研究科と、教職に就こうという生徒が通う教職科があり、研究科の生徒で良い結果を出せた者は、国が運営する研究施設で働く事ができ、個人で研究する際にも援助金を貰う事が出来る。それが叶わなかった者も、資金繰りをしつつ研究を続ける者が殆どであった。エルスペロに住む人の国は全て王政で身分も貴族と平民に分かれているが、ガーデン内での身分差別は殆ど無かった。

というのも、ガーデンは人が住まう場所では唯一独立している街だからというのと、最大の要因は、その完全な実力主義の世界にあった。どれ程度の高い貴族出身でも実力が伴わなければ何も出来ず、それでも身分をちらつかせようものなら逆に冷たい目で見られるのだった。その所為か、貴族達の中にはガーデンを嫌い王立の貴族学校を選ぶ者も多かった。

シャルも貴族、それも火の加護を授かったかなり由緒正しい一族なのだが、フェルナ曰く、

「あそのこの連中って高飛車で嫌いなよねー」
との事。

とはいえ、そんな大貴族の令嬢が昼過ぎとはいえ子供二人で出歩いていて良いのかと疑問に思うかもしれないが、ガーデン内は治安

が非常に良く、危惧するような事は全く無い。流石に最初の頃は道行く人に何度も驚かれ、「シャーロットお嬢様」などと呼ばれていたのだが、シャルもフェルナもそれを嫌がって強引に他の子と同様に扱うように言い続けた結果、今ではすっかり街の人々と顔馴染みになり、呼び方も愛称で呼ばれるようになっていた。

そんな変化をずっと傍ら^{かたわ}で見っていたアレンは、今ではシャルの付属品としてデフォルトされていた。そんな訳で二人が休日に神殿前の広場に向かうのはもはや定番となっていて、それはこの夏休み中も変わらなかった。

「やっと着いたわね」

そう言って歩みを止めたシャルの横で、アレンも立ち止まる。

ここは、ガーデンの中央に位置するセフィロトと、その周囲の森を囲むように建てられた神殿の手前の広場である。

二人は休みの日は大体ここで日が暮れるまで魔法の訓練をしていた。

四年生に上がったばかりで初級魔法が使えるのは、双方の親達に教わった練習方法と、それを続けてきた努力、そしてやはり他よりも抜きん出ていた才能の賜物^{たまもの}という訳である。

「それで、今日はどうするの？いつもみたいに訓練するわけじゃないんでしょ？」

そう言ったアレンの瞳に映ったのは、何故か素敵な笑顔を浮かべるシャルの顔だった。

アレンはその顔に良い思い出が無く、シャルが思い付いた悪戯を必死に止めようとするが強行され、それを親達にはれないように何とかしようと四苦八苦するが、結局ばれて怒られた過去の自分の姿を思い浮かべて肩を落とした。

「……一応聞くけど、何をするつもりなの？」

おおかた神殿周辺のおちこちに魔法で簡単な落とし穴や足枷の罠を作って、来訪する人達に悪戯しようとか言うのだろうが、儂い願いだと知りつつも一応聞いてみる。

「それはまだ内緒。良いから神殿の方まで行くわよ」

意外な答えが返ってきたが、もしかとうとう神殿にまで悪戯をするのかと思いい、心の中で頭を抱える。しかし、結局は付いていくしか無いのだった。

「まずいよ、シャル。神殿にまでいたずらしたら、今度こそ家事一週間担当とかじゃ済まないよ?」

そう言った時には既に扉を通り過ぎて神殿の敷地内に入っていたのだが、シャルはお構い無しに歩を進めると、正面の入口に向かうのでは無く、道を左に外れてさらに奥に進んだ。

そして人目に付かないところでようやく立ち止まり、辺りをきよるきよる見始めた。やがて誰も居ない事を確認すると、ようやくアレンに視線を向ける。

「別に今日はいたずらするつもりはないから安心しなさい。ねえ、アレン。あんた、神殿の中って見たことある?」

という事はいつかはするのかと後々(のちのち)の事を憂いたアレンは、今度は神殿の壁を触り始めたシャルを不思議に思いつつも答える。

「そりゃあ、誰でも入れるんだから見たことぐらいはあるよ?年の初めにいつもお祈りしに行くし、シャルも一緒だったでしょ?」

それはエルスペロの人々にとっては共通の習慣で、年の初めにはその年の平穩を精霊に祈りに、終わりにはそれを感謝する為に多くの人々が神殿を訪れ、神殿から遠い距離にいる人々は街にある教会へ行ったり、自宅で祈ったりする。その為、普段の神殿は日が落ちると入口が閉められるのだが、その時期だけは一日中解放していた。神殿内部はとても広く、戦争があった時代は避難所としても使われていたそうだがそれも遙か昔の話で、ここ二千年程は戦争など起きていなかった。

「でも、祭壇の間以外は特に何もなかったと思うけど……」

アレンの言う通り、神殿内部は正面奥に祭壇の間があるくらいであとは特に何も無かったし、祭壇の間も別段立ち入り禁止という訳

では無かった。そもそも精霊に祈る為の場所なので、余計な物は必要無いのだ。

「それがおかしいのよ」

しかし、シャルはそれを否定しながらまだ壁を調べていた。

「何で？」

「この神殿の向こう側にセフィロトがあつて、それを神殿の壁が囲んでるでしょ？なのに、肝心のセフィロトへ行くための入口がどこにも見当たらないのよ。もしかしたら何か仕掛けがあるのかも」

確かにセフィロトは周囲を森と神殿の堀に囲まれており、そこへ至る道は見当たらない。堀を越えようにも魔法で結界が張られているらしく中に入るのは不可能で、実際セフィロトに行ったという話は聞いた事が無かった。

「もしそうだったとしても、どうやって調べるの？そんなことしたら絶対怒られると思うよ？」

「だから、誰もいなくなつてから忍び込むのよ。そろそろ神殿が閉まる時間だし」

いつの間にか暗くなっている事に今更ながら気付いたが、南西にあるシャルの自宅から神殿までは結構距離があつたし、今日はそもそもこつちに来るつもりでは無かつたので外に出るのが遅かつたのだ。そして途中で買った昼食をまだ食べていない事を思い出して急に空腹感を感じ始めたが、何やら不審な言葉が聞こえてそれどころでは無くなつた。

「何だつて？」

「だから忍び込むのよ。それ以外に調べる方法はないでしょ？」

アレンは自分の耳を疑いたくなるような発言に頭が痛くなつてきた。

「シャル、どうやって中に入るつもりなんだよ。まさか入口の鍵を盗んだとか言わないよね？」

「そんなことしないわよ。失礼ね」

と、言いつつも一度は考えた手段の為思わず目が泳いでしまった

が、とりあえずは事実である。

アレンはその様子をジト目で見つめるが、とりあえず罪は犯していないようなので少し安心する。もっとも、忍び込んだらその時点で不法侵入なのだが。

「なら良いけど、じゃあどうするの？」

「ふっふっふっ」

シャルは怪しげな笑みを浮かべると、壁を探っていた手を止めた。「誰にも言っちゃだめよ？」

そう言っ壁を押すと、その部分が正方形の形に押し込まれていた。

しばらく何も起きなかったが、突然壁に光の亀裂が走りだし、壁の表面に円形をした金色の光が現れた。

「ま、魔法陣!？」

円形の内側には様々な模様が描かれ、外縁には何かの文字が所狭しと埋まっていた。

しばらく淡い光を放っていた魔法陣は徐々に光を失い、やがて消えていった。すると、先程までそこにあつた壁も同時に消えていた。

「早くしなさい。この壁、すぐに戻るみたいだから」

呆気にとられているアレンを余所に、シャルは既に奥へと進んでいた。

「……ちょ、ちょっと待ってよ、シャル!」

はっ、と我に返つたアレンは慌てて後を追い掛けていったが、そのすぐ後ろで壁が元に戻るのを感じて少し冷や汗を掻いた。

「あんなもの、いつの間に見つけたの？」

二人は薄暗い廊下を魔法で照らしながら歩いていた。

二人は光と火が得意なので灯りが落ちた神殿の中でも問題は無か

つたが、夜の学校然り、夜の神殿には普段では感じられない独特の怖さがあった。

「あれを見つけたのは三日前よ。一月くらい前から神殿に忍び込むのにいろんなどを調べてただけど、その時に偶然見つけたの。でもその時はお昼だったし、人が来そうだったから中には入らなかつただけだね。」

アレンは一月も前からそんな事をしていたのかと呆れたが、殆ど毎日一緒に居たのに全く気付けなかつた自分に驚いた。

「言ってくれても良かったのに……」

「だって、言ったら止めてたでしょ？それにアレンてば嘘が下手なんだから、すぐにお母さんたちにはれるのがオチよ」

残念ながらすべて事実の為反論は出来なかつた。もともと、アレンが止めてやめるのであれば誰も苦勞はしないのだが。

「あつ、見て。たぶん、礼拝堂に繋がってる扉よ」

そう言つて前を照らすと、木で出来た扉が見えた。二人は西側の壁から入つて東の方に道なりに進んだので、間違つていなければこの先は確かに礼拝堂がある筈だ。

シャルが扉の取っ手に手を掛けガチャツ、と開くとそこは予想通り広い礼拝堂だったが、広い空間が一層不気味さを強調していた。

「け、けっこう不気味ね」

そんな事を言いつつも先に進むシャルだが、ふと立ち止まって後ろを振り返つた。

「な、何してるのよ。早く行くわよ」

あくまでも強気に言うが、流石のシャルも怖いようでアレンが来るのを待っている。それが何だかおかしくてアレンはついつい笑つてしまいそうになるが、顔には出さずにシャルの隣に並んで歩き始めた。

「行くのは良いけど、どこを調べるの？」

「わたしが見たところじゃ、やっぱり一番怪しいのは祭壇ね。それ以外考えられないわ」

と、名探偵のように自信満々に断言するが、元々物が少なく、アレンから見てもそこ以外に調べるところは無かったので異論は無い。そもそも小さな子供二人ではそのくらいが限界だと思っていたので、他の可能性を提示するつもりも無かった。

そう思つて礼拝堂の奥に進むと、やがて先程とは違つて少し重そうな鉄の扉が見えた。

アレンがその扉を開けて中に入ると灯りの向こうに大きな祭壇が見えたので、二人はそこに近付いていく。

「それじゃあ、手分けして調べてみましょう。何か気になる物を見つけたらすぐに知らせること。良いわね？」

そう言つて、シャルは祭壇の台に登つて床の部分を調べ始めた。凄く罰^{ばち}あたりな気がしたが、アレンも下の部分を調べてみる事にした。

祭壇の下部には、アレンには読めない文字が絡み合うように刻まれていて、その中央には太陽と月が描かれていた。これは光と闇の精霊のシンボルで、他の大陸の祭壇にもこういった精霊のシンボルが描かれていると聞いた事があつた。他の部分も見てみたが、シンボル以外は特に何も無く、

「アレン、ちよつと来てみて」

上からシャルの声が聞こえたのでそちらに行く事にした。

台部分の床には下と同じく二つのシンボルが大きく描かれていて、ここにも先程の文字が刻まれていた。

「これを見て」

そう言われて照らされた所を見ると、何かの文字が書かれた、小さな石板のようなものが埋め込まれていた。下に刻まれていた文字と似ていて、良く見てみようと思つたとさらに近づいてみたら、不意に頭

の中に言葉が浮かんできた。

「……光と闇の、狭間？混、沌を、救いしは、其そが、七色の、輝なりき也？」

すると、シャルが心底驚いた声を出した。

「アレン、あんたこれが読めるの？」

「……良くわかんないけど、たぶんそうみたい。これって何の文字なの？見たことないや。」

自分でも何故読めたのかわからず、何だか変な感じだった。

「たぶんこれ、古代語よ」

「古代語？」

アレンは聞き慣れない単語に首を傾げる。

「そう。あんた、魔法陣には二つの種類の文字が使われてるって、知ってた？」

「そうなの？」

「そうらしいわ。これはお母さんから聞いたんだけど、大陸が分かれたばかりの頃はまだ使われていたらしいの。ほら、ここってその頃に建てられた物でしょ？だからあちこちにそれと似たようなのが刻まれてたわ。魔法陣も最初はその文字だけが陣の内側に使われてたんだけど、だんだん読める人が少なくなっていくたから、新しく使われ始めた文字を外側に付け足していったんですって」

「でも、じゃあ何でぼくが読めたんだろ？それに下にあった文字は読めなかったよ？」

「知らないわよ、そんなの。考古学者とか、高位の魔導師とか、あと精霊と話すことのできる大司祭様とかなら読めるらしいけど」

しかし、アレンはまだ今年十歳になったばかりで初級魔法しか使えないし、ましてや精霊と会話など出来る筈も無かった。

結局幾ら考えても解らないので一旦置いておき、次の疑問を口にする。

「この、七色の輝きってというのが何なのかが問題よね」

「晴れの日に雨でも降らすのかな？」

「冗談半分で言いながら再び石板を見ると、少し違和感があるのに気付く。」

「ねえ、シャル。もしかして、この下に何かあるんじゃない？」

暗くて気付かなかったが、良く見ると床から少しだけ出っ張っていて、頑張ったら外せそうだった。

「……試す価値はあるわね」

そう言っただけでシャルは石板を外そうとしたが、完全に埋まっているらしくビクともしない。

「だめ、全然外れないわ。アレンもやってみて」

「わかった」

言われて、アレンは石板に指を引っ掛けて引っ張ってみる。すると、外れないと思っていた石板は、少し重い音と共に床を離れた。

「……何であんたには外せるのよ」

「……さあ、何でなんだろう」

石板は結構厚くて少し重かったが、裏には特に何も無かったので埋め込まれていた箇所を覗く。すると、そこには宝石のような物がポツンと置いてあった。

「シャル、見てよ」

アレンはそれを手に取って、シャルにも見えるように上にかざす。その宝石は見る角度によって様々な光を放っていて、とても美しい。つた。

「……綺麗。虹みたいに光ってる」

シャルはすっかりそれに見惚れてしまっていたが、アレンはすぐに話を戻した。

「たぶん、七色の光はこれのことじゃない？問題はこれをどうするかかなんだけど……光と闇の狭間……もしかして」

何かを思い付いたのか、アレンは祭壇の中央へ向かう。

「アレン？」

「……やっぱり。これを見てよ」

アレンが二つのシンボルの中央を照らすと、そこには小さな窪みくぼ

が存在していた。

「太陽と月、つまり光と闇の、その狭間……」

そして、そこに先程の宝石を嵌め込んだ。

すると、突然虹色に輝く魔法陣が二人の足元に現れた。

「な、何!？」

「シャル!」

突然の事にシャルは慌てふためき、アレンは嫌な予感がして咄嗟とつなにシャルの手を取って引き寄せる。

虹色の光は瞬く間に二人を包み込み、やがて消えていった。

二人の姿は、祭壇のどこにも見当たらなかった。

夜の静寂の中、何かが倒れる音が、突然その沈黙を破った。

「う、うーん……何が起きたのよ、もう」

シャルは先程の出来事を思い返してみる。

「急に魔法陣が現れたと思ったら、光に包まれて……」
思い出したところで周囲を見てみると、

「……ここ、どこ？」

そこは、深い森の中だった。シャルはその中の開けた場所にある、台座のようなところにいた。四方には柱が建っていて、何かの装置のようだった。そしてその向こうには、巨大な大樹が見えた。

「もしかして、セフィロトの森なの？」

まさかとは思ったが、生まれた時から見てきたあの巨大に過ぎる大樹は見間違えようが無かった。

「や、やった……本当に来れた……」

感動のあまり思わず涙が出そうになるが、それを堪えてアレンに呼び掛ける。

「アレン、見なさいよ！わたしの言った通りだったでしょ？……アレン？」

しかし、呼び掛けても返事は返って来なかった。そしてようやく、自分の下に何か柔らかい物体が敷いてある事に気が付いた。

「き、きゃあ！アレン、大丈夫！？」

「うーん……シャル？」

慌ててアレンの上から退くと、ようやく呻くような声が聞こえてほっとする。

「……ここは？」

「たぶん、セフィロトの森だと思う。どうやって来たのかはわからないけど、ほら、あれ」

シャルはそう言って、遠くにある大樹を指差した。

「……ほんとだ」

それを見たアレンは、自分の周囲を確認したかと思うと台座と四本の柱を少し調べてみた。

「……ダメだ、何も起きないや」

そして、そこから予想される未来に突然不安になる。

(このまま戻れなかったらどうしよう)

しかし、不用意にシャルを不安がらせないように口にはしなかった。

「ねえ、ここまで来れたんだから、根元まで行ってみましようよ」

シャルはかなり興奮しているようで、目を輝かせていた。

「……そうだね。ここにいても帰り方がわからないし、朝になったら誰かが気付いて迎えに来てくれるかも知れないし……どうせ待つなら時間はいつぱいあるんだから、この際行ってみようか」

珍しく積極的なアレンにシャルは少し驚いたが、アレンも滅多に無い機会に、不安以上に興奮していたのだった。

「ねえ、ちよつと休みましよう？」

しばらく森を進んでいた二人だったが、二時間程歩いたところでとうとうシャルが音を上げた。

「良いよ。ちよつど良いから昼間に買ったパンでも食べようか」

それに頷き、近くの樹の根元に二人で腰かける。

森には随分長い事人が入った気配が無かったので道らしい道など無く、アレンも慣れない獣道に正直参っていたところだった。

「……なんだかこうやって近くで見ると、すごく幻想的よね」

既に夜になっていたが、辺りはそうとは思えない程明るかった。

「前から思ってたけど、あれって何で光ってるの？」

あれとは、セフィロトの事である。

不思議な事に、セフィロトは常に淡い金色の光を放っているのだ。その為『^{ガーデン}学びの庭』とその周辺の地域は、夜になっても他の地域程暗くはならないのだった。

「たしか、生命いのちの力が原因って聞いたことがあるよ？」

「それって、滅んだ二つの世界に送ってるっていう？」

「うん。この世界からそれを集めて二つの世界に送る時に、一緒に集めた魔力を吸って光ってるんだって」

「ふーん」

そんな話をしながらパンを頬張る。少し固くなっていたが、それでも相変わらず美味しかった。

「そういえば、何でセフィロトに行こうなんて言い出したの？」

「んー、特に理由はないわ」

まさかの回答に、アレンは思わず口を止める。

「強しいて言うなら、子供のうちに間近で見えておきたかったのよ。大きくなったら、今みたいにいるできないでしょ？まさか本当に来れるなんて思ってなかったけど……」

「ふーん、なるほどね……」

「何よ」

「何でもない」

つまりは、そういう事だった。

シャルが普段悪戯をするのは、悪戯のやり溜めなのだ。確かに、あと三年もすれば上級学院に進学するのでそんな事は出来なくなる。悪戯で済むうちに色々な事をやっておきたいのだろう。夜の神殿に忍び込むなんて、それこそばれたらただでは済まないが、子供のうちならまだ悪戯で済まされるだろうと見越しての行動だったのだ。

「……パンも無くなったし、そろそろ行こっか」

そう言って立ち上がり、手を差し出す。

「ええ」

シャルはその手を、少し頬を赤く染めながら握って立ち上がった。

その時、

ガサッ

突然、アレン達が来た方向から物音がしてビクリと震える。

「な、何？」

「グルルル……」

恐る恐る目をやると、そこには熊のような体をした、猪のような生き物が立っていた。その頭には、二本の角が後ろに曲がって生えている。

「なっ　！？」

突然の来訪者に、体が硬直していくのが解る。と、そこへ、

「グオオオオ！」

怪物は突然咆哮を上げた。

アレンは身を強張こわばらせるが何とか後退あとすべり、シャルに声を掛ける。

「……しゃ、シャル、逃げよう……シャル？」

ふと、握っている手が震えているのを感じて横目でシャルを見ると、今にも泣き出しそうな顔でガチガチと歯を鳴らしていた。

これでは自力で走るのとは不可能だと判断して、握っていた手をきつく握り直し、再び呼び掛ける。

「シャル！しっかりして！シャル！！」

「あ、アレン……」

シャルはようやくその声に気付いて、震える声で返事をした。

「良いかい？僕が三つ数えたら、思いつきりセフィロトに向かって

走るよ？わかった？」

「う、うん」

本当解っているのか怪しかったが、それでもアレンはタイミングを見計らう。

「いち、に……さん！」

そしてシャルの手を握ったまま、後ろを向いて一気に駆け出した。その背後で、何かが倒れる音がした。恐らく、あの怪物が木を薙ぎ倒したのだろう。

しかし、そんな事を確認している余裕はない。今はとにかく、全力で逃げる事しか頭に無かった。

「ハアツ、ハアツ、ハアツ、ハアツ」

二人はとにかく体力の続く限り走り続け、だいぶ経った頃にようやく立ち止まった。

「た、たぶん、ここまで来れば、大丈夫だと、思う、よ」

アレンは、まだ上がっている息を整えながら安全を確認する。

「それにしても、何でこんなところに怪物が……」

「ま、怪物？あれが？」

「うん。学校の図書館にある本でしか見たことなかったけど、たしかベアオークって名前の下級種だったはず……」

「な、何でそんなのが、こんなところにいるのよ……」

シャルを見てみると、まだ震えが治まっていないようだった。

確かに怪物は世界中に存在するが、基本的にああいった下級の怪物は森や山などといった人が少ない場所にしか現れない。そういった場所には十分な食料があるので、態々人が大勢いるところにはやってくるのは高度な知恵を持った友好的な上位種くらいだった。

その為怪物を見た事が無い者も多く、ガーデンでも上級学院に上

がって最初に行く実習で、初めてその姿を見る者が多い。まさか街の中心部にあるこの森にまでいるとは、欠片も思っていなかったのだ。

「ど、どうしよう……あんなの、倒せっこないわよ……」

シャルはその場に座り込んでしまい、今にも泣きそうだった。無理も無い。普段気が強くて大人びているシャルも、やはりまだたった十歳の女の子なのだ。幾ら他の子供より魔法が得意でも、怖いものは怖い。それでも泣き出さないのは立派な事だった。

寧ろアレンは良く自分があの場合で冷静に判断出来たものだと思っていたが、恐らくシャルが居なければ自分も震えて動けなかっただろう。

「だ、大丈夫だよ。本で読んだらあいつ、力は強いけど足が遅いつて書いてたから、ここまで来る前にたぶん諦めてるよ」

「……………」

アレンは何とかシャルを元氣付けようとするが、シャルは俯いたまま応えない。どうしたものかと思っていると、周りの景色が先程よりも随分明るい事に気が付いた。

「ほ、ほら。もうセフィロトがあんな近くに見えるよ。行ってみようよ」

そう言つと、シャルはようやく顔を上げた。

「……………」

やっと返事をしたシャルにほっとしたアレンは手を差し伸べて立ち上がらせ、そのままシャルの手を引つ張って歩き出した。

「……………」

「えっ？」

「何でもない」

そう言つて柔らかな微笑ほほえみを見せるシャルに、アレンは内心ドキツとした。普段の悪戯いたづらっ子のような笑みとは全然違って見惚れてしまいそうだったが、顔が赤くなるのを隠す為に前を向く事にした。

シャルはまだ繋がれたその手を見て、それから前に行く少年の後ろ姿を優しく見つめ、ぎゅっと握り返して後に続いた。

それから十分程進むと、森の出口が見えてきた。

二人が少し早足になって森を抜けると、

「……おつきい」

「うわぁ……」

そこは不自然なまでに大きく開けていて、広場のようになっていた。

そしてそこには、この世のどんな物よりも大きく、どんな景色よりも幻想的で美しい大樹が、その巨大な根を降ろしてそびえ立っていた。

「ねえ、もっと近くまで行きましょうよ！」

すっかり元気を取り戻したシャルは、そう言うと根元に向かって駆けていった。

「あつ、シャル！」

慌てて追うアレンだったが、シャルの様子に一安心する。

「それにしても……」

でかいなあ、と感嘆の声を漏らす。なにせ、本当にでかいのだ。

「……てっぺんが見えないや」

樹の幹は天を衝く勢いで伸びており、一番近くにある枝にさえ届きそうに無かった。

「アレン！こっちに来て！早く！！」

不意にシャルの声が聞こえてそちらを見る。どうやら、かなり向こう側まで行っていたようだ。

「どうしたの？」

「良いから！付いてきて！」

そう言ってアレンの手を引っ張り、シャルは急いで進んでいく。「これ見てよ」

「……おんなの、こ?」

言われた方を見ると、樹の根と幹との境目に出来た隙間に挟まるように、一人の少女が眠っていた。

「誰なのかしら?」

「わ、わかんないけど、とにかく外してあげようよ」

アレンは少女に駆け寄って何とか樹の根を外そうと手を伸ばす。

「うわっ　!?!」

「アレン!?!」

しかし、その手が根に触れた途端、突然樹全体が一層強く輝き出した。そして少女の前に虹色の魔法陣が現れたかと思うと、二人は突風に吹かれて後ろに吹き飛ばされてしまった。

「いつつ……シャル、大丈夫?」

「え、ええ……でも、何だったの、いまの……?」

お互いの無事を確認した二人は再び少女の方を見るが、特に変わった様子は見られなかった。

「……またあんなことがあったら危ないし、シャルはここにいて」

「アレン?」

アレンはそう言うと、もう一度少女に近付いていった。

「……ゴクッ」

そして恐る恐る手を伸ばし、再び根に触れる。

「……」

しかし、今度は光もせず、突風も襲って来なかった。

その事に安堵し、後ろを向いて呼び掛ける。

「今度は大丈夫みたい　いたっ!?!」

それを見ていたシャルは急いでアレンの下もとにやってくると、その頭を思いつ切り引っぱらいた。

「『大丈夫みたい』じゃないわよ!またさっきみたいのがあったらどうすんのよ!?!」

「いや、だから一応ぼく一人で確かめたわけだし……」

「~~~~っ！もういい！アレンのバカッ！！」

そこまで聞いたシャルは、思いつきり怒鳴って背を向けてしまった。

「シャル？何で怒ってるのさ？」

しかしそれでも何故シャルが怒っているのか全く解っていないアレンは、それを見ても首を傾げるしか無かった。

「知らないっ！……それでそれ、外せそうなの？」

「う、うん、ちよつと待つて」

まだ何か言いたそうな顔をしていたが今それを口にするとうんぬんか解っているのか、アレンはもう一度樹の根を外そうと手を掛ける。しかし少女の前側を抑えている根は完全に幹と一体になっているらしく、ビクともしなかった。

「ダメだ、全然外れないや」

「……ちよつと退いてみて」

シャルは少女に近付くと、何かをブツブツ唱え始めた。すると、掌の上に神殿で使っていた火の灯りが現れた。

「しゃ、シャル、もしかして……」

「大丈夫よ。『火はちゃんと意識を傾けたら目的の物以外を燃やす事は無い』ってお母さんが言ってたし」

そう言つて火を少女に近づける。アレンはシャルの意識を乱さないように静かにしていた。

小さな炎は根を上の部分から徐々に燃やしていった。そして三分の一程いったところで、シャルは火を消してその場に座り込んだ。

不思議な事に火はちょうどその部分で消えており、焼けて脆くなったところを取ると空いた場所から少女の白い肌が見えたが、火傷は負っていないようだった。

「ふう、意識してやると結構疲れるわね」

シャルは額の汗を拭いながら、内心で上手くいった事に安堵する。「もう外せそうだから、後はぼくがやるよ。シャルは休んでて」

「ええ、お願い」

アレンは樹の根の上の方に手を掛けると、ありったけの力を込めて引っ張った。

「くっ、い、意外と、堅い……」

それでも太くて地面からしっかりと伸びていた樹の根を剥がすのには相当苦勞したが、

「こ、れ、で、どう、だぁぁぁあ！」

思いつ切り声を上げて全体重を乗せた渾身の力で樹の根を引き剥がすと同時に、少女がアレン目掛けて倒れてきた。

「うわっ　！痛ててて……」

そのまま倒れたアレンは、倒れ掛かってきた少女を見る。

「お疲れ様」

シャルも少女を見ようと近づいてきた。

「……綺麗」

歳は二人の二つ三つ程下だろうか。肩の出た薄い布の服に包まれた少女の体は雪のように白く、何よりも注目したのは、その限り無く白に近い、長く、美しい銀色の髪だった。

「銀色の髪って初めて見るわ……」

「僕も……」

そんな少女に呆気に取られていると、アレンは不意に頭痛がして顔を顰めた。

「痛っ！」

「アレン？どうしたの？」

「……何でもない。ちょっと頭を打ったみたいだけど、もう治まったから」

「大丈夫？ちょっと見せて？」

シャルはアレンの頭を触ってみたが、特にコブなどは出来ていなかった。

「特に傷とかはないみたいだけど、一応ちょっと休んだ方が良くも」

「うん、そうする」

その意見に賛同し、少女を脇に寝かせて二人は体を休める。

「ふう。いま何時なのかな？」

「九時くらいじゃない？ここに来て結構経ったし……」

「そっか……」

いつもならとつくに帰っている時間帯なので、おそらく二人の母達がいつまで経っても帰らない二人を心配して探しているだろう。

しかし夜の神殿は入口が閉じているので入る事は出来ない。という事は、いよいよ朝になって誰かが祭壇の仕掛けに気付いてくれる事を祈るしか無かった。

そう思っていると、不意にシャルがそわそわし始めた。

「シャル？どうかしたの？」

「な、何でもないわ」

そんな様子を少し不思議に思うが、特に何も言わなかった。すると、シャルは突然立ち上がり、

「わたし、ちょっと他のところも見てくるわ」

そう言って森の方に駆け出した。

「シャル、森は危ないよ！」

「そんなに奥には行かないから平気よ」

「でも……」

「……もう！ちょっとは察しなさいよ！トイレよ……」

シャルは顔を赤くして怒鳴ると、そのまま走り去っていく。

アレンはそういう事かと納得してそのまま見送るが、不意に視界の端に何かが映り、視線を向けた。

「グルルル……」

アレン達からかなり離れた場所に、先程のベアオークが立っていた。

「っ！！」

再び現れたベアオークを見て驚愕するが、同時に、何故かその右手が振り上げられている事に気付く。

(何だ？あんなところから、何をするつもりなんだ？)

どうやらシャルはまだ気付いていないようだったが、アレンが告げるよりも先に、ベアオークが右手を振り下ろした。

「っ！シャル！危ない！！！」

「え？」

ベアオークが右手を振り下ろす直前、アレンは嫌な予感がして咄嗟に駆け出し、シャルに飛び付いて伏せた。すると、何かが体の上を通過する音と共に、背中に焼け付くような痛みが走った。

「ぐっ、うああああ！！！」

どうやらベアオークが放った何かを掠めたらしいが、そんな事をいちいち確認出来るような状態では無かった。

「あ、アレン！？アレン！すっかりして！っ！！！」

シャルは何が何だか分からず、それでもアレンが苦しんでいる事を理解して必死に呼び掛けるが、ふと手に生温い感触が伝わりそちらに目を向けた。

「あ、ああ………」

その手には、アレンの背中から大量に溢れ出た血がべっとり付いていた。

「い、いや……いやああああ！！！」

それを見て、同時に何が起きたかを理解したシャルは、その事に恐怖し、叫んだ。

それを朦朧とした意識の中で見ていたアレンは、

「しゃ、しゃる……にげ、て」

それでもシャルに逃げるように促したが、もはやその言葉はシャルには届いていなかった。

そして、

「グオオオオ！！」

ベアオークが咆哮を上げ、またしても手を振り下ろした。

今度はその瞬間を見ていたアレンは、硬い土で出来た槍のような物が飛んでくるのを見て驚愕する。

（ま、まほう……！？）

魔法が魔法を使った事に驚いたが、それよりも再びシャルに危険を知らせようとする。しかし、

（だ、だめだ……声が出ない……）

もはや意識を保つので精一杯のアレンに、言葉を発する力は残されていなかった。

（あ、あぶない……シャル……）

手を伸ばそうとするが体が言う事を聞かず、もう駄目だと思ったその時、

土の槍が、地面に落ちた。

突然の出来事に驚いていると、

（あっつ……）

辺りが急に暑くなってきた事に気付く。地面に落ちた土の槍を見ると、溶けて形が崩れているようだった。

（いったい……まさか……シャル……？）

そう思つて、シャルを見た。

そこには、真っ赤に染まった自分の手を見つめ、緋色の髪を逆立てたシャルが、赤い光に包まれていた。そして、パチッ、パチッ、という音と共に火の粉が現れ、周囲の景色が揺らめく。

「グオオオオ！！」

ベアオークは土の槍が効かないと解つたのか、直接攻撃すべく自らの巨躯を走らせた。

(ま、まずい……)

シャルはそれを見ていないようで、先程から何かを呟いている。もはや避けられない程ベアオークが近づき、今度こそダメだと思つた瞬間、

「!?!」

突然の爆発音と共にシャルを中心に巨大な炎の柱が現れ、アレンはセフィロトの近くまで吹き飛ばされた。

「うっ……ぐっ……!」

その際に背中に強烈な痛みが走つたが、アレンは倒れた体勢のままシャルの方を見た。

ベアオークは、影も形も残さずに消えていた。

あまりにも突然過ぎて痛みも忘れて呆気に取られていたが、はつとしてシャルを見る。

(しゃ……シャル……?)

「や、いや、いや、いや、いや……いやあああああ!」

シャルが突然叫んだかと思うと、それに合わせるように炎が舞う。そして地面に生えている草をみるみる燃やしていき、やがてシャルを包み込んでいく。

アレンは、先程のシャルの言葉を思い出していた。

「大丈夫よ。『火はちゃんと意識を傾けたら目的の物以外を燃やす事は無い』ってお母さんが言ってたし」

今のシャルが、意識的に炎を繰り返しているとは思えなかった。

(ぼっ、そう……?)

人は、何かの切っ掛けで本人の意思とは関係無くその魔力を暴走させる事があった。大抵は何か大きな肉体的、あるいは精神的ショックによつて起こる場合が多いのだが、そうなると他者の介入が無い限り意識を失うまで力を使い、最悪の場合は意識を失つてもそれが続く。暴走の最中に力を制御出来るようになる者もいるがそんなケースは極稀で、シャルが出来るとは思えなかった。

となると、この暴走を止めるにはシャルの意識が無くなるを待つしかないが、最悪な事にここは森の中。そんな事をしているうちにあつという間に森に火が燃え移ってしまうだろう。しかも、セフィロトにまで移ってしまったら取り返しが付かなくなる。

さらに、シャルのあの様子は明らかに正気を失っている為、意識を失っても収まらない可能性が高い。そうなった場合魔力が無くなるまで続くのだが、魔力の枯渇状態は非常に危険で、シャルの命すらも危うくなってくる。

「……………」

アレンは何とか声を出して呼び掛けようとするが、短い息が漏れるだけでどうにもならなかった。

炎の柱は天を衝くかのように伸び、勢いを増していく。その熱気がさらにアレンの意識を蝕んでいき、頭がぼーっとしてきた。

(も、もう……………だめ……………だ……………)

段々視界もぼやけてきていよいよ自分の命も尽きてきたかと思い、短い人生が走馬灯のように駆け巡る。

(お母、さん……………一人に、しちゃう、けど……………ごめ、なさい……………)

まずは愛しい母の事が頭に浮かび、

(みじか、かったけど……………楽しかった、なあ……………)

十年ばかりの儂い人生に、それでも楽しかった毎日を思い出し、

「いざというときは護ってあげてね」

(ごめんな、さい……………おばさん……………やく、そく……………守れ、なかつ……………)

つい何時間前かに交わした約束を思い出し、

(シャル……………)

最後に、最も大切な人の顔を思い描く。

(だれ、か……………)

太陽のように明るく、何度も悪戯としては自分を困らせ、最後にはいつも眩しいばかりの笑顔を見せる少女を想い、重くなってきた瞼を閉じて願う。

(しゃる、を……た、すけ……)
しかし、その願いは誰にも届く事は無い。
……そう、思っていた。

大丈夫

(……えっ?)

とつとつ幻聴が聞こえ始めたかと思っただが、不意に誰かが近付いてくる足音が聞こえた。

「……ごめんなさい。もうちょっとだけ我慢してね」
そして、澄んだ、幼い声が聞こえ、閉じた瞼を少し持ち上げてみる。

すると、銀色の光が視界に映り、気になったアレンはもう少しだけ瞼を開いた。

そこには、

「今、助けるから」

銀髪の少女が、アレンに背を向けながら立っていた。

少女が右手を掲げて何かを唱え始めると、巨大な魔法陣が虹色の光を放って空に浮かび上がり、その下にさらに幾つもの魔法陣が現れる。

魔法陣は少女の向こう側にいるシャルを囲むように移動し、光を放ち始めた。

「あああああ……!」

シャルが苦しそうに叫ぶと炎の柱が光に抗うように激しくなり、

今にも襲い掛かってきそうだった。

「くっ！」

しかし少女がさらに力を込めると、虹色の光は瞬く間に炎の柱とシャルを包み込んでしまった。

「っ！」

アレンはその光に思わず目を閉じた。

しばらくしてもう一度目を開くと、草に燃え移っていた炎が収まっており、炎の柱があったところにはシャルが横たわっていた。

アレンは思わず声を出そうとするが、その前に少女がアレンの傍に来てしゃがみ込む。その息は、微かに荒い。

「しゃゝる……は……？」

「大丈夫。命に別状は無いわ」

「そ……か……よか……」

「だから、今度はあなたの番」

そう呟く少女はアレンの傷口に手を当て、淡い光で包む。すると、痛みが引いていくのを感じた。

「これで大丈夫。後でちょっと熱が出るかもしれないけど、それは我慢してね。あとは……」

少女が再び右手を翳すと、少女とアレン、そしてシャルの下に、またしても虹色の魔法陣が現れた。

「ひとまず、ここから出るね」

そう言った途端、光が三人を包み込み、

「……えっ？」

気が付くと神殿前の広場に居た。

「ひろ、ば？」

何が何だか解らないアレンは、とりあえずシャルの姿を探す。と、

その背後でドサツと何かが倒れる音がして振り返ると、少女が横たわったシャルの傍で倒れていた。

「だ、大丈夫!?!」

慌てて駆け寄ると少女の額には大量の汗が浮かんでいた。

「ご、めんな、さい……急に……いつ、ぱい……力、つかっ……たから……」

「待ってて!いま誰か呼んでくるから!」

苦しそうに笑う少女を見て、アレンは助けを呼ぼうと駆け出す。

が、突然激しい頭痛と目眩が起こって地面に倒れた。

(なん……)

突然の出来事に驚くが、先程の少女の言葉を思い出す。

(こっ……こと、か……)

ちよつととかさういうレベルじゃないだろと思いつつ、アレンの意識は闇へと落ちていった。

やがて、雨が降り始めた。

第一話：『妹』

……ずいぶん久しぶりに見たな。

そう思つて目を開けると、そこにはすっかり見慣れた天井があった。

「まだ四時かよ……ちょっと早いけど、まあ良いか」

長針が右下に傾いている時計を見てそう呟き、少年はベッドから身を起こして伸びをする。

「ふあ……」

その際に大きな欠伸あくびが出たが、普段より一時間も早く目が覚めたのだから仕方がない。

とりあえず顔を洗おうと洗面所に行くと、ただでさえ癖の強い黄金色の髪がボサボサになっているのを鏡で確認する。

「うわ、すごいな……」

もはや部分的に直すのは不可能だと思い、蛇口から水を出して思い切つて顔を洗面台に突っ込み、そのついでに顔も洗う。

それですつかり目が覚めたので顔と頭を拭いてもう一度鏡を見ると、それでも目に掛かる前髪が右寄りに撥ね、首に掛かる程度に伸びた後ろ髪も所々が撥ねていた。しかし、これは幼い頃に何度もこの髪に櫛を通してきた自分の母親でもどうにもならなかったので既に諦めていた。

「はあ……」

その事に小さく溜め息を吐いて寝室に戻り動きやすい格好に着替えると、少年はそのまま部屋を出て外に向かった。

アレン・レディアントは十六歳になっていた。

正確に言うと、今月の二十四日付けで十六歳になる。

今日から上級学院の四年生として『学びの庭』^{ガーデン}に通うのだが、始業式兼新一年生の入学式があるこの日でも、毎日の日課である鍛錬をこなす為に朝早くから外に出ていた。

「まだちよつと寒いな……」

外に出た途端に感じる冷たい空気にそう呟く。四季が存在するこの大陸では既に春に入って一月が経つのだが、それでもまだ日も昇っていないこの時間帯は少し肌寒かった。

アレンはとりあえず体を温めようと、準備体操を終えてランニングを開始する。

「はっ、はっ、はっ……」

まだ殆どの住民が眠っている街を、いつものように中心部に向かって走る。所々で仕入れの業者が商品を搬入しているところやアレンのようにランニングをしている者を見掛けたが、それ以外は至って静かだった。

それから二十分程走り、街の中心部に当たる神殿が見えたところで来た道に戻ろうとして、不意にその足を止める。

「……………」

その目には神殿前の広場が映っていたが、一分も経たないうちにすぐにまた走り出してその場を去っていった。

「……………ふっ！ふっ！」

ランニングを終えたアレンは一振りの剣を振っていた。

身長は百七十センチを越え、幼かった非力な体はかなり逞しくなっていて、剣を様々な形で振るうその動きは無駄が無いとは言えないが、^{すわい}齡十六にしてはかなりのものだった。

「はあっ！」

最後に力強く一閃すると、アレンはその手を止める。日はすっかり昇り、その光が額から溢れた汗を照らしていた。

アレンはその汗を拭くと、剣を壁に掛けて一息つく。

(……そろそろ来る頃かな)

そう思っていると、案の定扉が開く音が聞こえたのでそちらを見ると、

「お兄ちゃん？朝ごはん出来たよ？」

長い銀髪を持つ少女が、こちらを見て呼び掛けた。嘗ての幼い体は年相応の成長を遂げ、長かった髪をさらに伸ばしている。

「わかった。いま行くよ、イリス」

「うん」

イリスはその声に柔らかな笑顔で頷くと、先に中に戻っていった。

(……もう、六年も経つのか)

その笑顔を見たアレンは、あの時の事を思い返す。

広場で倒れたアレンが目を覚ますと、そこには見慣れた天井があった。

「ぼく……何で自分の部屋に……？」

アレンはいつの間自分の部屋で寝ていたのかと考え、

「……………！そうだ、シャル！それにあの子も！」

一気に何が起こったかを思い出した。

二人は自分と一緒に広場に帰った筈だ。あの後気を失ってしまったが、一体どうなったのだろう。

そう考えていると、不意にガチャツ、と扉が開いた。

「あ……………」

扉を開けたのは、シャルだった。

「シャル！良かった！だいじょうぶ、と言おうとしたところで、シャルが勢い良く飛び付いて来たので言葉が途切れる。」

「しゃ、シャル？」

あまりに突然で驚くアレンの耳に、

「……なさい」

小さく、そう呟く声が聞こえてきた。それと同時に、噤り泣く声も聞こえる。

「ごめ、なさい、ヒック、ごめん、なさい……」

シャルは、泣きじゃくりながら何度もそう呟く。

「しゃ、シャル？どうしたの？ごめんなさいって、何が？」

それに慌てるアレンは、戸惑いながらもそう尋ねた。

「わ、わたしが、ヒック、しんでん、ヒック、いこ、なんて、ヒック、いったから……」

シャルはなおも泣きながら言葉を続ける。

「アレン、ヒック、しんじゃ、かと、おもっ、ヒック……」

どうやら、自分が無理やり神殿に行った所為でアレンが死に掛けた事をかなり気にしているようだった。

「うっ……うああああん！」

アレンは何と言って良いか解らず、やがて胸元で盛大に泣き始めたシャルにどうしたものかと困っていたら、

「……アレン！目が覚めたのね！」

セフィーナが部屋にやってきた。

「あ……」

随分懐かしく感じる母の姿に思わず泣きそうになるが、扉の前にいたセフィーナは早足でアレンに近付くと、

パアン！

……思いつ切り頬を引っぱたいた。

「……………」

「散々心配掛けて！シャルちゃんまで危険な目に合わせて！何をやってるの！」

一瞬、何が起こったのか理解出来なかったアレンは、生まれて初めて聞く母の怒鳴り声に何も言えずに俯く。

すると、突然その体が柔らかく抱き寄せられるのを感じて目を見張った。

「本当に、無事で良かった……………」

セフィーナの頬は、大粒の涙で濡れていた。

「おかえりなさい、アレン」

その言葉を聞いたアレンに、自身の黄金色の瞳から溢れる涙を抑える事は、出来る筈も無かった。

「それで、大体の事はシャルちゃんから聞いたけど……………」

泣き止んだアレンはリビングにあるテーブルに着いて、あの時の事について話していた

そこにはセフィーナ、シャル、フェルナも居る。シャルの父は仕事の都合上普段は王都で暮らしていて、アレンの父はアレンが五歳の時に他界していたのでこの場には居ない。

そして、ここにはもう一人。

「結局、その子はどこの誰なの？」

セフィーナは、先程からアレンに隠れるようにぴったりとくっついている銀髪の少女を見てそう尋ねる。

「ベツタリね……」

「……………」

それを見たフェルナとシャルは、それぞれの反応を示した。

フェルナと共にリビングに居た少女は、降りてきたアレンを見るや否や飛び付いてきて、それからずっと離れようとしない。その為テーブルにはセフィーナ、アレン、少女の順で着き、その対面にフェルナとシャルが着いている。

話に依ると、セフィーナ達は雨の中広場に倒れていた三人を見つけてひとまずアレンの家まで運んだのだが、熱を出していたアレンと少女は二日間寝込んでいたらしい。

二人はその日に目覚めたシャルから何が起きたかを聞き、アレンが目覚める少し前に少女が目覚めたので色々と尋ねるも、少女は震えるだけで答えようとはせず、困り果てていたところにアレンが目覚めたという訳であった。

「だ、だからぼくにもわからないだつて！」

少女にびったりとくつつかれているアレンは、正面の視線に恐怖しながら答える。

「でも、完全にアレン君に懐いてるわよね、その子」

フェルナはその様子に少し呆れながら言った。

「はぁ……ねえ、お名前は何て言うのかしら？」

セフィーナは困ったように頬に手を当てると、少女に名を尋ねた。問い掛けられた少女は、ビクツと震えてさらに身を隠してアレンの服を強く握るが、

「……………」いりす

かなり長い間の後に、辛うじて聞き取れる程の声で呟いた。どうやらイリスという名前らしい。

セフィーナはようやく答えてくれた少女に安堵し、次の質問をする。

「イリスちゃんのご家族はどうしてらっしゃるの？」

「……………」知らない

「どこにいるかも？」

アレンがそう聞くと、

「いりす、おぼえてないもん」

明らかに他と反応が違っていた。

「覚えてないって……なんでセフィロトの根元で眠ってたのかも？」

「んつとね、いりす、きづいたらおふとんでねてたの」

アレンとはすらすら喋っていくので、他の三人はアレンに任せてその様子を見守る事にした。

「じゃあ他に覚えてることは？」

「んつと、いりすのなまえと、まほうのことはわかるけど……」

そう言うイリスの声は徐々に小さくなっていき、言葉を止めた。どうやら本格的に記憶喪失らしかった。

「魔法の事？」

その言葉に、フェルナが疑問を抱く。

「イリスちゃん、魔法が使えるの？」

「………つかえるよ。いりす、まほうならぜんぶつかえるもん」

イリスはまたもやビクツと震えたがそう答えた。

「全部？全部って、上級魔法とか精霊魔法とかも？」

「………うん。あとは、しんせいまほうとかもつかえるよ」

イリスのその言葉に、その場の全員が驚く。

精霊魔法とは高位の精霊の力を借りて使う上級魔法のさらに上に当たる魔法の事で、神聖魔法とはこの世界を去った神が残っていた力、若しくはそれに近い者の力を借りた魔法である。どちらも並の魔導師では発動出来ない高難度の魔法なので、その使い手には必ずと言って良い程国や神殿騎士団から声が掛かる程だった。

「そ、そういえば、シャルが暴走したときもすごい魔法を使ってたし、ぼくを治したり、森から広場までいきなり移動したときも何かの魔法を使ってたっけ……」

「ちょっと！今何て言ったの!？」

その言葉を聞いたフェルナが、急に大声を出して身を乗り出した。その声にイリスが再び震える。

「えっ？あつ、もしかしてシャル、暴走したこと言っただけなの？」

確かにあの時は正気を失っていたので、シャルが覚えていなくても無理は無かった。

「そうじゃなくて！いや、それもあるけど！その後何て言ったの！？広場がどうか!？」

「も、森から広場に急に移動したこと……?」

「……嘘でしょ」

それを聞いたフェルナは再び椅子に座って背凭せもたれに体を預けるが、その顔は信じられない物を見たかのように驚愕に満ちていた。

「いったいどうしたの？それって、そんなにすごい魔法なの?」

アレンはそれを疑問に思っただけで尋ねる。

「……転移の魔法は確かに上級魔法だし、それをこんな小さな子が使えるのは確かにすごいんだけど、問題はそこじゃないの」

その問いに、フェルナに代わってまたしても困ったように頬に手を当てたセフィーナが答えた。

「良い、アレン？まだこの世界の大陸が五つに分かれる前に存在していた魔法は、少なくとも、今の倍はあったと言われているの」

「そんなに?」

アレンは初めて聞くその事実には驚いた。アレンが知るだけでも現在の魔法はとてつもなく多く、全ての魔法を使える者など存在しないだろう。

「今でこそ精霊の加護のおかげで誰でも魔法が使えるけど、当時は神様が加護を与えた限られた人たちだけが使えて、それでもその量と質は今よりずっと上だったと言われているわ。でも、大陸が五つに分かれて多くの命が失われた時に、数少ない魔導師たちと、彼らが使っていた多くの魔法も失われてしまったの。私たちはそれを」

『失われし魔法』って呼んでいるんだけど、セフィロトの周囲に張ってある結界はその魔法の一つなの。結界っていうのは普通、そこに使われている以上の魔力を使わないと越えられないんだけど……」

「じゃあ、イリスはあの結界よりもすごい魔力を使っただってこと？」

「……今まで数多くの魔導師達が、セフィロトを調べる為に結界を越えようとしたわ。でも、誰一人としてそれは出来なかった。あそこに使われている魔力は、今の時代の人達では決して到達出来ない程に強力なの。だから、その子が結界を越えて転移出来た事に驚いたってわけ」

最後に、フェルナが首を横に振りながら言葉を引き継いだ。

アレンはあの結界はそんなに凄かったのかと驚き、同時に何故今まで誰も結界の奥に行かなかったのかに納得した。

「……ねえ、この子を見つけた時の事、もっと詳しく教えてくれない？」

フェルナはしばらく何かを考えて、アレンにそう尋ねた。

それを聞いたアレンは、言われた通りにその時の事を詳細に話す。

「……なるほどね」

フェルナは何かに納得したかのように頷くと、パンツと手を叩いた。

「とりあえず、この話は一旦置いときましょう。それで当面の問題はこの子をどうするかだけど……」

その言葉に、イリスは再びビクツと震える。

「セフィーナ」

「ええ。この子はウチで預かるわ」

「えっ？」

予想外の言葉に、アレンは間の抜けた声を上げる。

「だってその子、アレン君から離れないしねえ」

「………ここにいて、いいの？」

その言葉に、イリスが小さく呟いた。

「もちろん良いわよ。良かったじゃない、アレン。妹が出来たみた

いで」

セフィーナは優しく微笑ほほえみながらそう言っ二人を見る。

「……………いもう、と？」

「お兄ちゃんって呼んで良いのよ、イリスちゃん？」

フェルナは意地の悪い笑みを浮かべてそんな事を言った。

「なっ　！？おばさん！」

その言葉に驚き、アレンはそれを制しようとするが、

「……………おにい、ちゃん？」

イリスがそう呟くのを聞き、体が固まる。

「い、イリス？別に無理して呼ばなくても……………」

「……………おにいちゃん……………あれん、おにいちゃん……………」

アレンはイリスに呼び掛けるが、その言葉は聞こえていなかった。

「これからよろしくね？イリスちゃん。私はアレンのお母さんだから、イリスちゃんもそう呼んでくれると嬉しいんだけど……………」

「……………おかあ、さん？」

「……………っ！！！」

セフィーナはそれを聞くと何か感極まったような表情をして立ち上がり、イリスを抱き締めた。

イリスはそれにびつくりしたが、その顔が徐々に綻んでいく。

「おにいちゃんと、おかあさん。えへへ」

アレンは自分の母親の意外な姿とこれからの生活に頭を抱えなくなったが、初めて見るイリスの笑顔に、まあ良いかといった風に苦笑した。

その時のアレンには、シャルが一言も発していない事に疑問を抱く余裕は無かった

あれからイリスはすっかりレディアント家に馴染み、本当の妹のようにアレンと一緒に育ってきた。アレンがその少し後から今の日課である剣術の鍛錬を始めたり、他にも色々あったのだが、それはまた別の話である。

そんな事を思い出していると、いつの間にか目の前に扉があった。中に入ると、リビングのテーブルには軽くも重くもなく、それでいて健康に良さそうな朝食が三人分並んでいた。

イリスは家事が得意で、中でもセフィーナ仕込みの料理はそこのレストランなど目では無い程の腕前を持っていて、アレンの食事はいつもイリスが作っていた。

「あつ、やつと来た」

既に食卓に着いていたイリスは、しかしまだ食べ始めてはいなかった。これもいつもの事で、イリスは鍛錬を終えたアレンが食卓に着くまで待つようにしていた。

「ごめんごめん」

アレンが軽く謝りイリスの正面に座ると、イリスはマグカップにミルクを注ぎ、笑顔でそれを渡す。

「はい」

「ん、ありがと。じゃあ、いただきます」

アレンはそれを受け取り少し飲むと、朝食を食べ始める。それを見たイリスも自分の分を食べ始めた。

「今朝はいつもより早かったんだね」

「ああ、何か目が覚めたんだよ」

二人がそうやって朝食を食べながら何かしらの話をしていると、不意にリビングの扉が開いた。

「おはよう。イリス、私の髪留め知らない？」

「あつ、シャル、おはよー。ううん、見てないよ？」

そこに、燃えるような赤い髪を腰までまっすぐに伸ばし、背が伸びて起伏に富んだ身体を学園指定の黒い上着とスカートの制服に包んだシャルが入ってきた。上着には所々に金色のラインが入っていて、その首には赤いネクタイが緩く締められている。

「おつかしいわねえ。どこに置いたのかしら……」

「おおかた、昨日風呂に入る時に洗面台にでも置いたんだろ？」

その言葉にシャルははっとして駆けていき、しばらくしてまた戻ってきた。

「さすがアレンね」

その手には、円錐型をした金色の髪留めが握られていた。

「この前もそこに忘れてただろ……」

アレンは、つい最近同じ事をしたのに全く懲りていないシャルを見て嘆息する。

「良いじゃない、見つかったんだから」

そう言って、シャルは髪留めを開いて後ろ髪を一つに束ねる。

「これでよし、っと」

パチツ、と軽い音を鳴らして髪留めを閉じ、シャルは機嫌良くテーブルに着いた。

「シャル、その髪留めすごく気に入ってるよね」

「えっ？べ、別にそんな事無いわよ？普通よ、普通」

それを見たイリスがそんな事を言うと、シャルは何故か慌てたように否定する。

「おいおい。せっかく人がプレゼントした物をそんな簡単に否定されたら、さすがにちょっと傷付くぞ？」

「そ、そんなつもりじゃないわよ」

「あれ？それってお兄ちゃんがプレゼントしたの？」

「ああ、十一歳の誕生日の時にな」

「ふーん……」

それを聞いたイリスは何かを思ったのか、シャルに意地の悪い視線を送る。

「な、何よ？」

「んーん、別に？良かったね、シャル」

それを不審がるシャルに、イリスはわざとらしい笑顔を向けた。

「っ！あ、アレン？あんたどうせまだシャワー浴びてないんでしょ？さつさと浴びて来なさいよ」

その笑顔から何を察したのか、シャルは突然話題を切り替える。

「へ？あ、ああ……」

アレンはそれにしぶしぶ従い、席を離れた。

「ごちそうさま」

「お粗末さま。お兄ちゃん？あんまりゆっくりしていると、置いてっちゃうからね？」

「わかってる」

手を挙げて応えたアレンは、寝室から着替えを取って風呂場に向かった。

「……………イリスのいじわる」

シャルはアレンが完全に風呂場に入った事を確認すると、イリスをジトツと睨みながら愚痴を漏らす。

「ごめん。でも良いなあ、お兄ちゃんからのプレゼント」

イリスは短く舌を出して謝ると、シャルに羨望の眼差しを向ける。

「プレゼントなら、イリスも毎年貰ってるでしょ？」

アレンはそういうところはしっかりしていて、シャルも物心ついた時から毎年貰っていた。

しかし、イリスは首を横に振ってそれを否定する。

「プレゼントは貰ってるけど、私は、まだそういう『特別』は貰ってないから……だから、それを貰えたシャルがちょっと羨ましいの」

イリスはそう言うと、食べ終わった食器を片付けて台所に向かった。

「……『特別』、か」

シャルはイリスに聞こえないくらい小さくそう呟いて、朝食を再開した。

ガーデンは、その巨大な都市形成によって幾つかの区に分かれている。

セフィロトの森を中心とし、それを囲む神殿がある中央区、その周囲を囲むようにして、各校舎や図書館、闘技場や学生寮などがある学区が存在し、さらにそれを囲むように、南に一般居住区、西に工業区、北に自治区、東に商業区が存在する。

一般居住区には主にガーデンに通う生徒達の家族などが暮らしていて、アレンやシャルの自宅はこの南西部に建っている。その他にも、他地区に店を構える者の家なども多く並んでいる。

工業区は生徒達が使う魔具から一般の住民が使う生活用品まで、様々な品物を生産する工房が立ち並ぶところで、ここで作られた物が商業地区や他の街の業者に売られ、さらにそれを業者から引き取った店側が一般客に売るシステムになっている。武器や魔具などは作った工房が直接店を構えるところが殆どで、生徒や冒険者などはこの地区で装備を整える事が多い。

自治区というのは主に、周辺地域に出没する魔物の討伐依頼や、一般人にとっては赴く事が困難な場所にある薬草などの採集依頼を受け付ける『ギルド』という建物と、冒険者用の宿屋などが多く立ち並んでいる地区である。

ガーデンで行われる実習には直接ギルドへ赴き、指定された依頼内容を遂行する物が多く存在する。あくまでも実習なので、せいぜい薬草採集や下級魔物の討伐といった比較的危険度の低い内容がほ

殆どなのだが、中には中級以上の魔物が出現する北西の森の奥地にある泉の水や、南の大陸の火山地帯にある鉱石の採集などといった危険な内容も存在する。もともと、そういった依頼を引き受けるには担当教員と学園長の許可証が必要となっていて、余程実力のある生徒でなければ許可を得る事は出来ないのだが。

閑話休題。

東の商業地区には、食品店、衣料品店、生活用品店など、様々な店が立ち並んでいる。多くの住民がここで必要なものを買っていくのだが、カフェや屋台なども多く、ガーデンの生徒達も休日はここで過ごす者が多い。

中央区は狭く、セフィロトの森を囲う神殿とそれを管理する神殿騎士団の宿泊施設、そして幾つかの飲食店の他は広場があるだけだった。

学区は先に述べた通り、基礎学院、上級学院、研究院からなる各校舎や巨大な図書館、魔法や武術の合同実技や年に一度行われる魔法闘技大会の会場として使われる闘技場、学生達が住む学生寮などが存在する、謂わばガーデンの本質とも言つべき地区である。

上級学院からは自立心を高めるという名目で全寮制となっており、アレン達も現在はここに数多くある寮の一角で暮らしていた。

学生寮は高級マンションとまではいかないがそれなりに質の良い造りをしていて、各部屋は寝室、リビングの他にもう一部屋あり、オープンキッチンと浴室が完備されている。さらにガーデン内の全ての寮に室温調節の魔法が掛けられている為、生徒達は快適に過ごせているのだった。まさに至れり尽くせりである。

勿論これ程環境が整っているのには理由がある。世界がより強い生命いのちの力を得る為には世界の繁栄が必要であり、ガーデンはそれを目的として造られている為、生徒達は卒業後、その高度な知識と技術を以て様々な形で世界を繁栄に導くことになる。そしてそのレベルを少しでも高くする為に、このように教育のレベルと生徒達の生活水準が高く設定されているのである。

学生寮は別段男子寮と女子寮に分かれている訳では無いので、アレンの部屋の右隣にイリス、正面にシャルの部屋があり、三人はいつもアレンの部屋にあるリビングでイリスが作った料理を食べていた。

シャルは料理が苦手なのだがイリスが有無を言わず三人分作り始めてしまったので、せめて自分が来るまで待たないという条件で一任していた。そうで無くてはあまりにも申し訳なかったのである。もっともイリスの料理はかなり美味しいので、自分が作るよりも食事を楽しめるのだが。

そんな毎日を送る三人は、朝食を終えて上級学院側の校舎群のうちの一つを目指して歩いていった。

「あーあ、また課題に追われる日々が始まるのかあ」

シャルとイリスの間を歩くアレンは、視線を空に向けてそうぼやいた。

「まったく、シャキツとしなさいよ。ただでさえ授業内容が難しくなってくるのに、そんな事じゃ先が思いやられるわよ？」

それを聞いたシャルは、呆れたように言葉を返す。

上級学院の四年生ともなるとそろそろ必修科目の難易度も上がり、実習の最低ラインも他の大陸へ渡ったり難度の高い魔法薬を調合したりと、本格的な物が多くなってくる。その為、気を抜いていたらいつの間にか置いていかれる事などざらであった。

「シャルはそんな心配ないけどね」

イリスはそう言っただけで苦笑する。シャルは、基礎学院の頃から常に学年の上位三位以内には入っている程の成績優秀者なのだ。

「そんな事無いわよ。これでも結構必死なんだから。少なくとも、どっかの誰かさんよりはね」

「あつはつはつはつ……」

それを聞いたどっかの誰かさんは、乾いた笑いを零した。

「でも、お兄ちゃんは実技の成績が良いから大丈夫だよ……はあ」
イリスはどこか苦い顔をしているアレンを励ましたが、しばらく

して溜め息を吐いた。

「どうしたの？イリスこそ、そんな心配要らないじゃない」

それを見たシャルが心配そうに尋ねる。実際、イリスの成績はシャル程では無いが常に上位に入っていた。

「そんなことないよ。実践魔法関連は確かに皆より楽だけど、他は必死だし。それに……」

「……ああ、そういえばそうだったわね」

その言葉に、イリスは先程よりも深い溜め息を吐くのだった。

レディアント家の娘として暮らすようになったイリスが一通り身の回りの物を揃えて少し落ち着き、夏休みも残るところあと三日となった頃、突然、セフィーナの口からこんな言葉が零れた。

「ねえ、イリス。学校に通ってみない？」

セフィーナはイリスを本当の娘のように扱っていたので、呼び方も他人行儀なちゃん付けから呼び捨てに変えていた。

「がっこう？」

新しい生活にすっかり馴染んでいたイリスは、セフィーナともアレンと同じように話すようになっていた。

「そう。アレンやシャルちゃんは、いつもはそこで勉強してるの。今は夏休みだから家にいることが多いけど、明々後日には学校が始まっちゃうから、そうになったら一日のほとんどはその学校で過ごさないといけないの」

「……おにいちゃん、いなくなっちゃうの？」

それを聞いたイリスは、目に涙を浮かべながら尋ねる。

「そうなの。でも、もしイリスがアレンと一緒に学校へ行きたいなら、お母さんはそうしてあげられるの。どうする？」

「いく！いりす、おにいちゃんといっしょにいきたい！」

イリスはその言葉に即答し、セフィーナは優しく微笑んだ。
「わかった。じゃあ明後日、お母さんとアレンと一緒に学校へ行き
ましょう」

そして二日後、セフィーナは、アレンとイリスを連れてガーデン
の基礎学院にある客室に来ていた。

教員に案内されてソファアに座って少し待っていると、そこに一
人の若い男が入ってきた。

「ああ、セフィーナ。待たせてすまないな」

「お久しぶりです、学園長」

セフィーナはそう言うと、立ち上がって深くお辞儀した。

「こんにちは」

「……………こんにちは」

それに倣^{なら}って、アレンと、かなり間があつたがイリスも頭を下げ
て挨拶をする。

学園長らしい男は黄色掛かった短い金髪を逆立て、前髪をひと束
だけ前に出していた。そして、その深いエメラルドグリーンの瞳が、
イリスを捉える。

「堅^かつ苦しいな、昔みたいに呼び捨てで構わんよ。それで、その子
か？」

「ええ、事情は話した通りよ。フェルナも納得してくれたわ」

「らしいな。実は、彼女からも連絡を受けていてな。くれぐれも宜
しく頼むと、電話越しに頭を下げられたよ」

そう言って、学園長は苦笑する。

「それで、シド。この子を通っても問題はなさそう？」

「……………聞き忘れていたんだが、歳は幾つだ？」

「それが、話した通り名前くらいしか分からなくて……………見た目から
すると六、七歳くらいなんだけど……………」

「なら基礎学院の一年生ってところか……………」

それを聞いたイリスが、小さな声で呟いた。

「……………おにいちゃんといっしょがいい」

「でもね、イリス。イリスはまだ小さいから、アレンと一緒にの学年に入ったらお勉強がすごく大変なの」

「やだ。おにいちゃんといっしょがいい」

それを聞いたセフィーナは諭すように言うが、イリスは視線を下に向けながらそう言って、アレンの裾を掴んで離さない。

その様子に、セフィーナは頬に手を当ててどうしたものかと困った顔をした。

「イリス、イリスはぼくと歳が違うから一緒にの学年には入れないんだよ」

「いや、出来ない事は無い」

しかしアレンがイリスの頭を撫でながらそう言うと、シドは客室に置いてあった机の引き出しから冊子のような物を取り出し、それを開いてセフィーナに見せる。

「この学園には飛び級制度も存在する。ただ、その際に一般知識だけで無く魔力量と魔法技量も測るから希望者は滅多にいないのだが……………」

セフィーナがそれを受け取ると、確かに飛び級制度について書かれている項目が目に入った。

「魔力量に関しては、通常なら上の学年でも付いていけるように同い年の平均の倍は無いと承認出来ないんだが……………その子は神聖魔法や、あの結界を越えられる程の転移が使えるんだろう?」

「ええ。実際に私が見た訳ではないのだけど……………」

それを確認したシドは、イリスの前にしゃがんでペンを一つ差し出した。

「このペンをあその机の上に転移させてくれないか?」

イリスはそれを聞くと、恐る恐るペンを取った。

……………すると、指先に銀色の魔法陣が現れ、ペンが消えた。

(あれ？色が……？)

と、アレンは不思議に思ったが、机の方で物が落ちる音が聞こえたので思考を中断する。そちらを見てみると、先程のペンがコロコロと転がっていた。

「……ふむ、上級魔法に加えてその詠唱破棄も使えるか。分かった、この子の飛び級を認めよう。四年生の1クラスで良かったな？」
それを見て顎に手を当てながら頷いたシドは、先程の冊子にペンを走らせる。

「ほんとに!？」

その言葉を聞いたイリスは、弾けるように顔を上げた。

「ただし、他人が見ている前で精霊魔法や明らかに魔力量の違う魔法は使うなよ？見られたら面倒だ。それと神聖魔法も使うな。あれは本来、大司祭や神殿騎士団の隊長クラスでないと使えない魔法だからな」

「うん!！」

イリスはそれに満面の笑顔で頷いた。

「それじゃあ、一般知識についても調べるから少し待っていてくれ。まあ、ある程度さえ出来れば後は通いながら何とかなるだろう。あと、その子の事は病気で入院していた妹という事にしておけ。その方が何かと都合が良い」

シドはそう言うと、一旦客室から出ていった。

「良かったわね、イリス？」

「うん！おかあさん、ありがとう！」

「イリスとおんなじクラスかあ。シャルもいるし、何とかなるかなあ」

本当に嬉しそうにしているイリスの姿を見ていたアレンの頭からは、先程の疑問はすっかり消えていた。

その結果に喜び合っていた三人だったが、アレンとセフィーナはこの時、まだ知らなかった。

イリスは確かにちゃんと話せるし、魔法に関しては文句が無い。

一般知識もそれなりにはあるだろうし、駄目ならシャルに手伝って貰ってアレンと二人で教えてあげれば何とかなるだろう。
しかし……

イリスは、字が読めなかったのだ。
その事實は、戻ってきたシドの手に握られた何枚かの問題用紙によって、初めて知れ渡るのであった

「はあ……」

当時の事を思い出して、イリスはまたしても溜め息を吐いてうな垂れる。

正確に言うと、魔法文字や古代文字は読めるのだが（その二つが読めると聞いた時点でアレン達は驚いたが）、肝心の現代文字がさっぱり解らなかったのだった。

流石に教科書に使われる文字が読めなければどうしようも無く、結局イリスは翌年の四月までみっちり現代文字を叩きこまれる羽目になってしまった。それから再び試験を受け、長い時間を掛けて文字を読み解いた結果、晴れて五年生として入学したのだが……

「イリス、魔法薬学苦手だもんなあ」

苦笑するアレンの言葉に、イリスは更に項垂れる。うなだ

そう、イリスは上級学院から必修に加わった魔法薬学という科目が致命的に苦手だった。

魔法薬学とはその名の通り、様々な魔法の効果を持った薬を調合する授業なのだが、その性質上細かい理論と調合の為の式を紙面で

説明した後、初めて実際に調合する事になっている。その為授業は座学と実技に分かれており、イリスにとってはこの座学がとんでも無い天敵だった。

ただでさえ今でも現代文字を読むのに時間が掛かるのに、そこに調合の為の小難しい言葉の羅列と、(イリスにとって)意味不明な記号が合わさった調合式の総攻撃によって、イリスの頭は魔法薬学の授業中、常にショートしていた。

それでも何とかなっているのは、シャルが懇切丁寧に教えてくれるのと(アレンも座学は苦手なので一緒に教えて貰う側である)、何故か優秀な実技の成績のおかげだった。本人曰く、感覚は料理と一緒にだそう。

「実際に調合出来れば良いんだから、試験も実技だけにしてくれればいいのに……」

そう言っ肩を落とすイリスに、

「それじゃあ感覚でやって失敗する馬鹿がいるからよ」
シャルは厳しい言葉を投げ掛ける。アレンにとっても。

そんな訳でイリスは、入学当初は教科書を読むのに苦労し、今は魔法薬学に使われる小難しい理論とその式に悪戦苦闘しているのだ。

「でも、小難しい理論なら他の授業でも聞くだろ？」

アレンの言う通り、その他の魔法関連の授業でも同様に難しい理論の説明や筆記試験はあった。魔法陣の解析からそれを行使する際の条件や発動理論、その他諸々と、アレンからしてみれば意味が解らない事の方が多かったが、イリスはそれらに関しては筆記、実技問わず好成绩を修めている。

「他の授業は使ってる文字が魔法文字と現代文字だから、現代文字だけ頑張れば出来るんだけど、あの授業は専門の記号も使ってるから……たぶん魔法科学を取ってもおなじ感じになると思うよ。良かったあ、必修じゃなくて」

そう言っ溜め息なのか安堵の息なのか判らないものを吐くイ

リスは肩を落としたまま歩を進めていくが、その足取りは重かった。魔法科学とは、魔法の力を使った様々な道具を作ったりする科目で、部屋の灯りや水道、その他の一般的に使われている道具はこの分野の知識から作られている。因みに魔法科学は一年生から学べる選択科目なのだが、上級学院五年生ではその基礎部分が魔法薬学に代わる必修科目にもなっている。

リスがその事を知り、魔法薬学からの束の間の解放から再び絶望の淵に叩き落とされるのは、もう少し先の話であった。

第二話：『模擬試合』

しばらく話しながら歩いてきたアレン達は、校舎群の上級学院工
リアにある講堂にやってきていた。

「入学式は九時からだから、まだ時間はあるな」

講堂の入り口にある時計を見ると、あと十五分程の余裕があった。
アレンはもう中に入って席に着いておくかどうか考えていたが、
見覚えのある青い頭がこちらにやってくるのが見えたのでイリスが
声を掛けた。

「あつ、おはよー、アクア」

「おはよう、イリスちゃん。アレン君とシャルちゃんも、おはよう」

「ああ、おはよう」

「おはよう。あれ？一人？」

声を掛けられた少女　アクアが、首に掛けた銀色のペンダントを
揺らしながら柔らかい笑顔でそれに応えて、残りの二人にも挨拶を
する。

平均的な身長に肩まで掛かった紺青色こんじょうしきの綺麗な髪を前側だけ左に
流し、両側には薄い黒のリボンを着けている。髪と同色の青い瞳は
優しい光を放っていて、おっとりとした口調と相まってさながら全
てを赦してくれる聖母の样だった。

そんな少女にアレンとシャルも挨拶を返すが、常とは違い一人で
やってきた事を疑問に思ったシャルも問い掛けた。

「うん。トイレに行ってくるから先に行ってるって。みんな、今来
たところなの？」

「ああ、ちょうどアクアたちが見えないから待つかどうか迷ってた
ところ。じゃあ、とりあえずあいつが来るまでここで待とうか。どう
せすぐ来るだろ」

アレンはそう言って自然と待つ事に決めてしまったが、皆そのつ

もりだったので異論は無かった。

「そうね。そもそも、あいつがそんなに長時間アクアを待たせるとは思えないわ」

「何でわたしだけ？」

何故か対象を自分に限定して言い切ってしまったているシャルにアクアは苦笑しながら問い掛けるが、実際彼が他人をあまり長く待たせる事をしないのは解っている為、その事自体は否定しない。

「だって、あいついつつも無口で無愛想なくせに、アクアにだけは甘いんだから。もうちょっと他の人にも愛想良く出来ないのかしら？」

「……誰が無口で無愛想だ」

散々な事を言っていると思われ、後ろから不意に声が掛かり、シャルはビクツと小さく跳ねた。

後ろを振り返ると、アレンより少し背の高い、漆黒の髪と瞳を持つ少年が立っていた。サラサラでまっすぐな髪は肩近くまで伸びており、耳と切れ長の目を少し隠している。

「……そういう気配を消して近づくとところが根暗だって言ってるのよ」

「悪かったな。此方こちらは口が達者な奴をいつも羨ましく思っている」

「……皮肉にしか聞こえないんだけど、こっちの気のせいかしら？」

「ほう、舌が回るだけで無く頭もちゃんと回るのか。これは新しい発見をした」

「何ですって!？」

「はい、ストップ」

額に青筋を浮かべたシャルを制しながら、アレンは二人の間に割って入った。

「ちよつとアレン、退きなさいよ!今この根暗にとっておきのやつ喰らわせてやるんだから……!」

「こんなところで魔法なんて使ったら罰則受けるって。だいたい、先に悪口言ったのはシャルだろ?ノアも、シャルの悪口なんていつも

のことなんだからいちいち怒るなよな」

「ならば其方を如何にかすべきだと思うが？尤も、そのとっておきとやらが通用するとはとても思えないがな」

「……何なら試してみる？」

ノアはなおも言葉を返し、それを聞いたシャルの周りに火の粉が現れ始める。が、

「ノア君？」

「………解ったからその顔をやめろ、アクア」

背後に何か黒いものを宿したまま笑顔を向けてくるアクアを見て、ノアが引き下がった。そしてふと、その隣にいた銀髪の少女と目が合う。

「あっ、えっと、その………おはよう」

その途端に慌ててアクアの背後に隠れてしまったイリスを見て、小さく溜め息を吐く。

「………ああ」

「ノア君？」

「………何だ？」

「朝の挨拶はおはようだよ？」

「………御早う、イリス」

その声にまたしても嘆息しながらも、挨拶をし直した。やっぱりアクアには甘いんじゃない、と聞こえた気がするが、これ以上あの笑顔を向けられるのは御免なのでそれは無視する。

「ま、まあノアも来たからさっさと中に入ろっか。そろそろ席に着かないと怒られるし」

少し微妙な空気が流れ始めた事をいち早く察知したアレンは少し早足で入り口に向かい、その後ノアが、その後ろに残りの三人が続いた。

「悪いな、ノア」

「………お前が謝る事では無いと思うが？」

「いや、でもほら、やっぱりシャルとは昔からの付き合いだからさ」

「……それでお前の気が済むのなら、受け取っておこう」

しかし、しばらくしてノアは再び小さな溜め息を吐いた。

「どうかしたか？」

「……いや、やはり未だ駄目な様だ」

そう言いながら、視線だけを後ろに向ける。

「……ああ、イリスか」

イリスは、何故かノアの事が苦手だった。

もともと極端に人見知りするらしく、『ガーデン学びの庭』に入ったばかりの頃はアレンとシャル以外とはまともに口を利けなかったのだが、現在は基礎学院から一緒だったアクアや他の女友達とも普通に接するようになり、人見知りも少しはマシになっていた。しかし、何故かノアとだけは未だにまともに話せないでいた。

「うーん、何でなんだろうなあ。理由を聞いても話してくれないし、以前何度もその理由を尋ねたが、イリスは俯くだけで結局答えはくれなかった。」

「まあ、そのうち何とかなるって」

「………ああ」

アレンは励ますように言うが、ノアの表情は心無しか少し寂しきうに見える。

ガーデンに通う生徒は殆どが上級学院生の為、上級学院のエリアは非常に広く、その中心に位置する講堂も生徒の数に合わせた造りとなっていた。

アレン達が入ると、右手奥に各教員の席と教卓が一つあり、左手奥に在学生の席、その間に新入生用の席が設けられていて、左手奥から右手奥に掛けて、真ん中に人が充分通れるだけのスペースが空いていた。新入生は式が始まってから入場する為まだ居なかつ

だが、殆どの在学生達は既に席に着いて各々が話をしながら待っていたので、五人は早足で空いている席に向かった。

「あー、その銀髪の君」

そこへ不意に、最後に入ってきたイリスに呼びかける声が聞こえた。

「……………はい？」

声が出た方を見ると、スーツを着た若い男がこちらに向かって歩いてきていた。

「新入生は向こうの入り口に回ってその手前で並んで待つように言われなかったか？もう他の子達はそっちで待つてるから、早く行きなさい」

教員らしいその男は、そう言いながら左手奥にある扉を指差す。

どうやらこの教員は、アレン達と比べるとかなり身体の小さいイリスの事を新入生と勘違いしているらしい。イリスは飛び級をしている為年齢的には当たっていて、確かに傍はたから見たら新入生にしか見えない。本来なら数少ない飛び級をしている生徒であるイリスの事を知らない教員がいるとは思えなかったのだが、どうやらこの教員は今年から新しくやってきた者のようで、イリスの事はまだ聞かされていなかった。

「ん？どうした？もうじき式が始まるから早くしなさい」

「あー、すいません。こいつは飛び級してるから新入生じゃないんですけど……………」

「何？そんな生徒がいるとは聞いたらんぞ？」

「それは、見たところ新任の方のようですし、まだ説明を受けていないのでは？イリス、生徒手帳をお見せして？」

「……………うん」

そう言われたイリスは制服のポケットから生徒手帳を取り出し、それを受け取った教員が内容を確認する。

「……………むっ、本当のようだな。すまなかったな、行つていいぞ」

教員はそれを返すと、着任早々のミスを恥ずかしがるようにそそ

くさとその場を去っていった。

「ふう……さつ、早く座りましょう」

それを見送ったシャルはさつさと席の方に向かっていき、アレ
ンもそれに続く。

「はあ……」

イリスは新入生と間違われた事に軽く溜め息を吐いたが、すぐに他の生徒たちの注目的になっていく事に気付いて顔を赤くしながら二人を追った。

「うう、恥ずかしい……」

席に着いたイリスは身を隠すように頭を伏せていた。腕の間から僅かに見える顔は、まだ薄っすらと赤い。

「仕方無いわよ。本当なら新入生と同じ学年なんだし……」

「……シャルは良いよね、背も高いスタイルも良いから……わたしなんてやっぱりまだまだだもだよ……」

シャルはそれを宥^{なだ}めていたが、今のイリスは完全に落ち込んでいた。その悲観と羨望と羞恥と嫉妬とその他諸々が混ざり合った瞳が、シャルの整った顔を力無く見る。

シャルの身長は百七十センチ近くあって起伏に富んだ身体付きをしているが、イリスの身長は百五十センチもなく、毎日の食事で摂取した栄養はいつたいどこへ行っているのか疑問が湧くような身体付きをしていた。

確かにシャルは同年代でも高い方だが、そもそもイリスはまだ今年で十三歳になるのだから、シャルと比べると差があるのは当然である。しかしそれでも、本人にとっては悩みの種のようなものだった。因みにアクアは百六十センチ程で、身体付きも二人のちょうど中間とあったところだった。

「そんな事無いわよ。私は逆にイリスみたいな女の子らしいところが……あつ」

不意にブザーが鳴って周りの話し声が消えていったので会話を止めて前を見ると、一人の女子生徒が手に紙を持って教卓の前に立っていた。

「皆さん、静粛をお願い致します」

音声拡張の魔法を使っているらしく、その声は講堂内にいる全ての人に聞こえた。やがてざわめきが完全に収まると、その生徒は再び口を開く。

「ありがとうございます。それではこれより今年度の入学式、及び始業式を行いたいと思います。司会は私わたくし、上級学院五年・生徒会長のティア・レイ・ライトが勤めさせていただきます。なお、新入生入場の際して在学生、各教員の方々は御起立お願い致します」

その言葉が終わると全員が立ち上がり、アレン達もそれに倣ならう。

「それでは新入生、入場！」

すると、一体どこに居たのか、様々な楽器を持った生徒達が演奏を始め、その音色ねいろが講堂を包み込む。そして先程の新任教員が言っていた扉が開き、そこから新入生達が二列に並んで入ってきた。真ん中に空いたスペースを歩く新入生を皆が拍手で迎え、背中を叩き、中には指笛を吹く者もいる。

新入生達はどこか緊張したような、しかし期待に満ち溢れた表情で自らの席に向かっていき、やがて全ての生徒が席に着くと演奏が止まった。しばらくして、再び生徒会長が口を開く。

「それではまず、新入生の入学を祝って上級学院学院長からのお言葉を頂きたいと思います。学院長、お願い致します」

ガーデンの最高責任者は学園長であるシドだが、各学院を纏める為に学院長が存在する。各学院内での懸案事項などはこの学院長までが全て解決し、その報告書を学園長が確認するようになっていく。

「うむ。えー、まずは新入生諸君。この度の入学、おめでとう。そして……」

学院長が話し始めると、急に周りに声を潜めたざわめきが戻る。

やはり何代になってもこの手の話は無駄に長つたらしく、生徒達の耳を右から左に貫通していくらしい。その為、後ろの方に座っている上級生達は各々が話を始めるのだった

「はあ……何でここのうって、やたら長つたらしく話すのかしら。こんなの五秒で済ませなさいよね」

シャルは溜め息を吐いてそうぼやいた。どうやら学院長の話は、シャルの耳も通過しているらしい。それにしても、五秒で一体何を話せというのだろうか。

「さすがにそれはちよつとひどくない？ちゃんと聞いてあげようよ」
イリスはその言葉に苦笑いしつつも、学院長の言葉をしっかりと聞いている。今はちよつと、近年の開拓情勢について語り始めたところだった。しかし、

「でも、これ見なさいよ」

「？」

シャルはそう言って、左隣りを顎で差す。

「すう……すう……」

そちらを見ると、アレンが腕を組んで小さな寝息を立てていた。

「話が始まって一分でこれよ」

「……お兄ちゃん」

まさかの兄の姿に、額に手を当てて溜め息を吐くイリスであった。

「それでは最後に、学園長からのお言葉を頂きたいと思います。
シド学園長、お願い致します」

それから二時間、様々な教員や地区の責任者などが代わる代わる話をし、ようやく最後の学園長の挨拶となった。

「……さて、とりあえず長つたらしいのはこれで終わるから、眠っ

ている奴は起きてくれ」

シドがそう言った途端、眠っていた生徒達が皆起き始める。シドはそれを確認すると、言葉を続けた。

「よし。俺も昔はそのクチだったから、お前達の気持ちは良く解る。だが今から話す事は、今後の学生生活にも関わってくる重要事項だ。メモを取るなり頭に焼き付けるなり、好きな方法でしっかり聞いておいてくれ」

その言葉に講堂の空気が少し引き締まる。何せ学園長直々の連絡なのだから、その重要度が低い筈は無かった。

「先ずは新入生達、入学おめでとうと言っておこう。お前達はこれから様々な分野を学ぶわけだが、上級学院には学期毎に何回かの実習があり、実際に希望する職場に研修に行ったり、既に開拓された森等に赴く事になる。後者に関して、既に知っている者も多いだろうが、最近新たに開拓地域が増えた事でその選択範囲が広がった事を伝えておく」

これは既に全員が知っている事で、ガーデンでは開拓地が増える度にその分選択出来る範囲が広がるようになっており、今年に入って一月程経った頃に新たな土地が開拓されたという事が報じられていた。

「新しく追加された場所は火の大陸と水の大陸が主だが、選択リストに解るように印を付けておくのでその時に確認してくれ。そして次だが、近年、魔物達が凶暴化しているという話だ」

その言葉に、講堂内がざわめく。これはまだ誰も聞いた事の無い新しい情報だった。

「これは以前から各王国とガーデンによって話し合われていたのだが、およそ六年前からその傾向が見られ、現在も原因の究明には至っていない。今までは民衆に余計な不安と混乱を招かないように秘密裏に調査していたが、ここ最近になってその程度が看過出来ない物になってきている。そして、諸君らの実習には実際に魔物と戦う事のある物が多い。よって、ガーデンの生徒と教員、及びギルド関

係者にのみ、その事実を伝える事になった。学生諸君はこれを念頭に置きつつ、慎重に実習に取り組んでくれ」

シドはそこまで言って少し間を置くと、再び口を開いた。

「最後に、これは連絡事項では無いんだが、まあ聞いておいてくれ。新入生、それから上級生の諸君。お前達はこの学園で勉学以外にも様々な事を学ぶ事になる。その全てに於いて、悩み、苦しむ事が多いだろう。だが、お前達には頼れる仲間や、愛する者がいるだろうから、そんな時はそいつらに頼れ。頼る事は恥ではない。勿論、頼ってばかりではいつまで経っても成長しないだろうし、最終的に決断するのは自分自身だ。だから、仲間や愛する者を信じ、自分を信じ、良かれと思う事を選び、それを貫け。そうすれば、ここを発つ頃には誰もが誇れる人物になれる筈だ」

言葉が終わると、シドは自らの席へと戻っていった。

再び、生徒会長が前に出て口を開く。

「ありがとうございます。それでは以上を以て入学式、及び、始業式を閉会致します」

「ああ、やっと終わった〜！」

アレンは歩きながら大きく伸びをして、すっかり凝り固まった身体を解す。

式が閉会し、午後からの授業の為に五人は昼食を摂るべく食堂に向かっていた。その道がたら、アレンはノアと午後の授業について話していた。

「午後の授業って何だっけ？」

「……中・近距離戦闘学の合同授業だった筈だが？」

「そっか。まあ初っ端だし、軽く手合わせするぐらいで終わるだろ」

「……………」

樂觀しているアレンに、ノアは何も言わなかった。

ノアが無口なのはいつもの事なので、アレンは特に気にせず後ろにいるシャル達に話を振る。

「シャルたちは午後の授業は？」

「私達は無いわよ？」

「ええっ！？何で!？」

その答えに、アレンは思わず声を上げた。

「何でって……お兄ちゃん、掲示板見てないの？」

「掲示板？見てないけど……」

首を傾げるアレンに、イリスは呆れたように短く溜め息を吐いて言葉を続ける。

「入学式の日の午後は、武術学部の実技でみんなが集中できないからそれ以外はないんだよ？」

「何でみんなが集中できないんだ？」

「そんなの、恒例のあれのせいに決まってるじゃない」

しかし、アレンには一体何の事かさっぱりだった。

それを見たアクアは首を傾げる

「アレン君、入学式の日の授業って、毎年受けてるよね？」

「いや、去年は俺が、一昨年はイリスが熱出したから休んでるけど……」

そういえば、とシャルはその事を思い出した。去年も一昨年も、どちらかが高熱を出して、片方はそれを看病する為に休んでいたのだ。

アクアはそれに納得して説明する。

「入学式の日の中・近距離戦闘学の授業で派手に模擬試合をするから、他の生徒はみんなそれが気になって授業にならないの。だから何年前かに学園長が思い切って他の授業をなしにしちゃったの。武器系統ごとに各学年の代表者が二人ずつ、一対一でいっぺんに戦うし、場所も普段使ってる訓練場じゃなくて闘技場で大々的にやるから、ちよっとしたイベントなんだよ？」

ガーデンに入学した一年生は入学式から一週間掛けて自らの選択授業を選ぶ事になっており、実際に行っている授業の見学が許されている。上級生はその一週間臨時の時間割で授業を受けるのだが、百聞は一見に然ずの通り、その多くは実技で組まれている。

そしてその中でも特に新入生に人気なのが、魔法学部と武術学部の実技であった。

アレン達は皆、魔法学部に籍を置いていたので必修はその授業なのだが、アレンとノアは一年生の頃から武術学部の授業も多く取っていた。何故最初から武術学部に入らなかったのかというと、『武術は自己流で出来るけど、魔法はそうもいかないから』、という事らしい。

武術学部の授業は遠・中・近距離武器の三つに大きく分かれ、そこからさらに各々の武器系統に分かれて行われる。その中でも中・近距離は人気が高く、扱いが難しく魔法で代用も出来る遠距離武器と比べると生徒数が多くて戦闘に華があるので、毎年入学式の日のみこのように大々的に模擬試合を行っていた。

「へえ、知らなかったなあ。でも、じゃあ何でイリスは知ってるんだ？休んでたのはイリスも同じなのに」

「わたしは、一年生の頃に観に行っただし、そもそも掲示板に書いてあるんだからちゃんとチェックしようよ。お兄ちゃんこそ、一年生の頃は何かやってたの？」

「えっと、確か式が終わって、いつの間にかみんなと逸れちゃったからそのまま寮に戻って……」

「お兄ちゃん……」

何とも間の抜けた話に、イリスは再び呆れて溜め息を吐く。

「っていうか、おんなじ授業にノアもいるんだから、それくらい教えて貰うときなさいよ」

アレンはその言葉にはっとして隣を見る。

「……………別に隠していた訳では無いのだが」

その視線を感じたノアは、前を向いたまま呟いた。

「お前な……じゃあ聞くけど、各学年の代表者ってどうやって決めるんだ？」

「前年度の成績最優秀者二名だった筈だが？」

「ノア君は去年と一昨年も出たよね？」

「ああ」

「じゃあ俺は特にすることないな。ノアとおんなじレベルの成績とは思えないし」

アレンはそう言って笑いながら、いつの間にか辿り着いていた食堂に入ってしまった。

「……………」

ノアは何かを言い掛けたが、既にアレンは奥に行ってしまったので口を閉じて後が続く。

「……ノアが言わないのもあるけど、それ以上にアレンが人の話を最後まで聞かないのが悪いのよね」

「あはは……………」

「はあ……………」

シャルが呆れたようにそう言うと、アクアから乾いた笑いが、イリスからまたしても溜め息が零れた。

昼食を摂り終えたアレンとノアは、学区の北エリアにある闘技場に来ていた。

シャル達は何か話があるらしく一旦食堂で別れていたのが今は居ないが、ノアが試合に出る事は分かっていたので後で観に来る手筈になっていた。

しかし、

「……………なあ、何これ？」

アレンは呆気に取られていた。その人の数に。

闘技場の観客席は既に新入生を含めた多くの学生達で埋め尽くされており、所々では売り子の姿や何らかの共通のグッズを持っている者達の姿も見える。もはや本当にお祭り状態だった。

「毎年こんなものだ。確かに今年は多いが」

「……それにしても、他の戦闘学の奴らは？」

闘技場内のグラウンドには既に数十名の生徒達が居たが、中・近距離戦闘学を受講している生徒数と比べると明らかに少なかった。

「……彼処だ」

「……あつ！何であんなところに！」

指差された場所を見ると、一緒のクラスの友人達が観客席に座っていた。その手にはたこ焼きや焼きそばを持っていて、完全に観客に混ざっている。

「あいつらは見物だからな」

「それはわかるけど、何でもうあっちにいるんだよ。グラウンド集合じゃないのか？」

アレンはつきり先にグラウンドに集合してから観戦するのだと思っていたので、友人達の姿に啞然としていた。

「なあ、俺ももう向こうに行っても良いか？」

「……俺達は此処だ」

「お前はわかるけど、何で俺までここなんだよ。試合するわけじゃあるまいし」

「……………」

ノアは少し間を置いてから口を開こうとするが、

「よし、全員いるな？」

担当教員が来てしまったので、結局何も言えなかった。

「これより、毎年恒例の中・近距離戦闘学の模擬試合を開始する。ルールは予め掲示板に載せておいたが、念の為もう一度説明するぞ」

茶色が混じった赤く短い髪と筋骨隆々とした逞しい身体に、それに見合った厳つい顔と燃えるような紅い瞳。初対面の人間には、道端で遭遇すれば間違いないく一目散に逃げ出すであろうこの外見から

はとても教鞭を執る姿は想像出来ないだろうが、歴としたガーデンの教員である。

「ルールは鉾槍術、棒杖術、鎚斧術、刀剣術、鎌鎖術、銃闘術、格闘術科の順に、各学年代表者二名による一対一で行う。武器は学園の物を持ってきてはいるが、恐らく皆各々の武器を所持しているだろうから、試合開始前に斬撃、貫通防止の魔法を掛けて執り行う。

魔法の使用は肉体強化以外禁止、銃闘術に関しては麻酔弾を使用して貰う。制限時間は三十分でどちらかが降参するか気絶した時点で終了とし、時間内に決着が着かない場合はこちらの判定により勝者を決めるが、接戦していた場合は引き分けも有り得る。試合は各科で一斉に行うが、グラウンドには個別に結界を張っておくので他の試合の邪魔をする事は無いから安心しろ。なお、この試合はあくまでも新入生が授業選択の参考にする為の模擬試合である。よって勝敗に拘らず、各々の武器の特性を活かし、授業で学び得た実力を出すように。以上。何か質問はあるか？」

教員はそこまで言うと言員に質問を促したが、誰からも声は上がらなかった。

「……よし、何も無いな。それでは最初は鉾槍術から……何だ、アレン？」

と思っただが、後ろの方にいたアレンが手を挙げていた。

「あゝ、ダグラス教官。刀剣術の四年生が一人いないんですけど……？」

「……………」

周囲を見渡すと四年生はいるものの、刀剣術科はアレンと、何故か汗を掻いているノアだけだった。

「何を言っておる。ちゃんといるではないか」

ダグラスと呼ばれた教員は眉を寄せてアレンを見た。

「……………どこに？」

再び周囲を見るアレンだが、やはり他の生徒は見当たらなかった。……………アレン、一応聞いておこう。貴様、掲示板の案内は見たか

「？」

「いえ、むしろこの模擬試合のことは今日初めて知りました」

「そうか……では代表者の一覧も見ていないのだな？」

「はい」

「……………」

淡々と答えていくアレンに対し、ダグラスのこめかみには青筋が一つ、また一つと増えていく。心無しかノアの汗の量も増えているような気がした。

「……………アレン。どうやら貴様に、学期最初の特別課題をプレゼントする事がたつた今決まったようだ」

「……………へっ？」

「貴様とノアが代表者だ！学内の掲示板は毎回チェックするよ」と、普段からあれ程言っておるだろうが！この大馬鹿者が！！間抜けな声を出したアレンに対し、ダグラスは突如、大声で怒鳴り散らし始めた。

「なっ……………ええっ！？何かの間違いじゃないんですか？」

「……………お前の去年の成績は俺と同じだ」

そこに、先程から大量の汗をたらたらと流しながら沈黙していたノアが、ようやくくぼそつと口を開いた。

「マジで！？っていうか知ってたんなら教えるよな！」

「お前が人の話を最後まで聞かんからだろうが。と言うか、自分の成績ぐらい知っておけ」

「……………はあ、やはりあの成績を付けたのは間違いだったか」

ダグラスは過去の過ち（？）に対して額に手を当てていた。

「もう良い。とにかく銚槍術科の者以外は観客席に行つて良いぞ。自分の二つ手前の試合が始まったら控え室に行くように」

ダグラスはそう言つてグラウンドの外に向かい、銚槍術科以外の生徒達もそれに続いていった。

「じゃあ、何？結局始まる直前まで知らなかったの？」

観客席に来た二人は、シャル達と合流して試合を眺めていた。

「みんなが悪いよなあ。知ってたんなら教えてくれても良いのに……」

「あなたが人の話を最後まで聞かずにどんどん先に行っちゃうからでしょうが」

シャルはそう言って、ぼやくアレンの頭を叩く。

「でもアレン君、準備とか大丈夫なの？」

「まあ、準備って言っても特に無いからな。服は別に制服で良いし、ガーデンの制服は実習地でも動きやすいように伸縮性の高い生地で作られ、温度調整や下級の物理、魔法障壁など様々な補助魔法が掛けられている特注品なので、試合をする分には全く問題は無かった。

「それにしても、ノアと戦うのは久しぶりだから楽しみだな」

「……」

ノアはそれに対し、口を開く。

『おおっと！ここで残った六年生も決着！勝者はジークハルト選手だ！やはり槍の名手と謳うたわれるだけあり、圧倒的にして華麗な槍捌きでした！』

前に、鎗術科の試合終了を告げる実況が聞こえた。ただの実技の授業に実況が居る辺り、学園側のこの模擬試合への本気度が窺える。

「あつ、終わったみたいだよ」

「よし、じゃあ行くか」

「……ああ」

二人は刀剣術科の為、次の次が出番だった。

ノアは口に出掛かっていた言葉を飲み込んで立ち上がると、控え室へと続く階段に向かった。

「がんばってねー」

イリスの激励に手を振って、アレンもその後を追っていった。

「……大丈夫かなあ」

「まあノアは知らないけど、アレンは楽しそうだから良いんじゃない？」

かなり抜けたところのあるアレンを心配するイリスだが、シャルは特に気にしていないようだった。

「……大丈夫だと思うよ？」

そこに、アクアの落ち着いた声が入る。

「どうして？」

どこか自身に満ち溢れたその言葉に、イリスは不思議そうに尋ねた。

「アレン君もそうだけど、ノア君も楽しそうだったから」

アクアの瞳は、優しい紺青色の輝きを放ちながら、二人の背中を追っていた。

アレンとノアが闘技場の控え室に入ると、そこには既に刀剣術科の生徒達が出て、各々が待機していた。

「よう、アレン。自分が出るのも知らなかったなんて、さすがだな」

そこに、上級生らしき男子生徒が声を掛けてきた。

「カイル先輩、それってどういう意味ですか？」

「ん？言葉通りの意味だけ？」

そう言って、カイルと呼ばれた生徒は人懐っこい顔で笑った。

カイルは現在六年生で、深緑の長髪と同色の瞳を持ち、背中まで伸びている鮮やかな髪を首の後ろで括っている。身長はノアと同じくらいで、少し細い身体付きをしていた。

「お前とノアの一騎打ちかあ……まあ、こっちはさっさと終わらせ

てゆっくり見物させて貰うとするわ」

「……良いんですか、そんなこと言って？先輩の相手ってグレイス先輩でしょう？」

「良いの良いの。負ける気しないし」

少し目を細めて言うアレンに、カイルは笑いながら手をひらひらさせる。

グレイスというのはカイルと同じ六年生の大剣使いで、火属性を得意とし、かなり実力の有るパワーファイターだった。

この模擬試合は前年度の最優秀成績者二名が戦うので、このグレイスとカイルが現状六年生のトップという事になるのだが、カイルは相当自信があるようだった。

「んな事より、お前ら二人とも秋の大会、ちゃんと勝ち上がれよ？卒業する前にお前らと戦つときたいからな」

秋の大会とはガーデン年に一度行われる魔法闘技大会の事で、今回の模擬試合とは違って魔法アリ、武器アリで戦う一大イベントである。多くの生徒がこの大会の為に腕を上げて日頃の成果を試すのだが、アレンは去年、これの決勝トーナメントの一回戦で、ノアは三回戦で敗退している。ちなみにカイルは四年生で準優勝、五年生で優勝していた。

「……善処します」

「まあ、去年はダメだったから、今年はもっと上を目指すつもりだし」

「おっ、言うねえ。じゃあ楽しみにしてるわ」

『……えー、まもなく刀剣術科の試合が始まりますので、選手の方々はグラウンドに向かってください』

そう言ったところで、控室にアナウンスが響いた。

「おっ、もう時間が。それじゃ、頑張れよ」

カイルは明るく笑いながら手を振って、控え室を出ていった。そのすぐ後ろに赤い短髪を尖らせた大柄な生徒が鋭い目つきで続くが、カイルは気付いていないようだった。もしかしたら、そのフリかも

知らないが……。

「あつちやー……今の会話、完全にグレイス先輩に聞かれてたよ」

「……俺達も行くぞ」

アレンの言葉には反応せず、ノアはさっさとその場を後にする。

「あつ、待てよ！」

アレンはそれを見て慌てて後を追っていった。

「うっはー、こっから見ると闘技大会みたいだなー」

グラウンドに出たアレンは、感嘆の声を漏らす。

既に前の試合で盛り上がりつつあるらしく、観客は今か今かと試合が始まるのを待っている。観客席の前列は新入生が優先されているらしく、すぐ間近で行われていた戦いにかなり興奮しているようだった。

「さあ、やってきました刀剣術科！おそらく最も一般的な武器類であり、最も戦闘に華があるであろう彼らの戦い！一年生たちも多くがこの学科を選択肢に入れていることでしょう！」

不意に先程の実況の声が聞こえて正面の観客席の上の方を見ると、実況席らしきところに男子生徒がマイクを持って身を乗り出していた。隣にいるのは解説だろうか。それにしても、やけに本格的である。

「おおっと、なにやら「お前誰だよ」的な視線を感じるの、ここでもう一度自己紹介をしておきましょう。実況は私わたくし、魔法学部魔法科学学科五年生のジョニーことジョン＝ファクターと、」

「同じく魔法学部魔法科学学科五年生、解説のケイン＝ウエルナスです。よろしくお願いします」

ガーデンの必修科目は選択科目の中から指定されるのだが、各学部で自分が専攻する学科によって、必修も一部が変わるようになって

ている。

例えば彼らの専攻する魔法科学学科では、他学科では五年生から必修に指定されている魔法科学が一年生の頃から指定されており、学年が上がる程に、その内容もより専門的なものへとなっていく。同じように、アレン達が専攻する魔法科学で必修指定されている、攻撃、防御、補助魔法などの授業は他学科でも一年生の頃から学ぶ事になってはいるが、三年生からは必修から外れている。

また、^{のち}後に必修に加わる事になっている科目を既に選択科目として履修し終えている場合、その科目の代わりに別の科目を選ぶ事も出来る。そして、生徒達は五つの学部全てから授業を選択出来るので、こういった形式を取る事で、実際にその能力を活用する際に、ただ一つの分野に特化するだけでは決して起こり得ない、新しい発想を得る事が出来るのだった。

閑話休題。

何故魔法科学学科が実況と解説をやっているのか甚だ疑問^{はなは}だったが、そういえば彼らは去年の魔法闘技大会でも同じ事をしていたのをアレンは思い出した。

「さあ、それでは解説のケイン、早速この科の特徴と注目選手を教えてください」

「そうですね、まず科の特徴ですけど、一口に刀剣と言っても実に様々な種類と型があるんですが、その本領は当然、接近戦ですね。武器によっては格闘術並みに小回りが効いたり、斧よりも強烈な一撃を放つことが出来るのが魅力だと思います。また、魔法と組み合わせた戦いが最もやり易い武器でもあって、武器を媒介にした攻撃によって遠・中距離戦闘も可能になるのが利点なのですが、今回攻撃魔法は禁止されているので、接近戦で如何に間合いを制すかと、如何に相手の攻撃を読み切るかが鍵になってくると思います。注目選手はもちろん、前年度の魔法闘技大会で優勝している六年生の力

イル・グラン先輩ですが、僕個人としては前年度に三年生で決勝トーナメント三回戦まで勝ち進んだ、現在四年生のノア・レヴィウスの戦いも注目したいところですね」

「なるほど。ちなみにカイル選手の対戦相手はパワーファイターとして有名なグレイス・バーン選手、ノア選手の対戦相手は、同じく去年の大会で決勝トーナメント一回戦まで勝ち上がったアレン・レディアント選手です。二人の戦いにも注目ですね。さあ、それでは会場の皆さん、もうまもなく、試合開始です！」

「……………だつてさ」

「興味が無いな」

実況を聞いていたアレン達は、お互いに向き合いながら言葉を交わす。

「それでは、これより刀剣術科の模擬試合を開始する。二人とも、学校側の武器は必要か？」

審判の教員が二人の中央に立って確認する。

「俺はこれがあるんで」

そう言つて、アレンは右手を前に出す。

すると金色こんじきの光が掌に集まり始め、やがて今朝の鍛錬で使っていた両刃の剣がそこに収まった。柄は黄金色に輝き、刃の外側には何らかの魔法文字が刻まれている。

「うむ。レヴィウス？」

教員はそれを確認するとノアに視線を向ける。

それを受けたノアは右手を前に差し出し、

「……………必要無い」

漆黒の光の中から、鞘に収まった一振りの刀を手にとり収めた。

「よろしい。では斬撃と貫通防止の魔法を掛けさせて貰う。」

教員が二人の武器に手を翳すと、淡い青色の光がそれらを包み込む。

「……それでは、制限時間は三十分、ルールは厳守するように。試合、開始！」

教員は手を降ろして試合開始を宣言すると、すぐさまその場を離れた。

それを見たアレンは、両手で剣を構えてノアを見据える。

「さて、それじゃあ一丁やり「アレン」

不意に、ノアが言葉を遮る。そして鞘に収まった刀を左手で抜き、鞘を右の腰に差した。

持ち主と同様の漆黒の光を放っているその刀には鍔ツバが無く、長さ
は通常の刀の一・五倍から二倍はあった。

「本気で来い」

ビリビリと、ノアから闘気が向けられる。

アレンは何年振りかになるそれに、一気に気を引き締める。

「……行くぞ」

二人の間にほんの僅かな静寂が訪れ、突如、アレンが地面を蹴つてノアに迫った。そして手に持った剣を左に振り下ろす。

「はあっ！」

ノアはそれを左手に持った刀で往いなしてアレンのバランスを崩し、さらに上から振り下ろす。

「ふっ！」

「おわっ!?!」

体制を崩されたアレンはそれを身を反らして紙一重で躲かわし、今度は横薙ぎに払った。身を屈めてそれを躲したノアは、身体を起こすと同時に刀を振り上げ、さらに刀を辿るように脚を蹴り上げて回転する。

刀を避けたアレンは蹴りへの防御が間に合わず、それが顎に直撃した。

「ぐっ! うおっ!?!」

仰け反ったアレンにノアが更に追撃し、強烈な突きを繰り出してきた。それを右側に反転して躲すと、

「……っの！」

そのまま剣をノアの左脇腹目掛けて薙ぎ払う。

ノアはそれを完全に避けられないと判断して右手で鞘を構え、直撃の瞬間に剣とは逆方向に飛んで衝撃を逃がす。

「っ！！！」

しかし、遠心力が付いた一撃は予想以上に強力で勢いを殺し切れずに吹き飛ばされ、着地した瞬間に態勢を崩してしまった。

アレンはそれを好機と見て追撃しようとするが、顎への一撃が脚にきたらしく、身体が前に出なかった。

「くっ……！！！」

「……ちっ」

やがて体制を立て直した二人は、再び間合いを詰めて斬り掛かった。

『おおっと、レディアント選手、今度は突きを繰り出した！レヴィウス選手、これを躲しながら突き返す！レディアント、再び避けて剣を払った！しかしレヴィウスもこれを躲す！これはすごい！どちらにも引きません！！』

「……なんか、すごいね」

二人の試合を観ていたイリスは、只々（ただただ）感嘆する。実際、二人の戦いは明らかに他の四年生のそれとは一線を画していた。

「二人とも、毎日がんばってるから。それに、こっちもすごいよ？」

アクアはそう言って隣を見る。それに釣られてイリスも見ると、

「ああっ、もう！何やってるのよ、アレン！そこで突きよ！そう！そこから薙ぎ払って……あっ！？危ない！！！」

シャルが身を乗り出して大興奮していた。

「シャルちゃん、アレン君の応援、張り切ってるね」

「えっ！？そ、そんな事無いわよ！な、何で私があいつの応援で張り切らなきゃいけないのよ！？」

しかしアクアがニコニコしながらそう言つと、シャルは慌ててそれを否定した。が、その顔は耳まで真っ赤だった。

「……素直じゃないなあ」

そんなシャルの反応に、イリスは呆れて小さく息を吐く。

「ねえシャル、いい加減素直になったら？でなきゃ、何のために今度の　むぐっ！？」

「ちよっ、ちよつと、イリス！ストップ！誰か聞いてたらどうするのよ！」

シャルは慌ててイリスの口を塞いで周囲を見渡すが、幸い他の生徒は試合に夢中でこちらの話は聞こえていないようだったのでほっと息を吐く。

「　ぶはっ！……別に聞かれたつてどうにもならないと思うけど？」

口を塞がれたイリスはその手を強引に退けて、何を今更といった風に言葉を返す。

シャルがアレンの事をどう思っているかなど、新入生以外は殆ど知っているだろう。代々火の精霊の加護を授かってきた由緒正しき大貴族の令嬢であるシャルはそれなりに有名だし、魔法の実力も群を抜いている。容姿も端麗でファンクラブまであるのだが、それでもその傍に男の影が見当たらないのは、普段のアレンに対する態度と、それを見てもなおありもしない可能性に縋^{すが}り付いて告白してきた者を、皆^{みな}すべからくフツているからであった。

しかしアレンはシャルの事を完全に幼馴染として見ているし、肝心のシャルもこの調子なので、二人の関係は一向に進展しないのだった。

「ま、まあ、私は別に何にも無いからどうにもならないけど？せつかく秘密にしてびっくりさせようとしているのに、誰かの耳に入って台無しにされても困るじゃない？そう、そうなのよ！そんな事より

も試合を観ましよう？ね？」

シャルはそう言うのが早いか、顔と意識を試合に集中する。その表情からは、さしずめ「今話しかけても何も聞こえないから」とでもいうような無言の言葉が窺えた。

イリスもアレン達の試合が気にならない訳では無いので、一度盛大に溜め息を吐いてから観戦を再開した。

「……さすがにやるな」

アレンは度重なる攻撃をギリギリのところまで防いだり躲したりして自分も反撃していたが、やはりノアには致命的なダメージを与えられずにいた。

対するノアは、少し悔しそうにしているアレンに言葉を返す。

「お前も以前よりも遥かに強くなっていたので、正直驚いた。たったの六年で此処まで強くなるとは思わなかったぞ」

クリーンヒットこそ無いものの、実際最初の方に横に飛んで流した一撃はノアの予想を上回る破壊力だったし、その他の攻撃も惜しいところまでいっていた。

「だが……」

そこで言葉を切ると、不意に刀を鞘に納めて身を低くし、構える。その構えは、居合い。

しかし、それにしても二人の距離は少し離れているので、一体何をするつもりなのかとアレンが眉を寄せると、

ノアが、消えた。

「未だ甘い」

「っ!?!」

突如アレンの背後に現れたノアは、そのまま抜刀する。

アレンは目の前で起こった出来事に驚きつつも、それを防ごうと後ろに振り向き剣を構える。が、そのあまりの威力に結界の端まで吹き飛ばされてしまった。

「がっ、はあっ……………!」

背中に伝わる衝撃に息が漏れるが、さらに追撃してくるノアを見て咄嗟に剣を横に払う。

ノアは予想外の反撃に、しかしどこまでも冷静に刀を縦に構えてそれを防ぐが、剣を防いだところへ蹴りが迫ってきたので後ろに飛んでそれを躲した。

「……………ふむ。今のを防いで反撃もしてくるとは、本当に腕を上げたな」

「……………そいつはどうも」

感心したように言うが、淡々と口にするその表情は普段とまったく変わらなかつたので、客観的には全くそうは思えなかつた。

「然し、こうなると中々決着が着かなくなるな……………仕方が無い、俺も本気を出そう」

今までは本気じゃなかつたのか、とは思わない。ノアの実力は良く知っているし、相手の力が解らない程アレンは未熟では無かつた。「その代わり……………」

ノアは再び刀を鞘に納めて左手を添え、身を低くした。

「この一撃で終わらせる」

アレンは迫りくる一撃に対処すべく、全神経を集中する。ノアの攻撃が居合である以上、それを防げば隙が生まれる筈だ。そこを突

けば一撃くらいは入れられるだろう。問題は、どこから攻撃してくるかである。

そう思考しながらも、僅かな動作も見逃すまいとノアを見つめていたが、

(来るっ！)

不意にその気配を感じる。すると、目の前に居たノアが再び消えた。

「っ！」

今度は真横に現れたノアの一撃を防ぐべく、アレンは刀の軌道を予測してそこに剣を構える。

ノアはそれを見てもお構い無しにアレンの顔面を掛けて左手を振った。

しかし、振り終えた手の先を見ると、そこには何も無かった。

(な)

顔を驚愕の色に染めているアレンの眼前で、ノアは空いている右手で刀を逆手に持ち、今度こそ、その漆黒の刃をアレン目掛けて振る。

(に)

その一撃はアレンの左脇腹に直撃し、鈍い音と共に吹き飛ばした。

「ぐあっ」

アレンはそのまま地面に倒れ、激痛に顔を歪める。

「フェイント……かよ……」

「言っただろう？ 『この一撃で終わらせる』と。お前が初撃を防ぎに来るのは解っていたからな。ならば隙を作って其処を突けば良いだけだ」

脇腹を押えながら見上げてくるアレンに、ノアはやはり淡々と言葉を発する。

「この……ぐっ……！」

アレンは何とか立ち上がるつもりだが、どうやら身体は言う事を聞きそうに無かった。

「無理をするな。恐らくアバラが幾つか折れている筈だ。後で治癒して貰うんだな」

「く……そ……」

自分がやった癖に、と心中で悪態を吐くが、アレンの意識はやがて闇に落ちていった。

『あーっと、ここでアレン選手の意識が落ちた！勝ったのは、ノア！レヴィウス選手です！それと同時に刀剣術科の全ての試合が終了しました！』

アレンが気絶すると、実況の声が高らかに響いた。

「わたし、お兄ちゃんのとこに行ってくるね！」

「えっ？あっ、ちよっとイリス！」

イリスはそう言うつとすぐに席を離れて走って行ってしまった。

「……もう」

「わたしたちも行くっ？」

「ええ……」

それに頷いて立ち上がったシャルは、アクアと一緒にイリスの後を追う。

(アレン……)

その足取りは、自然と早足になっていった。

コッ、コッ、コッ……

闘技場の暗い廊下に、ゆっくりとした足音が響く。

試合を終えたノアは、アレンが運ばれたであろう医務室に向かって歩いていった。

「よう、お疲れさん」

そこへ、不意に声が掛かる。

「……………どうも」

ノアは声を掛けてきた人物　カイルに、軽く頭を下げる。

「上級の肉体強化まで使ったあ、容赦ねえな」

「……………一応、本気を出すと宣言したので」

表情を変えずに話すノアに、カイルは目を細める。

「……………そこまでやってもそれか？」

「……………」

ノアはそれには答えず、自らの左脇腹に手を当てる。

最後の一撃が当たる直前、アレンは無意識的にノア目掛けて蹴りを放っていたのだった。

「制限付きとはいえ本気出したお前に一撃くれるなんて、こりゃいよいよあいつと戦ってみたくなってきたな」

「……………カイル先輩」

「ん？……………わかった、わかった。わかったからそんなに怖い顔すんなよ」

ノアの表情は傍から見ても特にいつもと変わらなかったが、カイルはそこから溢れだす殺気を感じ、しかし手をひらひらさせて笑って受け流す。

ノアははっとしてすぐに殺気を消すと、軽く頭を下げる。

「……………済みません」

「良いって。でも大会の組み合わせは抽選なんだから、俺が当たっても文句言つなよ？」

「……………善処します」

「……………そこは『はい』って言っとけよ。まあ良いや。そんじゃ、俺はそろそろ行くわ」

「カイルは呆れながらそう言つと、後ろを向いて歩き出した。

「……………」
「ノアはそれを見送りながら、瞳に強い光を宿して拳をきつく握る。」

その口は、常では考えられない程吊り上がっていた。

第三話：『腐れ縁と新たな出会い』

「お兄ちゃん、はやくはやく！」

「そんな急がなくても出店は逃げないんだから慌てるなよ！」

「こういうところは、やっぱりまだまだ子供なのよねえ」

「そんなこと言ったら、またイリスちゃん拗ねちゃうよ？」

「……………」

模擬試合が全て終わり、週末までの授業も、シャルが攻撃魔法の実技で派手に上級魔法を使ったり、その余波に襲われた新入生をアクアが見事な防御魔法で護ってみせたり、イリスが魔法薬の実技で難易度の高い魔法薬を調合したりして、すっかり新入生達の頭に五人の顔と名前がインプットされて終了した今日、『ガーデン学びの庭』では、街を挙げての新入生歓迎祭が行われていた。

五人は現在商業区にきているのだが、街は道を埋め尽くさんばかりの出店とそこを行き来する多くの人々で賑わっていた。

「あつ、あそこの焼き鳥美味しそうだよ？あつちの林檎飴も！」

先程からあれやこれやと食べ物を見ては買い食いしているイリスは、既に懐に抱えきれない程の食べ物を持っているにも関わらず、またしても別の店を見つけてそこへ駆けていった。

「あつ、イリス！先に全部食べてからにしろって！」

それをアレンが引き留めた時には、既にイリスは人の良さそうなおじさんから焼き鳥を受け取っていた。

「……………それにしても、あれだけ食べてるのにどこに栄養が行ってるのかしら」

「いいなあ……………」

「……………」

シャルとアクアは、先程から欲望の赴くままに様々な食べ物を食べているイリスを見て溜め息吐く。そして、

「……ノア君？さつきからどうして」

一言も喋らないのか、と聞こえと後ろを振り返ったアクアの目に、

「……………ゴクン」

何かを飲み込んだらしいノアの姿が映った。

「……………如何どうした？」

「……………うつん、何でもない」

ちやつかり何か食べていたらしいノアの手には、出店で買ったらしき焼き鳥やイカ焼きなどが握られていた。それに対して若干声のトーンを落として前を向くと、

「そんなに買って、全部食えるのかよ」

「じゃあ、お兄ちゃんにもあげるね。はい、あーん」

「いや、いいって！自分で食べるから！　　うあつっ!?!?じゃ、シャル！なんで火の粉出してるんだよ!?!?」

そこには、満面の笑みで焼き鳥を食べさせようとしてくるイリスにひつつかれていたアレンと、それを見て周りに火の粉を撒き散らしているシャルの姿があった。

(……………平和だなあ)

そんな光景にほのぼのしつつ、まるで新入生達を祝っているかのような晴れ空を見上げるのだった。

「なあ、ここらで休憩しないか？」

昼を少し過ぎたところで、アレンは四人にそう提案した。

「そうね、少し歩き疲れちゃったし」

「じゃあお昼ご飯にしよう？」

「イリス、あんたさつきからずっと食べてるのに良くそんな事言えるわね……………」

「良いじゃない、別に。それよりもどうするの?」

「わたしはさつきからちよこちよこ摘まんてるから、お昼はいいかなあ」

「私もパス」

「……………」

「ええ」

三者三様の拒否を受け（一人は喋ってすらいないが）、イリスは口を尖らせる。

「みんなお前みたいに大食いじゃないんだよ。クレープでも買ってやるから、おとなしくここで待ってな」

アレンはイリスの頭を撫でると、クレープ屋を探す為にその場を離れる。と、そこにノアも続いた。

「…………俺も行こう」

「おっ、どうした？」

「別に。食後の軽い散歩だ」

「ふーん…………」

「あっ、お兄ちゃん！わたし、いちごが入ってるやつね？」

「はいはい」

イリスの注文に苦笑しながら、二人はそのまま歩いていった。

「……………それにしてもイリス、あんた今日は久しぶりに全開で甘えてるわね」

「えへへ」

朝からテンション全開のイリスにシャルは呆れるが、イリスは逆にその言葉を聞いてはにかんだ。

「何かあったの？」

アクアはその様子を不思議に思って尋ねる。

「そんなに大したことじゃないよ？ただ単にあの試合の後お兄ちゃんが、『歓迎祭の日は一日中甘えても良い』って約束してくれただけ」

イリスはそう言って、さらに嬉しそうに顔を綻ばせた。

実際のところ、アレンの怪我は治癒魔法のおかげで翌日には完全

に治つたのだが、イリスは気絶して医務室に運ばれたアレンを見た途端飛び付いて泣き出してしまい、寮に戻ってもその機嫌が直らなかつたので、アレンが妥協案としてそう提案したのだった。それを聞いてたちまち上機嫌に戻ったイリスがその日に作った夕飯が、まるで誰かの誕生パーティーのようだったというのは余談である。

基礎学院の頃のイリスは、まるで産まれたばかりの雛鳥のように四六時中アレンに甘えていて、上級学院に上がる際に、ついにセフイーナから甘え禁止令が発令されてしまったのだった。

アレンとしても、さすがに上級学院でまで人前でくつつかれたりしたら恥ずかしいので出来る限りそうしていたのだが、今回はそもそも原因が自分にあるうえにあそこまでいじけるのは少し珍しかったので、一日甘えるくらいは許してやろうという事だった。だから元々究極のブラコン（普段は普通のブラコン）であるイリスからしてみれば、今日は久しぶりの解禁日なのである。

そんなわけで、イリスは今日一日を最大限利用するつもりで朝からアレンをあちこち連れ回していた。

「というわけで、シャルには悪いけど、今日一日お兄ちゃんは渡さないから」

「なっ!?!」

満面の笑顔を向けてくるイリスに、シャルは声を詰まらせる。

「な、何で私に断るのよ!? 別にアレンは私のか、カレシでも何でも無いんだから、好きにすれば良いじゃない!」

シャルは顔を真っ赤にして声を上げるが、自分が言った単語でさらに体温が上昇していた。

イリスはそんな様子に、些ちかかならず溜め息を吐く。

「はあ、いつになったら進展するんだろ……」

「イリスちゃん……」

アクアは自分から渡す気はないと言っておきながらそれは無いだろう、と苦笑いするが、

「ねえ、シャルちゃん。ぼやっとしてると、本当に誰かにアレン君、

取られちゃうよ?」

不意に真剣な表情でシャルを見る。

「と、取られるも何も、別に私はそんなんじゃない……だ、大体アレんよ? いったいどこに、あんな奴を好きになる物好きがいるって言うのよ?」

自分の事はもはや完全に棚のてっぺんの奥に専用の金庫を作つて鍵まで掛けていたのだが、アクアはなおも表情を変えずに続ける。

「でも、アレん君つて結構女の子から人気あるんだよ? たまに告白とかされてるみたいだし……」

「うそ!?」

その言葉に、何故かイリスまで驚いていた。

「それにこの前の模擬試合も凄かったから、もしかしたら今頃新入生からどこかに誘われてたりして……」

「ちよつとトイレに行つてくる!」

「わたしも!」

それを聞くや否や、二人は全速力で走り去ってしまった。

「……行っちゃった。まあ、誘われてもアレん君は行かないんだろうけど……良いよね?」

一人取り残されたアクアは、誰に言うでもなく呟いて短く舌を出した。

シャル達がそんな話をしている頃、アレんとノアはクレープ屋にやって来ていた。

どうやらかなり人気があるらしいその店の前には既に長蛇の列が出来ていて、二人はようやく順番が回つてきたので、それぞれの分と待っている三人の分を買つて店を離れた。

「ふう、やっと買った。それにしても凄い人混みだな」

「ちょうど昼過ぎだからな」

通りはちょうど昼食を取り終えて移動を始めた人々で埋め尽くされており、店の前にある行列が、もはやどこまでがそれなのか判らなくなっていた。

「イリスたち、変なところ行って逸はぐれてなきや良いけど…」

待っている三人を案じるアレンだったが、

「きやつ!?!」

「うおつ!?!……あつ!」

不意にその肩に誰かがぶつかって、持っていたクレープを落とすってしまった。

「ご、ごめんなさい!大丈夫ですか!?!」

「あ、ああ。そっちこそ、大丈夫?」

「はい あつ」

ぶつかった人物は、シャルより少し背が低い少女だった。少しウエーブの掛かった茶色の髪を肩辺りまで伸ばし、左側に白いリボンを結んでいて、髪と同色の瞳は何故か驚きに揺れている。

「?……あの、どうかした?」

「っ!」

アレンがその様子に首を傾げて尋ねると、少女ははっと我に返って勢い良く頭を下げながら、

「す、好きですっ!……!」

……告白した。

「…………へっ?」

あまりに突然の告白に、アレンは間抜けな声を上げてしまった。肝心の少女はしばらく顔を伏せていたが、突然顔を上げると耳まで真っ赤になっていた。

「…………あつ、えっ?あの、その、あれ?」

どうやらパニックになっているらしい少女は、意味不明な事を口にしていたかと思うと、

「ご、ごめんなさ〜い!」

突然走り出して人混みの中に出て行ってしまった。

「な、何だったんだ…………?」

事態が全く読み込めていないアレンは、まだ人混みに消えていった少女の後ろ姿を視線で追いながら、茫然と立ち尽くしていた。

「はっ!?!」

そこへ不意に、背中に強烈な殺気を感じて後ろを振り返った。

「…………あ、あんたつて、やつは…………」

「お、おにいちゃんんん〜!?!」

そこには、紅蓮の業火と見紛う長髪を逆立てて火の粉を撒き散らしているシャルと、銀色の魔力の塊をその手に宿しているイリスの姿があつた。二人とも顔を伏せていたが、既に額に青筋が浮かんでいる事は容易に確信できた。

「…………なっ、何で、怒ってらっしやるのか、聞いてもよろしいですよ、か…………?」

アレンはそれを見て顔を引き攣らせながら尋ねる。が、

「「問答無用!」」

「ちよっ、まっ、ぎゃあああああ〜!?!」

この日、一人の若者の生命が、大地へと還った。

「…………哀れな」

事の全てを見ていたノアは、そう呟いてクレープを頬張った。

「ハアツ、ハアツ、ハアツ、ハアツ…………！」

今までに無いくらい思いつ切り人混みを走り抜けてようやく立ち止まった少女は、息を切らせながら手で胸を押さえていた。

「び、びっくり、しました…………」

少女は大きく息を吸い込んで呼吸を整える。まだ顔に熱を感じるのは、走っていた所為だけでは無いだろう。

（あんな所でお会いするなんて…………）

先程ぶつかった少年の顔を思い出し、同時に自分の行動も思い出して再び赤くなった顔に手を当てる。

（どうして謝るつもりが、いきなり告白してるんですか！？私の口のパカ〜！！）

心中で自らの口を罵倒して（自分では無く口だけを罵倒して）深い溜め息を吐くが、一向に気分は晴れなかった。

（授業、一緒になったらどうしましょう…………）

ガーデンの選択授業に学年の壁は存在しないので、その可能性は十分にあった。

そうならそうならで別の意味で困るのだが、今はとにかくそんな余裕は無かった。

（もう、どうして私がこんな目に…………）

せっかく大きな祭りを楽しもうと意気揚々としていたのに、あまりの人の多さに圧倒されているうちに人波に流されて連れと逸れてしまい、まだ街に来たばかりでどこに何があるやらさっぱり解らず

迷子になってしまったのがそもそもの原因だった。

そしてどこも知れず彷徨さまよっているうちに美味しそうなクレープ屋を見つけたので、長い列に並んでようやく買えたと思ったらこのざまである。クレープは落とすし何故か告白するし、走って疲れたうえに再び迷子になってしまって、もういつその事泣きたいくらいだった。

(道、聞いておけば良かったでしょうか……)

などと思うが、そもそもあの時にそんな余裕は無かったので後の祭りである。

「はあ……」

そして少女はもう一度、今日のガーデン内で最も深い溜め息を吐くのだった。

次の日、いつものように鍛錬を終えて朝食を摂ったアレンは、イリスとシャルと共に授業に向かっていた。

「はあ……」

しかしその足取りは普段よりも心無しか重く、自然と口から溜め息が漏れていた。

「どうしたの、お兄ちゃん？」

それを見たイリスがアレンに尋ねるが、

「もう、溜め息ばかり吐かないでよね。こっちまで暗くなるじゃない」

シャルが鬱陶つっとうしそうに一蹴した。

「……お前な、誰の所為だと思ってるんだよ」

「何よ、私の所為とでも言いたいのか？」

アレンはそんなシャルをジトッと睨みながら歩を進めるが、シャルはそれをさらに睨み返す。

「じゃあ聞くけど、何が悲しくて、昨日何回も火の玉やら火の槍やらを投げ付けられなくちゃいけなかつたんだよ」

「そ、それは、その……あ、あんたが！イリスや、他の一年生の子にデレデレ鼻の下伸ばすから、私が注意してあげたんじゃない！」

アレンの言葉にシャルは思わず視線を泳がせるが、あくまでも強気に言い返した。

事実としては、結局あの後もイリスは甘えてひつついてきたし、偶々（たまたま）道に迷っていた一年生の女の子達が居たので親切心から道を教えてあげると、顔を真っ赤にしながらお礼にと食事に誘われるところを見たシャルが癪癪を起こし、拳句の果てにはイリスと一緒に寝たいと言って聞かなかつたので仕方なくそうするとそれが朝食の席でシャルにばれて、アレンの身体はあちこちから悲鳴を上げていたのだった。

「でもシャル、あんまりやり過ぎるとホントにお兄ちゃんが壊れちゃうよ？」

（あんたも原因の一つでしょうが……）

（しかも他の子の時は一緒になってぶん殴ってたし……）

苦笑しながら言うイリスに、二人は心底呆れるしかなかった。

「あつ、三人ともおはよう」

「……御早う」

と、そこへ横道からアクアとノアがやってきた。

「あはよー」

「あら？アクア、それって新しいリボン？」

見ると、アクアの濃い青髪の内側に、いつもの薄い黒のリボンの代わりに細い白色のリボンが結われていた。

「うん。昨日ノア君に買って貰っちゃった」

「へえ、似合ってるな」

「うんうん。いつものも良いけどこっちも可愛いよ、アクア」

「そ、そうかな？ありがとう」

新しいリボンを着けた姿を褒められて、アクアは照れて少し顔を

赤くする。

「ふ〜ん、昨日ねえ……」

一方、シャルは何を思ってたか、ニヤニヤとノアを見る。

「……何だ、その目は」

「べっつに〜?」

シャルはわざとらしく視線を背けるが、その顔はまだニヤけていた。

「……行くぞ、アレン。一限は必修だ」

「えっ? あっ、待てよ!」

ノアがさつさと先に行ってしまったので、アレンは慌ててその後を追っていった。

「……行っちゃった」

「シャルちゃん、あんまり意地悪しちゃだめだよ?」

「あら、私は何も言っていないわよ? それよりも、詳しく聞かせなさいよ〜」

そう言いながらもまだニヤついているシャルは、逃がさんとはかりにアクアの腕を掴み事情聴取を行う。

「そうだよ、アクア。大体、いつの間に買って貰ってたの?」

イリスもそれに便乗してアクアを問い質す。ただ

やはりどれ程魔法が使えても、こういった事には興味津々な年頃なのだった。

結局シャル達はアクアから詳しい話は聞けず終いだっただが、その様子を前方で窺っていたアレンは、いつの間にか目的の教室に辿り着いていた事に気付いて中に入った。

少し広めの教室には既に何人か生徒がいて、各々が階段状の席に着いて友人達と談笑していた。その中の何人か見知った顔がアレン

達に気付いて手を挙げたので、それに応えて後ろの方の空いている席に腰掛ける。

「結構知ってる奴が多いな」

「まあ、当然と言えば当然よね」

必修は個人のレベル差を無くす為に前年度の成績によってクラスが分けられるので、当然常に優秀な成績を修めれば同様の生徒達とクラスが被るのだが、それでも半分程が初対面なのが、ガーデンの規模の大きさを物語っていた。

普通ならアレン達もクラスがバラバラになってもおかしくないのだが、どうやら見えざる力、もとい学園長であるシドの配慮が働いているようで、五人は今年も同じクラスになっていた。

「わたしは、知ってる人の方が良いんだけどなあ」

「わたしもどっちかって言うところ……」

「二人とも人見知りだからなあ。特にイリスは」

「でも、顔見知りがある事は必ずしも良い事って訳じゃないわよ。ほら」

シャルの視線を辿ると、金髪の少年と黒髪の少女がこちらに向かって来ていた。

アレンと同じくらいの身長少年は、全体的にツンツン撥ねた金色の髪を背中まで伸ばして、目に掛かる前髪を左側に流し、長くなつた左側のもみあげを銀の髪留めで束ねていた。

少女の方はアクアと同じくらいの身長で、少し濃くて綺麗な黒髪を、こちらも背中まで伸ばし、前髪で目を完全に隠していた。その為表情は良く見えなかったが、どこかおどおどとした雰囲気を出していた。

「これはこれは、模擬試合の事を直前まで知らなかったレディアント君とその御一行じゃあないか」

少年は開口一番にそう言うと、自らの蒼い瞳で小馬鹿にしたようにアレンを見る。

「よお、アルベルト」

しかし、アレンは何事も無かったかのように手を挙げて挨拶をする。どうやら馬鹿にされている事に気付いていないらしい。

「はあ……それで？何か用？」

その様子に小さく溜め息を吐いたシャルが、少し棘のある口調で尋ねた。

アルベルトはそれに顔を顰めるが、すぐに不敵な笑みを浮かべて話を続ける。

「フン、まあ大した用という訳でも無いのだけれどね。なあに、今年こそは、このアルベルト＝ルクス＝ラディウスが君達の上に行くという宣言をしに来ただけさ。いや、予言、と言っても良いかもしれないね。なにせ、もう決まっている事なのだから」

「そっか。じゃあ、今年もよろしくな」

前髪をキザつたらしく掻き上げて自信満々に宣戦布告したアルベルトに、しかしアレンは満面の笑みで右手を差し出した。どうやら先程のセリフの意味が全くと言って良い程伝わっていないようだった。そんなアレンに、シャルは更に深い溜め息を吐く。

「……君は相変わらず、人をコケにするのが好きなようだね。まあ良いさ。まずは来月にある新人生クエストの結果を見て、せいぜい驚くがいい。行くぞ、アリス」

アルベルトは顔を少し引き攣らせながらそう言つと、少女を置いてさっさと席に戻っていった。

「……うん……ごめんなさい……」

アリスと呼ばれた少女は、申し訳なさそうにアレン達に頭を下げ、そのままアルベルトの後を追い掛けていった。

「あらら、行っちゃった」

「はあ……去年もあんな事言つてなかったかしら」

「結局、アレン君には伝わらなかつただけだね」

「前から思ってたんだけど、どうしてあつちはファミリィネームで呼んでるのに、お兄ちゃんはファーストネームで呼んでるの？」

呑気に手を振っているアレンを見ながら前後の席で呆れたように

話しているシャルとアクアに、イリスが不思議そうに問い掛けた。確かに片方だけがファーストネームで呼んでいるのは、どこか違和感のある話である。

その問いに、シャルはイリスの肩に手を置いて答える。

「それはね、イリス。要するに、アレンがバカで鈍感って事よ」

「どういうこと？」

しかし、イリスはまだ解っていないようで首を傾げた。その様子に、アクアが苦笑しながら言葉を続ける。

「えっとね、つまり、アルベルト君はアレン君に敵対心、っていうかライバル意識を持つてるからファミリネームで呼んでるんだけど、アレン君はアルベルト君を友達だと思ってるからファーストネームで呼んでるの」

「ああ、なるほど。お兄ちゃんらしいね」

その説明に納得して、イリスはどこか嬉しそうな顔をする。

「まったく、お人好し過ぎるのよ、アレンは」

「でも、それがアレン君の良いところじゃない？」

「まあ、それはそうんだけど……」

アレンの方を見ると、こちらの話は聞こえていないらしく、ノアと話しながら無邪気に笑っていた。それを見てまたしても小さく溜め息を吐くが、その表情は自然と緩んでいた。

それからしばらく雑談していると始業の鐘が鳴り、教卓側の扉から、模擬試合の時にアレンを怒鳴ったダグラス教官が入ってきた。

「えー、わしが今年度、諸君らの攻撃魔法学を担当するダグラスギルバートだ。以前わしの担当になった者は知っているとと思うが、得意属性は火、戦闘スタイルは魔導戦士タイプだ。これから一年間、厳しく指導していくのでそのつもりでいるように」

戦闘をする際、魔導師は大きく三つのタイプに分かれる。

一つは主に使用魔力の少ない肉体強化のみを使って前衛で戦う戦士タイプ、もう一つは後方から援護魔法や強力な魔法を使う魔導師タイプ、そして、武器戦闘もこなして魔法も使うオールラウンダーの魔導戦士タイプである。

基本的に各タイプは魔導師の魔力量や魔法技量、性格などから自然と決まり、魔力が高く技量も高ければ魔導師タイプ、どちらかが低い武器の扱いに長けていれば戦士タイプ、どちらも高く、更に武器戦闘も得意であれば魔導戦士タイプとなる。

正直ダグラスは誰がどう見ても戦士タイプにしか見えなかったが、しかしダグラス「ギルバート」と言えばこの学園の卒業生の中でも有名で、その実力は卒業当時、何度も王国の魔導戦士隊から勧誘されていた程であった。そして、それにも拘らずガーデンでの教職の道を選んだ変わり者としても有名である。因みに他の教員が先生と呼ばれているのにダグラスだけが教官と呼ばれている理由は、大体察しが付くだろう。

「さて、先週の実技は新入生の為に授業を優先したので、まだ全員の顔と名前を覚えていない者も多いと思う。という事で、今日は出席確認も兼ねて自己紹介をして貰う」

厳しく行くと言った矢先のこの言葉に、教室が少しざわめき始める。もっともアレン達を含め、既にダグラスの授業を受けた事のある生徒達は予想していたようだったが。

「あうう……自己紹介の事忘れてたよう……」

……若干一名を除いて。

アレンの右隣に座っているイリスは、頭を抱えて机に突っ伏していた。

「イリスにとつちゃ、最初の難関ってとこかな」

アレンはそれを横目で見ながら少し意地悪く笑った。それに対し、イリスは心底困ったように視線を向ける。

「笑い事じゃないよお」

その目には僅かに涙が溜まっていたが、アレンは気付かないフリをして話の続きを聞く事にした。

「それでは手前の席から順に名前、得意属性、戦闘スタイルと、あとは各々で一つ二つ足して自己紹介をしていってくれ」

それに従って前の席に座っていた男子生徒から順に次々と自己紹介をしていく。

人の第一印象というのは大抵の場合こういった事で決まるので、少し面白い事を言おうとして場の空気を凍てつかせる者や、必要最低限の情報だけを伝える者などもいるが、殆どは定型的な文章で、友好的且つ無難な自己紹介をしていく。

それからしばらくして順番が中程の席になると、今度は先程のアルベルトが立ち上がり、例によってキザっとらしく髪を掻き上げて口を開く。

「僕の名はアルベルト＝ルクス＝ラディウス。得意属性は光、戦闘スタイルは魔導戦士タイプだ。由緒正しきラディウス家の人間だが、優秀な君達は……まあ、障り無い程度に接してくれて構わないよ。ただの自己紹介じゃつまらないな……そうだね、僕は今年の新入生クエストでSクラスを受け、学年トップの成績を修めることをここに宣言しよう」

その宣言に、教室中がざわめく。

Sクラスのクエストと言えば学生が受けられる物の中で最も難易度が高く、その内容は通常の冒険者でさえも成功の保証が無い物ばかりで、受けるには担当教員と学園長の許可証が必要となっている。

どこまでも学生用なので流石に魔物討伐が目的の内容はないが、危険地域に訪れる事になるのは間違い無く、もし成功すればそれだけで今学期分の成績はSランク評価を貰えるだろう。しかし、それを受領する者は長いガーデンの歴史の中にも滅多にいなかった。そんな危険な目に遭うくらいなら、身の丈に合った内容をコツコツこなしでいった方が賢明というものだろう。

そんな物を受け、更に成功を宣言したアルベルトに誰もが驚いて

いたが、ダグラスがそのざわめきを制止する。

「静かに！その事については、後で新入生クエストの説明をしてから話を聞く事にする！それでは次の生徒！」

その言葉に、太々（ふてぶて）しく席に着いているアルベルトの隣に座っていた少女が立ち上がる。すると、小さくなっていたざわめきが再び大きくなった。今度のは主に男子生徒からだったが。

「……アリス！！リア！！シュバルツハイト……です……閻属性が、得意……です……」

人前に立つのが恥ずかしいのか、アリスは顔を赤らめながら口を手を当てて俯き、前髪で隠れた視線をあちこちに向けながらもじもじしていたが、やがて慌てて席に着き、身を縮こまらせた（その姿にどこか感嘆したような声上がり、所々から、「良い！あの恥じらう姿がなんともし！」やら、「ふむ、黒髪にあの性格……九十点ですな」などといった声が聞こえた気がした）。

「何か、イリスと良い勝負よね、アリスって。名前も似てるし」
それを後ろの席で見っていたシャルが、隣に座っているイリスに視線を向ける。

「でもわたし、アリスとちゃんとお話したことってないんだよね」
「そういえば私も無いわね。いっつもアルベルトに連れ回されてるイメージしか無いわ」

あの二人とは既に結構長い付き合いの筈だったが、彼女とはこれまでまともに接した事が無い事を今更のように自覚する。

「俺はあるぞ？良く相談されるし」

「えっ？」

「なんでお兄ちゃんが？」

きょとんとしているアレンに二人は少し驚き、その言葉を脳内で再度確認する。

（そ、相談って何の事かしら……）

（まさか……）

そこまでいってお互いを視線で確認し、思い切って事の真相を聞

いてみる事にした。

「お、お兄ちゃん、アリスから何の相談を受けてるの？」

恐る恐る尋ねるイリスとそれを見守るシャルは、ゴクツと喉を鳴らす。

「ああ、アルベルトの事だよ。詳しい事は言えないけど」

しかし、アレンの回答に危惧していた事は起きていない事を確認して、とりあえず安堵する。

と、そこへ前の席に座っていたアクアが立ち上がった。どうやらいつの間にか順番がこちらまで回ってきていたらしい。

「アクアレヴィウスです。魔導師タイプですけど、あんまり攻撃魔法は得意じゃないです。その代わり、水属性の防御とか補助魔法は得意です。よろしくお願いします」

アクアが丁寧にお辞儀して座ると、またしても男子の妄言（「可憐だ……」「むむつ、九十三点、といったところですかな」）が聞こえてきたが、それに構わず隣に座っていたノアが立ち上がった。どことなく目付きが怖いのは気の所為だろうか。

「ノアレヴィウス。闇属性、魔導師士タイプだ」

ノアはそれだけ言うのとさっさと席に着いてしまった。それだけで場の雰囲気が一気に五段階くらい下がったのだが、それでも所々から黄色い声が聞こえてきていた。

「まったく、あんな根暗のどこが良いんだか……」

シャルは全く理解出来ないといった風に肘を突くが、次が自分の番だった事を思い出してすぐに立ち上がる。

「シャーロットフラムエルイグニスです。得意属性は火、戦闘スタイルは魔導師タイプです。これから一年間、よろしく願います」

腰を折って柔らかい笑みを見せるシャルに、教室が再びざわめき出す（今度は「おお！」やら、「相も変らぬ美しさ、九十九点！」やら、「イグニスさん！付き合ってくれー！」などと聞こえたが、本人はそれを歯牙にも掛けていなかった）。

シャルはそのまま席に着くと、隣のイリスに視線を送る。

それを受けたイリスは、シャルとは対照的に恐る恐るといった感じに立ち上がりつつ前を向く。が、すぐに耐え切れなくなって顔を俯かせてしまった。

それを見ていたアレンは、仕方無いなといった感じに短く息を吐いて、小さく声を掛ける。

「イリス、がんばって」

「う、うん……」

アレンからの激励を受け、イリスは一瞬躊躇ためらいながらも、意を決して再び前を向く。

「……えっと、イリスはレディアントって言います。得意属性は光属性で、魔導師タイプです。えと、趣味はお料理で、得意科目は魔法薬学の実技で、苦手科目はその座学で、」

イリスはただどしくも順調に話していき、その様子に肘を着いて安堵するアレンだったが、

「好きな物、ってというか人はお兄ちゃんです」

ゴトツ！

突然の暴露に思わず滑って頭を打ってしまった。

「イ、イリス……？いきなり何を」

言い出すのかと隣を見ると、今にも頭から煙を噴きそうな程顔を赤くしているイリスが、どうやらパニックになっているらしく、完全に目を回していた。

「……あつちやー」

アレンは右手で顔を覆い、慌ててイリスを席に着かせる。その間に聞こえた叫び声（「ブラコン!? ブラコンなのか!?」）「それは犯罪ではないのか、兄よ!」「だがしかあし! 九十五点だああ!」）は完全に無視して。

「シャル、頼む」

「はあ……ほら、イリス? しっかりしなさい」

「うーん……人が、いっぱい……」

とりあえず自分で最後なので、アレンはさつさと終わらせる為に気絶しているイリスをシャルに任せて口を開いた。

「えー、アレン」レディアントです。得意属性は光、戦士タイプです。一応言つとくとイリスとは兄妹ですが、本当に何も無いんで気にしないでください。よろしくお願いします」

口から盛大な溜め息が出そうになるのをなんとか堪えて自己紹介を終えたのだが、席に着く際に謂れの無い僻み（「では奴が!？」）「おのれい! いったい普段どんな生活をしているんだ!」「うらやま……いや、けしからん奴め!」）が聞こえて、やはり溜め息が漏れてしまった。

「静かにせんか!……あー、これで全員終わったな? それではこれより、先程話に出た新入生クエストについて説明する」

ダグラスはもう一度ざわめきを制し、説明を始める。

「諸君らも一年生の時に受けたと思うが、新入生クエストとは来月の中旬に一年生が初めて行う実習の事で、これには毎年四年生も同伴する事になっている。その目的は、まだ魔物を見た事もない者が殆どの一年生に野外実習のノウハウを教えてやる事と、上級学年に上がった諸君らの指導力を高める事にある。よって、もちろん諸君らにも成績は付くし、実習内容を選ぶ権限も諸君らにある。が、まあ正直言ってあまりレベルの高い内容を選んでもお互いに負担が大きくなるだけなので、一年生の事も考慮したうえで選ぶように。一年生は二人〜三人、四年生は二人〜五人までのパーティーを組める

ので、四年生、または一年生で既に希望する者がいる場合は代表者が後で配る紙に名前を書いて、来週末までにわしに提出する事。それ以外はこちらで決めて月末のこの授業で発表し、その際に顔合わせをする予定だ」

説明が一通り終わると、再び教室がざわめく。なにせ下の学年と組むという事はその分難易度も増すうえ、自分達の指導次第で成功の有無が決まると言っても過言では無いのだ。

「大まかな説明は以上だ。詳しく聞きたい者は授業が終わった後に聞きに来るように。それから授業が終わった後でもう一度言うが、アルベルトは後でわしの研究室まで来るように。では少し時間が短いが授業を始める………イリス、いつまで気絶しておる！さっさと起きるか！」

結局その時間は簡単なおさらいで終わったのだが、ダグラスの喝でようやく目を覚ましたイリスは事態を把握してまたしても顔を赤くし、授業が終わるまで身を小さくしていたのだった。

「はあ、やっとあの視線から抜けられた………」

それから三限までの授業を終えたアレンとノアは武術学部の授業を受ける為に一旦シヤル達と別れて次の教室に向かっていたのだが、一限目の騒動の所為で先程までずっと（主にとにかく全て男子からの）鋭い視線を浴びていたアレンは、謂れの無いスパイ容疑による拘束からようやく解放された運の悪い民間人のような、はたまた何年も刑期を終えて久方ぶりに娑婆しゃばに戻った元囚人のような、言いよりの無い開放感を味わっていた。

「全く、下らんな………」

その様子をずっと見ていたノアは、無表情のまま隠す事無く溜め息を吐く。が、

「でもさ、お前アクアの時ちょっと怒ってたろ……あつ、待てよ！冗談だって！」

不意にアレンが意地の悪いニヤけ顔でそんな事を言ってきたので、無視を決め込んでさっさと先に行く事にした。

ガーデンの授業は、平日は午前中に一から四限、昼食を挟んで七限まであり、土曜は午前中のみ授業となっている。そして基本的には午前が座学、午後が実技と別れていて（授業によっては逆もある）、これから生徒達は、午前中最後の試練とも言うべき四限目の授業で、睡魔と空腹との激闘を行うのだった。

武術学部は戦闘の為の実技が主だと思われがちだが、もちろん座学も存在する。様々な武器の特性や、森などに訪れた際の薬草の知識、緊急時の応急処置など、魔法が使えない時でも生き残れる術を教わる事が出来る。もっとも、それら座学よりも実技の方が圧倒的に多いのは間違いないのだが。

アレン達がこれから受けるのは近距離戦闘学の座学で、人体の構造や近距離武器の特性、それを踏まえての鍛錬の仕方などを学ぶ授業である。

「おつ、もう結構埋まってるな」

教室に着いた二人が中に入ると、講堂とも言える程に広いそこは既にたくさん生徒達で埋まっていた。

「今日から一年生も受けるからだろう」

「ああ、なるほど。おつ、あそこ空いてるぞ」

アレンはそれに納得し、中程の三人席がちょうど二人分空いていたのでそこに向かった。

「ここ、空いてるかな？」

「あつ、はい、どうぞ　ね、レディアント先輩!？」

アレンが先に座っていた少女に尋ねると、少女はこちらを向きながら返事をして、アレンの顔を見た瞬間に驚いて思わず立ち上がって叫んでしまった。

「あれ？君、確か昨日の……」

その少女は、昨日クレープ屋の前でアレンとぶつかった少女だった。

「あっ、あの、昨日はその、すみませんでした、その、えっと……」
「ま、まあまずは座って落ち着いて。みんな見てるし」

しどろもどろに昨日の事を弁解する少女はアレンに言われて周りをみると、他の生徒達が興味深げにこちらを見ている事に気付き、顔を赤くして慌てて席に着いた。

「す、すみません……」

少女は赤くなった顔を下に向け、身を縮こまらせる。

「良いつて。それよりも、えっと……」

「あっ、えっと、私はステラ＝ユイ＝エル＝ティエラと言います。一年生です」

「ステラか。俺は知ってるみたいだけど、一応。アレン＝レディアント、四年生な。こいつは同級生のノア＝レヴィウス。よろしくな」

「よ、よろしくお願いします」

「それでステラ、何で俺の事知ってるんだ？昨日も俺を見て驚いてたし……」

「そ、それは、その……お、お二人の事は入学式の日の模擬試合を見ていたので知っていたのですが、まさかあんな所でお会いするなんて思っていないくて、それで、その、動揺してしまって、つい、逃げてしまったというか、なんと……ですかその、昨日の事は忘れて欲しいというか、そもそもあんな事を言うつもりではなくて……」

「わ、わかった、わかった。だからそんなに落ち込むなよ」

アレンは別に責めているわけでは無かったのだが、徐々に小さくなって顔をさらに俯かせていくステラを見て慌てて宥めた。

「とにかく、これからよろしくな？ここにいてことはステラも近距離武器なんだろう？」

ステラはその言葉に顔を輝かせ、勢い良く頷く。

「は、はい！レディアント先輩たちと同じ刀剣科です！」

「アレンで良いって。ファミリーネームだと、妹と区別付かないし。ノアもファーストネームで良いよな？」

「……ああ」

（あんなにすごい試合をなさっていたのに、結構無口な方なんですね……）

ステラはそこでようやく口を開いたノアを見て、そんな事を思っていた。

「あっ、こいつが無口なのは気にしなくて良いから。俺とでもこんな感じだし」

「は、はい」

それとは反対に、アレンは人の良い笑顔で積極的にステラに話しかけてくる。

そんな正反対の二人を見て、ふと不思議に思ったので尋ねてみる事にした。

「……お二人は、仲がよろしいんですね」

「ん？まあな。基礎学院からの付き合いだし」

「……と言っても、行動を共にし始めたのは途中からだかな」

「どのような出会いだっただのか、お聞きしてもよろしいですか？」

「それは……」

と言ったところで始業の鐘が鳴り、担当教員であるダグラスが入ってきた。

「あっ、わるい、また後でな。あの人、怒らせると怖いんだよ」

アレンは両手を向けて謝り前を向く。

「聞こえたぞ、アレン？心配しなくても、貴様には既に模擬試合の時の特別課題を用意してあるから安心しろ」

「げっ、そりやないですよ教官！」

そのやり取りに、教室から笑いが零れた。

「ちょうど良いから言うておくが、学内や寮に張り出されている掲示板はこまめにチェックするように。さもないとこのバカのように、直前まで模擬試合に出る事を知らずに特別課題を喰らう事になるぞ

？」

その言葉に、生徒達はクスクスと笑いを零しながら返事をする。

「それでは授業を始める前に。あー、わしは本来魔法学部の教員なんだが、この授業に限り、武術学部でも教鞭を取っている。担当は刀剣科で、刀剣類ならばほぼ全て扱えるので安心して良いぞ。この授業は卒業するまで受ける事になるが、途中でやめる事も出来る。しかし、諸君らには是非とも、最後まで続けていって欲しいと思っている。また、この授業は実技も含め、一年と四年、二年と五年、三年と六年が合同で行っているので、上級生は下級生を助け、下級生は遠慮なく上級生から学ぶように。それではまずは各自、同じ科の上級生と下級生で三人、もしくは四人の組を作れ。作ったら、代表者一人は前に来てこの用紙に組の者の名前を書くように。余った者は後でわしが適宜入れていく」

ダグラスの説明を聞いた生徒達は、それに従って近くの者や顔見知りの者と組を作っていく。

「俺たちはこの三人で良いよな？」

「ああ」

「あ、あの、私なんかでよろしいんですか？」

アレンは二人の確認を待たずしてダグラスの下へ行くこととするが、ステラが遠慮がちにそれを引き留めた。

「悪いわけないだろ？それに、これも何かの縁だって」

しかしアレンは手をひらひらさせて、さっさと前に行ってしまった。

「……諦める。こうなったらあいつは止められん」

「はあ……」

ステラはそれに納得しつつ、何気にノアが普通に話し掛けてきた事に驚いていた。そして、

(あう……話題がありません……)

ノアの話し掛け辛い雰囲気になるのだった。

一方、アレンは教卓の上に置かれた用紙に三人の名前を書いてい

た。

「むっ、やはりお前達二人が組むか……」

「まあ、去年までは別々でしたし。あっ、メンバーはこの三人だけで良いですよ」

「何？」

アレンは怪訝な表情を浮かべるダグラスを見てニヤツと笑う。

「教官、俺が座学で戦力になると思います？」

「……残念ながら望み薄だな」

「でしょ？」

「望み薄だが、自信満々に言っな」

「いでっ!？」

ダグラスはアレンの言葉に不本意ながらも同意するが、しかしその頭に一発拳骨を叩き込んだ。

「まったく、試験で上位に入るなら普段ももつとしっかりせんか。

だがまあ、一年生はステラか……ふむ、これはこれで……」

「はい？」

「いや……とりあえず、お前達はそのメンバーでやれ。しっかり鍛えてやれよ？」

「……善処します」

少し気になる反応だったが、アレンはそれに応えようとまだ痛む頭を擦りながら自分の席へ戻っていった。

「終わったぞー、っと」

しかし、アレンが席に戻るとノアとステラの間になにやら微妙な空気が漂っていた。

「……どした？」

「何でもありません……」

ステラは少し疲れ気味に首を振るが、アレンは大体どんな状況だったのか察しが付いたので、敢えてスルーする事にした。

「……誰か他に入ったか？」

「いや、俺が拒否した」

「だろうな」

「えっ？どうしてですか？」

ステラはさも当たり前のように話す二人に首を傾げた。それを見たノアが、アレンを横目で見ながら答える。

「こいつが座学が苦手だからだ」

「……そんな理由で大丈夫なんですか？」

まさかの超個人的な理由に少し不安になるが、アレンは笑いながら手をひらひらさせる。

「まあ、教官も他の奴に付けた方が新入生の為になるってわかってるだろうしな」

「で、ですが、アレン先輩は模擬試合に出られるくらいですから、成績はトップなんですよね？」

模擬試合に出れるのは学年のトップ二人だと聞いていたので、そんな生徒が座学が苦手だというのは意外だったが、

「こいつが得意なのは実技だけで、座学は全て一夜漬けだ」

「そゆこと」

「心配しなくとも、ステラは俺が責任を持って教える」

「……よろしくお願いします」

ノアの言葉に笑って頷くアレンを見て何故か納得してしまい、深い溜め息を吐いてしまった。

「では午前の授業はこれで終了する。午後は実技だから、教室を間違えるなよ？」

ダグラスは授業終了の鐘が鳴ると同時にそう告げ、教材を持って教室を出ていった。

その途端、教室中から息が漏れた。

「ふあゝあ、やっと終わった」

アレンは大きく欠伸をしながら、机に張り付けていた身体を伸ばした。

「し、初日から、結構飛ばすんですね……」

その隣では、ステラが初日から膨大な量のノートを取った腕に手を当てながら、他の生徒同様軽く参っていた。

アレンはそれを見て、小さく笑いを零す。

「まあ、ステラもすぐに慣れるって。それよりも昼飯食べに行かないか？」

「御一緒してもよろしいんですか？」

「どうせ次も実技で一緒だしな。それとも、誰かと飯食う約束でもしてたか？」

「いつ、いえ！そんな事ありません！」

「……？まあ、いいや。じゃあ早いところ行くか」

アレンは何故か激しく否定するステラに軽く首を掲げるが、気にせず立ち上がって出口に向かう。

「……アレン、あいつらにステラを紹介するの？」

そこへ、ノアがアレンにだけ聞こえるように尋ねた。

「ん？そうだけど、なんかまずかったか？」

「……いや」

ノアは何か言いたそうだったが、アレンは気にせずに教室を出ていき、そのすぐ後にステラも続く。

「……まあ、俺は構わんがな」

小さな呟きは、誰に聞こえるでもなく、誰もいなくなった教室に消えていった。

ガーデンの校舎内には生徒数に見合った数多くの飲食店が存在していて、その種類も各大陸から来る生徒の為に実に様々な物が揃っ

ている。

その多くは一般業者が営む物だが、中には技術学部生徒らの実習を兼ねた店もあり、彼らはそこで店の建築や経営、調理などを学んでいる。

「で、今から行くのは俺たちがいつつも行ってる実習生の店なんだけど、結構美味いうえに安いんだよ」

「そうなんですか。楽しみです」

そんな説明を受けているステラはどうやらすっかり打ち解けたらしく、少し顔を赤くしながらも柔らかな笑顔でアレンと話していた。

(それにしても……)

そのすぐ後ろを歩くノアは、二人の様子を無表情に眺めていた。

(あの二人は、先日告白したりされたりしたのでは無かったか……?)

告白した側のステラが積極的に話に行くのはまだ解るのだが、普通ならアレンはもう少し意識していても良い筈だった。しかし本人にはそんな様子は一切感じられない。というよりも、

(あれは……本当に忘れてるな)

どうやらアレンは先程のステラの言葉を真に受けて、昨日の出来事はきれいさっぱり忘れてしまったらしい。通常なら考えられないが、そこはアレンだからと納得する。昔から、そういう事に関しては異常に疎くて間が抜けているのだ、アレンは。

(……不憫な)

本来なら嫌でも意識してしまってそこから何らかの発展があるのだが、そんな可能性が微塵も残っていない事を知らないステラに少し同情するノアだった。

「あっ、お兄ちゃん！こっちこっち！」

と、そんな事を考えていると前方からイリスの声が聞こえてきた。見ると、既に六人掛けのテーブルを陣取ってこちらに手を振っていた。

「いまシャルたちがお水汲んで来てるから……あれ、その子は？」

三人がテーブルに向かうと、当然と言えば当然だがイリスがステラを見て首を傾げた。

「ああ、さっきの授業で一緒の組になった一年生のステラ。次も実技で一緒だから、ついでに昼飯に誘ったってわけ。ステラ、こいつは妹のイリス」

「は、はじめまして。ステラⅡユイⅡエルⅡティエラです。よろしくお願いします」

「イリスⅡレディアントだよ。こっちこそよろしくね？わたし四年生だけど、ステラとは同じ年だから敬語は使わなくて良いよ」

やや緊張気味に挨拶をするステラに、イリスはへにやつと笑って応える。

「えっ？同じ年なのに四年生なんですか……？」

「ああ、こいつは飛び級してるから」

「飛び級ですか!？」

「そ、そんなに驚かれるとさすがに照れるんだけど……それより、ステラってもしかして昨日クレープ屋にいた子？」

飛び級をした事に心底驚くステラに、イリスは照れて少し頬を赤くして話題を変える。

「あつ、はい。そこでアレン先輩にぶつかって……っ！」

ステラはそこまで答えて、その後何が起こったかを思い出して一気に顔を赤くする。

「ステラ？どうかしたか？」

「い、いえ……大丈夫、です……」

そうは言うが、ステラは顔を俯かせてしまい、こちらと目を合わせようとしない。

「……？それで、それがどうかしたのか？」

「あー、えっと、ステラはどうもじゃないんだけど、その……シャルが……」

「シャル？……はっ!？」

何故か言い淀むイリスに首を傾げるが、アレンは突如として襲い

掛かってきた強烈な殺気に身体を硬直させる。

ギギギッ、と不快な音が聞こえそうな感じで首から上だけで振り向くと、

(……………お、鬼がいる)

「誰が鬼ですって?」

「い、いや!今のは言葉のあや、っていつか俺いま声に出してた!」

全身から真っ黒なオーラを出しているシャルを見て思わず恐怖するが、よもやの読心術にさらに動揺する。

そんな事はお構い無しに、シャルは一步、また一步と近づいてくる。その手には水が入ったコップが握られていたのだが、良く見ると沸騰している事に気付いてアレンは顔を引き攣らせた。

「どうしてあんたは、いつつもいつつも……………」

「じゃ、シャル?まずは落ち着け。そして俺の話によく耳を傾ければ俺には何の落ち度もないことが……………」

必死に説得するアレンを余所に、全く聞く耳を持たないシャルは手に持っていたコップを放って右手を掲げる。そして紅蓮の炎を掌に宿すと、それをアレン目掛けて思い切り投げ付ける。

「問答むよ」

「ゴ、ごめんなさい!」

前に、突然ステラが目の前に飛び出してきて、勢い良く頭を下げた。

「わ、私の所為でみなさんにご迷惑をお掛けしてしまって……………ですが、アレン先輩は何も悪くないんです!信じてあげてください!」

あまりにも突然の出来事に、全員が言葉を無くす。

「……………はあ、別にあなたの所為じゃないわよ。迷惑でも無いし。もう良いから、さっさとお昼を食えましょう。アレン、あんたはお水ね」

ここまで真っ正直に謝られてはさすがのシャルも怒る気が失せた

のか、炎を消して席に着く。

アレンは何故か有無を言わず水を汲みに行かされる事になったが、肌突き刺さるような視線に（精神的には既に完全に突き刺さっていたが、そのうち本当に肉体にも何か突き刺さりそうだったので）抵抗する気にはなれなかった。

「……まったく、善く善く学習しない奴だな、あいつは」

事が一段落着いたところで、いつの間にか席に着いていたノアがぼそつと呟いた。

「ノア君、いつからそこにいたの？」

「今さっきだ」

どうやらノアはシャルが癪癢を起こす事を予測して、店に入っすぐに避難所トイレに行っていたらしい。

（うーん、さすがにちよつとアレン君がかわいそうかも……）

アクアはその隣に腰掛けつつ、本人の気付かぬうちにとも簡単に見捨てられていたアレンを心中で不憫に思っつて、その端正な顔立ちに苦い頬笑みを浮かべた。

「そついえば、自己紹介がまだだったわね。私はシャーロットフラムエルイグニス、シャルで良いわ。こつちはアクアレヴィウス。よろしくね？」

「は、はい、よろしくお願いします。ステラユイエルティエラです」

後からやってきた店員にそれぞれが料理を注文した後、シャルはそついえばまだ目の前の少女の名前すら知らなかった事に気付き、まずは自分から名乗る事にした。

先程の事もあったので出来るだけ柔らかい声と表情で話し掛けたのだが、対するステラの表情はどこか緊張しているように見えた。

(……やっぱり、さっきのは拙かったかしら?)

その原因を先程の自分の行動だと推測したシャルは、どうしたものと心中で顎に手を添える。実際問題、初対面であんな場面に遭遇したら、誰であろうと少しは身構えるというものだった。

(シャル先輩にアクア先輩……お二人とも、公開授業で目立っていた方達ですよ……それに……)

しかし、正面に座る少女は確かに緊張はしていたのだが、その原因は先の理由とは全く関係のないところに起因していたのだった。

「あ、あの！失礼ですが、イグニスという事はシャル先輩の御実家はあの……?」

ステラは突然遠慮がちに尋ねてその途中で言葉を途切らせるが、シャルは彼女が言わんとしている事を察して、軽く頷く事で肯定の意を示す。

「ああ、まあ、そうね……あなたの考えてる通り、私の家はそのイグニスよ。自慢みたいになるから、自分からはあんまり言わないんだけどね……」

「やっぱり！『火の一族』の方とお知り合いになれるなんて、感激です！あつ、この間の公開授業、お二人とも凄かったです！四年生でもう上級魔法が使えるなんて感動しました!!」

その答えに、ステラは瞳を輝かせながら羨望の眼差しを向けて大興奮していた。

一気にまくし立ててくる少女に、シャルは圧倒されつつも柔らかく微笑みながら、何かを見透かすような視線を向けた。

「ありがとう。でも、あなたの家も似たようなものでしょう?」

「っ!」

その一言に、少女の茶色い瞳が揺らめいた。

「……御存じだったんですか?」

「まあ、私は貴族だから名前を聞けば判るわよ。もっともここは余所の大陸だから、皆が皆あなたの事を知ってる訳じゃ無いでしょうけどね」

肩を竦めながら話すシャルから、ステラはどこか居心地悪そうに視線を背ける。

「……なあ、『火の一族』って？」

そこに、先程からステラの隣で会話を聞いていたアレンが、頭に疑問符を浮かべながら尋ねた。

「……むしろ、あんたは知つときなさいよ」

「ごめん、わたしもわかんないんだけど……」

「イリスまで……」

この兄妹は揃いも揃って、と顔に手を当てて溜め息を吐くシャルに代わって、その隣にいたアクアが口を開く。

「シャルちゃんの家は昔から火の加護を強く授かった有名な貴族だから、そういう呼び方をする人たちが多いみたい。要するに、その人たちの代表みたいなものかな？」

「へえ」

解つたのか解っていないのか、アレンは呆けたような声を出した。

「あれ？それでステラの家もってことは……」

「ステラの家は、地属性の加護を強く授かっている貴族なのよ。まあ別の大陸の事だから、この大陸の人達は名前を聞いたくらいじゃ判んないだろうけど、それが普通なの。でも、そもそも何でここに入ったの？確かあの家って、皆あつちの医療学校に通うんじゃないかな？ たかしら？」

「それは、その……」

貴族間の事情をそれなりに知っているシャルにとっては当然の疑問に、ステラは困つたように俯いていく。

「ま、まあ、そんなのは良いだろ？それよりも、ちょっとみんなに提案があるんだけど」

それを見兼ねてか、アレンは話題を別のところへと持っていた。結果として、それは話題を逸らすという本来の目的を果たす事になった。聞いた側にとっては十二分に。

「今度の新人生クエスト、俺はステラを入れようと思ってる」

時が、止まった。

その間実に七秒。七秒間もの間、そのテーブルからは一切の物音がせず、周りの生徒達の話し声や食器が立てる音のみが響いていた。……アレン、おま「あんた私達が何受けるか解ってるの!？」はっと気付いたノアを遮って、シャルが勢い良く立ち上がってテーブルに両手を叩きつけた。

「わかってるよ。でも、そもそも引き受けたのはシャルだろ？」

「うぐっ……で、でも！」

「それにどうせ誰かと組まなきゃいけないだし、だったら知ってる奴の方がやりやすいじゃん」

「そ、それは……まあ、そうだけど……」

妙に説得力のある言葉に、シャルは徐々に最初の勢いを無くしていく。

「あ、あの、皆さんはどのクラスを受けるんですか？」

「あー、それはだな……」

恐る恐る手を挙げた当事者であるステラの言葉に、アレンを含めた全員が視線を逸らす。そして、

「………Sクラス」

「………えっ？」

ぼそつと呟いたイリスに思わず聞き返してしまう程、ステラは自分の耳を疑ってしまった。

「あの、いま何て……?」

「……私達は今年の新入生クエスト、Sクラスの内容を受ける事になったの。ちなみにこれは諸々の事情により変更不可よ」

「なっ　！？」

観念したようなシャルの言葉に、絶句する。

「ええ~~~~~!?」

そして、人目も憚らず叫んでしまった。

「な、なんで！？どうしてそんな難易度の高いものを受けたんですか！？先生たちでさえ、『あんなのを受ける奴らの気が知れないな、はっはっはっ』とか言う程なんですよ！？」

「あ、あははは……　ちよ〜と並々ならぬ事情があつてね〜」

目に涙を浮かべながら物凄い剣幕で迫ってくるステラに、シャルはついに顔まで逸らして乾いた笑いを零した。

「どこが『並々ならぬ』だよ。アルベルトの挑発に乗って勝負を引き受けただけだろ？俺は別に下のクラスでも良かったのに」

「うっ、うるさいわね！あんな奴より下なんて、私のプライドが許さないのよ！いえ、プライド以前に、生理的に無理！！」

「……挑発？勝負？」

さっぱり事情が呑み込めないステラは、ただ頭に疑問符を浮かべていく。

その隣にいたイリスが、溜め息を吐いて事情を説明する。

「実はね　」

三限目終了の鐘が鳴り、教室移動の為に授業道具を鞆に詰めていたアレンの下へ、なにやら得意げな足取りのアルベルトがやってきた。その後ろには、付属品のようにアリスもいる。

「何か用？」

「……まだ何も言っていないだろう。まあ良い、これを見たまえ」

シャルの言葉によって完全に鼻を挫かれたアルベルトは一瞬不機嫌そうに顔を顰めるが、すぐに気を取り直して一枚の用紙を取り出すと、もはやお馴染みのように前髪を掻き上げた。

「……受領許可証？」

「そう！まさにそれさ！」

「ひゃっ!？」

イリスがそこに書かれた文字をそのまま読むと、アルベルトは更に得意げな顔をして一歩近づく。それにびっくりしたイリスは、思わずシャルの後ろに隠れてしまった。

「ちよつと、ウチのイリスをいじめないでよ！」

「人聞きの悪い事を言うな。僕に幼女虐待の趣味は無い。それに、彼女はレディアントの妹であって君の妹では無い筈だが？」

「私にとつても妹みたいなもんなのよ！」

「……………幼女？幼女つて、わたしのこと？」

「ま、まあまあ。それで、それがどうしたんだ？」

結果として地面に両手を着いているイリスを余所に、アレンはいつまでも進まない話を再開させる。

「どうしたもこうしたも、これで晴れて僕のSクラス挑戦が確定したという事さ」

「みただいな。がんばれよ」

「……………どうして君はそこまで鈍いんだ」

「ん？」

アルベルトはまたしても言いたい事が全く伝わっていない事に不満げに呟いた。

「何でも無い!……………ゴホンッ!さて、これで僕が君達の上に立つのは時間の問題になったわけだが、ここで一つ問題があるのさ」

「問題？」

気を取り直して話を続けるアルベルトは、用紙を持っていない側の指を一本立てる。

「仮にこのまま僕がSランク評価を取り君達に勝ったとしよう。し

かし中には、Sクラスを受けたのだから下のクラスを受けた君達よりも評価が高いのは当然だと思っ輩も出てくるわけだ」

「まあ、そりゃそうだ。でもSクラスを成功させたらそれだけで十分だと思っけどなあ」

「ところがだ！そういう連中は君達にもSクラスを受ける實力はあるのだから、それがそのまま實力の証明にはならないと考えるのさ」
要するに、實力の近い者同士がそれぞれレベルの違う内容を挑んでも、それは評価の基準にはならないという事だ。

「……つまり、私達にも同じ内容を受けて勝負しろって言うの？」
先程から回りくどく話すアルベルトに、シャルは本題をぶつけた。
「まあ、ぶつちやけてしまっっとうさういう事だね。その方がどちらが上かはつきり出来る」

アルベルトは腕を組んで不敵な表情を浮かべるが、シャルは馬鹿らしそうに肩を竦める。

「バツからし。何で私達まであんたの無謀な挑戦に付き合わなきやいけないのよ」

「おや？この世界に名高き一族であるイグニスともあろう者が、まさか怖気付いたのかい？」

短く鼻で嘲笑っアルベルトの言葉に、シャルの眉がピクリと反応した。

「……何ですって？悪いんだけど、良く聞こえなかつたからもう一回言ってくれるかしら？」

「お、おい、アルベルト、やめとけっつて」

額に青筋を浮かべてピクピクさせているシャルを見てアレンは慌ててアルベルトを止めるが、言われた本人はそれを無視してニヤリと口角を吊り上げる。

「何度でも言っつてあげるよ。僕に負けて、負け犬になるのが、そんなに怖いのかい？」

「まけっつ　！良いじゃない、やってやるわよ！その根拠のない自信、この私が完膚無きまでに叩きのめしてやるわ！！終わっつてから

吠え面搔くんじやないわよ!？」

完全に力チンときたシャルはアルベルトに向かつて勢い良く人差し指を向けると、その場にいた全員に聞こえる程大きな声で怒鳴り散らした。

「あつちやー、だから言つたのに……」

「ふっ、軽いもんだね」

予想通りの展開になったアレンとアルベルトは、片方は額に手を当て、片方はやれやれといった感じに肩を竦めてそれぞれの反応を示す。

「それじゃあ勝負は同じ内容のSクラスを受けて同時にスタート、成功失敗に関わらず、より評価の高かった方の勝ちとしよう。同ラックだった場合は評価内容の点数で優劣を決める。人数はそちらに合わせて四年生五人、一年生二人のパーティーでいこう。内容自体は君達が決めてくれて構わないよ。ああ、それから負けた方は勝つた方の言う事をなんでも一つ聞く事。僕が勝つたらそうだね、君達二人には、園内放送で高らかに敗北宣言でもしてもらおうかな。特にイグニス、君のは是非とも聞いてみたいね。それじゃあ、内容が決まったら知らせてくれたまえ」

アルベルトはそれだけ言つと、こちらの返事も待たずにアリスを従えて去っていった。

「……上等じゃない。私達が勝つたら、私に喧嘩を売った事を来世までトラウマを引きずるぐらい後悔させてやるわ」

その後ろ姿を瞳にメラメラと燃え盛る炎を宿らせながら睨みつけるシャルを止める手立てがアレンに思い付く筈も無かったのは、言うまでも無い事だった。

「幼女……幼女って言われた……」

イリスは、まだ地面に両手を着きながらブツブツと呟いていた

「と、いうわけ」

「イリスちゃん、なかなか立ち直ってくれないから大変だったよ」

「アクア！そんな事言わなくて良いよお！」

クスクスと笑うアクアに、イリスは頬を膨らませて顔を赤くする。それを見たステラは思わず笑ってしまいそうになるが、困ったような表情をする事でぐっと堪える事に成功する。

「……ステラ、いま笑ったでしょ？」

「い、いえ、そんな事は……」

かに見えたが、イリスに悟られてしまつて慌てて否定した。

「と、とにかく！事情はわかりましたけど、そのアルベルト先輩とはどなたなんですか？」

話を聞いた限りだと、Sクラスの受領を許可されたのだから相当の実力者で間違い無いのだが、いまいちアレン達との関係性が見えてこない。

「アルベルト君は、この大陸で光の加護を授かったかなり高位の貴族でね、わたしたちとは基礎学院から一緒なの。それで、アレン君も光の加護を授かつてるでしょ？それもすごく強い加護を。だから、昔からアレン君の事をライバル視してるの。でも、アレン君はそんなつもり全然ないからいつも空振りしてるんだけどね」

「それにしたつて拘り過ぎだと思っただけね。何かあるのかな？あつ、ちなみにアリスはアルベルトの幼なじみなんだけど、確か従者でもあるんだつて……ステラ、どうかしたの？」

苦笑いする二人は、どこか不安げな表情を浮かべるステラを心配そうに見つめる。

「あ、いえ……その、クエストの事を考えたら不安になつてしまつ

て

「嫌なら無理をする必要は無い」

「……ノア先輩」

みるみる表情を暗くしていくステラに、先程から全く言葉を発していなかったノアが口を開いた。

「自分には荷が重いと思うのなら、それを辞める決断も出来なければならぬ。無理をしては、自分にも周りにも良い結果は生まれな
いだろう。抑この話はアレンが勝手に言い出した事で、未だ正式な
手続きは何もやっていないんだ。断った処で、誰もお前を責めたり
はしない」

いつになく長いセリフに、ステラは一瞬考え込む。が、すぐに閉じていた口を開いて決断する。

「……行きます。考えてみればこんな機会滅多にありませんし、私自身の夢の為にも、これは良い経験になると思いますので。それに、もう一人の一年生にも心当たりがあるんです。ですから、足を引っ張らないように精一杯頑張ります」

まっすぐに見つめてくる漆黒の瞳から視線を逸らさず力強く頷く少女に、ノアは目を閉じながら短く息を漏らして、小さく笑う。

「だいじょうぶ！シャルもお兄ちゃんもいるし、わたしもちゃんとフォローするから！」

「それに、こつちには学年トップのノア君がいるしね？」

そのやり取りを見ていたイリスとアクアも、片方は力強い、片方は優しい微笑みを浮かべた。

「皆さん、これからよろしくお願いします」

ぺこりと頭を下げるステラに、ノアもはっきりと頷く。

「ああ、解らない事は遠慮なく聞いてくれ」

「……ノア君、なんだか今日は良く喋るね？」

「……気の所為だ」

が、ニコニコしながら笑い掛けてくるアクアの言葉に、すぐにいつもの仏頂面に戻ってしまった。

「ステラちゃんの事、心配なんだよね？」

「……そう思いたければ好きにしる」

自分の事のように嬉しがるアクアに小さく溜め息を吐き、もう一度ステラを見る。

ノアには、何か確信めいたものがあつた。

そもそも、何故アレンがたまたま知り合つたばかりの少女をこの難題に加えようとしたのか。

恐らくアレンは、ステラの持つ何らかの力を感じ取つたのだとノアは考えていた。

昔からそういうところに妙に聡い少年は、いつの間にか周りを惹きつける力を持っていた。

かくいう自分もその一人であると、当時の事を思い出して小さく笑う。

「……アレン」

「そもそも何であんたはいつもいつも！」

「それは関係ないだろ！？っていうか、俺の所為じゃないって何回言ったらん？ああ、ノア。どうした？」

まだ言い争っていたアレンとシャルは、息を切らせてお互いを睨みつける。

「……何故、知り合つたばかりのステラを誘つたんだ？」

この二人も出会つた頃のままだと半ば呆れつつ、先の理由について尋ねた。

問い掛けられた本人は、全くの予想外だったのか、きよとんとしてノアを見る。

「あー、えっと、何ていうか……勘？」

「……」

少し買い被り過ぎただろうかと本気で思ってしまったノアを、一体誰が責められようか。

魔法学部側の校舎の屋上、そこには、庭園と呼んで差し支えない広場が存在している。

春の柔らかな暖かい風に包まれたそこに、二つの人影があった。

「……ねえ、アル……」

「……何だ？」

木のベンチに寝そべっているアルベルトに、その頭を膝に乗せて行儀良く腰掛けていたアリスが不意に問い掛けた。

「……どうして……あんなことまでして……アレンたちに勝負……受けさせたの……？」

「……別に。大した理由なんか無い」

小さくゆっくりと尋ねるアリスに、アルベルトは寝返りを打って顔を背けた。

否定する金髪の幼馴染に、少女はなおも言葉を続ける。

「……うそ……アルは、いつも一番になりたがってる……」

今度は沈黙で答える自分の従うべき主に、あくまでも幼馴染として、あるいは一人の少女として、再び尋ねる。

「ねえ、どうして……？」

「……『約束』だから」

その問いに、すぐ傍にいる少女にも聞こえない程小さく、少年は

そう呟いた。

「アル……？」

「……何でも無い。それよりも今度の勝負、必ず勝つぞ」

アリスはもう一度聞き返すが、アルベルトはそれには答えず、自分に分りに言い聞かすように言葉を紡ぐ。

「……………うん」

春の暖かい風が、柔らかく微笑む少女の綺麗な黒髪を優しく撫でて、陽気な空へと去っていった。

第四話：『人は見掛けに依らぬもの』

再び場所を移したそこは、武術学部側の校舎に数多く存在する訓練室の一室。

小さな体育館程の広さの部屋で、数多あまたの金属がぶつかり合う音が鳴り響く。

そのうちの一つを奏しやうでるのは、金髪しんぱつの少年が持つ、黄金色の柄の剣。

「ほいつ、と」

右側から斜めに振り下ろされた刃を別の刃が受け止め、甲高く、しかし重い音が周囲に響く。

「んっ……!!」

受け止めた刃は、少年のそれとは比べるべくも無く、巨大。

それを繰るのは、白く細い、か弱き少女の右手。

「やあっ!!」

少女は少年の剣を弾くと、自らの刃を右に薙ぎ払う。

「つとと……!!」

少年は身を屈めてそれを躲かわすと、今度は下から剣を振り上げる。

「っっ!!」

しかし少女はいとも簡単にそれを防ぎ、再び反撃する。

(……ふむ)

一連のやり取りを、少し離れたところから観察する漆黒の少年。

(基礎部分に問題はない、か。恐らく、其処らの一年より実力は遙かに上だろう……)

顎に手をやりながら、髪と同じ漆黒の双眸に、主に少女を映し出す。

その視線の先で、少女が巨大な刃を振り下ろした。

その切っ先は狙った筈の金髪の少年には当たらず、地面に深く突

き刺さって土を撒き散らす。

(加えて、あの力か……)

その光景に、少年は先程の出来事を思い返す。

話が纏まるのを見計らったかのようなタイミングで運ばれてきた昼食に舌鼓を打ち、一同は各々の授業が行われる教室へと向かう為に二方向に別れた。

そのうちの片方、アレン、ノア、ステラは、近距離戦闘学の実技に参加していた。

午前に行われた座学は科を分けずに行っていたが実技は各科に別れて行われ、座学で学んだ事や指示された課題を踏まえたうえで各自が訓練方法を考えるという形式が取られていた。

そして初日という事もあって午前に決めたメンバーで自由に組みむ事になった三人の訓練は、ノアのこんな一言から始まった。

「ステラとアレンで組み手をして貰う」

「えっ？」

まさかいきなり自分が組み手をさせられると思っていなかったステラは、思わずそんな声を上げてしまった。

余談ではあるが、組み手とは本来格闘術における型の練習を指すのだが、ここでは一対一の簡単な模擬戦を意味している(組み剣、と言わないのは、単に語呂の問題からだろう。閑話休題)。

「模擬戦を観ていたのなら俺達の事は大体分かるだろうが、俺達はステラの事を何も知らない。ましてや同じパーティーを組むのだから、ステラの実力は知っておくべきだ。一応聞くが、肉体強化と武器召喚は使えるだろう？」

先日の模擬試合でも使われていたが、肉体強化とは自らの身体に魔力を纏って身体能力を飛躍的に向上させる魔法で、武器召喚とは

武器、或いは防具をこことは違う亜空間と呼ばれる空間に収納、そこから召喚する魔法である。

肉体強化は魔法の発動よりも維持の方が意外に難しく、基礎学院の頃から条件反射で発動出来るように訓練させられる。

というのも、肉体強化をせざるにいと、例え初級魔法であろうと当たれば確実に大怪我をするからである。その為魔導師にとっては重要度がかなり高く、必ずと言って良い程使用する魔法であった。

武器召喚は余程質量の大きい物を召喚しない限りは魔力も殆ど消費せず、武器の持ち運びをする必要が無くなるので利便性が非常に高い魔法である。幾つか制限はあるものの、習得しさえすればあとは武器に魔法文字を刻むだけなので、現代では魔導師タイプ、戦士タイプに関わらずほぼ全ての者が使えると言っても良いだろう。

しかしその原理を事細かに説明すると、非常に多くの言葉が必要となる魔法でもある。というのも、この魔法は実は古代の遺産、『失われし魔法』^{ロストスベル}の一種で、地の大陸に保管されている『古き贈り物』^{ティアック}から長い年月を経て、ほんの千年程前によく紐解かれた魔法なのであった。

『古き贈り物』とは世界各地に存在する『失われし魔法』や古代の技術が記された書物で、開拓はその発見も兼ねているのだが、それが幾つあり、また何故存在するのかは判明していない。古代人達がかつての大陸分断を予見して後世の為に残したという説もあるが、いずれにせよはつきりとした事は五千年経った現在でも判っていないかった。

兎にも角にも、現代ではこの二つの魔法の習得が魔導師と呼ばれる為の最低条件と言われているのだった。

「それは勿論使えますが……」

当然それを肯定するステラは、何故か視線を背ける。

「どうかしたか？」

「いえ、その……」

何かを躊躇うように視線を泳がせると、やがておずおずと口を開

いた。

「……………多分これを見たら、お二人とも引いてしまいますから」
「いったい何を気にしているのか見当が付かない二人は、それでも首を横に振って断言する。」

「大丈夫だつて、んなことしないから」

「ですが……………」

「それに、それを承知でこの授業を選んだのだから？」

「うっ……………それは、そうなんです……………」

確かにそれは覚悟していた事だったし、例えその結果がどうであれ、今の自分ならば耐えられると思っていたのだ。が、その相手がこの二人だとは夢にも思っていなかったのである。

「……………わかり、ました」

結局、ステラはまだ不安げな表情を残しつつも諦めたようにゆっくりと頷き、右手を前に伸ばして目を閉じた。

「……………っ！」

短く息を漏らすと同時に掌の先に土色の光が集まり始め、それはやがて形を成していく。

それを、ノアは少し前髪で隠れた切れ長の目で見詰める。

(……………意外、だな)

地面に向けて垂直に現れたのは、一振りの大剣。

赤と茶の入り混じった輝きを薄っすらと放つ刀身は、大剣というよりも巨剣と表現した方が正しい程に分厚く巨大で、一人を完全に隠してもまだ余裕があるくらいの長さ^{つは}と幅を持っていた。

刃よりも濃い赤茶色の柄は金色に輝く鍔^{つば}を持ち、必要最低限の長さ^{つは}と持ち主に合わせたような細さは、巨大な刀身と比べるとまるで小枝のように見える。

正直細剣のような物を想像していたノアには、か細い少女と巨大な剣はミスマッチとしか思えなかった。

「……………少し意外だったが、別に引いてはいないから安心」
「違っんです」

「？」

実際引いていないのだからとノアはステラを安心させようとするが、それは本人によって遮られた。

「問題なのは、これなんです」

そう言つて、ステラは片手で大剣を構え、まっすぐに振り下ろした。

振り下ろされた剣はそのまま地面に深く刺さり、周囲に土を撒き散らした。十三歳の少女からは考えられない程の力を以て。

「……私、生まれ付き人よりもすぐ力が強いんです。普段は抑えています。興奮した時や戦闘中はどうしても力んでしまって、武器もこの剣以外だとすぐに壊れてしまふんです」

視線を下に向けるステラは、ぼつぼつと話し始める。

「小さい頃は力の加減も出来なくて、よく周囲の人達に気味悪がられていました。当然ですよ。女の子なのに、男の子の何倍も力が強いんですから」

やがて浮かべた力無い頬笑みは、どこか自嘲したような、それでいて悲しげな笑みだった。

(……精霊の加護、か)

頭の中で眩きながら、ノアは目の前の少女を見詰める。

大地を彷彿させる濃い茶髪と茶色い瞳。それは、地の精霊にこの上なく愛されている証だった。

(確かに肉体的な力は地属性が持つ特徴の一つだが……)

各属性にはそれぞれ特徴があり、それらは行使する魔法のみならず、加護を受けた者の性格や身体能力などにも少なからず顕れる。

例えば火属性の魔法は四大属性で最も攻撃力が高く、風属性は魔法の発動やそれ自体の速度が最も速い。水属性は防御や補助に長け、地属性は肉体的な力と治癒能力に長けている。

光と闇は二極属性と呼ばれ、四大属性よりも基本能力が高く強力な魔法が多いが、その分魔力の消費も著しい。

他にも細かい特徴が数多くあるが、要するに地属性の加護を強く

授かるステラは、その分他者よりも腕力が強くなってしまったという訳であった。

（それにしても極端な顕れ方だな。幾ら『地の一族』とはいえ……）
加護の強さは人それぞれだが、強いと呼べる程の加護を授かった者は、実は世界規模で見るとあまり多くない。特にアレン達のような髪と瞳が完全に同色の者は意外と珍しく、世界中から人が集まるこの学園でも数える程しかいなかった。

（これはこれで珍しい顕れ方だが……いや、珍しさでは人の事は言えないな）

そこまで考えて、心中で自嘲する。

二極属性の加護は、それ自体が珍しかった。

これが他属性よりも強力だからなのか、単に精霊が好む人自体が少ないからかは解らないが、その中でもさらに髪と瞳が同色のアレンとノアは、この世界で最も珍しい部類に入っていた。

（精霊達は何を基準に加護を与えているのか……いや、抑基準そもそもなどあるのだろうか）

「やっぱり、気味が悪いですよね、こんなの……」

「むっ？」

徐々に思考が別のところへ行き始めたノアの耳に、そんな声が届いた。意識を目の前の少女に戻すと、どうやら少女を見つめたまますっかり黙り込んでしまった自分の姿をそう解釈してしまっただらしく、少し目が潤んでいた。

「い、いや、すまない。そんなつもりでは……」

彼にしては珍しく慌ててそれを否定するが時既に遅く、ステラの瞳からは今にも涙が零れ落ちそうだった。

「す、すげえ……」

「？」

「えっ？」

そこへ、先程から何故か黙っていたアレンがそんな言葉を呟いた。「すげえよ、ステラ！こんなでかい剣をあんな軽々振れるなんて！」

その剣もなんかカッコいいし！」

何故が大興奮しているアレンは、瞳を輝かせながらステラの両手を握る。

「す、すごい……？アレン先輩は、気味が悪くないんですか？こんな……」

「気味悪いわけないだろ？俺にはあんなことできねえよ！っていうか他の奴にも出来ないと思うし、それってステラの才能ってことだろ？だからやっぱりすごいんだって！なっ、それよりもその剣、ちよつと貸してもらっても良いか？」

「あ、はい……」

そう言うのが早いか、アレンはステラから突き刺さっていた大剣を受け取る。

「おもっ！？」

剣の柄がステラの手を離れた途端、剣は再びアレンの手と共に地面に引つ張られた。

それを必死に持ち上げようとするアレンをぽかんと眺めるステラに、ノアが不意に口を開いた。

「ああいう奴だ、あいつは。勿論俺も気味悪いなどとは思っていないし、他の三人もそんな事は気にしない」

ステラはまだぽかんとした表情のまま金髪の少年に視線を向けていたが、

「……すごい方ですね、アレン先輩は。なんだか、こんな事で悩んでいた自分が馬鹿らしく思えてきました」

少し間を置いて、そう呟いた。

「……そうだな」

その言葉に、ノアは小さく頷く。

「例えどれ程人と違っていても、あいつは何時だろうと無邪気に、一方的に、強引に他人の心に入ってきて、いとも簡単に其処に根付いた不安を吹き飛ばす。あいつの言葉を借りるなら、それがあいつの才能なんだろう」

言葉を終えると、ノアはステラの頭に優しく手を置いた。

「……ノア先輩は」

「？」

傍らの少年と比べると随分小さく見える少女は、今度は無表情のままの少年を見上げて、深い闇のような瞳に視線を合わせる。

「もっと、無口な方だと思っていました」

「……その筈なんだがな」

実際、今日の自分は常には無いくらい良く喋ると自覚していた。

その原因が、昼食の時に幼馴染の少女に指摘されたものなのかは解らないが。

「それに……」

と、原因であろう少女は言葉を続ける。

「思っていたよりも、ずっと優しいです」

そう言って、ステラは柔らかく顔を綻ばせた。

「……そうか」

それを見て、良く知らない者には判らない程だったが、ノアも小さな笑みを浮かべた。

「ぬおおおおお！！み、見ろ、二人とも！ここまで持ち上げたぞ！」

と、不意にそんな声が聞こえて視線を向けると、アレンがなんとか大剣を身体の前まで持ち上げて、腕をプルプル震わせていた。

余りにも無邪気な様子にステラは思わず噴き出してしまい、ノアは呆れたように声を掛ける。

「アレン、そろそろステラに返してやれ。訓練が出来ん」

「へっ？あ、ああ、そっか。わるいステラ……っとおわっ!？」

すっかり本来の目的を忘れていたアレンは剣をステラに返そうとした途端にバランスを崩し、剣と共に前のめりに倒れてしまった。

「だ、大丈夫ですか!？」

「いっつ〜……」

「……………」

本当に色々な意味で凄い奴だと、ノアは心中で深い溜め息を吐いた

（最初は如何なる事かと思ったが、あれに関しては何とかなるだろう。然し……）

意識を二人に向けつつも思案するノアの視線の先で、ステラが再び大剣を振るう。

「はあっ！」

「……っとお！……ふっ！」

対するアレンは身体を反らしてそれを躲すと、右手に持った剣で袈裟斬りを放つ。

「ん、くっ……！」

ステラは迫り来る一撃を防ぐと、

「はっ！」

今度はアレン目掛けて突きを放つ。が、それも再び躲され、またしてもアレンの剣が襲い掛かる。

「ほいつ」

「……っ！」

攻撃の直後で隙が出来たステラは、しかしそれを余裕を持って剣で防いだ。

（うーん、大剣とは思えないぐらいスピードがあるんだよなあ……さっきのも今のも、フツーだったら間に合わないし。しかもそれでパワーもあるから結構厄介かもなあ……でも……）

剣を交えながらもステラの実力を分析するアレンは、今度はまっすぐに振り下ろす。

「んっ……っ！」

それは容易く防がれるが、そうなるように仕掛けたので問題はな

い。

「うりゃっ」

何とも気の抜けるような声を出しながら、そのまま本命である左中段蹴りをステラの右脇腹目掛けて放つ。

「きゃあっ!？」

予想外の攻撃に対処出来なかったステラは、それをまともに受けて横に吹き飛んだ。

「其処までだ」

それを合図に、ノアが組み手を止めて二人に近寄る。

「ステラ、大丈夫か？」

吹き飛ばした張本人であるアレンが、声を掛けて空いている方の手を差し出した。

「はい、ありがとうございます………完敗、ですね」

ステラはその手を掴んで立ち上がり、制服に付いた砂を軽く払い落とす。

吹き飛びはしたが肉体強化を使っていたし、アレンも手加減していたので特に痛む箇所は無かったのだが、その状態でも実質手も足も出なかった。

正直少しは剣の腕前に自信を持っていたステラにとって、これは相当ショックな出来事だった。

「いやいや、剣の腕はたいしたもんだって。実際思ってたよりも強かったし」

かなり落ち込み気味のステラに、アレンは笑いながら手をひらひらさせる。

「確かに、剣術の腕は既に一年生のレベルを超えているだろう。だが、それはあくまでも剣術だけの話だ」

「………どういう事ですか？」

ステラは二人の言葉に顔を顰める。

「つまり………」

その視線を受けて、ノアは手に黒い光を宿すと、

「おわっ!?!」

突然アレンに斬り掛かった。

「……こういう事だ」

二人の体勢は、ノアが振り下ろした刀をアレンが剣で受け止め、右の中段蹴りを左手で受け止める形で止まっていた。

「……………あっ」

それを見て、ステラはある事に気付く。

それは左右こそ対称だったが、先程ステラが吹き飛ばされた時と同じ形だった。

「体術、ですか?」

ステラはアレンの中段蹴りで吹き飛ばされたが、アレンはノアのそれを受け止めていた。

つまり、アレンは反射的に武器以外の攻撃にも対応出来ていたのだ。

ステラの言葉に、体勢を直したノアが頷く。

「その通りだ。魔物相手に型に嵌った剣術だけでは限界がある上に、外に出れば野盗などと戦う事もあるだろう。そんな相手に只の剣術だけで挑んだ所で、結果は見えている。今回の場合勿論二人の実力の差もあるが、それ以上に重要なのはそれに対する警戒心だ。刀剣科の授業だからと肉弾戦を全く想定していなかったから、あんな単純な誘いに引っ掛かる」

刀を軽く振ってその場から消しながら、ノアは淡々と説明する。

「単純とか言うなよな。とにかく、攻撃手段はいっぱいあった方が良いだろ?相手の身体全体に意識を向けてた方が対処もし易くなるし。まあそれ以外にも魔法とか気にしなきゃいけないから、実際やってみると結構大変なだけだな」

ってかいきなり斬り掛かるなんての、とアレンはふてくされてノアをジトツと睨むが、当の本人は全く意に介さず話を続ける。

「魔法に関してはまた今度見る事にして、ステラにはクエストまでにやっってもらおう事がある」

「やってもらう事……ですか？」

首を傾げるステラに、ノアは再び頷く。

「単純に体術を使うと言っても、只攻撃手段として加えるだけでは余り意味が無い。動き全体に取り入れてこそ、初めて有効な手段になる。見た所、ステラは腕力と武器に少し頼り過ぎな所がある様だ。現に何回か躲せる攻撃を無理矢理剣で防いでいたからな。恐らく精霊の加護で強化されているのは上半身の力だけで下半身は他と変わらないから、咄嗟に身体ごと移動する為の脚力が無いのだろう」

「それは……確かに……」

ノアの指摘はもつともで、確かにステラは隙が出来て攻撃された時は剣を強引に呼び戻して防いでいた。そしてその原因も、彼の言う通りだった。

あの短い時間でそこまで看破した漆黒の少年に、ステラは驚きを隠しきれなかった。

「其処で、ステラには中級の肉体強化を習得して貰う」

「中級……？あの、肉体強化にも上位魔法があるんですか？」

「まあ、習うのは二年からだからなあ。ちなみにこいつは上級も使えるんだよ」

アレンはノアを親指で指差す。

「お前も後少しだろうが」

自分を指差してくるアレンに、ノアは腕を組んで相変わらずの鉄面皮を向ける。

「んー、あとは最後の部分かなー。でもなかなか進まないんだよなあ、これが」

「あの、後少しというのは？」

少し引つ掛かるような会話に、ステラは再び首を傾げる。

「ん？ああ。上級魔法ってさ、下級や中級とはちよつと習得の仕方が違うんだよ」

「そうなんですか？」

それは上級学部に上がりたてのステラには初耳だった。

少女の言葉に、今度はノアが頷く。

「下位魔法が現代語での呪文の詠唱と明確なイメージのみで発動出来るのに対し、上級魔法は一つ一つに精霊との契約が必要になる上に、古代語で書かれた呪文を解読しなくてはならない」

「どうして現代語では駄目なんですか？」

「それは……えっと、なんだっけ？」

「……阿呆が。今日の授業でもやっていただろうが」

呆れて溜め息を吐くノアに、アレンは頭を掻きながら乾いた笑いを零す。

「魔法というのは本来、人ならざる者達が使っていた力だ。ならば、それが彼らの言葉を以て使役されるのは当然だろう。古代語というのは、彼らが使う言葉を古の魔導師達マジックが魔法を行使する際に使い、現代の人々が勝手にそう呼んでいるだけだ。そして、使役する魔法が強力であればある程、精霊達にはより正確に伝わらなければならぬ。つまり誤った情報が伝わって魔法が暴発しない為に、現代でも上級以上の魔法には古代語が使われているという訳だ」

「なるほど……」という事は、古代語が話せる方は精霊や魔物とも会話が出来るんでしょうか？」

ステラはそれに納得して頷くと、さらに疑問をぶつけた。

ノアはそれに首を横に振って答える。

「確かに、その理屈でいくとそういう事になる。が、呪文の詠唱なら兎も角、実際に会話が出来る人間など殆ど居ないだろう。古代語の研究を行っている学者達でさえ、極一部の者しか使えないそうだし単純に言語を学ぶのとは少し違っていて、相応の魔力を持っていないと文字を読む事すら出来ないからな。因みにアレンの『もう少し』というのは、あと一節分で解読が完了するという事だ」

「そうなんですか。ノア先輩、何だか詳しいですね？」

「そりゃあ、こいつの趣味も入ってるからな」

「趣味、ですか？」

アレンの言葉に、ステラは小首を傾げる。

すると、アレンは何故かニヤツとした笑みを浮かべた。

「そ。考古学」

途端に、ステラの頭には仏頂面で古い資料の山と向き合っているノアの姿が浮かび上がってきた。

「……似合いますね」

「だろ？」

「……そろそろ話を戻しても構わないか？」

妙に納得している二人を無視して、ノアは話を本来のところに戻す。

「兎に角、ステラには中級の肉体強化を完全に習得して貰う。ステラ、下級の方を使ってみる」

「あつ、はい」

言われて、ステラはすぐに身体に少量の魔力を纏う。

「よし。その状態から更に倍、魔力を纏わせる」

「はい………！」

指示に従い、ゆっくりと、自分の感覚でさらに倍の魔力を引き出す。

感覚で表現するなら、透けて見える程の薄い布が、シャツぐらいの生地が変わったような、そんな微々たる厚さの魔力が、身体全体を包み込んだ。

「これで、良いですか？」

「ああ。まずはそれを最低二十四時間、寝ている時でも纏えるようにしろ」

「にじゅう………!？」

何かとんでもない事を、しれつと言われてしまった。

身体を包んでいる魔力の壁は薄いながらも維持し続けねばやがて疲弊していくだろうに、それを一日中しろと言っただから無茶も良いところだった。

「大丈夫だって。どうせ最初は二時間ぐらいでへばるから」

とアレンは笑いながら言うが、全く大丈夫な気がしないのは誰が

聞いても明らかだった。

「これからはとにかく出来るだけ長い時間それを使い続ける。無理だと思っただら休憩しても構わん。ただひたすら、さっき言ったノルマが達成出来るまで続けてもらう」

「うう……………分かりました……………」

さっきは優しくかったけどやっぱり根は厳しいのでは？という疑念は、どうやら拭い去れそうになかった。

放課後。

魔法学部側の校舎に設けられた教職員用の研究室が詰められたフロアにて、緋色の髪の少女が腕を組んで仁王立ちしていた。

「遅い！」

「しゃ、シャルちゃん、まだ授業が終わってから十分くらいしか経ってないよ？」

「そーそー。ちょっと長引いてるだけかもしれないし」

「いーえ、駄目よ！か弱い女の子三人を十分も待たせるなんて、それはもはや犯罪よ！」

それを宥める銀髪の少女と青髪の少女を、怒り心頭の少女は燃えるような瞳を宿した目を吊り上げて一蹴する。

現在三人はSクラスのクエストを受ける為の許可を貰いに担当であるダグラスの研究室前に来ていたのだが、放課後になって十分が経っても残りのメンバーがやって来ないので、とうとうシャルが痺れを切らし始めたのだった。

そんな理不尽な、と乾いた笑いを零すイリスとアクアは、今にも発火しそうな少女をこれ以上刺激しないように話題を変える事にした。

「そ、そういえば、ステラが言ってたもう一人の子ってどんな子な

「んだろ？」

「そ、そうだね。リオン＝ウィンジア君、だったよね？なんだか強そうな名前だね？」

「どんな奴かはともかく、ある程度は実力があつて欲しいものよね。まあ、こればかりはステラの心当たりとやらを信じるしかないんだけど」

言つて、シャルは肩を竦める。

実を言つとそのステラの実力も、三人は五限で残りの二人と一緒にになった時に聞いた程度しか知らなかつたのだが、そこら辺は（シャルにとっては腹立たしい事に）学年一位のノアと、実技に関してはトップクラスのアレンの言葉なので信用していた。

（ま、そのステラのお薦めだし、少しは期待出来るのかしらね）
仮にそれ程実力が無くても問題は無いのだが、やはり組むからには少しは高望みしたいというのが本音であつた。

「あの〜……」

「あら？」

そこへ、不意に一人の少年が声を掛けてきた。

「ここつて、ダグラス＝ギルバート先生の研究室で合ってます？」

「そーだよ。あつ、ねえねえ。もしかして、あなたがリオン君？」

初対面なので一応敬称を付けて尋ねるイリスに、少年は軽く頷く。

「はい、初めまして。リオン＝ウィンジアです。よろしくお願ひします」

ぺこりとお辞儀をして挨拶する少年を、シャルは少し目を細めて観察する。

（……………何か、弱そ〜）

アクアより五センチ程低い身長に、線の細い身体付き。少し長くボサボサした暗緑色の髪は所々が撥ねていて、同じ色の瞳を持った締まりの無い顔は、何だか弱々しい感じがした。そして、

（……………何でマフラー？）

もう四月だというのに、少年は藍色のロングマフラーを解けない

ようにしっかりと首に巻いていた。

と、そこまでいったところでイリスの声が聞こえ、はっと意識を会話に戻す。

「よろしくね？わたしがイリスレディアントで、こっちの二人が」「シャーロット先輩にアクア先輩、ですよ？みなさんの事はステラから聞いてます。って言っても、さつき授業で一緒になった時に聞いたんですけど」

リオンは照れたように笑いながら、ボサボサの頭をポリポリと掻く。

「へえ〜。ステラ、わたしたちの事なんて言ってたの？」

「えっと、赤髪の背が高くて綺麗でカッコいい人がシャーロット先輩、青髪の可愛くて優しそうな人がアクア先輩で、」

「うんうん」

イリスは頷きながら自分の評価に期待するが、

「綺麗な銀髪の、背が小さくて可愛らしい人がイリス先輩だって言っていましたよ」

何と無く子供扱いされている気がして、一気に肩を落とした。

「……………なんか、背のところをすごく強調された気がする……………それになんだかおんなじ可愛いでもアクアと違って子供っぽい響きがあるし」

「って、僕に言われても……………」

「まあ妥当な評価じゃない？ステラも見る目あるわね」

自分の評価に全く文句が無いシャルは、先程とは打って変わって上機嫌になっていた。

「そんな風に言われると、お世辞でも嬉しいよね」

それとは逆に、アクアは少し顔を赤くしながら控え目な微笑みを浮かべる。

その様子にシャルはやれやれと溜め息を吐く。

「アクア、あんたは謙遜し過ぎ」

「そうだよ！アクアが可愛いのは全世界共通なんだからっ！」

「いったいどこから生まれた共通意識なのかはわからないが、イリスは自信満々に言い放った。

「そんなことないよ。でもありがとう、二人とも」

お世辞抜きで褒めてくる二人に、アクアはにっこりと柔らかい笑顔を向けた。

（ああ……………癒される……………）

（心のオアシス、いただきました……………）

キラキラと眩いばかりの笑顔に、二人はほのぼのと顔を和ませる。「って、そう言えば肝心のステラは？一緒じゃないの？」

はつと我に返ったシャルは、リオンが先程授業で一緒だったと言っていた事を思い出した。

「そうだった！さっきの評価をきちんと訂正してもらわないと！」
同じく我に返ったイリスは、まだ先程の事を根に持っているらしい。

「えーっと、授業じゃ一緒だったんですけど、なんか先に行つてつて言われて……………あつ、でもそろそろ来る頃だと「お、おまたせ、しました……………」

後頭部に手をやりながら答えるリオンの後ろから、不意に少女の声が掛かった。

「あつ、ステラあ？なんでわたしだけあんな……………」

それに気付いたイリスが、先程の自分の評価に一言文句を言つてやるうつとそこを覗き込むと、

「……………どうしたの？」

壁に手を着いている茶髪の少女はなぜか少しボロボロになっていて、今にも倒れそうなくらい疲れ切つて息を切らしていた。

「い、いえ……………ちよつと、疲れただけで……………たいした事は……………」

「ちよつと疲れただけの人は、そんな風にせえせえ言わないわよ。何やってたの？」

ステラの言葉に軽く溜め息を吐きながら、シャルは腰に手を当てる。

「す、少しぶつかり、過ぎただけで……あの、それよりもアレン先輩と、ノア先輩は……？」

そうなった原因を聞いたのだが、どうやら今聞いても無駄だと悟ってそれに答える。

「まだ来てないわ。ったく、あの二人はホントに何してるんだか……」

「もしかして、もう先に入っていたりして」

「………無くは無いわね………良いわ、どっちか解らないけど、とりあえず中に入りましょう。これで中に居たらあいつらには後でケーキを奢って貰いましょう」

イリスの言葉に目を細めたシャルは、三回丁寧にノックをしてから扉の取っ手に手を掛ける。

「いなかっただらどうするの？」

首を軽く傾げるイリスの目の前で、

「そんなの、勿論奢って貰うわよ」

シャルは当然とばかりにそう言って、扉を開いた。

どうやら二人がケーキを奢る事は確定してしまったらしい。

「失礼します」

「おっ、やつときたか」

少し広めの長方形の部屋に入るとそこには案の定二人が居て、アレンが待ちくたびれたと言わんばかりの声を上げた。

「………ねえ、質問があるんだけど、研究室前に集合って言った筈なのに、どうしてあんた達は先に中に入っていたのかしら？」

「えっ？着いたら部屋に入って待つんじゃないっけ？」

「だから言っただろう。何度も言うようだが、人の話はちゃんと聞け」

「つまり、アレンがいつものように人の話を聞かずに、いつものように勝手に中に入った訳ね。私達が外で待ちくたびれてるとも知らずに」

アレンのきよとんとした声に反応して、シャルの周囲の温度が徐々に高まっていく。

それを察知して、ノア以外全員の顔が青ざめる。

「お、おい、シャル？こんなところで魔法は……」

「さ、さすがにそれはまずいよ、シャル！お兄ちゃん！早く謝つて！」

「へっ？あ、ああ……！ごめんシャル！この通り！」

慌ててシャルを宥めるイリスに促されて、アレンは両手をパン、と合わせた。

「……………良いわ。とりあえずあんたは後で全員にケーキを奢る事」

「ええ！？何でだ……ハイ、ワカリマシタ」

アレンはどうしてそうなるのかと文句を言おうとするが、その途端に鋭い目で睨まれたので大人しく言う事を聞く事にした。

「……………そろそろ話を始めても良いか？」

一段落したところで、不意に部屋の奥から声が掛かった。

そこには、教員用の長机に肘を突いて苦笑いしているダグラスの姿があった。

「あつ、はい。すみません」

それに気付いたシャルは、少し恥ずかしそうに顔を赤らめながら頷いた。

「さて、話は四限が終わった時にアレン達から聞いたが、お前達、本気でSクラスを受けるつもりか？」

全員の顔を見渡ししながら確認するダグラスに、アレン達は頷く事で肯定の意を示す。

それを見て、ダグラスは短く息を漏らして言葉を続ける。

「ふむ……まあ四年生の五人は成績からして問題は無いだろう。バランスも取れているしな。後は一年生の二人だが……」

そこまでいって初めて、アレンは見知らぬ少年がその場にいる事に気付いた。

リオンがその視線に気付いてぺこりと小さく頭を下げてきたので、アレンも笑顔でそれに頷き返した。

「正直、一年生は入学試験の成績しか判断の材料が無い。従って、二人に行く意志があるかどうかで決めようと思っている」

ダグラスに視線を向けられたステラとリオンは、互いに視線を合わせて頷き合う。

「大丈夫です」

「僕も」

ダグラスはしばらく二人をじっと見詰めると、やがて小さく笑った。

「良いだろう。実は学園長からは既に許可が降りていたのだが、意志の無い者に危険の伴う事をさせる訳にもいかないのでな」

そう言いながら机に置いてあった用紙にサインをして、一番近くに居たノアに渡す。

「クエストまでにはまだ時間はあるが、どこに行くか慎重に決めてその間にしっかりと準備を整えておくように。アレン達は一年生の二人をちゃんとサポートしてやれ」

「はい、ありがとうございます。では失礼します」

シャルが代表してお礼を言い、七人は部屋を後にした。

「中級の肉体強化の訓練？そんな事してたの？」

研究室を後にしたアレン達は、そのままカフェにやって来ていた。

「はい。ですが思っていた以上に維持が難しく、それに集中し過ぎてしょっちゅう人や物にぶつかってしまっ……」

「ふーん、それであんなにボロボロだったのね」

先程ステラが疲れ切っていた原因に納得して、シャルはテーブルに置かれたショートケーキを一口食べた。

「まだ一時間も持たなくて、授業が終わったら次の教室に行くのも大変なんです」

その向かいに座っているステラも、溜め息を吐きながら自分のチーズケーキを口に運ぶ。途端に、その顔が驚きに染まった。

「美味しい……！」

「でしょう？ここ、実は隠れた名店なの。ピーク以外はそんなに混まないから、美味しいデザートがゆっくり食べられるのよ。ちなみに私のお勧めはこのイチゴのショートケーキ。シンプルだけどこれが美味しいのよ」

はい、とシャルが差し出した一切れを、ステラは口で迎える。

「ん~~~~~！これも美味しいですう！」

頬に手を当てて幸せそうに顔を綻ばせるステラを見て、シャルも笑顔になる。

「もう一つ注文しましょうか。すみません、イチゴのショートケーキも一つお願いします。あっ、あとチョコとモンブランと、この本日のお勧めっていうのも」

「ちよつと待て」

通り掛かった女性店員に次々と注文していくシャルに、横から不意に声が掛かった。

その声の主は、シャルはきよとんとした顔を向ける。

「何よ？」

「何よ？じゃねーよ！」

声の主 アレンは、テーブルに手を叩き付けて勢い良く立ち上がった。

「確かにケーキを奢る約束はした。だからそれ自体にはもう文句は言わねーよ………ただどな！俺はそんなに頼んで良いなんて一言も言っただけで、何より何でノアは良いんだよ！納得出来ねえ！」

「むっ？」

ビシツ、と指差した先で、黙々とチョコケーキを食べ続けていたノアが首を傾げた。

「あら、私は一つだけなんて言った覚えは無いわよ？それにあんたが人の話を聞かずに先に中に入ってたのが悪いんだから、あんたが責任取るのは当然じゃない」

「だからってちよつとは遠慮つてもんをだな……！」

「そーだよ、シャル？あんまり頼み過ぎたらお兄ちゃんがかわいそうだよ」

「……………イリス、お前の目の前に置いてあるその色とりどりのケーキたちは何なんだ？」

「えっ？これは、その……………てへっ」

「てへっ、じゃねー」

「いたっ！？」

自分の目の前にある大量のケーキを指摘されたイリスは語尾にハートマークが付きそうな感じで可愛らしく頭を小突いて舌を出すのが残念ながらアレンには通用せず額にチョコップを喰らった。

「もうそれ以上頼んでも俺は払わないからな」

「え〜〜！？この後チョコケーキホール頼もうと思ったのに！！」

「どんだけ食べる気だよ！？」

相変わらずこの細い身体の何処にそんなに入るのかと呆れるが、アレンは不意にニヤリと怪しげな笑みを浮かべた。

「なあイリス、お前最近ちよつと太ったんじゃないか？ほっぺたとか」

「うえっ！？そ、そんなことないよ！普通だもん！」

と言いつつも、イリスは両手で頬をぺたぺたと触って確かめる。

「いやいや、何か前よりもふつくらしてきたと思うぞ？まあここ最近祭りやらなんやらで買い食いばっかしてたからなー。しかも大量に。そりゃあ太りもするかー。いやー、母さんが見たらどう思うかなー。俺も太っちょの妹はなー」

「うっつ……」

アレンはわざとらしく声を大きくして額に手を当て、そのまま言葉が続ける。

「こりゃ今度こそ永久に甘えるの禁止されるかもなー。まあでもイリスが食べたいんじゃないよなー」

さすがにここまで言えば少しは控えるだろう、と手の隙間からちらりとイリスの様子を確認する。

「……………うっつ」

すると、いつの間にかイリスは膝の上で拳を握って俯いていた。

「……………あれ？おーい、イリスー？」

予想していたのと違う反応に、嫌な汗が頬を伝った。

少し言い過ぎたか？と、アレンが顔を覗き込もうとした瞬間、

「……………お兄ちゃんの、ヒック……………ばかあああああー！」

「ぶへあっ!？」

イリスはアレンの顔面を思いつ切り殴り飛ばすと、目に涙を浮かべながら店から走り去ってしまった。

「ぐっ……………おい、イリス!? 待ってっ!」

「アレンー!!」

慌てて追いかけてようと立ち上がったアレンを、突然シャルが引き留めた。その顔は、常に無い程真剣な表情をしている。

それを見て、アレンは少しバツが悪そうな顔をして後頭部に手をやる。

「……………わかってるよ。ちょっと言い過ぎ」財布、置いていきなさい」「鬼かお前は!？」

真面目な顔で支払いの心配をするシャルに全力で突っ込んで、アレンは急いでイリスの後を追っていった。勿論財布はテーブルに置いて。

「あの、よろしいんですか……………?」

泣きながら去っていったイリスを心配して、ついでに有り金を財布ごと置かされてそれを追い掛けたアレンを少し不憫に思って、ス

テラがおずおずと尋ねた。

「良いのよ、どうせアレンが謝って甘えさせたら機嫌なんてすぐに直るんだから」

「はあ……」

「そんな事よりも、そろそろやる事やつちやいましょう。その三人、こつちに詰めてちょうだい」

あっさり二人を放置して、シャルは他の三人を呼び寄せる。どうやらノアとアクアも先程のような事には慣れているらしく、至って平然とケーキを食べていた。

「何をするんですか？」

自分が注文したマロンケーキを綺麗に片付けたリオンが、イリスが座っていた席に付きながら尋ねた。

「とりあえず、まずはどのクエストを受けるのか決めないとね。アクア、リスト持つてる？」

「うん。ちゃんと全員分貰っておいたよ」

アクアは足元に置いてあった紙袋の中からかなり分厚い冊子を七冊取り出すと、それを全員に配っていく。

「これは？」

「全クエストの一覧表と詳細よ。最初の数ページにクラス別で目次が載ってるから、そこから自分が良いと思った物を一人一つずつ選んでちょうだい」

冊子を受け取ったりオンとステラは、Sクラスの部分をパラパラと捲っていく。

「へえー、その地域の特徴とかも書いてるんですね。でもこんなにいっぱいあるとどれを選べば良いのかわかんないや」

「そうですね。Sクラスだけでもこんなにありますし……」

困った顔をする二人に、アクアがいつも通り柔らかい頬笑みを向ける。

「だいたいみんな、自分が得意な属性を基準に距離と内容を比べて決めてるよ。Sクラスにはないけど魔物の討伐とかもあるし、あん

まり適当に決めちゃうと後で大変だから慎重にね？」

「なるほど。それで、決めたらその後はどうするんですか？」

ステラはその説明に頷くと、今度はそう言って小さく首を傾げた。
「全員決まったらその後は……………これよ！」

シャルが取り出したのは、一枚の紙。

「……………あの、これは……………？」

紙には七本の直線が縦に引かれていて、一番下の部分が少し折られていた。どうやらこの状態から各々で横線を書き足していくらしい。つまり、

「見ての通り、あみだくじよ」

「慎重に決めるっていうのは……………？」

きっぱりと言いつ放つシャルに、リオンは先程のアクアの言葉を確かめるが、

「どうせ得意な属性とかは皆バラバラなんだから、話し合ったつて決まらないわよ。それよりもこっちの方が平和的且つ手っ取り早く決まるわ。さっ、ちゃっちゃと決めちゃいましょう。アレンとイリスは放つといても大丈夫でしょう」

シャルは自分の分の冊子を広げると何か良さそうなのは無いかと探し始めてしまい、周りを見るとノアとアクアも既に作業に入っていた。シャルの発言を聞き流しているところを見ると、どうやら今回に限った事では無いらしい。

「……………僕たちも探そうか」

「そうですね……………」

二人は上級生達の手慣れた様子に呆気を取られながらも、それぞれに合った内容のクエストを探し始めた。

「……………それじゃあ、良いわね？」

シャルの言葉に、他の四人はコクリと頷く。

その視線の先で、シャルは短く閉じた紙をゆっくり開いた。

「……………」

十の瞳が、その紙に引かれた少し複雑に入り組んだ線を右に左にと辿っていく。

「あつ、ハズレです……………」

「わたしも」

先ずはステラとアクアから、そんな声が上がった。

「…………… 僕もだめかあ。残念」

次に、リオンが顔を上げて後頭部に手をやる。

「と、いう事は……………」

それを聞いたシャルは、急いで紙に書かれた自分の名前から伸びた線を辿っていく。

残りは自分とノアのみ。それを意識した途端に妙な対抗心が湧き出てきた。

（当たれ、当たれ、当たれ…………… っていうかノア外しなさい）

自分のアタリよりもノアのハズレを祈る時の方が心の声が強くなっている事は全く気付かずに、シャルの視線はどんどん下へと降りていく。

（外れる、外れる、外れる、外れ…………… あつ）

祈りというよりも怨念に近い何かを飛ばしている、その視線が最下部で止まった。

「当たった〜！」

それを確認した途端、シャルは紙を持ち上げて歓声を上げた。

「おめでとう、シャルちゃん」

「おめでとうございます！」

それを見て、アクアとステラも笑顔で祝福する。

「えっと、確か先輩が選んだのって……………」

その隣で、リオンはシャルが選んだクエストの内容を確認する。

「あった。えーっと、火の大陸、キネリキア山にて『紅蓮華』の葉

を三十キロ採集……これって、新しく開拓された地域にあるんですよね？」

「そうよ。どうせならまだ誰もやった事の無いやつにしようと思ったの。そっちの方がより実力が試されるから、はっきりとアルベルトのバカに負けを突き付けられるじゃない」

それに、と何とも不穏な理由を笑顔で語るシャルは言葉を続ける。
「そっちの方が面白いじゃない」

瞳を爛々と輝かせる姿にステラとリオンが抱いていた真面目そうなイメージが少し崩れていつている事を、シャルが知る由は無かった。

「君にしては中々の選択じゃないか。そしてその言葉、そっくりそのまま返させて貰うよ」

と、不意に店の奥からそんな声が聞こえてきた。

「……………あんだ、いつから居たのよ」

そこから現れた見慣れた顔に、シャルは溜め息を吐く。

「フン、悪いが後から来たのは君達の方だ。まったく、折角静かに紅茶とケーキに舌鼓を打っていたというのに、話し声がデカ過ぎて雰囲気台無しだよ」

「……………先回り」

「なっ！？おい、アリス」

「アルは、甘い物は食べられなむぐっ」

「ふーん……………」

アルベルトはぼそつと事実をバラしたアリスの口を慌てて塞いだが、シャルの不敵な笑みに気付いてピタリと動きを止めた（口を押さえられたアリスの顔が茹でダコのように真っ赤になっている事は気付いていなかった）。

「ゴホンッ！……………それで、君達がこのいつ爆発するか分からないダイナマイトみたいな女とその愉快的仲間達に、不幸にも巻き込まれてしまった一年生かい？」

アルベルトは大きく咳払いをすると、そこに居た見知らぬ二人に

憐れむように声を掛けた。

いきなり話を振られたステラとリオンは、お互いに顔を見合わせ
ておずおずと頷く。

「えーっと、一応、はい……」

「あの、あなたは……?」

ステラの問いに、アルベルトは得意げに髪を掻き上げて答える。

「僕かい? 僕の名は」

「変態ストーリーカー貴族よ」

「違う! アルベルト! ルクス! ラディウスだ! 誰が変態だ、誰が!

「ストーリーカーは訂正しないのね。でもストーリーカーも変態もそんなに
変わらないから結局変態ね、あんた」

「だから違うと言っているだろう!」

完全に変態扱いされてしまっているアルベルトは声を荒げて訂正
するが、シャルは全く聞く耳を持たない。

「もう、うるさいわね。ただでさえ見たくもない顔を一日に三回も
見せられてうんざりしてるのに、耳元で騒がないでよ。それで、何
の用なの?」

シャルは心底鬱陶しそうな顔をして、さっさと本題を話すよう促
した。

「どこまで横暴なんだ君は……:……はあ、現地でのルートを決めてお
こうと思っただよ。被ってお互いが邪魔し合うよりは効率が良い
だろう?」

結局訂正出来ずに頂垂れながら、アルベルトは要件を伝える。

「あら、あなたにしては気が効くじゃない。それじゃあ私達は山の
東側から行くわ」

「フン、この僕の考えなのだから当然だろう。では僕達は西側から
行くとしよう」

シャルが珍しく害の無い意見に感心していると、アルベルトはそ
れを切っ掛けに本来の調子を取り戻していく。

「まあ、せいぜい当日まで入念に準備しておく事だ。あまり差があ

り過ぎてもつまらないからね。それじゃあ、僕達はここらで失礼するよ」

アルベルトは去り際に店の雰囲気ぶち壊しの高笑いを上げながら、アリスを従えて店を後にした。

「……………なんていうか、面白い人ですね」

苦笑するリオンに、シャルは呆れた声を出す。

「どこがよ。騒がしいだけじゃない。まあ、あんなのでも一応スクラスを受けられるだけの实力はあるんだから、人は見掛けに依らないってというのはホントよね」

「そういえば気になってたんですけど、先輩たちの中じゃ誰が一番強いんですか？」

リオンのふとした質問に、四年生の三人は一瞬きよんとするが、「うーん、総合的にバランスが良くて強いのは、やっぱりノア君じゃないかな？」

と、まずはアクアが小首を傾げながら、

「まあ、私とかアクアは接近戦出来ないしね。でも、」

次にシャルが頬杖を突きながら、

「魔法しか使えないが、圧倒的にイリスの方が強い」

最後にノアが淡々と結論を出した。

「そうなんですか？」

「ああ。正直、下手をすると魔法だけで瞬殺され兼ねない」

三人共それに納得しているようで、ステラとリオンは内心かなり驚いていた。

確かに飛び級をするくらいなのだから常人以上の实力があるとは思っていたが、まさか学年トップクラスのこの三人が口を揃える程とは思っていなかった。公開授業の時も魔法薬学以外は特に目立っていないかつたし、何よりも普段があれなので仕方が無いと言えはそうなのだが。

いまいち納得出来ていない二人に、アクアが少し困ったような顔で口を開く。

「イリスちゃんが来たのは初級学院の五年生からで、それまではずっと入院してたらしいんだけど、初めての魔法の授業でみんな自分の一番得意な魔法を見せることになったの。さすがにみんなイリスちゃんが何か出来るって思ってたから、先生も自然とイリスちゃんの番を飛ばそうとしたんだけど、イリスちゃん、自分の番が来てすぐに詠唱破棄で魔法を使ったの。それも上級魔法を」

「何でもアレンが言うには、入院中は時間が有り余っていたから絵本気分て魔導書を読み漁っていたそうさ。五年前であれなのだから、今が如何なっているのか想像も出来ん」

アクアとノアは先程から「らしい」や「そうさ」などが多いが、イリスの身の上を知らない二人は当時アレン達が予め決めておいた設定をアレンの口から聞いていただけなので口調がはっきりしないのは仕方の無い事であり、そもそもアレンに妹がいた事もその時に初めて知ったのだった（もちろんそれも設定の一つなのだが、二人は事実として捉えている）。

（っていうか、実際はその時点で精霊魔法とかも使えたんだけどね）その話題を冷や汗を掻きながら聞いていたシャルは、内心で乾いた笑いを零していた。

「それよりも、リオンこそどうなのよ？一応どのくらいか知つときたいし、それなりに実力があつた方が助かるんだけど？」

「えっ？」

突然話を振られてきよとんとするリオンの表情は、続けて苦笑いに変わる。

「あー、まあ、そのうち……でも、自分の身は自分で守れると思ふんで、先輩たちも気にしなくて大丈夫ですよ」

「何よ、はっきりしないわね。見たところ風に加護が強いみたいだけど、戦闘スタイルとか武器は？魔法はどのくらい使えるの？それから」

「あつ、帰ってきた」

少し言葉を濁すリオンにシャルはさらに詰め寄るが、それはアク

アの声によつて遮られた。

入口の方に視線を向けると、今にも盛大な溜め息が漏れそうな顔をしているアレンと、その腕にしがみ付いて満面の笑みを浮かべているイリスがこちらにやってきた。

「二人とも、おかえりなさい」

「ただいまー、アクアっ！」

「ただいま……」

「お帰り。で？今回はどんな条件を出したの？」

すっかり疲れ切った声を出すアレンに、シャルは頬杖を突く。

「えへへ。あのね、日曜日に二人つきりでお買い物しに行くの」

「あら、良かったじゃない。欲しい物いっぱい買って貰いなさいな」
至福の極みといった感じの笑顔を浮かべるイリスに、シャルも笑顔を向けた。

「あの、イリス先輩って……」

リオンはすっかり上機嫌のイリスに聞こえないようシャルに問い掛けた。

「超とドが付いてもまだ足りないくらいのプラコンよ」

「やっぱり……」

イリスに笑顔を向けたまま返された呆れ声に、リオンとステラは苦笑いを浮かべるしか無かった。

「あつ、ねえねえ二人と　どうかしたの？」

「い、いえ！何でもありませんよ？」

「そ、そうそう！」

突然声を掛けられて苦笑いを隠しきれず、二人は慌てて取り繕った。

「そう？あつ、それより、二人とも二十四日って何か予定ある？」

イリスはその様子に首を傾げるが、特に気にせず話を続ける。

「いや、特になにも……」

「何かあるんですか？」

質問に答えつつ、二人は話題を無事(?)逸らせた事に内心でホ

ツとする。

「実はね、その日はお兄ちゃんの誕生日なの。で、授業が終わった
らみんなで誕生パーティーをするんだけど、良かったら二人にも
行きます！」

話の途中にも拘らず、ステラが勢い良く返答した。

「あ、ありがと。リオンは？」

「うーん、まあ特にすることもないし、ステラも行くんなら……」

「ホントに？ありがと！」

自分の事のように喜ぶ少女に、リオンも自然と顔が緩む。

(本当にアレン先輩が大切なんだなあ……)

そう思った途端表情が憂いを纏うが、一瞬の出来事だったので誰
にも悟られずに済んだ。

「良かったね、イリスちゃん？」

「うん！お料理、いつも以上に気合い入れて作らなきゃ！」

「イリス先輩が作るんですか？」

「言っとくけど、この子の腕は相当なもんよ」

「ステラはお料理するの？」

「一応一通りの料理は作れますが、特別得意というわけでは……」

ステラは少し困った顔で笑いながら、頬に手を当てる。

「あつ、じゃあ今度お願いがあるんだけど」

「……………なあ、ノア」

「……………何だ？」

すっかり盛り上がっている女子を横目に、アレンがぼそっと声を掛けた。

「……………俺たち、何か影薄くないか？」

「……………」

ノアは黙って新しく頼んだチョコケーキを口にした。

第五話：『屁理屈は災いの元』

色々であった初日（通常の時間割で授業が行われるという意味での）から少しだけ時間が流れ、日付は二十三日。

待ちに待ったアレンの誕生日を明日に控えたステラは（主語が誕生日を迎える本人でないのは、この歳にもなつて誕生日を嬉々として迎える事に思春期男子故の抵抗があるから、では無い）、未だに誕生日プレゼントを決め倦^{あく}ねて始業の鐘待ちの教室で席に着きながら頬杖を突いていた。

「ステラっ。おはよっ」

「あっ、ミリーさん。おはようございます」

「うんうん、相変わらずお淑やかかぁいいねえ。んでんで？どしたのかな？」

この朝っぱらから高めのテンションで話し掛けてくる少女の名はミリアム・リーラ・ガーフィールド。必修のクラスで席が隣になったのを切っ掛けに知り合い、以来授業が重なった時に隣に座ったり、昼食を一緒に摂ったりしている。

癖毛なのか意図的なのか判らない微妙なパーマが掛かった、短めで少し赤み掛かったオレンジ色の髪と薄茶色の猫のような瞳を持った少女は火属性の加護を授かっているらしく、基本的に高めのテンションと活発な印象は少なからずそれに影響されているようだ。

「いえ、別にたいした事では無いのですが……」

とは言うものの今まで一人で考えて結局良い案が浮かばなかったので、ステラはアレンの名前は伏せながら事の経緯を話して助言を得る事にした。

「……ふーん、なるほどねー。つまりプレゼントを選ぼうにも今まででそういう経験がなくて、しかもまだ知り合ったばかりだからどんなのが良いのかわかんないと」

「はい……」

「それでうだうだやってたら二週間経っちゃったと」

「……はい」

「ステラってさあ、優柔不断？」

「うっ……」

何か痛いところをグサツと突き刺されて、ステラは我ながら情けないと溜め息を吐く。

「……ですから、ミリーさんならどうするのかと思ってこうしてお話しているんです」

「んー、でもさ、ぶっちゃけそれって意味くない？」

「はい？」

ミリーは両手を頭の後ろで組みながら、然したる緊張感も持たずに言う。

「だって、そのプレゼントはステラがその人の為に選ぶんだから、他の人の意見を聞いたら意味ないじゃん」

「それは、ですが……」

もっともな意見なのだが、しかしそれでも何かしらの助言が欲しいところでもある。

困り果てている友人に、ミリーは仕方無いなといった感じに微笑む。

「んー、じゃああげる側じゃなくて貰う側からの意見。アタシなら一生懸命考えてくれたんなら何を貰っても嬉しいと思うな」

「そういうものでしょうか……」

「そうだよ。だいたい、こーんなかいい子からのプレゼントだったら、このクラスの男子どもなら泥でも貰うと思うよ？」

「それはちよつと……」

ステラは苦い笑いを零しながらちらつと男子が固まっている方を見るが、どうやらミリーの暴言は聞こえていないようだった。

「んでんで？ステラがこんだけ悩むぐらい恋焦がれてる男はいったい誰なのかにゃー？」

「えっ？やっ、アレン先輩はそのっ　！」

突然の話題転換に焦ってまんまと自爆してしまったステラは、顔を真っ赤にしながら俯いていく。

「ふーん、アレン先輩ねえ……………あり？もしかして、アレン＝レディアント先輩？」

その様子をニヤニヤしながら眺めていたミリーは、ふと聞き覚えのある名前に首を傾げた。

「御存じなんですか？」

「んー、アタシこの大陸出身だから基礎学院からここに通ってるんだけどさ、まあぶっちゃけかなりの有名人だよ、あの人？」

「そうなんですか？」

「うん。もともと違う理由で有名だったんだけど、なんせあのイケメンにあの性格じゃん？しかも結構強いから上級学院こっち来てからファンクラブまで出来ちゃったし、一年ももう何人か入ったって話だよ？でも、なんで知り合ったばっかのステラがパーティーに呼ばれたのさ？」

「実は、新人生クエストで一緒にする事になって、その話をしている時にリオン君と誘われたんです」

「あー、そういえばなんかSクラスで勝負するって話題になったわけ。いやー、そっちの方に注目行き過ぎて全然知らなかったよ」

「ちよっと、今の話は本当ですか！？」

たはは、と笑いながら手を振るミリーの後ろから突然そんな叫び声が聞こえて、その顔がピシッと固まった。

「あっちゃー、めんどいのが来たよ……………」

「相変わらず失礼ですわね、貴女は」

額に手を当てて溜め息を吐くミリーに、声の主は腕を組んで短く鼻を鳴らす。

「えっと、ラフォーレーゼ、さん？」

ステラはこの少し曇った表情をしている少女の名を思い出して、自信無さげに声を掛ける。

「あら、覚えていて下さいましたの？でもどうせなら名字ではなく、クラウドディアと名前で呼んで下さいな、ステラさん？」

クラウドディアはそう言つてニツコリ微笑んだ。

（良かった、思っていたよりも良い人そうです）

今まで話した事は無かつたのだが、正直ステラは彼女が苦手だった。というのも、この少女の外見が金髪の豪勢な縦ロールに煌びやかなアクセサリーを身に着けているという、如何にもなお嬢様スタイルだった事が原因なのだが。

（やはり人を見掛けで判断するのはいけませんよね）

自分の考えを改め、この機会にまた一人友人の輪を広げようと笑顔を返す。

「それで、先程の話は本当ですか？」

が、クラウドディアは逆に目を細めてぬつと顔を近付けてきた。

「えと、く、クラウドディアさん？」

澄んだ水のように青い瞳にジトツと見つめられてステラは思わず後退ろうとするが、生憎今は椅子に座っているのでお互いの距離は変わらなかった。

「やめんかこのオモシロ頭。困ってんでしょーが」

「いたっ!？」

それを見兼ねたミリーが、クラウドディアの無駄に多く巻かれた髪を後ろからぐいっつと引つ張った。

「ちよつと！いきなり何をなさいますの!？」

引つ張られた拍子に首を痛めたらしく、クラウドディアは涙目でミリーを睨み付ける。

「やかましい。だいたいアンタには関係ないでしょーが」

ミリーはそれを冷めた目で返すが、

「いいえっ！大有りですっ！何故ならわたくしは　!」

クラウドディアは大袈裟に制服の内ポケットに手をつ突っ込んで、勢い良く何かを突き出した。

「……『アレン』レディアントファンクラブ』会員ナンバー　三

番？」

突き出されたのは、そう書かれた一枚のカードだった。

ステラがそれを読み上げるのと同時に、ミリーの顔が苦虫を噛み潰したような顔に変わった。

「そう！わたくしはアレン様を陰から見守るべく発足した神聖なるファンクラブ、その三人の創始者のうちの一人ですの！ちなみに活動は会員による週二回のミーティング、アレン様のプロフィールやその週のご予定、摂られた食事などを記載した回覧板の作成、その他状況に応じて様々な催しを行っておりますわ。近いものですと明日の誕生日になりますわね。夜中の十二時ちょうどに集会所にて会員全員でお祝いしますの。もちろんアレン様の貴重な睡眠時間を頂く訳には参りませんのでその場合は会員のみになりますが、アレン様のお体を案ずるのも会員の勤めですので仕方ありませんわね。日中のプレゼント贈呈に關しても会員番号順にお渡しすることになっていまして、これを破った者には世にも恐ろしい罰が」

ペラペラと矢継ぎ早に話すクラウドディアに、ミリーは盛大な溜め息を吐く。

「また始まったよ……ちなみに会員番号一と二はこいつの姉貴たちね。姉妹揃って何やってんだか」

「確か、ファンクラブが出来たのはアレン先輩が上級学院に上がったからでしたよね？」

「そ。つまりこいつは十歳の頃からご執心ってわけ」

「あ、あはは……」

その頃からこんな感じだったのかと思うと、ついつい乾いた笑いが零れてしまった。

「つまりアレン様の魅力というのは……ちょっと！聞いていますの！？」

「うんにや、全然。もう、ふあ……終わった？」

クラウドディアがこちらの状況に気付いたが、ミリーは全く悪びれずに欠伸をする。

「いいえ、まだまだここからが重要な」

「なんでも良いんだけどさ、もう決まって二週間経つのになんでステラのこと知らなかったのさ？ファンクラブお得意の情報調査は？」
再び自分の世界に入ろうとするクラウディアを無視して、ミリーは話を元に戻した。

「……確かに我がファンクラブでも直ぐに調査を行いましたわ。ですが、さすがのわたくし達でもあの鬼教官の研究室を調べることは不可能でしたの……！」

「いや、普通に聞けよ」

悔しそうに拳を握るクラウディアに、ミリーは心底どうでも良さそうにツッコんだ。

「とにかく！アレン様を見守るファンクラブを纏める者としては、ぼつと出の貴女に好き放題されることによってこの学院内の秩序が乱れる事態を放置する訳にはいきませんの！」

クラウディアは手を腰に当てながら、ビシッとステラを指差す。
「なんの秩序なんだか……」

ミリーはやはりどうでも良さそうに溜め息を吐くが、指差されたステラはどう反応すれば良いのか解らず苦笑いするしか無かった。

「え、えーつと、つまりどうすればよろしいのでしょうか……？」

「わたくしと代わりなさい！」

「アンタそれが目的なだけじゃん！」

秩序云々を放り投げて私欲丸出しの縦ロール少女であった。

「……すみませんが、それは出来ません」

少し間を置いて、ステラはきつぱりとそれを拒否した。

「……まあ、当然ですわね。なんといつてもアレン様と一緒「その事とは関係ありません」

ステラは首を横に振りながらクラウディアの言葉を遮る。

「確かにアレン先輩達と御一緒出来る事は光栄ですが、私は私の夢の為に一緒にするんです。その為にはどんな努力も惜しまないつもりです」

濃い茶色の瞳がクラウディアの青い瞳をまっすぐに見つめ、

「それに、せっかく誘って頂いたのに、いまさら辞退なんて出来ませんよ」

少し間を置くと、今度はそう言って困ったような微笑みを浮かべた。

(…………へえ)

ミリーは、今は影も形も見えなくなったステラの強い意志を目の当たりにして、声には出さず、感嘆していた。

まだ知り合って二週間程しか経っていないが、この茶髪の少女に対して全体的に大人しい印象を抱いていた彼女にとって、先程の凛とした表情はかなり意外なものだった。

それはクラウディアも同じらしく、すっかり先程までの勢いを無くして言葉に詰まっていた。

「…………ま、まあ、そこまで言うのなら、仕方ありませんわね。今回はお譲りしましょう」

ようやく捻り出した声は、少し上擦っていた。

「…………おい」

と、不意に前方から男性の声が掛かった。

「あら、何か」

振り向いたクラウディアの視界に、自分の席に着いているクラスメイト達と、肩を教本で軽く叩いている黒髪の男性教諭の姿が映った(ステラとミリーは最初から席に着いている)。

「…………授業、始まつてるんだが？」

「は、はいっ！」

ただ一人立って教室中から視線を受けていたクラウディアは、それに気付いた途端顔を真っ赤にして自分の席に戻っていった。

「プツ…………やーい」

「ダメですよミリーさん、笑っては」

その様子を声も潜めて笑うミリーをステラが窺^{たしな}めるが、

「そこー、話すのやめねーと特別課題喰らわすぞー」

「いつ!？」

「す、すみません!」

教師の特権による脅し(?)を受けて慌てて話を中断する。

「さてと……あー、ひっじょーに眠いが授業を始めるぞー。このクラスは攻撃魔法学?で良かったな?」

男性教諭は心底怠そうに頭を掻きながら教本を開く。

因みにアレン達を担当しているダグラスも同じ科目を担当しているが、あちらは攻撃魔法学?を担当している。

「うっし。そんじゃあ本題に入る前におさらいでもやっておくか。

まずは魔法の定義について……あー、じゃあさっきのついでにラフオレーゼ」

「は、はい」

「先程の事と生徒を選ぶのが面倒という理由一(恐らく後者が八割を占めている)から指名されたクラウドディアがその場に立つ。

「……魔法とは、魔力の性質が変化することによって引き起こされる現象を指します。魔力にはこの世界の大気中に漂っている大気魔力と、人間や魔物、精霊などが本来身の内に宿している体内魔力の二種類があり、この内魔法の発動に使用出来るものは体内魔力のみとなります」

「最初こそ戸惑ったものの、クラウドディアは短く一息入れると教科書を丸暗記でもしているかのようにすらすらと答えていく。

「魔力を持った生物、魔法生物の体内には魔力の性質を変化させる機能を持つ器官と、大気魔力を微量ずつ吸収して体内魔力へと変換する器官が存在し、これによって魔法を使用、減少した魔力を回復します。一部の鉱石や樹木なども同様の機能を備えており、これらの魔力が一定量を超えると魔石や霊樹などと呼ばれます」

「そこで言葉を区切ると、教員に視線を向ける。

「……よし、オーケーだ。座って良いぞ」

教員はクラウドディアに着席を促すと、開いていた教科書を丸めて肩を叩く。

「今言った通り、魔法は体内魔力を消費する事で発動し、消費された魔力は空気中で少しずつ大気魔力へと戻っていく。これが魔力の還元だ。で、俺達人間も当然体内魔力を持った魔法生物に分類される訳だが、他の魔法生物とは大きく異なっただ点が幾つかある。それを……」

教諭が教室を見渡すと、生徒達は当てられたく無いので微妙に視線を逸らしていた。

ステラも無意識的に直視を避けていたのだが、ミリーは教科書を壁にして完全に隠れていたので、

「ガーフィールド、言ってみろ」

「うげっ……」

逆に目立ってまんまと当てられてしまった。

「えーっと、人間は他の魔法生物よりも体内魔力がすごく少ない……」

「でしたっけ？」

「他には？」

「うえ〜……!?!?」

クラウディアとは対象的に自信無さ気に答えるが、教諭にさらに答えを求められて呻き声を上げる。

「……ん〜、アタシたちは精霊の力を借りて魔法を使うけど、他は自分の力だけで魔法が使える……とか？」

「……まあ、及第点をやろう」

「やたっ!」

ミリーは教諭の譲歩したような一言に安堵して席に着く。

「正確に言えば、人間は本来在るべき魔力と属性を持っておらず、精霊の加護によって極少量だがそれらを得る。加護を授かった属性や他の属性の魔法を使う事は出来るがそれらは殆ど精霊の力に因るもので、俺達が自力で使える魔法は肉体強化などの一部のものだけだ。そういった魔法を無属性魔法と呼ぶ」

教諭は丸めていた教科書を教卓に置くと、白墨を持って板書していく。

「ここが最大の相違点だ。他の魔法生物はそれぞれの属性と十分な魔力を持っているから精霊の力を借りずとも魔法を使えるが、自分の持つ属性しか使えない。逆に俺達人間は精霊の力を借りなければ魔法は使えないが、一つ以上の属性の魔法を使う事が出来る。まあ眷属や相性の問題で使える属性もそれぞれ違うんだがな。それで魔力の総量を簡単に比較すると、こんな感じになる」

教諭はそのまま黒板の右側に簡単なグラフを描いていく。グラフの一番下には「人」と書かれ、その上に「下」、「中」、「上」と順に書かれている。

「まず人間が持つ魔力の総量を一とすると、下級の魔物は約五倍になる」

教諭は「下」と書かれた場所の右に「五」と書く。

「次に中級はこれの倍、つまり人間の十倍はある事になり、上級はさらに十倍の百倍になる」

先程と同じように「中」と「上」の場所にもそれぞれ「十」、「百」と書かれ、

「ついでに言うと、上級の中で最強と言われている竜族や、魔物とは違う枠組みになるが同程度の力を持つと言われているエルフ族は、これらとは比較にならない程の魔力を持つそうだ」

「上」のさらに上に「竜」と「エ」が付け足され、その隣に「？」が表記される。

「俺達を使う魔法にクラスがあるのは、精霊にもこの枠組みで言うところの中級や上級以上の精霊がいて、魔法を使う際にそれに見合ったクラスの精霊から力を借りるからだ。つまり俺達が魔物と戦って勝てるのは、精霊達が足りない分を補ってくれるからという訳だ」

教諭は白墨を置いて軽く手を払うと、教卓に両手を突いて体重を掛ける。

「だがクラスが上になる程精霊から力を借りるのは難しくなる。精霊達が安易に強い力を貸す事を嫌い、気に入った奴にしか力を貸さないからだ。上級魔法や精霊魔法の習得が難しいのは魔力の総量も

あるが、そこが一番の理由だ。それからこれはお前らがこれから外でクエストをしたり、将来的に魔物と戦うような職業に就く事を考慮して言うておくが、」

教諭はそこで一旦言葉を切ると、一度目を瞑り、再び開く。

「万が一竜族やエルフ族と戦うような事になったら、迷わず逃げる命が惜しかったら、間違っても戦おうなんて思うなよ」

そこにあつたのは、先程までのやる気のない瞳ではなく、鋭く尖った刃物のような力強さを帯びた瞳だった。

その変貌ぶりと真剣身を帯びた声に、生徒達は思わず息を呑む。

「……まあ、そういう奴らは頭が良いからまずそんな状況にはなんねーと思うがな。そもそも一生の内に一度でも遭えたらスゲーって言われるぐらい、連中は人前に出てこねーしな」

しかし、その瞳は次の瞬間には元のやる気の無い光を放っていた。

「うーし、そんじゃあ今日の本題に入るぞー。まず」

「　　っつー訳だ。それからこの　　おっ?」

教諭が板書された箇所を手でコツコツと軽く叩きながら次の説明に入ろうとした時、終業を告げる鐘が教室内の静寂を破った。

「うし、じゃあ今日はここまでだ。今日やったとこの復習はちゃんとやっつけよー」

教諭はそれだけ告げるとさっさと教室を後にした。

それと同時にあちこちから大なり小なり息が漏れ、教室内は一気にざわめきを取り戻す。

「ねえねえ！さっきの先生、なんかいつもよりカツコ良くなかった?」

「うんうん！なーんか『死線を潜り抜けてきた男』って感じ?」

そしてそのざわめきの中心は、主に先程の教諭の変貌ぶりに対す

る黄色い声だった。

「ああいう大人っぽい人って良いよねー！結構イケメンだし、私ファンになっちゃいそう！」

「……ふっふっふっ、見掛けに惑わされちゃあいかんよキミたち」というよりも、顎に手を添えながら意味深な笑みを浮かべているミリーだった。

「確かにあの人はイケメンだけど、突っ込んだところを知ったら幻滅するよー？例えば結構若く見えるけど、実はあのダグラス教官と同期だとかにゃっ！？」

「人の事ペラペラ喋ってんじゃねーよ」

人差し指を立てて周りの女子に語り掛けていたミリーは、いつの間にか戻ってきていた教諭に思い切り拳骨を喰らった。

「……例えば可愛い姪っ子にも容赦なく拳骨をかますとか」

「拳骨だけじゃ足りねーらしいな」

めげずに続けるミリーに、教諭は額に青筋を浮かべながら掌に黒い光を帯びた魔力を集める。

「わー！うそうそ！ミリーちゃんは優しくてかっこいいクライヴ叔父さんが大好きですよー！？ってか教師がこんなところで魔法なんか使っちゃダメでしょ！？」

「やかましい。大体あのむさ苦しい奴との事は口にするなって散々言ってるだろーが。……あっ、思い出したら余計腹立ってきた」

「ストロップ！とりあえずその右手のどす黒い光をなんとかしてみよーか！？ほら、みんな見てるしね？ね！？」

「あっっ？」

ギロリ、と紅い瞳で周りを睨み付けると（本人は普通に見渡したつもりでいる）、生徒達が遠巻きにこちらの様子を窺っていた。

「……ちっ」

クライヴは小さく舌打ちすると、掌に集めていた魔力をゆっくりと解放する。

ミリーはようやく落ち着いてくれた叔父に目を細めながら頬をポ

リポリと掻く。

「うーん、やっぱし叔父さんが四十代になっても独り身なのは目付きが悪いのと短気なのが原因だと思うな……」

「大きなお世話だ。それと学院内で叔父さんはやめろっつってんだ」

クライヴは小さく溜め息を吐くと、懐から煙草を取り出した。

「堅いこと言わないでよ。それとここ禁煙だよ？」

「かてー事言うなよ」

相変わらずやる気の無い光を瞳に宿しながら、指先に火を灯して啜えた煙草に付けようとするが、

「ぼっしゅ〜」

「あっ、コラッ！」

直前でミリーに掠め取られてしまった。

「ダメ、他の子もいるんだから。で、用があつたから戻ってきたんじゃないの？」

「……お前、段々言う事が姉貴に似てきたな。まあ良い。ティエラとウインジア、まだ居るか？」

少し赤いオレンジ髪の少女が口煩い姉の幼い姿とダブって視えた気がして、溜め息を漏らしながら要件を伝える。

「ステラとリオン君？ちよい待ってて。んーっと……」

ミリーは一度首を傾げると、遠くの景色を眺める様に手を翳して周囲を見渡す。

「……んにやつ、はっけーん。ステラー！リットンくん！」

ミリーが大きく手を振った先に、鞆を手に持ちながらこちらを窺っている二人の姿があつた。どうやらミリーを待っていたらしい。

「どうかしましたか？」

実は先程から二人の会話を聞いていたのだが、ステラはさも何も知らないかのように応じる。

「ああ、すっかり伝えるのを忘れてたんだがな、お前ら二人、来週の授業は出なくて良いぞ」

「えっ、どうしてですか？」

突然の通達に三人（ミリーは関係ないが）は首を傾げる。

「本来なら来週から新入生クエストの準備期間に入るから一年と四年の授業は午前だけになるんだが、お前らSクラス組は難易度や距離の問題で急遽来週から出発する事になった。だから今週中に準備を終わらせておけよ」

「わかりました」

「じゃあ今日から準備始めないとね」

ステラとリオンはその説明に納得して早速お互いに話し始める。

「……………ねえ、叔父さん」

「あん？」

しかしミリーは何か思うところがあるのか、徐にクライヴに話し掛けた。

「その話が決まったのってさ、いつ？」

「……………さあて、次の授業の準備しないとな」

「あっ、逃げた！」

全身から冷や汗が溢れるのを感じながら、クライヴはそそくさとその場を立ち去った。

「ミリーさん、私たちもそろそろ行きましょう？」

「あー、うん……………」

ミリーは相変わらずのやる気の無さと逃げ足の速さに呆れながら、二人と共に次の教室に向かう事にした。

「そっいえば……………」

若干頂垂れ気味のミリーに、リオンがふと話し掛ける。

「さっきから気になってたんだけど、クライヴ先生って……………」

「……………うん、アタシの叔父さんだよ。ウチのお母さんの弟。フルネームはクライヴ・シン・カーライル」

ミリーの答えにステラもやはりと納得する。

「お二人とも、どことなく似ていますよね」

「ええ〜？まあ、否定出来ないところも多々あるけど……………」

ニツコリと笑うステラに、ミリーは嫌そうな顔をしつつも半ば諦めたように溜め息を吐く。

「でも、身内に教師がいるって良いなあ。勉強とか教えて貰えるし、いろいろ楽そうじゃない？」

「いやいやいや、現実はその間に甘くはないのだよ、リオン君」

羨ましそうに言うリオンに、ミリーは全力で手を横に振る。

「宿題なんか教えてくれたことないし、いつともテキトーだし、その癖アタシがなんかやると直ぐに拳骨だし、この間なんか、急に呼び出されたと思ったら研究室の大掃除を手伝わされるし。しかも自分分は用事があると言ってアタシに丸投げするんだよ!？」

「あ、あはは……」

負のオーラを背後に纏いながら指を折って一つ一つ問題点を挙げていくミリーに、ステラは苦笑いを浮かべる。

「そ、そういえばステラ、鍛練はどう？」

触れてはいけないモノに触れてしまった事に気付いたリオンは、何も聞かなかつた事にしてステラに話題を振った。

「だいぶ慣れてきましたよ。さすがに一日中はまだ無理ですが、八時間程度なら集中しなくても維持出来るようになりましたし」

それでもまだ目標には程遠いんですけどね、と少し憂いを帯びた笑みを見せるが、ほんの二週間前の姿と比べると明らかに余裕のある様子から、本当に順調だという事が窺えた。

「やっぱリオン君も一緒にやりませんか、鍛練？」

「まあ、気が向いたら……」

「あれ？リオン君はやってないの？一緒に行くのに？」

苦笑いをしながら後頭部を掻くリオンに、いつの間にか復活していたミリーは首を傾げる。

実は鍛練を始めた当初にアレン達からも提案されたのだが、その時もリオンは先程のような台詞で断っていた。

「そうですか……」

結果は解っていたが、それでもステラは心底残念そうな声を出す。

「はーん、さてはリオン君……」
「ミリーは何か思い付いたのか、顎に手を添えてニヤリと笑う。
「実はこの前のステラみたいに、無様な格好をした挙げ句みんなの
注目的になつて恥ずかしい思いをするのが嫌なんでしょ？」
「まあ、そんなところかな？」
「もう！二人ともその事は忘れてくださいっ！」
からかうように笑う二人に、ステラは赤面しながら怒鳴った。

「……………ふむ、大分マシになつてきたな」
「ハアツ、ハアツ、ハアツ……………」

放課後の個人用訓練室で、いつもの如くノアにポロポロにされた
ステラは、いつもの如く仰向けに倒れて息を切らしていた。
「毎度の如く良くやるわねえ」

その様子を地面に座りながら見物していたシャルは、膝に頬杖を
突きながら感心なのか呆れなのか判らない声を出す。

「よし、じゃあ次は俺とノアな！」

同じく地面に座っていたアレンは勢い良く立ち上がると、右手に
黄金の柄を持った剣を召喚した。

「い、いえ……………もう一度、お願いします……………」
ステラは手を着いて起き上がると、息も絶え絶えに再開を要求す
る。

「無理すんなつて。とりあえず治療してもらつて休んどけよ」
しかしアレンは左手を腰に当てて休憩を促した。

「ですが……………！」
「ステラちゃん？頑張るのは良いけど、適度に休むのも鍛練の内だ
よっ。」

治療の為に傍に来たアクアが、それでも引き下がろうとしないス

テラの肩に手を置いて宥める。

「それに、身体を休める間にもやってもらふ事はあるしな」

「……………」

にこやかに笑うアレンの言葉に、ステラは重たい首を傾げる。と、
「ジャツジャジャーン！」

突然なんとも古臭い効果音一（口頭）が聞こえてきた。

声が出た方を見ると、完全に呆れているシャルの隣に、何故か伊達眼鏡を掛けてイイ顔をしているイリスが立っていた。

「イリス、それ何？」

「これ？気分を出す為の必須アイテムっ！」

イリスは指先で眼鏡を持ち上げる。

「当初の予定ではもう少し後からにするつもりだったのだが、予想以上に成長が早いので今日から魔法の訓練も加える事にした。魔法はイリスが一番得意だからな」

「なるほど……………」

相変わらずの無表情で腕組みをしているノアの言葉に納得しつつ、ステラは何気なく褒められた事に頬が弛まないように意識する。

「最初はいつ頃を予定していたんですか？」

「遅くともクエストに行きながらと考えていた。この調子だとその後の予定も繰り上がりそうだし」

「その後？」

暗に予定が繰り上がってもクエスト中の鍛練は実行すると言われたのだが、そこに妙な引つ掛かりを覚えた。

「クエストが終わった後に決まってるだろ？」

「えっ？今回だけではないんですか？」

当然のように答えたアレンに、ステラは思わずきよんとする。

「一月ぼつちじゃそんなに変わらないって。嫌だったら無理してやらなくても良いけど……………」

「い、いえっ！そんな事ありませんっ！ただクエストが終わった後も続けて頂けるとは思っていなかったの……………」

「二人とも、面倒見が良いから」

慌てて両手を振るステラに、アクアが優しい微笑みを向けた。

「でも、やっぱりリオンも一緒だったら良かったのにな」

「仕方ないだろう。無理強いする訳にもいかん。まあ、実力ぐらいは知っておきたいがな」

残念がるアレンに、ノアは少し本音を明かす。

「あのっ、リオン君でしたら本当に大丈夫だと思いますよ？」

「そういえばステラ、授業一緒なのよね？」

以前話が逸れて結局聞けなかったので、シャルは興味津々といった感じだった。

「はい。と言っても授業中は手を抜いているみたいなので、ちゃんとしたところは一度しか見た事がないのですが……でも噂によるとリオン君、入学時の試験でトップだったとか……」

「へえー、意外だな。あんまりそういうキャラには見えないけどなあ」

「あんたが言わないの」

少し目を見張るアレンにシャルが突っ込んだ。

「まあこれに関してはいずれはつきりするだろう。それよりも今は自分達の事に集中するぞ。アレン、少し離れるぞ」

「おう。じゃあイリス、頼むな」

二人は皆を巻き込まないようにその場を離れていった。

「まっかせといてっ！」

イリスは自分の胸に小さな拳をドンと乗せた。

「じゃあステラ、始めよっか。アクア、治療お願いね？」

「うん。ステラちゃん、こっちに座ってくれる？」

「あっ、はい」

ステラは言われた通りアクアの前に腰を降ろして背を向けた。

アクアはステラの背中に両手を軽く当てて、ゆっくりと口を開く。

「幼き水の姉上よ、我が想いに応え、彼の者に清澄なる癒しを与えたまえ。【水姫の幼声】」

詠唱を終えると、アクアの両手から現れた淡い青色の光がステラの背中を優しく覆っていた。

「時間もあつし、下級魔法でゆつくり治療していくね？」

治療魔法は対象者の自然治療能力を無理矢理高めるので、身体に掛かる負担を抑える為に緊急時以外は初級魔法で徐々に治していくのが基本であつた。

治療を受けるステラの目の前に、イリスが座る。

「じゃあその間にやつちやおつか。ちなみに今からわたしのことは『先生』と呼ぶようにっ」

「は、はい、先生っ……！」

「よろしいっ」

完全に気分になつているイリスは満足気に腕を組んで頷いた。

「で、ステラ、いまどの辺まで習つたの？」

「今日、魔力の性質変化について習いました」

「ふんふん。じゃあちよつとそこ復習してみよつか。初級学院の時は魔法が使えればそれで良かったけど、実際に原理を理解してるのとしてないのとだとすつごく差があるから」

「分かりました」

朗らかに笑うイリスに頷いて、ステラは今朝習つた内容を記憶の引き出しから引つ張り出す。

「……魔力の性質変化には、大きく分けて属性と効果の二種類があります。魔法を行使する際、まず使用したい属性の精霊の力を借りて体内魔力の属性を無属性から該当する属性に変化させます。その後、形状や効力などの効果を決定し、魔法を発動させます。一連の流れは全て呪文の詠唱文に含まれ、複雑で強力な効果を持つ魔法程、詠唱文が長くなります」

落ち着いた声ではつきりと述べ、臨時家庭教師に確認の眼差しを向ける。

小さな講師はそれに頷いて言葉を付け足す。

「うん、そんな感じかな？さつきアクアが使つた【レメディ】の呪

文を解析するとね、」

イリスはどこから取り出したのか、いつの間にか持っていた指し棒で地面を引つ掻いていき、やがて先程アクアが唱えた呪文が地面に彫られた。

「この『幼き水の姉上』っていうところで、力を借りる精霊のクラスと属性を決めるの。『幼き』は下級魔法で良く使われる言葉だね。その後の『我が想いに応え』は精霊に呼び掛ける節で、『想い』は『願い』とか『声』とかにもなるよ。それから『彼の者に』で対象を決めて、最後の『清澄なる癒し』で魔法の効果を定めるの。」

そこまで説明すると、イリスは一度顔を上げてステラを見る。

「それで、一番最後に魔法の名前を唱えるんだけど、実はこれが一番大切なの。」

「……と言つと？」

ステラは首を傾げた。

「名前っていうのはすっごく大切で、その存在を構成する要素の中心なの。もし魔法の名前を唱えずに使ったら、だいたい半分くらいまで威力が落ちちゃうんだよ。」

「そんなにですか？」

「うん。だから詠唱破棄でも、普通最後の名前だけは抜かさないんだよ。ちよつと火を出すとか、そういうのだとそんなに問題はないんだけどね。あと無属性魔法も。」

ステラは今朝の教室でクライヴが詠唱もなしに指先に灯した火を煙草に付けようとした光景を思い浮かべた。

「……あの、詠唱破棄について具体的に教えて頂けますか？」

「うん。ちよつとやるうとしてたから良いよ。」

イリスはへにやつと笑って頷く。

「ステラは呪文の詠唱ってどんなものだと思うてる？」

「魔力の性質変化を行う為の手段では無いのですか？」

先程やったばかりの内容を再び問われて、ステラは不思議そうに問い返した。

「じゃあその性質って、呪文の詠唱の何で変化してるかわかる？」
改めて問われて、今度は少し自信なさげに口を開く。

「……呪文の内容と詠唱する声、ですか？」

「うーん、それだと半分かなあ？」

イリスは残念とでも言いたげな表情を浮かべた。

「魔法の行使に必要なのはね、その魔法に対する具体的なイメージなの。精霊たちはわたしたちが頭に浮かべたイメージを読み取って力を貸してくれるんだよ。呪文の詠唱っていうのは、それを具体的な言葉にすることで補助するためのものなの。言葉にしたなら、なんとなくその魔法がどんなものなのかわかるでしょ？」

イリスは指し棒をぶらぶらさせながら話を続ける。

「詠唱破棄っていうのは、それを頭の中のイメージだけで具体的に確立させないといけないから難しいの。単純に火の玉を飛ばすだけだったら簡単だし、精霊たちがわかり易いように魔法の名前は全部古代語が使われてるけど、複雑な動きとか効力を持った魔法だとその分はつきりイメージしないと通にはならないんだよ。難しいけど、その代わりのメリットの一つが魔法発動の時間短縮ってこと」

「でも、詠唱破棄にはデメリットもあるのよ」

と、ここでシャルがイリスの隣に座って口を挟んだ。

「一つはさつき言ってた具体的なイメージね。属性、効果、座標、そこに至るまでの軌道、その他の色々なものはつきりと思えば浮かべないと成功しないわ。それから詠唱魔法と比べると結構威力が落ちるのも難点ね。しかも精霊魔法クラスは詠唱破棄出来ないし」

便利なんだかそうじゃないんだか、と短く息を吐くシャルに、アクアが治療を続けながら苦笑いする。

「でも、そんなの使える人なんてそうそういないんだけどね」

「まあ、ね……」

そんな人物に心当たりのあるシャルは、何気無く視線を隣に移した。

心当たりである少女はというと、

「むうー……」

何故か頬を膨らませていた。

「わたしが教えてたのに……」

「あ、あはは……つい、ね」

「ご、ごめんね、イリスちゃん。続けて？」

シャルとアクアは苦笑いしながら謝罪するが、すっかりご機嫌斜めな少女の頬は膨れたままだった。

「ぬおおりゃああああ!!」

シャルがどうやって機嫌を直そうかと頬を搔いていると、不意にそんな叫び声が聞こえてきた。

四人が声がした方を見ると、アレンがノアに斬り掛かるべく剣を振り上げていた。

「甘い……」

「がっ!?!」

ノアはそれをひらりと躲すと、目にも留まらぬ高速の連撃を叩き込んだ。

「如何した、この前はマグレか？」

ノアは無表情に左手に持っている刀を構える。

「うるせー! 大体お前だけ上級の肉体強化使えるとかずりーだろ！」

「……お前が本気で来いと言ったのでは無かったか？」

ノアはお門違いな文句に小さく溜め息を吐く。

対するアレンは、何度やっても攻撃が当たらず躍起になっていた。

「くっそー、身体能力に差がありすぎなんだよ………こうなったら………」

アレンは何かを決心して再び両手で剣を構えた。

それを見たノアは、体勢はそのままに口を開く。

「来い」

「言われなくても!」

地面を蹴って駆け出したアレンは、さっきのお返しとばかりに連

撃を繰り出す。

「ちっ……」

ノアはそれを一つ残らず捌いていくが、一度体勢を立て直す為の後方へと大きく跳んだ。

「そこだっ！」

その瞬間、アレンは剣に魔力を籠める。

「煌龍牙！」

アレンが剣を素早く上下に振るのと同時に、二本の光の刃が放たれた。

「っ！！」

二つの光刃は空中で混ざり合い、巨大な龍の顎となってノアを飲み込み、そのまま壁に激突した。

「どうだ！！」

壁から巻き起こった土煙に向かって、アレンはしてやったりとほくそ笑んだ。

「……………【闇影の剣】」

シャドウブレイド

しかし不意に煙の中から呟くような声が聞こえ、半月形の漆黒の刃が煙を裂いてアレンに襲い掛かってきた。

「おわっ！？」

アレンが咄嗟にそれを躲すと、刃は後方の壁を深く砕いて消え去った。

「あつぶねーな！いきなり何すんだよ！？」

アレンは突然の攻撃に声を荒げる。が、

「……………それは此方の台詞だ。俺の記憶が正しければ、攻撃魔法は無しだった筈だが？」

無傷で煙から出てきたノアの言葉にギクリとする。

「……………お、俺のは正確に言つと『技』だし」

視線を背けて口笛を吹くが、焦っているのか、音が掠れていた。

あくまでも屁理屈を捏ねるアレンに、ノアは服に付いた砂を払いながらやれやれと頭を振る。

「なら、俺の攻撃も『技』という事で良いな？」

「へっ……？」

きよとんとするアレンを余所に、ノアは刀を斜はすに構える。

大いなる闇夜の母上よ、契約に基づき、我に力を与えたまえ

「なっ!？」

アレンは突然古代語で詠唱を始めたノアに驚愕する。

閻えんごく獄より来るは深淵の闇、閻あんでん天より来るは断罪の咆哮。其の力、

我が剣しると成りて、彼の愚者に滅びの終焉を与えん

「ちよっ、おまつ、それ上級魔法じゃねーか!？」

お構い無しに詠唱を続けるノアの正面に、漆黒の魔法陣が現れた。

「……安心しろ、加減はしてやる」

「いやっ、そういう問題じゃ」

慌てふためくアレンはそっちのけで、ノアはその名を紡ぐ。その額には微妙に青筋が浮かんでいた。

「【エレボスロア闇夜の咆哮】」

呟きと共に刀を魔法陣に突き付けると、天井付近に巨大な魔法陣が展開され、そこから闇色の流星が降り注ぐ。

「ぎゃあああああ!?!？」

次々と襲い掛かってくる流星に、アレンは悲痛な叫びを上げながら逃げ惑う。

「……あゝあ」

それを見ていたシャルは、呆れたように溜め息を吐いた。

「よ、よろしいんですか？放っておいて……」

「うーん、今回は明らかにお兄ちゃんが悪いし……」

あわあわと狼狽えるステラに、イリスは諦めたように苦笑いする。

「だ、大丈夫だよ。ノア君も一応手加減はしてるから……」

そう言いつつも、アクアの頬には冷や汗が流れていた。

「そ、それにしても、先程アレン先輩が使っていたのは一体……?」
質問しながら、ステラは出来るだけ目の前の惨劇が視界に入らないようにする。

「あれは魔法の応用で、詠唱破棄した光属性の下級魔法を、剣を媒介にして飛ばしたんだよ」

「そんな事も出来るんですか？」

ステラの問いに、イリスは困ったような顔をする。

「んー、単純に魔法を使うよりも難しいけど、武器を媒介にすること自体は出来なくはないよ？でもお兄ちゃんの場合、『剣技』っていう剣の特性を活かしたオリジナルの魔法にまで昇華してるから、誰でも出来るってわけじゃないの。しかも普通は下級魔法であんな威力出ないし」

「それにしても、センス無いわよねえ……」

と、ここでシャルが口を開く。

「【煌龍牙】って、見たまんまじゃない。どうせ『龍』とか入れたらカツコイイとか思ったんでしょうけど」

安直な考えに呆れるシャルに、アクアが苦い微笑みを浮かべる。

「でも、あそこまでちゃんとしたオリジナルなんて、ノア君でも出来ないよ？」

「そりゃあまあ、そうなんだけど……」

アクアの言葉に同意しつつも、シャルは納得いかない顔をする。

「どうかしたんですか？」

ステラはそれに首を傾げた。

「オリジナルの魔法ってね、当たり前だけど創るのがすっごく難しいの。お兄ちゃんも全部感覚で構成してるけど、普通はあんなに簡単に創れるものじゃないんだよ」

少しムスツとしているシャルの様子にイリスは小さく笑う。

ステラの治療を続けるアクアも、今度は腕に手を当てながら同じような顔をする。

「元になる魔法はあるけど、一から創るのとあまり変わらないからね。シャルちゃんも何回か試して発動自体はしてるんだけど、アレん君みたいな実用性のある魔法は出来てないの。でもアレん君は剣を媒介にしないといけないけど、なんとなくて完璧なオリジナル魔

法を完成させてるから……」

その言葉にシャルはさらに眉を寄せる。

「ホント、何であんなのが成功してきちんと理論を固めた私が失敗するのか、甚だ疑問だわ」

「つまり、シャルはお兄ちゃんに嫉妬してるんだよ」

「違うっ！」

人差し指を立てて締め括ったイリスを、シャルは全力で否定した。
「はい、おしまい」

そのやり取りから目を離すと、アクアはにっこり微笑みながら治療の終わりを告げた。

ステラは手を握ったりして身体に違和感が無い事を確かめる。

「ありがとうございます」

「ううん、気にしなくても良いよ。治療魔法は自分には使えないし、このメンバーだといつもわたしもが治療担当だから」

アクアは変わらず優しい微笑みを向ける。

「他に治癒魔法を使う方はいらっしやらないんですか？」

そんな彼女に回復役はピッタリだと思いつつ、ステラは首を傾げる。

「オールラウンダーのイリスちゃんとノア君は使えるから、わたしにはどつちかがしてくれるよ。でも、地属性が得意なステラちゃんと一緒に、これからは任せようかな？」

「が、頑張ります……!!」

期待に応えるべく気を引き締めるステラの耳に、

「ど、退いてくれ……!!」

突然悲痛な叫びが届いた。

四人が顔を上げると、まだ闇色の流星群に追われているアレンが、必死の形相でこちらに向かってきていた。その後ろでは降り注ぐ流星群が次々と地面に小さなクレーターを作っていた。

「ちよっ、こつちに来ないでよ!？」

「お兄ちゃん! あっち行って、あっち!」

「も、むり、マジで……」

シャルとイリスが慌てて待ったを掛けるが、先程から全力疾走して疲弊しているアレンには全く聞こえていないようで、

「ぎゃああああああ!!」

「いやあああああ!?!」

ついに力尽きて流星群の餌食となった。シャル達を巻き添えにし
て。

「……………」

端から見ていたノアの頬に、嫌な汗が伝った。

翌日。

授業を終えてリオンと共に一度寮に戻ったステラは、アレンの誕生パーティーに向かっていた。

「それで、その後結局どうなったの?」

偶々(たまたま)同じ寮に住んでいた二人は、昨日の出来事を話しながら赤い煉瓦で整えられた道を歩いていた。

「それが、その魔法自体はアクア先輩が防御魔法で防いで下さったので被害は無かったのですが、シャル先輩が……」

「ああ……」

二人はどこか遠い目を空に向ける。

結局その日は、シャルが癪癪を起こしてアレンを三途の川に片足の膝まで踏み込む程ボロボロにするという見慣れたくも無い光景で締め括られたのだが、

「しかも、昨日はアクア先輩まで……」

流石の癒し系ほんわか和みキャラ（イリス談）のアクアも昨日の騒動には思うところがあつたらしく、ノアの魔法よりもダークなオーラを背負いつつ満面の笑みでその術者に詰め寄る様は、ステラの怒らせてはいけない人物ランキング堂々ぶつちぎりの一位にランクインを果たすという結果を生んだのだが、本人がそれを知る時「ステラの寿命なので、ステラはその時が来ない事を切に願っていた。と、昨日の惨劇を目に浮かべていると、

（そういえば、シャル先輩が魔法を使う時に魔法名を唱えるところを見た事が……）」

不意にそんな事を思い出す。

他の場面でも、彼女は確かに魔法名を唱えずにアレンに半殺し以上のダメージを負わせていた。しかし、昨日のイリスの説明に困ると、それでは本来の半分程度の威力しか発揮出来ない筈だ。

「何かあるんでしょうか……？」

「えっ？何か言った？」

「いつ、いえっ、何でもありませんっ」

思わず思考が口から漏れてしまい、慌てて取り繕った。

「……………」

リオンは不思議そうに首を傾げるが、特に追及はせず歩を進めるついでに話を別のところに移す事にする。

「ところで、誕生日プレゼントは決まったの？」

「はい、なんとか。でも、正直本当にこれで良いのか、未だに迷っているんですよ……」

ステラは困ったように身体の前で両手で掴んでいる持ち手の先を見下ろす。

掴まむように掴んだ先には、淡いピンク色の可愛らしい紙袋が申し訳無さそうに揺れていた。

因みに特に着替えたりしていない二人の現在の服装は、学園指定の黒地に金色のラインが入った上着に黒いシャツとスラックス（ス

テラは膝上までのスカート)、赤いネクタイである。

「大丈夫だって。アレン先輩なら何でも喜んでくれるよ」

緑髪の少年は相変わらずぐるぐる巻きにした藍色のマフラーを揺らしながら、傍らで少し俯いている少女を見上げた。

「そう、ですよ。大丈夫ですよ………よしっ」

ステラは自分に言い聞かせるように呟くと、意を決したように俯いていた顔を上げる。

「ありがとうございます、リオン君。少し急ぎましようか」

そろそろ時間も近いですし、と言って、ステラは少し駆け足になる。今日は二人の歓迎会も兼ねているので、遅くなる訳にはいかない。

「あんまり急ぐと転ぶよ？」

声を掛けたりオンは、先程とは打って変わって少しはしゃいでいるステラの様子に苦笑しながらその後を追った。

学区の南東部から北東部に掛けて存在する学生寮エリアは、とにかく広大である。

学区のほぼ右半分がこれに該当するのだが、膨大なまでの生徒数を考えればそれも当然の結果であった。

「シャル、そっちは終わった？」

寮の位置によっては朝家を出る時間が三十分から一時間以上違ってくる為、校舎に近い南東部に建てられた寮に^{こそ}挙って入れたアレン達は、運が良かったと言えよう。

「こっちは良いわよ」

しかし、流石に今回のメンバー全員が同じ寮に住んでいるなどという都合の良い展開は無く、アレン達の寮よりも西側の寮に住むノアとアクア、北側の寮に住むステラとリオンが荷物を取りに戻って

いる間に、残った三人はアレンの部屋のリビングでパーティーの準備をしていた。

「お兄ちゃん、テーブルの準備出来た？」

ふくらはぎ辺りまで伸ばした銀髪を一つに纏めて白いエプロンを掛けたイリスが、おたまを片手にオープンキッチンからリビングにいるアレンに声を掛けた。

「ふう、こつちも良いぞ」

アレンは短く息を吐いて頷いた。

少し広めのリビングには普段使っているテーブルが三つ合わせて並べられており、そこに真っ白なテーブルクロスが敷かれていた。

「じゃあシャルと一緒に料理運んでいってね。そろそろみんな来る頃だから」

部屋の飾り付けを終えたシャルにも声を掛けつつ、イリスは料理を再開する。

二人が言われた通りに器に盛られた色取り取りの料理をテーブルに運んでいると、不意に呼び出し音が鳴った。

「おっ、来たか」

それに反応したアレンが玄関に向かった。

「よう、いらっしやい」

扉を開けた先には先程別れた四人が、その時と同じ服装のまま立っていた。

「こんばんは」

「何だ、みんな一緒に来たのか」

「すぐそこで一緒になったの。もう入っても大丈夫？」

正面にいたアクアはにっこり微笑みながら、アレンの肩越しに中の様子を窺う。

「ああ、ちょうど準備出来たところだから」

アレンは半身になって中へ入るよう促す。

「じゃあ、お邪魔します。それとアレン君」

「ん？」

アクアはそれに応じて一步踏み出す前に一度言葉を止め、
「お誕生日、おめでとう」

先程見せたものよりも、さらに柔らかく優しい微笑みを浮かべた。

「……ありがとう」

それを受けたアレンも、少し照れ臭そうに笑顔を返した。

「あっ、あのっ！アレン先輩！お誕生日おめでとうございます！」

「おめでとうございます、先輩」

と、そこにステラの弾けたような声とリオンの弛んだ声が飛び込んできた。

「二人もありがとな。遠慮しないで上がってくれよ」

アレンはニカッと笑って部屋の中へ入っていき、三人もその後に続く。

「……………」

完全に祝いの言葉を述べるタイミングを失ったノアは、どうしたものかと思案しつつ無言のままその後ろに付いていった。

「こんばんは、シャルちゃん」

リビングで残った料理を運んでいたシャルは、その声で客人達がようやく部屋の中に入った事に気付いて視線を向けた。

「こんばんは、アクア。ステラもリオンもいらっしやい。適当に座ってちょうだい」

勿論シャルはこの場にノアが居る事も知っていたが、いちいち丁寧に挨拶し合う間柄でも無い事をお互いに認識しているので、背景と共に視界に入れるだけで他の三人をテーブルへ促して自分も椅子に腰掛けた。

「イリスちゃんは？」

「お手洗いに行ってるわ。帰ってきてからずっとお料理に掛かりきりだったから」

本人の意向とはいえ、自分には部屋の掃除くらいしか手伝えない事に申し訳無さそうな顔をする。

「これ、全部イリス先輩が作ったんですか？」

荷物を置いてテーブルに着いたりオンは、白いクロスの上に綺麗に並べられたサラダやパスタ、スープや肉料理などの涎よだれを誘う料理の品々に少し目を見開いていた。因みに室内でもやはり藍色のマフラーは外さないらしい。

「ああ。毎年豪勢だけど、今年のは特に気合い入ってるみたいだな」
「おかげで帰りしなのお買い物は荷物が多くて大変だったわ」

「俺がなっ！」
アレンはテーブルに着きながら、然も自分が大荷物を運んだかのように息を吐くシャルにツッコんだ。

実際女性に重たい物を持たせる訳にもいかないので進んで荷物持ちを買って出たのだが、こうなると文句の一つも言いたくなるというものだった。

「あははは……」
「おっ待たせーっ！」

リオンがそんなやり取りに乾いた笑いを零していると、イリスが手を挙げながら戻ってきた。

「……ってあれ？ステラ、座らないの？」
と、そこでステラがリビングに入ったところではーっと突っ立っている事に気付いた。

「……」
「……おーい？」

目の前で手を振ってみるが反応が無いので、

「……えいつ」
「ふえああッ!？」
後ろに回り込んで脇腹の辺りを両手で擦くすくするように摘まむと、何とも言えない悲鳴を上げた。

「なっ、何をするんですか!？」
ステラは突然の攻撃に少し涙目になって訴えた。

「だっていくら呼んでも気付かないんだもん。ほら、早く座ろ？」
「えっ?……あっ」

そこでようやく全員を待たせている事に気付き、慌ててテーブルに駆け寄る。

「す、すみません……」

「別に良いけど、どうかしたのか？ぼーっとして」

「いつ、いえっ、何でもありません、何でも……」

慌てて取り繕う様に不思議がるが、アレンはそれ以上は追及しなかった。

ステラはその事にほっと胸を撫で下ろすが、先程から下り坂を疾走している鼓動は未だに落ち着きを取り戻そうとしていなかった。その原因はというと、

（お、男の人の、それもアレン先輩の部屋……い、いけません、緊張が……）

初めて足を踏み入れる不可侵の聖域（異性の部屋）に、ステラの心臓は今にも緊張で爆発しそうだった。

少し部屋を見渡してみると、さすがに掃除はしたようで調度品なども綺麗に整頓されていた。

そのまま視線を右側に向けると、一つの扉が目に入る。

（あの扉……）

寮の造りは全て同じなので、その先に何があるのかは容易に確信出来た。

そこは、リビングよりも顕著に部屋の主の個性を映し出す、聖域の中核。

人に依っては魔窟にもなり得るが、殆どの者の一日はそこから始まり、また終わりを迎える。

つまり、寝室だった。

（っ！いつ、いけません！これではまるで覗きたいと思ってるみたいでは）

はっと思ひ留まり、首を振って好奇心を抑えるが、

「ステラ？今アレンの寝室に視線が釘付けになってたわよ？」

「き、気のせいですよ……！」

時既に遅く、シャルに感付かれてしまった。

それを見たアレンはきよんとする。

「何だ？見たいなら別に構わないけど、そんなに綺麗じゃないし特に何も無いぞ？」

「そうそう。筋トレ道具くらいしか無いつまらない部屋よ」

シャルはやれやれと肩を竦めた。

「良いだろ、別に。お前の部屋なんか分厚い本ばっかじゃねーか」

「筋トレ馬鹿よりはマシよ」

またしても不毛な口争いが始まり出したが、ステラは内心話が逸れた事にほっとしていた。

「全く、何時でも何処でもお構い無しだな」

言い争う二人の姿に、ノアは小さく溜め息を吐いた。

「二人とも？そのくらいにしないと、せっかくイリスちゃんが作ってくれたお料理が冷めちゃうよ？」

「うっ……」

アクアの困ったような声に二人とも言葉を詰まらせた。

その光景にクスツと笑って、イリスが立ち上がる。

「えーっと、それじゃあお兄ちゃんの十六歳の誕生日と、ステラとリオンとの新しい出会いを祝して、」

そこで一度言葉を区切り、全員が目の前に置いてあるジュースの入ったグラスを持ち上げた事を確認して一言。

「カンパニー！」

「乾杯！」

澆刺はっさつとした声に続いて、七つのグラスが祝福の調べを奏でた。

「美味しい……！イリス先輩、このパスタ、凄く美味しいです！」

丁寧にフォークに巻き付けたパスタを口に運んだステラが、目を見開いたまま笑顔を向けた。

「ホントに？良かったあ。おかわりはあるから遠慮しないでいっぱい食べてね？」

イリスも柔らかく微笑みを浮かべて自分の分を取り皿に盛ってい

く。

「ホント、イリスがいて良かったわ。おかげで毎日美味しい食事に有り付けるもの」

「シャル先輩の分もイリス先輩が作っているんですか？」

シャルの満足気な声にステラは小首を傾げた。

「シャルの部屋はこの向かいで、イリスは隣だからな。朝と晩はいつつもイリスが作ってくれるんだよ」

「ご飯はみんなで食べた方がおいしいからね」

イリスはアレンの言葉にへにやつと微笑んでサラダを口に運ぶ。

「でも、これだけおいしいと他の人の料理じゃ満足出来ないんじゃないですか？」

「っ！」「っ」

リオンの何気無い一言に、シャルとステラは思わず息を詰まらせた。

「そうか？俺はあんまり比較とかしないから、美味けりや美味いで良いと思うけどな」

しかし、ステラはアレンの言葉を聞いてほっと胸を撫で下ろした。

(美味けりや、ね……)

一方、シャルは内心で溜め息を吐いていた。

「と、ところで、ステラとリオンの誕生日はいつなの？」

それを察したイリスは、少し慌てたように話題を変える。

「僕は二月の終わりです」

「私は九月の半ばになります。皆さんはいつ頃なんですか？」

音を立てずに行儀良くスープを飲んでいたアクアがそれに答える。

「イリスちゃんは八月の中旬で、シャルちゃんは新年の初日だよ」

「へえ、シャル先輩って『再世の日』生まれなんですね」

リオンが珍しげな声を上げた。

『再世の日』とは、現在からおよそ一万年前、嘗て一つだった世界が、崩壊の危機を免れる為に三つに分かれた日の事を指す。

他の種族と比べて遥かに寿命の短い人間は、それまで続いていた

長い戦争の終結から再び始った平和な世界と、『人』という種族そのものの誕生を祝して、この日から一年の暦を数えていた。

「私もだけど、アクアとノアも珍しいわよ？なんせ十二月二十五日だもの」

「『終焉の日』ですか……？」

肩を竦めるシャルの言葉に今度はステラが驚いた。

『終焉の日』は先に述べた戦争、『魔神戦争』と呼ばれる総ての種族の存亡を賭けた戦いが終結した日であり、聖魔双方の神々はこの日より『再世の日』までの七日間を以て、世界を崩壊から救うべく三界に分断したとされる。

『再世の日』に誕生したとされる人類がそれ以前の出来事をどのようにして知ったのかは定かでは無いが、遙か一万年の昔から現在もこの世界に生き続ける種族達が遺した文献なども存在するという。こういった史実は神話や昔話のように語り継がれ、子供達は夜寝る前に布団の中で子守唄代わりに耳にするのだった。

「何ていうか、すごいですね。ただでさえ珍しいのに三人もいるなんて。まあ何となく納得出来ますけど」

現在この二日は人間の間では祝日として扱われ何かしらの祝い事が行われているのだが、不思議な事にこのどちらかに生まれる者は殆どおらず、稀に生まれた者は必ず強力な加護を授かって生まれるのだった。

「そういえばアクア先輩とノア先輩はファミリーネームも同じですが、御親戚か何かなんですか？」

ステラは同じ繋がりですら今まで気になっていた二人の関係について尋ねた。

「あー、それはだな……」

アレンは何処と無く気不味そうに二人に視線を送る。

それを受けて、アクアも困ったように隣にいるノアを窺う。

「……俺達は孤児だ」

仕方が無いとも言いたげな声色で口を開いた。

「俺達は入った時期こそ違えどガーデンに幾つか在る孤児院の一つで育った。孤児院は学園長の名で建てられているので俺達もその名を貰っている」

ノアはそこまで喋ると、もう話す事は無いと言わんばかりに口を閉ざした。

アクアはいつも首から提げている銀色のペンダントを手に取る。

「ノア君の誕生日は初めて孤児院に来た日なんだけど、その日が偶々わたしの誕生日だったの。だから、ノア君は『終焉の日』生まれつつわけじゃないよ」

「……その、すみませんでした……」

ステラは立ち入った事を尋ねてしまつて、気不味そうに謝罪した。ノアは短く息を吐いて首を横に振る。

「気にするな。どうせ何時かは知る事だ」

「それに、わたしはその事が嫌なわけじゃないよ？だって、こうしてみんなと出会えたもの」

アクアは柔らかく微笑んでステラを見つめる。いつもよりもさらに優しく見えるのは、恐らくステラの気の所為では無いだろう。

そのおかげでステラの気持ちは少し軽くなったが、この雰囲気はどうしたものかと全員が思索しているところに、

ピンポン

先程も聞いたオーソドックスな呼び出し音が鳴り響いた。

「はい！……見てくるね？」

「ああ」

イリスはこれ幸いとばかりに玄関に向かった。

「誰だろ、こんな時間に？」

特に来客の予定があつた訳でも無いので、不思議に思いながら玄関の扉を開けた。

「……………んばんわ……………」

扉の先には、私服であるう黒を基調としたゴシック風のデザインに白いフリルやレースの付いた服と、同じデザインのカチューシャ
所謂ゴスロリと呼ばれる服装に身を包んだアリスが、常とは違
い主であり幼馴染みでもあるアルベルトを連れず（普段は連れ回さ
れる側だが）、一人で手から白い紙袋をぶら下げていた。

「……………アリス？どうしたの、こんな時間に？」

予想だにしていなかった客人に、イリスは首を傾げた。

「……………レン……………る……………？」

話し慣れていないからか、アリスは黒い前髪に隠された瞳を右往
左往させながら呟いた。

「？……………あつ、お兄ちゃん？ちよつと待っててね？」

イリスは断片的にしか聞き取れなかった呟きに一瞬眉を寄せるが、
すぐに誰に会いに来たのかを察してパタパタとリビングに駆けてい
った。

「お兄ちゃん、アリスが……………」

「へっ？何だろ……………？」

アレンはきよとんとしながらもすぐに玄関に向かった。

「よう、アリス。どうかしたのか？」

「アレン……………」

アレンを見てほつとしたのか、アリスの表情は心無しか柔らかく
なっていた。

「……………これ……………」

アリスはそれだけ言うと、持っていた白い紙袋をアレンに差し出
した。

「これは？」

アレンは首を傾げながらそれを受け取った。

「……………アップルパイ……………焼いたの……………アレン、お誕生日だから……………」
ゆっくりではあるがアレンとは視線を合わせて話せるようで、身

長差から見上げる形になる為普段目を覆っている前髪が少し流れて、その奥から綺麗な灰色の瞳が覗いていた。

「そっか、ありがとな」

アレンが優しく笑ってアリスの頭を撫でると、アリスは気持ち良さ気に目を閉じる。

「……………いい……………いつものお礼……………」

「そっか。アルベルトは？」

「した……………」

どうやら寮の前で待っているらしい。

「あいつも来れば良いのに。いまみんなで飯食ってるんだけど、何なら一緒に食べてくか？」

アリスはふるふると首を振る。

「やめとく……………アルは、嫌がるから……………」

でも、と続けて、

「アップルパイの材料……………アルが、買ってくれたの……………」
嬉しそうに小さく微笑んだ。

言わんとしている事を察して、アレンはニヤツと笑う。

「じゃあ、これは二人からって事で良いか？」

アリスはこくりと頷いた。

「……………そろそろ……………行く……………アル、待ってるから」

「ああ。サンキューって言っといってくれ」

アリスは再び頷くとくるりと背を向けて歩き出すが、不意に何かを思い出したかのように立ち止まって振り返った。

「ん？どした？」

首を傾げるアレンに、振り返った際にふわりと揺れた黒い髪とは対照的な顔を緩ませた。

「……………お誕生日、おめでとう」

どこかデジャヴを引き起こさせる言葉と表情に、アレンはやはり柔らかく微笑み返す。

「わざわざありがとな。気を付けて」

「うん……おやすみなさい……」

ゆつくりと歩いていく少女が角に消えるまで見送って、アレンは中に待たせているであろう客人達のところへ戻っていった。

「あつ、戻ってきた。アリス、何だったの？」

中に戻ると、自分が作った料理を食器に山盛りになっているイリスが目に入った。

「……アップルパイ、焼いて持ってきてくれたんだよ。誕生日プレゼントだったさ」

パーティーが始まる前は正直七人前には作り過ぎだろうと思っていたが、この光景を見る限りそれは杞憂に終わりそうだった。

「へえ〜。あつ、そうだった」

アレンのそんな考えを余所に、イリスは思い出したかのように手を叩いた。

「ちょうどいいから、いまからプレゼントタイムっ！」

突然そう言っただち上がると、イリスは部屋の隅に置いていた袋から薄めの大きな箱を取り出した。

「はいっ、お兄ちゃん。わたしからの誕生日プレゼントっ」

イリスはニッコリ笑いながらその箱を差し出した。

「おっ、開けても良いか？」

「うんっ」

アレンが早速受け取った箱を開けると、

「おおっ！」

中には紺色の半袖シャツと長い丈のパンツが入っていた。

「お兄ちゃんがいま使ってる練習着もう結構ボロボロだったから、新しいのを作ったの」

「サンキュー！ちょうどそろそろ買い替えようと思ってたんだよ！」

「良かったあ」

大喜びしているアレンを見てイリスはへにやっと微笑む。

「アレン」

と不意に呼び掛けたノアが、包装紙に包まれた少し小さめの箱を差し出した。

「剣の手入れ用品だ。切らしていただろう？」

「ああ。サンキュー」

なんとも実用的だが、実にノアらしいプレゼントだと思ってそれを受け取る。

「僕のはそんなに良い物じゃないですけど……」

控えめな言葉と共に、リオンが拳大程の大きさの箱を差し出した。アレンがそれを開けると、樹皮で出来た紐の先端に綺麗な新緑色の小さな鉱石が嵌め込まれたネックレスが入っていた。

「風の御守りです。首から提げるタイプなんで、邪魔にもならないと思いますよ」

「ありがとな」

アレンはニカツと笑ってお礼を言った。

「じゃあ、わたしからはこれ」

次に、アクアが柔らかい微笑みを浮かべながら底の厚い大きな箱を持ってきた。

「サンキュー……って重いな。何が入って……」

箱を開けたアレンは、不意に言葉を詰まらせた。

「……ノア、今年は付いていかなかったのか……？」

「……嫌に重いとは思ったのだが……済まん」

アクアに聞こえないように尋ねると、ノアは申し訳無さそうに溜め息を吐いた。

「……？二人ともどうしたんです うっ」

リオンが額に手を当てている二人に首を傾げながら箱を覗くと、中から儼つい筋トレ道具達が天を仰いでいた。

「ちよつと前に商業区に行った時に、新しいお店が出来たの。アレン君が持つてる物もだいぶ古くなってると思って」

顔を引き攣るリオンの後ろで、アクアはにっこり微笑んだ。

「イ、イリス先輩……？」

リオンはさっぱり飲み込めない状況の説明を求めた。

「……アクアってね、変なところで天然なの。最初なんか数学の問題集だったし……」

溜め息を吐くイリスの脳裏に、無邪気な笑顔に嫌とも言えず、さらに解いたかどうかの確認までされるので泣く泣く数字を書き込んでいく幼いアレンの姿が浮かび上がった。

「あ、ありがとな、アクア？」

さすがに折角のプレゼントを断るわけにもいかず、アレンは苦笑いを浮かべながらお礼を言った。

(っっていうか、これは違うんじゃない？)

この中で(自分を含めて)最もまともな人物だと思っていたアクアのプレゼントに、リオンも苦笑いを隠せなかった。

「あっ、あの！アレン先輩！」

そこに、不意に弾けるような声が飛び込んできた。全員が声のした方を向くと、ステラが少し幼い端正な顔を真っ赤にしながら淡いピンク色の紙袋を抱えていた。

「こ、こここれ！どどどどどぞぞ！」

余程緊張しているのか、声を吃りながらそれを突き出した。

「おっ、サンキュー！開けても良いか？」

受け取ったアレンは嬉しそうに笑い掛けた。

「……………！」

それを見たステラは、既に真っ赤な顔からさらに火を噴いた。

「そ、その……わ、私、こういったものは初めてで、どんな物を差し上げれば良いのか解らなかったので……」

期待に胸を膨らませながら袋の中から箱を取り出すアレンの前で、ステラは落ち着かない様子で視線をあちこちに移しながら、ウェーブの掛かった濃い茶髪をくるくると細い人差し指に巻き付ける。

「……………おおっ！」

「い、以前カフェに行った時に、アレン先輩が頼んでいるのを思い出したので、作ってみました……」

アレンが箱を開けると、中から真っ白なクリームに覆われた小さな円いケーキが現れた。クリームの上には真っ赤なイチゴが幾つかちよこんと乗っていて、中央には白い文字で『ハッピーバースデー』と書かれたチョコのプレートが置かれていた

「すげえー！ありがとうな、ステラ！」

「いつ、いえ……！」

アレンの屈託の無い笑顔に、ステラは恥ずかしそうに顔を俯かせた。

「ねっ？だから大丈夫だって言っただろ？」

小声で話すリオンにコクコクと頷くステラの表情からは、安堵と至福の笑みが零れていた。

「……………」

それを横目で眺めていたシャルの耳に、

「じゃあ最後はシャルだねっ」

「っ！」

突然イリスの何かを含んだような声が聞こえてきた。見ると、何やら満面の笑みを浮かべている。

「おっ、シャルは何をくれるんだ？」

「えっ？あっ、その……………」

シャルはそれをじとつと睨むが、アレンが声を掛けてきたので慌てて視線をそちらに向けた。

「えっ、と…………その…………じ、実はね……………」

「ん？」

心中でわざとらしい笑みを向けているイリスを呪いながらどうしたものかと視線を右往左往させるが、このままでは埒が明かない事は解っているのだ、

「実は、その……………」

まるで突然砂漠にでも迷い出たかのように口の中が急速に渴いていくのを感じながら、意を決してようやく言葉を捻り出す。

「……ち、注文してたやつがまだ来てなくて、悪いけどまた今度渡すわ」

シャルは申し訳無さそうに小さく笑った。

「何だ、じゃあしょうがないな」

アレンは少し残念そうな顔をする。

「ま、まあ良いじゃない。どうせファンクラブの子達からも貰ってるんでしょ？」

シャルはそう言つと、気付かれない程度に足早にその場を離れようとする。

「シャル……？」

「ごめんなさい、ちよつと御手洗いに行つてくるわ」

心配そうに声を掛けたイリスが見た表情は笑顔だったが、いつもの力強いものとは程遠かった。

その後もイリスの料理に舌鼓を打ちながら笑い話をしたり来週のクエストの確認をして楽しい一時を過ごした七人は、さすがに夜も更けてきたという事で、一通り部屋を片付けて解散した。

別の寮に住んでいる四人を先に帰らせて残った洗い物や部屋の掃除をしていたアレン達も、先程全てやり終えて各々の部屋に戻っていた。

「……………」

薄いピンクの寝間着に着替えたシャルは、リビングのテーブルに腰掛けながら何処とも無くぼーっと視線を漂わせていた。入浴後の為普段着けている髪留めを外して、濡れたままの長く鮮やかな緋色の髪を腰まで降ろしている。

「……………はあ」

既に何度目かになる溜め息を吐くが、部屋の空気を重くするだけで一向に身体の中に溜まっているモヤモヤを晴らしてはくれなかった。

明日も勿論授業を控えている為そろそろ髪を乾かしてベッドに潜り込まなければならぬのだが、如何せんその気が起きず、気が付けば何をするでも無く椅子に座って半刻が過ぎようとしていた。

（……………何やってんのかしら、私）

そんな事を考えながら髪と同じ緋色の瞳をキッチンにある冷蔵庫に向け、その中で出番を貰えず未だに待機し続けているモノを思い浮かべると、またしても溜め息が口から漏れてしまった。

（意気地無し……………）

三つも年下の少女が勇気を振り絞ったというのに、肝心な時に臆病風に首を絞められて全てをふいにしてしまった自分があまりにも情けなかった。

（こんな筈じゃ、無かったのにな……………）

何よりも、この日の為に色々と協力してくれた二人の友人達に対して会わせる顔が、どこを探しても見当たらない。見当たる筈も無かった。

（あれ、どうしよう……………）

再び溜め息を吐いて、その処理に悩む。

思い切って渡せば良いのだが今更過ぎてそれも出来ず、かといって折角作った物を捨てるのは勿体無い。

しかし日保ちする物では無いので早めに何とかしなければならぬ事を考えると、残った選択肢は限られてくる。

（……………いっその事、食べちゃおうかしら……………？）

半ばヤケ食いのようになってしまつかも知れないが、それが現状では最善に近いのかも知れない。勿論逡巡せずにとつと渡せばそれで万事解決なのだが。

結局その方法しか思い浮かばず、冷蔵庫から少し大きな白い箱をテーブルに運ぶ。

箱を開けると、中からステラが渡した物よりも一回り大きなイチゴのショートケーキが現れた。

(……改めて見ると、ちよつと歪ね……もつと綺麗に作れなかったのかしら?)

先程見た茶髪の少女のケーキは傍から見ても綺麗な円形をしていて、装飾も完璧だった。食べてはいないが味の方も言わずもがなである。

それと比べると、やはり自分のケーキは一步も二歩も劣って見える。

「……っていうか、何で選りにも選って被るのよ。まあ、悪気は無いらんぞうけど……」

「何がだ？」

「っ!?!」

心臓が口から飛び出る。

そんな表現がシャルの頭を過ぎった。

思わず胸を押さえながら後ろを振り返ると、半袖のシャツと短パンに着替えたアレンが首を傾げていた。

「な、何勝手に入ってるのよ!?!」

「いや、何回呼んでも出なかつたから……おっ?」

後頭部を掻くアレンの金色の瞳が、テーブルに置かれたケーキを捉えた。

「あつ、ちよつ、こ、これは……!」

それに気付いたシャルは顔を赤くしながら慌ててケーキを背後に隠した。

「何だよ、やっぱりあるじゃん、プレゼント」

「えっ？」

しかし、アレンの言葉に思わずそんな声を上げた。

「……………し、知ってた、の……………？」

「んー、なんとなくな。お前ってほとんど嘔吐かないけど、吐く時は絶対俺の顔見ずに笑うし」

「うそっ……………!？」

よもや自分にそんな癖があったとは思ってもみなかった。

「ほんとだつて。何年幼馴染やつてると思ってるんだよ。なあ、食つても良いか？」

「えっ?あつ、ちよつ……………」

言うが早い、素早くケーキを奪ったアレンは、シャルの返事を待たずに付属されていたフォークで一欠片だけ口に運んだ。

もぐもぐと味わって飲み込んだアレンから一言。

「……………あまつ」

「うっ、うるさいわね!ちよつとお砂糖を多く入れ過ぎちゃったのよー!」

途端にシャルは顔から火を噴いて声を荒げた。

「ふ、ふんっ!ステラが作ったやつはさぞ美味しかったんでしょっかね?」

「ああ、すげー美味かった」

「……………っ!」

皮肉を籠めた台詞をあつさり肯定されて、思わずムツとする。
が、

「でも、シャルが作った料理の中じゃ、これが一番美味しい」

「えっ……………」

顔から爆発音が聞こえた。ような気がした。

「……………ば、ばか……………!褒めてないわよ、それ……………!？」

少し拗ねたような口調だったが、嬉しさが端から滲み出ていた。

顔を赤くしたまま隣に腰掛けて横目で窺っていると、アレンはそのままケーキを勢い良く掻き込んでいった。

先程夕食の後にステラのケーキを食べ、恐らくアリスのアップルパイも食べただろうに、その勢いは一向に衰えない。

やがて半分程が食器から消えた時、再びシャルが口を開いた。

「……………ねえ、アレン？」

まだ頬が熱いのが解るので、視線は上に向ける。

「んー？」

口にケーキを含んだまま返事をする幼馴染みに、今度こそ素直に想いを伝える為に口を開く。

「……………お誕生日、おめでとう」

その口調は、柔らかかった。

第六話：『旅に思わぬ出来事は付き物』

『一日目・早朝』

まだ街を覆い隠す霧が立ち籠める時刻に、『ガーデン学びの庭』南部にある巨大な鉄の門が、ゆっくりと重々しい音を立てて左右に開いた。

「やっと来たみたいね。ふあ……」

その手前の広場で赤いリュックを背負った少女が眠たげに欠伸びをし、その際に一つに纏められた緋色の髪が重たげに揺れた。

「さすがに、この時間は眠たいですね……っ」

同様にベージュ色のリュックを背負った濃い茶髪の少女はそれを見て貰い欠伸びをし、髪と同じ色の瞳から涙を浮かべた。

「シャルは朝弱いからね」

対照的に、長い銀髪の少女は朗らかな笑顔を浮かべていた。

「イリス先輩は平気なんですかあ？」

はしたないと思いつつも欠伸びが止まらない為、ステラは口に手をやりながら眠たげな声を出した。

「わたしはいつもこのくらいに起きてるから」

「こんなに朝早くからですか？」

「学園の準備とか朝ごはんの支度とか、色々やることがあるから。でもお兄ちゃんも鍛錬があるからわかるけど、リオンもなんだか慣れてるよね？」

二人は視線を広場の中央にある噴水に腰掛けている緑髪の少年に向ける。

「僕は朝の散歩が日課なんで」

相変わらず藍色のマフラーをぐるぐる巻きにしている少年は弛んだ表情を見せるが、眠気は完全に消え去っているようだった。

「それにしても、ノア先輩とアクア先輩、遅いですね？どうされたんでしょうか？」

意外な二人が遅刻しているの、ステラは少し心配げに寮の方角を見る。

「まあ、あつちはアクアがいるからなあ」

身体を捻ったり伸ばしたりして体操をしていた金髪の少年は、右手を腰に当てて短く息を吐いた。

「アクア先輩がどうかしたんですか？」

リオンはその言葉に首を傾げた。

「アクアは私以上に朝に弱いだよ。ふあ……っ」

シャルは再び大きな欠伸をして目を擦る。

「ひどい時はどんなに起こしても起きないしね……って噂をすれば」
イリスの銀色の瞳が、霧の中に現れた一つの人影を捉えた。

片手に二人分の荷物を持った漆黒の少年が、何かを背負いながらこちらに近付いてくる。特に歩調を緩めてはいないのに、どうやってか足音は聞こえなかった。

「よう、ノア。遅かったな」

それを確認したアレンが手を挙げて呼び掛ける。

「……………済まん」

ノアは無表情のまま軽く謝罪した。

「おはようございます、ノア先輩。……あの、アクア先輩は……？」

優しく微笑みながらもまだ眠たげな声色で挨拶したステラは、一緒にやって来る筈の少女の姿を探す。

「……………アクアなら此処だ」

ノアは自分の背負っているものに視線だけを向ける。

「あつ」

「すう……………すう……………」

ステラがそこを覗くと、紺青色の髪の少女がすやすやと気持ち良さそうに寝息を立てていた。

「何度起こしても起きなかったのな。仕方が無いから背負ってき

た」

ノアはズレ落ちそうになる少女に空いている手をやって、体勢を直しながら説明する。

「ん……………」

その際にアクアが少し身動いで短く息を漏らし、再び寝息を立てた。

(か、かわいい……………！)

あまりにも無邪気な寝顔に、ステラは思わず胸を締め付けられてしまった。

「うーん、今日はハズレかあ……………」

アレンは後頭部を掻いてやれやれと息を吐いた。

「良いじゃない、今日はお昼まで移動だけなんだし。向こうに着く頃にふあ……………っ、起きるわよ」

シャルは再び欠伸をしながら、重たい眼に細い人差し指を擦り付ける。

「シャル先輩、ホントに眠たそうですね」

「んー」

苦笑するリオンには生返事が返ってきた。

「仕方ないよ、普段こんな時間に起きないし。それより、こっちも着いたみたいだよ」

イリスが同じような表情をしながら門に続く道に視線を向けると、何かの生き物の足音と、車輪が地面を滑る音が聞こえてきた。

「わあ……………っ！」

ステラはそこから現れたモノを見て目を輝かせた。

霧の中から現れたのは、体長三メートルを優に越える四足歩行のドラゴンだった。

筋骨隆々の逞しい肉体に鋭く尖った爪と牙を持ち、鼻の頭に一本、頭部に二本の長い角を有している。翼は無く背には鶏冠トカが付いていて、蒼い鱗は鮮やかに輝き、吊り上がった目の中から同色の瞳が覗いていた。

身体には頑丈そうなロープが括り付けられており、その先には車輪付きの大きな四角い箱が繋がれていた。表面は薄茶色で、左右には長方形の窓が備わっている。

「どう、どう！よし、良い子だ」

箱とドラゴンの間の座席に座っていた御者が、ドラゴンの歩みを止めて飛び降りた。

「待たせたな。準備が出来ていたら早速出発しよう」

金髪碧眼の中年御者は日差しを避ける為の茶色い鍔付き帽子を脱いで会釈すると、アレン達を見渡して箱の扉を開いた。

「よし、じゃあ乗るか……ってステラ、どうかしたか？」

箱とドラゴンに視線が釘付けになっているステラは、瞳どころか顔全体を爛々と輝かせていた。

「私、ランドハウスは初めてなんです！」

子供のように興奮している様子に、御者が笑い掛ける。

「じゃあ嬢ちゃんもコイツも初めてか」

御者は大人しく待機しているドラゴンの身体に手を置いた。

「コイツはクルスドラゴンって言ってな、見ての通りドラゴンの亜種だ。竜種は幾つかいるが、その中でも脚力に特化してて人懐っこいんで、大きめのランドハウスは大体コイツらが運んでいる。もちろん、サイズ毎に色々な生き物がいるがな」

ランドハウスとは所謂馬車のような物で、通常の馬車が街中を走るのに対し、街と街などの長距離移動を中心に活躍している。

道中の魔物対策として、長期間寝泊まりする為の簡易式ベッドが付いた大きな箱を人が飼育した魔法生物が馬車馬代わりに運んでおり、地続きであれば大陸中を駆け回る事が出来るので、文明が発展途上のこの世界ではかなり重用されている。

「綺麗な鱗ですね……ですが、ドラゴンは滅多に人前に現れないのでは無いのですか？」

ステラが手入れの行き届いた綺麗な蒼い鱗に恐る恐る触れると、クルスドラゴンは気持ち良さそうに声を唸らせた。

「そりゃドラゴンの中でも原種って呼ばれてる奴らの事だな。コイツらみたいな亜種は結構いるんだよ。まあ、他の生き物に比べて希少な事に間違いは無いがな。……さて、そろそろ乗らないと、お仲間が待ちくたびれてるぞ?」

「あつ……!」

いつの間にか他の面々はランドハウスに乗り込んでいた。

「す、すみません、お待たせしてしまつ……て……」

慌てて乗り込んだステラは、中の様子に呆気にとられた。

箱の中は外見よりも広く、少しだけ幅広の背もたれ付きの座席が四つずつ、細長いテーブルを挟んで向かい合っていた。そのうちの一つは背もたれが後ろに倒れていて、アクアがすやすやと眠っている。

「ステラ? 驚くのはいいんだけど、早く座らないと出発出来ないよ?」

「あつ、はい……!」

一番手前に座っていたイリスの言葉にはっとして、とりあえず向かいの席に着く。その途端、若干の震動と共に、ゆっくりと車輪の回る音が聞こえてきた。

「しゅっぱーつ!」

イリスが楽しそうに右手の拳を突き上げると、ランドハウスは巨大な門を潜り抜けて霧の中へと消えていった……

『一日目・午前』

「中はこういった感じになっているんですね。見た目よりも広くてびっくりしました」

興味深々に箱の中を観察していたステラは、感嘆の息を漏らした。先程まで身体を支配していた睡魔はすっかり居なくなっているようだ。

「空間拡張系の技術が使われてるんだよ。ほら、わたしたちの荷物にも使われてるやつ」

「便利だよなあー。おかげでリュック一つだけで済むし」

アレンは頭の後ろで両手を組みながら呑気に笑った。

現代の魔法科学技術は、大陸分断直後と比べると格段に発達していた。

魔石等の自然物と機械を利用する事によって遠方との会話や食料の保存ができ、今回のようにある一定の空間を拡張する事で大量の荷物を一つのリュックに纏めたり、通常よりも多くの人や物を持ち物で運ぶ事が出来るのだった。

「然し、地の大陸出身のステラならこの程度は見慣れているのでは無いのか？向こうの魔法科学技術は五大陸の中でも群を抜いていると聞くが？」

首を僅かに傾げるノアにステラは頷く。

「確かに、あちらの技術は魔法も機械も他より遙かに進んでいますよ。首都には少人数用の乗り物が幾つもあつて、街中の移動は基本的にそれを利用しますし。ですが、小型化が進んでいるのでこんなに大きな乗り物は無いんです」

「馬車とは違うの？」

不思議そうな顔をするイリスを見て、ステラは少し困ったような表情になる。

「えっと、例えば良いのでしょうか？簡単に言うと、馬のいない小さな馬車……のような物で、備わっている魔石に籠められた魔力で動くんですよ。ですから、生き物が牽いて走るのも新鮮なんです」

「へえー、なんか面白そう！」

キラキラと瞳を輝かせるイリスが新しい玩具を発見した幼い子供

にしか見えなかった事は、誰も口にしなかった。

「それだけじゃ無いわよ。あっちじゃ転移装置を街中の移動に使うんだから。しかもタダで」

そこに、シャルが眠たげな声を放り投げた。

「贅沢だなあ。こっちじゃあれ一回使うのにシャルの一月の小遣いほとんど使うのに」

アレンは肘を突いて呆れるが、

「むしろ、一月分で足りるシャル先輩のお小遣いの方が気になるんですけど……」

リオンがその言葉に少し顔を引き攣らせた。

「別に私はそんなに要らないんだけど、うちの祖父がうるさくて何回言っても毎月送ってくるのよ。使い道なんて無いからほとんど貯金に回してるわ」

シャルは本当に悩ましげに頭を振った。

「まあその話は置いといて、そろそろ今回の予定を確認しないか？」

「そうね。とつとと終わらせて寝たいし」

アレンの提案に頷いたシャルは、リュックから五つの大陸が描かれた地図を取り出してテーブルに広げた。

「まずは火の大陸に渡らなきゃいけないから、南西にある王都から船に乗りましょう。ここからだと昼頃には着く予定よ」

まず地図上にある、ガーデンから南西の位置に描かれた街の印を指差し、

「それから昼食と休憩を挟んだら定期便に乗って火の大陸に移動、明後日の夕方には向こうの港街に着くわ。本当ならこっちでクエストの受注確認をしなきゃいけないんだけど、それは昨日のうちに済ませておいたからそのまま向こうのギルドで許可証の発行。その日はそこで一泊しましょう」

そこからスツと指を南に移動させる。

「次の日は普段通りの時間に起きて、いよいよクエスト開始よ。って言うっても、そこから山の麓まで移動しなきゃいけないけど」

さらに移動させた先には、広大な山脈が広がっていた。

「それから『紅蓮華』を採集してギルドに届けたらクエスト終了。帰り道は来た道に戻るだけ。何か質問はある？」

一通り説明を終えると、シャルは他を見渡した。

「うーん、クエストを受けるのっている面倒なんですね。受注やら許可やら」

言いながら、リオンはボサボサの頭に手をやる。

「移動も多くて、何だかすごく大変そうです……」

その隣で、ステラが憂鬱そうに溜め息を吐いた。

「個人で受ける時はこんなに手間取らないんだけどな。今回はガーデンからだし、別の大陸のクエストだから余計手続きが要るんだよ」

「移動は確かに大変だけど、向こうには温泉もあるから頑張りましょう、ね？」

アレンとシャルは早速参っている二人に苦笑した。

「そう言えば、アリスたちはもう出発したのかな？ 広場にはいなかったけど……」

ふとイリスが思い出したように言った。

「ああ、アルベルトたちなら転移装置で直接向こうに行くから、明日出発って言ってたぞ？」

「まったく、新生クエストの意味解ってんのかしら？」

シャルはうざったい金髪少年の薄ら笑いを思い浮かべながら鼻を鳴らした。

「新生クエストの意味、ですか？」

ステラは頭に疑問符を浮かべる。

「教官も言ってたけど、今回は新生にクエストのやり方を教えるのが目的なんだよ」

「なのに、高くてほとんどの生徒が使えない転移装置を行きしなから使うなんて、何考えてんのかしら？」

それに答えたアレンに続いて、シャルはやれやれと頭を振った。

「移動に手間取らないから、効率が良いのは確かなんだけどね」

イリスは苦笑しながらリュックの口を開けると、そこから少し大きめの包みを取り出した。

「何それ？」

「朝ごはん。はむっ」

包みから取り出した大きなおにぎりにパクリとかじり付くと、幸せそうに顔を綻ばせた。

「はあ、私寝るわね。着いたら起こしてちょうだい」

呆れたように息を吐いたシャルは、背もたれを倒して横になった。

「えっ？あ、あのっ……」

唐突過ぎて戸惑うステラが声を掛けた時には、シャルは既に小さな寝息を立てていた。

「……寝ちゃいましたね」

文字通り瞬く間に眠りに就いてしまったシャルに、リオンは呆然とする。

「まあ良いんじゃないか？王都に着くまでやることないし。二人も眠かったら寝てても良いぞ？」

苦笑するアレンに、

「はい、お兄ちゃんに分」

「おっ、サンキュー」

イリスが別の包みからおにぎりを差し出した。

二人してモグモグとおにぎりを頬張る姿に、マイペースとはこの兄妹の事を言うのかと、後輩達は内心で溜め息を吐いた。

「……ノア先輩、先程から何の本を読んでるんですか？」

ふと視界の端に例の如く沈黙を続ける少年の姿を捉えたステラが、話題転換も兼ねて尋ねた。

「……………」

問われたノアは、返事をする代わりに表紙を見せる。

『魔法科学的視点から見詰める古代史』と書かれた本は、態々（わざわざ）持ち運ぶには不便な分厚さを誇っていた。

「へえ、なんか面白そうですね。どんな内容なんですか？」

少し興味が沸いたのか、リオンもそこに加わる。

「……内容自体は題名通り、現在確認されている古代の魔法科学技術に焦点を当て、其処から様々な古代史を見詰めるという物だ。だが特に気になったのは、『大陸分断の真相究明に関する仮説』という、現在も続けられている五大大陸分断に関する研究論文だな。この本では、現在最も有力とされている『魔神戦争』後の三界分断に因る大陸への負担という仮説に付け加え、更なる可能性が書かれている」

ノアは視線を本に落としたまま、淡々と語り始めた。

「この著者の考えでは、大陸が五つに分かれる以前に大規模な戦争が起こり、その時に発生した何らかの魔力的現象が、三界分断時の負担を加速させた可能性があるとしている」

「つまり、故意であれ過失であれ、人為的に起こったと？」

ノアはステラの言葉にくくりと首を縦に振った。

「でもさ、あくまで仮説なんだから、それ？」

二つ目のおにぎりを手に、アレンが口を挟む。

「確かにそうだが、この著者は地の大陸でも名の知れた魔法科学者でもある。他の者では解明出来ない事象も、彼ならば解き明かせるのかも知れん」

「地の大陸の？あの、もしかしてその方は……」

その人物に心当たりがあるのか、ステラは確かめるように視線を向ける。

「ああ、エインズリー博士だ」

「やはりそうでしたか……」

「……誰？」

その名を聞いて何かに納得したステラとは対照的に、アレンは首を傾げる。

「ここ二、三年でいくつもの『ロストスベル失われし魔法』を解読して、画期的な魔法科学技術を発明した天才魔法科学者です」

「最も代表的な発明として、セフィロトの森に使われているものと

同程度の質の結界装置が知られている」

「へえ、すごいんだな」

あの結界の凄さは身を以て知っていた。

何せ六年前に結界の内側であれだけの騒ぎを起こしたというのに、外には全く知られていなかったのだ。そのおかげで面倒な事にはならず済んだのだが。

「でももしそれが本当なら、今までの歴史が変わるぐらいの大発見じゃないですか。その魔力的現象っていうのが何なのかは書いてるんですか？」

「いや、流石に其処までは書かれていない。それが仮定の域を出ない理由だからな」

珍しく興味津津なりオンとは対照的に、

「まあそれが本当だったとしても、俺たちには関係ないだろ」

アレンはこれといって関心が沸かないようだった。

「……お前はもう少し歴史に興味を持つべきだと思うがな」

ノアは無表情のまま小さく溜め息を吐いた。

「んなこと言っただって、今さらそんな昔のことを知らなくても世界が終わるわけじゃないだろ？また大陸が分かれるってんなら別だけども」

「お兄ちゃんからしてみれば、歴史の年表が変わってまた覚えなきゃいけない方が重要だもんね？」

「うっ、バレたか……」

もっともらしい事を言いはしたが、その建前は見事に見破られた。

「いやあ、暗記系は感覚じゃどうにもならないから苦手なんだよ」

「っていうか、他の科目は感覚でどうにかなってるんですね……」
「いったい第何感が発達したらそんな特技が身に付くのか、聞いたところで答えは出ないのだろう。」

アレンは苦笑いをしながら後頭部に手をやるが、

「……まあ、俺達が此処で考えても如何にもならないという点は認めるが、お前は抑今の年表を覚えているのか？」

その言葉にギクリと表情が固まった。

『一日目・昼』

七人を乗せたランドハウスは、昼が少し過ぎた頃に王都に到着した。

「ん〜……っ、やっと着いたわね」

ランドハウスから降りたシャルは、大きく伸びをしながら空を仰いだ。

「おはよう、シャルちゃん」

「あらアクア、おそよう。良く眠れた？」

後ろから聞こえてきた声に、少しだけ皮肉を込めて応える。

「うん、お陰様で。まだちょっと眠たいけど」

アクアは常の通りにどんな凶悪犯をも一撃で改心させ得る微笑みを浮かべていたが、言葉通りまだどこか眠たげだった。

「ホント、たまにどんだけ寝るんだってぐらい寝るよな、アクアって」

「でもほら、寝る子は育つって言うし」

呆れた声を出しながら降りてきたアレンに、イリスが苦笑しながら続いた。

「じゃあイリスはアクア以上に寝ないとダメだな。いっぱい食べてるのにちつとも背びないし」

「むう、またそういうこと言う！ちゃんと伸びてるもん！去年だつて一センチ伸びたし！」

アレンの意地悪い声にイリスは頬を膨らませる。

「まったく、あんたは少しデリカシーってもんを知らない。大体イリスはこのちつ

こいのが可愛いんじゃない」

「シャル、それフォローになってない……」

腰に手を当てる呆れるシャルに、イリスはガクツと項垂れた。

「ま、まあまあ。身長なんてすぐに伸びますから、元気を出してください、イリス先輩」

「ステラ、君が言ったら逆効果だと思っただけ」

「えっ、どうしてですか？」

「……いや、何でもないよ。気にしないで」

小首を傾げるステラを見上げて、リオンは溜め息を吐いた。

「……何でも良いがそろそろ出発しないか？此処に留まると如何にも目立つ」

ノアが周囲を見渡してぼそりと呟いた。

アレン達は王都を囲む高い防壁の東側の門を越えたところにある小さな広場にいるのだが、ランドハウスとクルスドラゴンが昼間の往来を行き交う人々の視線を集めていた。

「そうだな。じゃあおっちゃん、ありがとう」

「おう。またの御利用、心より御待ちしております」

鍔付き帽子を脱いで紳士っぽくお辞儀をした御者は、再び座席に飛び乗って手綱を握る。

「はっ！」

短い掛け声と共に、ランドハウスは街の出口を目指してゆつくりと進み始めた。

「またなー!!」

アレンはそれを見送りながら陽気に手を振った。

「さーて、そんなじゃあ飯にしますかー」

「どこで食べましょうか？」

「港から近いところにしましょう。着いてきて」

シャルはそう言うのと街の中心部に向かって歩き出した。

「シャル先輩は王都に御詳しいんですか？」

迷いも無くスイスイと進んでいくシャルの隣に並んだステラは、高めの身長の自分よりもさらに背の高い少女を見上げる。

「私は実家がこつちにあるから、休暇とかに帰って来てるのよ」

『火の一族』と称されるシャルの実家、イグニス家は本来これから向かう火の大陸出身の一族のだが、何百年も昔にこの大陸へと本家を移していた。

世に名高い名家の娘ともなれば休暇中は貴族間の様々な催しに参加せねばならず、シャルの父親が仕事の都合で本家とは別に王都に居を構えていたので、その際シャルはそこで過ごすようにしていた。ちなみにガーデンにいたシャルの母親であるフェルナも、シャルが寮に入ったのを機に家だけを残してそこに移り住んでいる。

「ステラはこつちの王都は初めてなの？」

言いながら、イリスは歩調を速める事で短い歩幅の差を埋める。

「はい。ガーデンには転移装置を使って直接来たので」

「じゃあ、ちよつとだけ街の説明してあげるね？」

「ふふつ、お願いします」

朗らかな笑顔が可愛らしくて、ステラはにっこりと微笑み返した。「えつとね、この王都アルモニアには東側と西側、南にある港の三ヶ所に門があつて、見ての通り背の高い防壁が街の周囲と南の海の一部を囲んでるんだよ」

イリスは小さな指を三本立てる。

「街の南側は港とくつついてるから、魚介類中心に食料品店がいっぱいあるの。いま歩いてる東側は一般市街、西側は貴族街って呼ばれてるんだよ。シャルの実家はこっちだね。それから、」

一度言葉を切ると、今度は進行方向に向かってまっすぐ指を伸ばす。

「このまままっすぐ行くと中央広場で、お城は北側にあるよ。ほら」
言われた方角には、民家の屋根越しに巨大な城の一部が見えた。

「ざっくり説明するとこんな感じかな？」

「ほ、本当にざっくりですね……」

「何気に食い物のとこだけはしっかり説明してるけどな」

後ろで聞いていたアレんがやれやれと溜め息を吐くと、

「だって、ここのお魚料理ってすごく美味しいんだよ！？あれを食べないでお兄ちゃんはどこで他に何するって言うの！？」

イリスは当然とばかりに声を荒げた。

「他にやることなんかいくらでもあると思うけどな」

アレんは呆れ果てて肩を竦めた。

「言っておくけどイリス、前みたいに勝手にどっかに行かないでよ？そんなに時間がある訳じゃないんだから」

シャルの溜め息混じりの声に、イリスは頬を膨らませる。

「わかってるよお。その代わりに、クエストが終わったら向こうで美味しい物いっぱい食べようね」、ステラ？」

「私は、食べるよりもお買い物の方が……」

「じゃあお買い物もっ！あっちにしかない物とかもあるんだよ！例えばね……」

そのまま二人はまだ始まってもないクエストの後の話で盛り上がっていく。

「別に反対はしないけど、これからもクエストで結構寄る事になるから、ステラとリオンはこの街の地理もちゃんと覚えなきゃ駄目よ？」

シャルはそんな二人に若干呆れながら歩みを止めた。

「さつきイリスが説明したけど、ここが中央広場よ。この街のギルドはここにあるから覚えておいて」

中心に大きな噴水が置かれたそこは、多くの人々で賑わいを見せていた。

「で、港はこつち」

シャルは一度歩みを止めると、すぐに方向を変えて再び歩き出した。

「ってことは、あっちがシャル先輩の実家がある貴族街ですか？」

リオンは来た道の正面に見える大通りを指差した。

その先には、今まで街に並んでいた民家とは段違いに質の良い家々が建ち並んでいた。

「……まあ、そういう事ね」

それだけ言うと、シャルはそちらには見向きもせず先に進んでいった。

「……僕、なんかまずいこと言った？」

「さあ……？」

キョトンとしながら自分を指差すリオンと同じく、ステラも首を傾げるしか無かった。

『一日目・昼 その二』

しばらく歩いていくと徐々に街並みが民家から商店へと変わっていき、正面から潮の香りが混ざった風が吹いてきた。

「着いたわ。ここが港街よ」

「わあ……！」

思わずステラから感嘆の声が上がった。

中央広場も賑わっていたが、港街の賑わいは全くの別物だった。中央広場や一般市街は穏やかで落ち着きのある賑わい方だったが、こちらは喧騒と言っても良い程人々が生き生きとしていた。特に、奥に進むにつれて増えていく出店や魚屋の客引きが怒号のように飛び交っていた。

「すごいですね。おんなじ街なのに雰囲気全然違うや」

街の雰囲気の違いに、リオンも呆気に取られていた。

アクアはその様子を見てにっこり笑い掛ける。

「ここは王都でも一番活気があるの。港の近くには魚市場があつて、新鮮な魚介類がいっぱい売ってるんだよ」

「へえ〜。……あれ？」

リオンは突然周囲をキョロキョロ見渡し始めた。

「どうかしたか？」

それを不思議に思ったアレンが首を傾げた。

「……………イリス先輩は？」

「はっ!？」

バツと振り返ると、つい先程まで傍にいた筈のイリスが消えていた。

「さっきの嬢ちゃん、凄い勢いで走ってったなあ」

「いやあ、若いつてなあ良いなあ、オイ!」

不意に耳に届いた会話に、六人の間に沈黙が漂った。

「もう、言った傍から! 追い掛けるわよ!」

はっと我に帰ったシャルは、額に青筋を浮かべて人混みの中へ駆け去っていった。

「あつ、おい待てよ、シャル!」

アレン達も慌ててその後を追う。

「お、追い掛けると言つても、イリス先輩がどこに行かれたのかわかるんですか？」

ステラは人混みをすり抜けながら前方を見渡すが、イリスの姿は全く見えなかった。

「大体の見当は付くわよ！もう、肉体強化まで使ってるわね！アレン、ノア！先に行つて取っ捕まえて！」

「ったく、しゃーねーな、っと！」

「……………」

金色と漆黒の光に身を包んだ二人は、人混みを避ける為に屋根に跳び乗ってみるみる遠ざかっていった。

「で、でも、場所が分かつてるんならそんなに急がなくても良いんじゃない？」

「それじゃあ遅いのよ！」

先頭を走るシャルの顔には尋常では無い焦りが浮かんでいた。

「さつき、前のクエストでイリスちゃんが勝手にどこかに行つたって言つてたじゃない？」

走りながら喋るアクアの笑顔も、少し苦いものになっていた

「その時もこうやってみんなで探してやっと見付かつただけど…

……………イリスちゃんつてほら、良く食べるから……………」

「お店の営業を強制終了させるのは良く食べるじゃ済まないわよ」
アクアのどこまでも控え目な表現を、シャルは迷い無く打ち砕いた。

「で、ですが、イリス先輩、ちゃんとお金を持っていたんですよ？」

その言葉にシャルは一層険しい表情をする。

「そんなの途中の出店で全部消えたに決まってるじゃない」

「で、ではアレン先輩が……………」

「私が払つたわよ！金貨五枚、銀貨三十六枚、銅貨七十八枚全額！そんな大金アレンに払える訳無いじゃない！」

金貨一枚あれば大人が一月普通に暮らしてもお釣りがくるのだから、シャルが憤るのも無理は無かった。ちなみに銅貨百枚で銀貨一枚、銀貨百枚で金貨一枚となる。

「ホントに今度こそとつちめないと、私の財布が持たないわ！」

「……………って、貯金してるって言つてませんか？」

他人の食費で自分の財布が軽くなるのは確かに嫌だが、毎月祖父から送られてくる大金を全て貯金に回しているのならそう簡単には無くならないだろう。

しかし、シャルはその一言に首だけ振り返ってキツと睨み付ける。「それとこれとは別よ！大体あんなに食べて何で太らないのよ、あの子！？」

「じゃ、シャルちゃん、怒るところが違う気がするんだけど……」
今にも爆発しそうな勢いの少女に、アクアは苦い微笑みを浮かべた。

「とにかく！一刻も早く追い付くわよ！」

「ですが、行き先も分からないのにどうやって追うんですか？」

ステラは付いて行っているだけなので、シャルがどこに向かっているのか見当が付かなかった。

「見当は付くつて言ったでしょう？それに……ちょうど良いわ、ついでだから教えてあげる。どうしてイリスが肉体強化を使つたつて解つたと思う？」

「えっと……どうしてですか？」

ステラは走りながら少し考えを巡らせるが、良い答えが浮かばなかったのか、申し訳無さそうに聞き返した。

シャルは少しペースを落とすと、そのままステラの隣に並ぶ。

「ま、解らない事を素直に聞くのは良い事よ。答えはね、魔力を視たのよ」

「魔力を……ですか？」

「いまいち意味を理解出来ず、ステラは困惑する

「正確に言つと魔力の痕跡をね。ステラ、肉体強化してみなさい」

「あつ、はい」

直ぐ様ステラの身体が淡い土色の光に包まれた。特に意識を集中する事も無く発動出来たのは、この三週間の鍛錬の賜物だろう。

「今の状態つて、どこにも集中してないわよね？」

「はい」

人にぶつからないように走りながらも、ステラははつきりと頷いた。

「じゃあ、目を凝らす感覚で強化に使ってる魔力を目に集中してみ
て」

「目に、ですか？」

ステラが言われた通りに身体を覆っている魔力を徐々に目に集めていくと、

「何が視える？」

「……………銀色の……………線、みたいな物が……………あと、建物の上に、金と黒の物も……………」

薄くだが、確かにそれらの光が港に向かって伸びていた。銀色の光は途中で幾つもある出店に寄っていたが。

「それが魔力の痕跡よ。本来は遺跡探索とかで魔法のトラップを見抜くのに使うんだ
ね」

「そう、なんですか……………んっ」

限界が来たのか、ステラは苦しげな声と共に肉体強化を解いた。

「慣れれば肉体強化を使わなくても視れるようになるわよ。リオン
みたいなね」

「あっ、やっぱり分かってました？」

二人の前を走るリオンは、悪戯がバレた時のような表情を浮かべた。

「……………リオン君はもう出来るんですか？」

「まあね。戦闘中に相手の魔法の前兆を察知したり魔法の性質を見抜いたりも出来るから、結構使えるんだよ。……………ステラ、どうか
した？」

リオンが振り返ると、何故かステラは顔を伏せていた。

「……………いえ、解ってはいましたけど、改めて差を実感してしまっ
て。私なんてまだ肉体強化だけで精一杯ですし……………」

「あ……………」

みるみる落ち込んでいく少女に、リオンはどうしたものかと頬を搔く。その間にもすっかり人を避けている辺りは流石と言う他無い。「鍛錬でも結局アレン先輩達に一度も攻撃を当てられませんでしたし……やはり才能が無いんでしょうか、私……」

「しっかりしなさい！」

不意に立ち止まったシャルの一喝が、その場に響いた。

「リオンは知ってるから使えるだけ！ステラは知らないから使えないだけ！そこに差なんて無いの！本当に差が出来るのは知った後に努力するかどうかで決まるの！大体中級の肉体強化だって本当は二、三週間で修得出来るもんじゃ無いのよ？だからもつと自信持ちなさい！」

周囲の視線を受けながらも毅然とした瞳が、少女の茶色のそれを見つめる。

「シャル先輩……」

思わず浮かんだ涙を見たシャルは、短く息を吐いてステラの顔に手を伸ばした。

「ステラは才能もあるしちゃんと努力もしてる。あんまり自分を卑下にするもんじゃ無いわよ？自分を信じられない人は何をやっても上手くいかないもんなだから」

伸ばした指先で雫を拭って、今度は優しく微笑み掛けた。

「ほら、笑って。せつかくの可愛い顔が台無しじゃない」

「グスツ………はい……！」

ステラはまだ止まらない水滴を拭って、無理矢理作った笑顔を向けた。

それを見たシャルは、どこか可笑しそうに笑う。

「もう、泣き虫ねえ。涙は女の子の武器なんだから、いざって時に使わなきゃ駄目よ？さっ、早く追い掛けましょ」

そう言って、シャルは再び人混みの中に駆けていった。

「まったく、世話の掛かる後輩ね」

「ふふっ」

小さな溜め息の横からそんな声が飛び込んできた。

「……………何よ、アクア？」

いつの間にか、アクアがにこにこしながら隣を走っていた。そのいつもの笑顔には、一層嬉しさが加わっているように見える。

「優しいね、シャルちゃんは」

「な、何言ってるのよいきなり!？」

唐突な言葉にシャルは思わず戸惑いを見せる。

「ステラちゃんって、結構自分を追い込んだじゃう性格だから、励ましてあげたんだよね？」

「べ、別にそんなんじゃないわよ!ただ……………」

「ただ？」

変わらず笑顔のまま聞き返され、シャルは不機嫌そうに眉を寄せ

る。 「……………ただ、昔の自分を見てみたいで腹が立つただけよ」

言って、自分の言葉でさらに顰めっ面になった。

「……………やっぱり、シャルちゃんは優しいんだよ」

「もう、勝手にそう思っときなさいよ……………」

やはり変わらぬ笑顔に、シャルは観念するように溜め息を吐いた。

『一日目・昼 その三』

先にイリスを追い掛けていたアレンとノアは、屋根伝いに移動し

ながら屋台や飲食店を中心にあちこちに視線を向けていた。

「ったく、イリスの奴どこ行ったんだよ」

「魔力の痕跡が見当たらないという事は、此処らに居る筈なんだが……」

どうやら肉体強化を解いたようで既に手掛かりだった魔力の痕跡も消えており、二人は注意深く辺りを見渡していたが一向に発見出来ずにいた。が、

「……ん？アレン」

ふとノアが指差した先に、人集りひとだかが出来ていた。

「……行ってみるか」

他に当てがある訳でも無いので、二人は屋根を降りてそこに向かう事にした。

「すげえ人集りだなあ……前見えねえし」

人集りは広い道路を殆ど二分していた。

「ちよつと、失礼、つと……」

後ろからでは何が起きているのか良く見えなかったので、アレンは強引に人の壁に身を押し込んでいく。

「貴族の兄弟ですって。やあねえ……」

「しっ！聞こえたら私達まで巻き込まれるわよ！？」

「……」

途中で声を潜めた会話を聞きながら、アレンはようやく人の壁の出口に辿り着く。

「あーあ、せつかくこんな魚臭いとこまで来たつてのに、目当てのもんは売り切れだつてよー！」

「なんでも、どっかの大食い女が全部食べちゃったらしいよ、兄さん？」

すると、なんともわざとらしい会話が耳に届いた。

野次馬から抜け出すと、ガツチリした大柄な男と背の低い痩せた男が視界に映った。腰の細剣と他の者より上質な服装、お揃いの赤褐色の髪から察するに、この二人が貴族の兄弟のようだ。

意地の悪そうな顔付きをしている二人は、ニヤニヤと笑いながらその正面に視線を向けていた。

アレンが視線をそちらに移すと、二人に背を向ける形で、尋ね人である銀髪の少女が屋台の前に佇んでいた。……のだが、

「おじさん、このプラチナフィッシュの塩焼き、すっごく美味しいね！さすがアルモニアの名物料理！」

「あ、ありがとう、お嬢ちゃん……」

イリスは串に刺された焼き魚を堪能しながら苦笑いを浮かべる店主に話し掛けていて、兄弟の事は全く眼中に無いようだった。

「い、いい加減こつち向きやがれ！」

「お前だよ、銀髪の！」

「ふえ？」

完全に無視された事に怒った兄弟が声を荒げると、イリスはようやくそれに気付いて後ろを振り向いた。魚は頬張ったままだったが、

「や、やつとこつち向いたよ、兄さん……」

「ふ、普通あんだけ言ったら気付くだろ、クソッ……」

どうやら先程からずっと遠回しにネチネチ嫌味を言っていたが、全く気付いて貰えなかったらしい。

「さあ、どうしてくれるんだ、嬢ちゃん！？」

大柄な男は気を取り直して再び責め立てる。

「んつと、何が？」

が、すぐにガクツと頂垂れた。

「に、兄さん！元気出して！」

「良いんだ……どうせ俺なんか……」

弟が慌てて宥めるが、兄は完全に落ち込み状態に入っていた。

「えつと、大丈夫？」

「お前のせいだよ！」

首を傾げる少女に弟が噛み付いた。

「とにかく、僕達はせっかくこんなとこまで来たのにお目当てのプラチナフィッシュが全部お前に食べられてムカついてるんだよ！ど

うしてくれるんだよ!？」

「そうなの?ん〜つと、じゃあ……」

ようやく状況を理解したらしく、イリスは顎に指を当てて何かを
考え込むと、

「食べる?」

笑顔で食べ掛けの焼き魚を差し出した。

「要らねえよ!食い掛けじゃねえか!」

「あつ、復活した」

兄がツツコむ為に見事復活を果たした。

「はあ、駄目だこりゃ……」

アレンは一連のやり取りに深く溜め息を吐くと、イリスに向かっ
て歩いていった。

「……おい、イリス」

「あつ、お兄ちゃん!食べる?滅多に捕れないプラチナフィッシュ
の塩焼き!」

「食べない。つたく、何やってんだよ」

「いたつ!？」

笑顔で差し出された焼き魚を押しやって、アレンはイリスの額を
小突いた。

「ああん?てめえ、この嬢ちゃんの兄貴か?」

その様子を見ていた兄弟の兄の方が、アレンに思い切りガンを飛
ばしてきた。

「悪いなあんたら、ウチの妹が迷惑掛けたみたいで。でもまあ無く
なっちまったもんはしょうがないし、今回は諦めて貰えないか?」

「ふざけんな!『無くなりました』で納得出来る訳ねえだろ!」

「お前、僕達が誰だと思ってそんな嘗めた口利いてるんだ!？」

アレンがニカツと笑って謝罪すると、兄弟はさらに怒りを顎あいつわにし
た。当然である。

「んー……」

弟の言葉に、アレンは真剣な面持ちで顎に手を添える。

「知ってるか、イリス？」

「んーん、知らない」

しかし知らないものは知らなかった。

「に、兄さん！しつかりして！」

「良いんだよ……どうせ俺なんかそんなもんだよ……」

またしても落ち込む兄を弟が宥める。

「ク、クソツ、馬鹿にしゃがって！俺達はオルコット伯爵家のモンだぞ！？」

「そ、そーだそーだ！お前ら平民なんかどうにでも出来るんだぞ！再び気を取り直した二人は、腰に帯びている細剣を、柄を見せ付けるように突き出す。

見事な銀細工が施された柄には、確かに家紋のような物が彫られていた。

（ああ、なるほどな……）

だからか、とアレンは心中で頷く。

伯爵家と言えば、貴族の中でもかなりの力を持つ家柄だ。周りの野次馬が誰も口を挟まないのも仕方ない事だと言える。

（うーん、どうすっかなあ……）

普段ならそんな事を気にするアレンでは無いのだが、今はクエストの最中なので（正確にはまだ始まってすらいないのだが）面倒事は極力避けたかったし、貴族と揉めたとなると後々ややこしくなり兼ねない。なにせ、アレンもイリスもガーデンの制服を着ているので身元はバツチリなのだ。

（『爽やかに笑ってこの場を凌ぐ大作戦』は何でか失敗したし、ここは出来るだけ穏便に……）

その作戦が通用するのは、『アレン』レディアントファンクラブ』の会員だけであろう。

そんな事を考えていると、

「だー！もう我慢ならねえ！」

「なっ　！？」

黙ったままのアレンに痺れを切らしたオルコット（兄）が右手を掲げ、その掌に赤褐色の魔法陣が顕れた。

「これでも喰らえ！【豪炎の咆哮】！」ファイアフレイズ

叫びと共に、全てを焼き尽くさんとばかりに業火の塊が放たれた。標的は

「イリス！」

「っ！！」

ズドオン、という大きな爆発音が鳴り響き、黒ずんだ煙が立ち上った。

突然の事態に、野次馬から悲鳴が上がる。

しかし、

「ゲホッ、ゴホッ……あつぶねえなあ、つたく……」

立ち上る煙の中から、咳き込みながら悪態を吐く声が聞こえた。

やがて煙が晴れていくと、イリスを庇う形で両手に剣を構えているアレンの姿が現れた。それを見た野次馬から安堵の息が漏れる。

「別に自分で防げたんだけどね」

まだ咳き込んでいるアレンに肩を竦めるイリス。こちらはどうか、つてか、咳き込む素振りすら見られなかった。

「そう言うなって。妹を護るのが兄貴の役目ってやつなんだよ」

「ふふっ、そうだね。ありがと、お兄ちゃん」

苦笑するアレンの言葉に、イリスは手を後ろで組んで嬉しそうに微笑んだ。

「さあて、さすがにこれなら正当防衛って事になるだろ」

反撃の大義名分を得たアレンの表情は明るかったが、少し腹が立ったのか、その額には青筋が浮かんでいた。

「く、来るんじゃないねえ！」

予想を裏切り傷一つ負わずに近付いてくるアレンに、オルコット（兄）はジリジリと後退る。

「悪いけど一発は一発だからな。それにそっちは不意打ちのうえに、よりもよってイリスを狙ったんだ……」

言いながら、アレンは剣を軽く左右に振ると、

「文句は言つなよ？」

表情はそのままに声だけを凄ませた。

「っ！ク、クソツッ！【ファイア」

再び魔法を放たんと右手を掲げたオルコット（兄）が、半ば悲鳴のように叫ぶ。

それを防ぐべく、アレンは剣を構えて駆け出す。

「させるか！　って、あら？」

つもりだったのだが、不意に目の前に黒い影が降り立ったのを見て急停止した。

「ヒッ　　！」

「動くな」

気付けば、オルコット（兄）の正面で体勢を低くしたノアが、その首筋に身の丈よりも長い漆黒の刃を添えていた。

「いつの間にかいないと思ったら、お前どこにいたんだよ？」

突然現れた少年に、アレンは呆れたように腰に手を当てた。

「上から見ていた。それでも初撃は遠くて間に合わなかったが……」

「ヒィッ　　！？」

「に、兄さん！」

ノアがグッ、と刀を握る手に力を込めると、兄弟から悲痛の聲が上がった。

「ま、ままま待ておおおお落ち着け！おおお前ら俺達にこんな事

してどどどどうなるか分かってんのか!？」

「あら、一体どうなるって言うのかしら？」

焦って吃りまくるオルコット（兄）に、不意に野次馬の中からそんな声が返ってきた。

その場にいた全員視線がそこに集中する。

「あ……」

「シャル！」

現れたのは、流麗な緋色の髪と、凜然たる炎の瞳を持った少女だった。

「だ、誰だ、てめえは！関係ねえ奴はすつこんで」

「に、兄さん！」

突如現れた少女に視線だけを向けて（首筋にはまだ刀が宛てがわれている）噛み付くオルコット（兄）を、弟が突然震える声で制止した。

「そ、その人の、髪と、目の、色……！」

オルコット（弟）は小刻みに震えながらシャルを指差した。

「？」

一層怯え始めた弟を怪訝に思っ、オルコット（兄）は再び横目で少女の姿を捉える。

その髪と瞳の色は、同じ輝きを放つ鮮やかな緋^{あか}。

「色が何だっつてんだ？別に普通のひい、ろ……？」

燃え盛る炎のように力強く、凜とした緋色。

「あ……ああ、アンタは……まさか……」

それは、この広い世界でもある者達しか持たない、強者の証。

人々は彼らの事を、畏敬の念を持ってこう呼ぶ。

「『火の、一族』……!？」

途端に、オルコット（兄）の全身から冷や汗が溢れ出し、血の気が引いていった。

「もう一度聞いわ。誰が、誰に、何をやったら、どうなるのかしら？」

オルコット兄弟とは正反対に笑顔を浮かべるシャルの掌の上で、ゴウツ、と炎が舞い踊った。

「う……あ……」

止まらない汗でびしょ濡れになったオルコット（兄）の顔面には、生きるという事がどういふ事なのかを忘れてしまったかのような表情が張り付いていた。

「あら大変、汗でびっしょりじゃない。すぐに乾かしてあげるわ」
そう言っただけを近づけていくシャル。それでは余計に汗を掻くどころか、火傷で済めば良い方だろう。

「……………す」

「す？」

僅かに聞こえたオルコット（兄）の言葉を、シャルは笑顔のまま聞き返した。

「すいませんでしたあああああ！！！！」

「ま、待ってよ兄さまああああん！！！！」

兄弟は身体の底から悲鳴を上げながら逃げていった。その勢いや、まさに脱兎の如く。

「……………行っちゃった」

「ね……………」

アレンとイリスは、その後ろ姿をポカンと見つめていた。

「ま、まあ何にせよ、これで一件落着「してないわよ」

剣を亜空間に仕舞って軽く息を吐くアレンに、シャルが言葉を被せた

「イリス、何か言う事は無い？」

「あ……………」

イリスの表情がしまった、という風に硬直した。

「じゃ、シャル、あのね……………」

慌てふためきながら、イリスはこの状況をどうすれば無事にやり過ごせるかを必死に考える。が、

「遺言は慎重に選びなさい？」

「気のせいかな！？言葉の字が違う気がするのには気のせいかな！？」
再び炎を喚び出したシャルに、何を言っても死は免れない事を悟
って悲鳴を上げる。

「えっと、その……」

イリスはそれでも何とか乗り切ろうと懸命に思考し、

「……………食べる？」

右手に持った騒動の原因である魚が、一瞬で消し炭になった。

その頃。

「……………リオン君……………ここ、どこですか……………？」

「……………知らない」

「どうしてまっすぐ道沿いに走っていただけなのに、いつの間にか
路地裏にいるんですか、私達……………？」

「……………知らない」

「変だね？シャルちゃん、どこに行っちゃったのかな？」

絶望的な表情をしているステラとリオンの前で、アクアが心底不
思議そうに首を傾げた。

それを見て、ステラの目に徐々に涙が溜まっていく。

「グスツ……………ここはどこなんですかー！？」

三人は、迷子になっていた。

『一日目・夕方』

大海原。

日が傾き掛けた大空の下、一隻の帆船が茜色に染まる世界を突き進む。

「ん〜っ、海だあ〜！」

潮の香りに包まれながら、甲板に出ていたアレンは大きく伸びをして風に当たっていた。

「こつちに来る時も乗りましたけど、こつやって風に当たると気持ち良いですよね」

そう言って、リオンは吹き付ける風を身体全体で受け入れるように目を閉じる。

そうすると、耳に入ってくるのは波の音と帆が風に揺れる音、海鳥の鳴き声。

「うっ……………ひっく……………グスッ……………」

そして少女の啜り泣く声だった。

「ハイハイ、もう泣かないの、ステラ」

「だって、ひっく、怖かったんです、ひっく……………」

小さな子供のようにしがみ付いて離れないステラをあやすシャルは、少し苦笑いを浮かべる。

「ああ、うん、悪かったわ。ごめんなさい、置いてけぼりにして謝罪するシャルに、ステラはふるふると首を振る。

「お、大通りに向かっているのに、いつまで経っても、路地裏から出られないんです……………すぐそこに見えるのに、一生、出られない

んじゃ無いかって、グスツ……………」

「ああ、うん、悪かったわ。ごめんなさい、アクアに任せて……………」
その言葉に苦い溜め息が零れた。

いつまで経っても姿が見えない三人を見付けて合流したのは、出航時間ギリギリだった。

一体何をどうすればそうなるのか、街の南側にいた筈がいつの間にか広い港街の端の路地裏に迷い込んでいたところをノアが発見、全速力で走ってギリギリ船に乗り込んだのだった。

「不思議だよな？どうして迷っちゃったのかな？」

「……………」お前は自分が方向音痴だという事をそろそろ自覚しろ」

やはり心底不思議そうに首を傾げるアクアに、流石のノアも溜め息を吐いた。

「なんて言うか、ここのところアクア先輩のイメージが『優しい先輩』から『天然ドジ子』に変わってきてるんですけど……………」

「まあ、あながち間違いじゃないけど……………」

揃って溜め息を吐きながら、リオンは先程からずっと気になっていた事を口にする。

「……………」で、あれはどうしたんですか？」

視線の先には、黒焦げになったイリスが倒れ伏していた。

「あー、焼き魚の気持ちを知りたくなったらしい」

「焼き魚、ね……………」

それだけで大体何があったのか解ってしまい、リオンは苦い顔をした。

「いやあ、でもシャルが来てくれてある意味助かったよ。ノアなんか今にも首吹っ飛ばしそうだったし」

「流石に其処までするつもりは無かったがな。精々頸動脈に切れ目を入れるくらいだ」

「いや、それもアウトでしょう……………」

二人して恐ろしい事をさらっと話すので、リオンの顔が少し引き攣った。

「とにかく、向こうに着くまでは自由行動よ。アレン、イリスを部屋まで運んでちょうだい」

「はあ……りょかい」

「あつ、アレン君、わたしも手伝うよ」

「やれやれと頭を掻いて倒れているイリスを背負ったアレンの後を追って、アクアは二人の荷物を担いで一緒に船の中へ入っていった」

「うーん、僕はどうしようかな……」

「お昼、食べてないんでしょう？もうすぐ夕飯だけど、お腹が空いてるなら中に食堂があるからステラと行ってきなさいな」

「先輩たちは？」

「あんた達が迷子になってる間に食べたわ。イリスは気絶してるし、どうせいっぱい食べたから放つといっても大丈夫よ」

「あ、そうなんですか……」

「ずっと自分達を捜してくれていた訳では無かったのかと、リオンは乾いた笑いを零した。

「じゃあステラ、行こうか？」

「グスン……はい……」

「リオンはまだ泣き止まないステラの手を引いて食堂に向かっていった。

「さて、と。ノア、あんたは……って聞くまでも無いわね」

「……………」

「シャルがちらりと残った少年に目を向けると、既に壁に背を預けながら例の分厚い本を取り出して自分の世界に入り込んでいた。

（ま、適当にぶらぶらしとこうかしらね）

「別に一緒に行動するつもりは毛程も無いどころかノアと二人つきりで行動するなんて想像しただけでも全身の毛穴が開く程おぞましいので、シャルはとりあえず暇を潰す為に一人で船内へ向かうのだった。」

海流や波の影響などもあるが、長距離用の大型帆船という物は本来、曲線状に張られた帆が捉える風を推進力にして動いている。

つまり殆ど自然に吹く風次第でその進行速度が変わるのだが、近代以降の帆船にこの条件は当て嵌まらない

現代の帆船は、魔力を籠められる特殊な糸で帆に風属性の魔方陣を縫い込む事によって一定量の風を常に捉えられるようになっており、それによって各大陸への移動速度が格段に上がっていた。

一昔前まではその糸自体が非常に希少で上流階級の者しか利用出来なかったのだが、その原料確保が安定した為、現在では一般市民でも利用出来るようになっていた。

そのおかげで、大陸間の移動に多くの時間を費やしていた昔とは違い、今日では二日足らずで各大陸へと渡れるのだった。

「……って言っても、さすがに二日も海の上じゃやることなく暇だよねぇ」

船室のベッドに寝そべりながら、イリスは暇そうに足をぶらぶらさせていた。

「船内は一日目に全て廻りましたしね」

ステラは備え付けのテーブルに着きながら返事を返した。

乗船してから既に二日が過ぎており、船内の探検などの暇潰しも一通り終えてやる事が無くなってしまっていた。

「何やってるの？」

先程からテーブルの上で何かをやっているステラに、イリスは完全にやる気の無い声で尋ねた。

「剣の手入れです。もう少しで到着すると、先程シャル先輩が仰っていましたので」

「ほんと!？」

イリスはガバツ、と起き上がって朗報に眼を輝かせた。

「はい。ですからその前だと思います。出発前は鍛錬と旅の支度だけで精一杯でしたし

「へえ〜。お兄ちゃんがやってるの見たことあるけど、武器の手入れってめんどくさそう」

そう言いながら、一転して今度は嫌そうな顔をする。

「イリス先輩は、普段御自分ではされないんですか？」

「だってわたし持ってないもん武器」

「えっ?」

ステラは驚いたように顔を上げた。

幾ら魔法主体で戦う魔導士タイプとは言え、普通は武器（若しくは防具）を持つているものだ。そうでなければ接近戦や魔法が使えない状況（例えば狭い洞窟内や乱戦など）に対処し切れないだろう。「では、接近された時はどうされるんですか？」

「えっ? やっ、その〜……ノリ?」

当然の質問に慌てたイリスは、可愛らしく人差し指を立てて首を傾けた。

「ノリって……もう、誤魔化さないでくださいよ」

流石にそんな事で誤魔化されるステラでは無かった。

「それで、今までどうされていたんですか？」

「え、え〜とねえ……」

例の巨大に過ぎる剣を置いてベッドに乗り込み珍しくズイツ、と身を乗り出すステラに、イリスは後ろに退きながら言葉を濁す。

「二人とも、そろそろ着くから準備」

不意に部屋の扉を開けたアレンが、その体勢のまま固まった。

「……………何やってんだ?」

端から見れば、二人がベッドの上でいかがわしい事をしているようにしか見えなかった。

「あ、やっ、これは……………!」

二人は顔を真つ赤にしながら慌てて離れる。

「ちっ、違うんだよお兄ちゃん!? これは別に変なことしてたんじやなくてステラが質問してたらいつの間にかこんな感じになって、そもそもわたしがお兄ちゃん以外の人とそんなことするわけ」「するんですか!?!」

慌てて説明するイリスの問題発言に、ステラが透かさず反応した。「やっ、ちがっ……………しっ、しないよ! ステラのえっち!」

自分が言った言葉を自覚して、イリスは色白な顔をさらに赤くして怒鳴った。

「……………あー、まあその、あれだ。とりあえずもっ着くから、降りる準備しとけよ?」

アレンは後頭部を掻いて扉を閉める。

「あー、それから……………」

しかし閉め切る直前で一度止めると、

「お、俺は別にその、何だ? そーいっのに偏見とかないから。仲が良いの、良いことだ、うん」

そう言い残して去っていった。

「……………」

二人の間に沈黙が流れる。

「……………はっ!? ちっ、違うの! 待ってお兄ちゃん!」

「私達の話聞いてくださーい!」

我に帰った二人の必死の弁明で、何とか最悪の事態は免れたのであった。

一般的に知られている火、風、地、水の四大精霊は、各大陸の名を冠する通りそれぞれの地方に特に多くの加護を与えているが、これは精霊達が他の生物と同じく、より適した環境を選んだ結果に過ぎない。

つまりは砂漠や火山が多い熱帯地域である南の大陸には火の、年中風が吹く渓谷や森が多い西の大陸には風の、水場や氷雪地帯が多い北の大陸には水の、良質の大地や鉱石を多く含む東の大陸には地の精霊達が多く棲んでいるのだ。

さらに全ての大陸に存在するそれらの環境にもそこに適した精霊が多く感じられる事から、世にいる多くの魔導士達はより効率良く特定の属性の修練を積む際にそれらの地に足を踏み入れる事が多く、その効果は推して知るべしであった。

「……………あ、つづー……………」

『火』の大陸、と言うだけの事はあり、夕方だというのに気温はガーデンの昼間よりも高く、港に着いたアレン達は拭いた傍から汗が溢れていた。

「火の精霊の加護が強い証拠よ。さ、早くギルドに行きましょう」

額から溢れる汗を拭いながら、シャルは街に向かって歩いていく。

「それにしても、本当に暑いですね……………夜寝れるかな……………」

そんな心配をしながらも、リオンの首にはしっかりと藍色のマフラーが巻かれていた。見ているだけでも相当に暑苦しい。

「夜は暖かくするのをお勧めするわ」

「どうしてですか？」

ステラが水を飲みながら言葉を返した。

「こっちの夜は一気に冷えるのよ。低い時は氷点下まで下がるわよ」

「う、え……………」

それを聞いたイリスが肩を落として呻いた。

「つあ……………！あつついなあ、もう！」

遂に限界が来たのか、アレンは叫びながら制服の上着を勢い良く脱いだ

上着を脱いだ事で少しは涼しくなるだろう、とさっぱりした顔をする。

「よし、これでちょっとは涼しく……」

が、涼しくなるどころか、日差しはより一層強くアレンの身体を突き刺した。

「うあつちや〜!?!」

焼けるような暑さに思わず飛び跳ねるアレンに、シャルが呆れたように溜め息を吐く。

「馬鹿ね。ウチの制服は温度調節の術式が籠められてるのよ?そんなの脱いだら余計暑いに決まってるじゃない」

「ってことは、それも効かないぐらい暑いんですか、こっつて……?」

「そういう事。まっ、自然の力には抗えないって事ね」

言い捨てて、シャルはどんどん先へ進んでいく。

「……シャル先輩、何であんなに平気そうなんだろう……」

心無しか機嫌が良さそうなシャルに、リオンが疑問の声を上げた。

「シャルちゃん、火の精霊に好かれてるからじゃないかな?」

答えるアクアは、汗を掻きながらもやはり笑顔を絶やさない。

「尚更暑そうなんですけど……」

「きつと、暑さよりも高揚感の方が勝ってるんだよ」

「そんなものですか……?」

イマイチ納得出来ないのか、リオンはまだ眉を寄せていた。

「……アクアあ〜……お水ちょおだあい……」

イリスが死に掛けのような声で救済を求めてきた。

これには流石のアクアも困った顔をする。

「えつと……ごめんね、イリスちゃん。シャルちゃんが、『すぐに出すと癖になるから駄目よ』って……」

「そんなあ〜……!」

先を読まれたイリスは絶句する。断っておくがアクアは全く悪くない。

「もうちょっとでギルドだから、ね？」

この状況で他人を気に掛けられる優しさが、アクアがアクアたる所以なのだろう。

「ノア先輩、暑くは無いですか……？」

適度に水分を摂りながら歩くステラは、この暑さでも文句一つ垂れないノアに視線を向けた。

「……無論暑いが、動きを最小限に留めれば騒ぐ程では無い」

言いながら、唇の動きすらも最小限に留めていた。ここまで来ると、流石という言葉以外ステラには思い付かなかった。

「シャル、まだあゝ？」

げんなりしたイリスの言葉に、シャルは溜め息を吐く。

「もう着くわよ。ほらそこ」

言って、シャルはすぐ傍に見える建物を指差した。

「……あれがギルドですか？」

リオンから疑念の籠った声が上がった。

というのも、そこはどこからどう見てもただの酒場にしか見えなかったのだ。

「まあ大抵のギルドは酒場と兼用で建てられてるからな。ガーデンのやつも似たようなもんだぞ？あゝ、やっと涼める」

そう言って、再び上着を着たアレンは一刻も早く涼む為に颯爽と中へ入っていった。

「……あの、私達未成年なのに入っても大丈夫なんでしょうか？」

ステラの当然の疑問を、

「言ったでしょ、兼用だって。お酒さえ飲まなけりゃ大丈夫よ」

肩を竦めたシャルが蹴散らしてアレンに続く。

「本当に大丈夫だよ。そもそもダメだったらクエスト受けられないし」

まだ不安を拭い切れない二人を後押しするイリスに続いて、アクアとノアも中へ入っていった。

「……行こう、ステラ。今さらどうにも出来ないよ」

「そうですね……」

納得というよりも諦めに近い感じで、残された二人も後に続いた。

ギルドの中は昼間だというのに大勢の客が酒を仰いで賑わっていたが、その喧騒はアレン達が現れた事で若干の鎮まりを見せた。

「すみません、学生用クエストの許可証発行しに来たんですけど」
空調が効いた部屋に入って元気になったアレンは、突き刺さるような視線をモノともせず、カウンターの奥にいたエプロンを掛けた若い女性に声を掛けた。

「あら、いらつしやい。話は聞いてるわ。立ち話もなんだし、向このテーブルに行きましょうか」

茜色のロングヘアと茶褐色の瞳を持った女性は、ニツコリ笑うと七人を奥の大人数用のテーブルへ促した。

「ゲツへへへ……坊主達い、ここはガキの来るとこじゃねーぞおー」
それに従い奥へ進むアレン達に、通路の傍にあるテーブルから下卑た笑い声が飛んできた。

見ると、屈強な肉体を持った酒の入った男達がニヤ付きながらこちらを見ていた。

「酒も飲めねえ鼻垂れ坊主共は、家でママのおっぱいでも飲んでなあ！」

「いやいや、嬢ちゃん達はなかなかのタマじゃねえか！どうだい？こつち来ておじさん達の相手しちゃあくんねえか？」

その言葉に、男達は下品に大笑いする。

「……………っ」

「大丈夫だつて、ステラ。何もしてきやしねえよ」

思わず後退るステラに、アレンは優しく笑って頭に手を置いた。

「……………おっ？」

「あつ……」

気が付くと、男達の目の前にシャルが立っていた。

「へへっ、何だあ？嬢ちゃんが相手してくれるのかあ、おい？」

一番手前にいた髭を生やした茶髪の大男は、その場に立つと厭いやらしい目付きで嘗め回すようにシャルを眺める。

「へへへっ、こりやなかなかのべっぴんさんじゃ「不潔」

唐突に、はつきりと、不快感を包み隠す事無く言い放った。

「汚ならしい、下品、不快、どんな言葉でも足りないくらい品性の欠片も感じられないわね。私達があんた達の相手をする？お金を積まれたつてお断りよ。まだ馬の糞の方がマシだわ」

グサツ、グサツ、と、シャルは遠慮無しに罵詈雑言を突き刺していく。

「うわあ……」

「シャル先輩、馬の糞だなんて……」

苦い顔をするアレンの後ろで、ステラが女の子らしからぬ言葉に赤面しながら顔を覆い隠した。

「こっ、の、ガキッ……!!」

大男は青筋を立てて顔を引き攣らせる。

「あら、ごめんなさい？つい本音が出ちゃったわ。ついでにその汚ならしい顔を仕舞ってくれと助かるんだけど……」

「てめええええ!!!!」

大男は遂に切れて拳を振り上げた。

「シャル先輩！」

「フンッ……」

慌てて声を上げたステラとは対照的に、シャルは短く鼻を鳴らして右手を構えた。

その時。

「グヘアッ !?」

「!?!」

突然シャルに襲い掛かろうとしていた大男が、勢い良く吹き飛ん

でテーブルに突っ込んだ。

「……アンタら、ウチのルール破る気？」

騒然とする中、先程の茜色の女性が大男のいた場所に立っていた。瞬間、大男の仲間達から血の気が失せる。

「いつ、いやっ、滅相も無いっ！」

「ちよ、ちよつと酒に酔い過ぎただけっすよ、マスター！」

慌てて弁解する男達に、マスターと呼ばれた女性は一言。

「……ウチのルールは？」

「酒は飲めども呑まれるな！」

「喧嘩をするなら店の外！」

「失礼しやしたーっ！！！」

男達は気絶している大男を担いで、瞬く間にその場を去っていった。

「見たか？」

「……ああ。恐ろしく強烈な蹴りだった」

あまりの一撃に、ノアですら少し青ざめていた。

「……つたく、テーブル壊しちゃったじゃない。まあ良いや、今度来た時にせつ引いてやる。……で、」

マスターは頭に手をやってばやくと、今度はシャルを睨み付ける。

「っ！」

睨まれたシャルは、思わずビクツと身を震わせた。

「アンタも、挑発なんかしてんじゃないの。それこそ品性ってやつが無いんじゃないの？」

「……ごめんなさい」

「大体ねえ、相手がもし自分より強かったらどうすんの？アンタだけじゃなくて、後ろにいる子達まで危なかったかかも知れないのよ？」

「……ごめん、なさい」

全くの正論に、シャルはただ謝る事しか出来なかった。

「ま、まあまあ。そこらへんにして……」

そろそろ限界かとアレンが割って入ると、マスターは今度はそち

らを睨み付ける。

「アンタも、何女の子にやらせてんのよ。ああいうのは男共が行きなさいっての。ったくこの甲斐性無し」

「ええええっ!?!?店のルールは!?!?」

「誰が店の中でやれって言った!」

「てっ!?!?」

驚愕するアレンの頭に拳骨が舞い降りた。

「さて、と……うるさいのもいなくなった事だし、そろそろ話をしましょうか。ああ、飲み物はオレンジジュースで良い?っていうかここ、お酒以外はそれとミルクしか無いのよ」

「は、はあ……」

「そうなんですか……」

先程の気迫は何のその。ケラケラ笑いながら奥のテーブルに腰掛けるマスターに、ステラとリオンは圧倒されて呆けたような声しか出せなかった。

「さてさて……向こうのギルドから貰った情報だと、確かSクラスだったわね?えーっと……?」

肩肘を突きながら、マスターは分厚い紙束をパラパラ捲っていく。

「……ああ、あったあった。あら、二組もいるじゃないの。代表者の名前は?」

「……シャーロット〃フラム〃エル〃イグニスです」

答えたシャルの声はまだ暗かった。

「ふーん、イグニスねえ……」

その名を聞いて、マスターは何処か意味深な表情でシャルを眺める。

「まあ良いわ。それじゃあ一年生が二人いるみたいだし、一から説明するわよ?」

言葉は疑問系だったが、マスターはアレン達の返事を待たずに話し始める。

「内容は『紅蓮華』の葉を三十キロ採集って事だから、採集用の道

具と袋はこつちで用意するわ。『ディスカバリー明くる朝』からの情報だとキネリキア山のあちこちに野生してるらしいから、まあそこまで時間は掛からないでしょ」

『明くる朝』とは五大陸間の開拓作業を指揮する組織で、現在では開拓作業の殆どがこの組織によって行われている。

「問題は魔物の方ね。ガルム系とドレイク系が特に多いみたいだけど、確認されてる中には上級種も載ってるわ。まあ、出逢うかどうかは運次第ね」

「運、ですか……」

張り詰めた表情をするステラに、マスターはまたしてもケラケラと笑う。

「だーいじょーぶよ。ああいうのは巢でも突かない限り襲って来ないって。それに、そういう万が一の時の為にこれがあんのよ」

マスターはエプロンのポケットから、紐の付いた丸い石のような物を取り出した。

「何ですか、それ？」

尋ねたりオンと同じく、ステラも首を傾げた。

「転移の魔法が籠められた風の魔石よ。所持者が命に関わる程肉体的に負傷した場合、これが自動的に発動してここに転移するようになっているの」

「つまり、死なない為の保険という事ですか？」

最悪クエストに失敗しても命を失う事にはならないと知り、ステラは少しほっとする。

しかし、それを見たアクアはいつに無く厳しい表情をする。

「安心したら駄目だよ、ステラちゃん？死なないって言ってもそれに近いくらいの重傷は負うし、転移したけど助からなかった人もいるらしいから」

「それにクエストも失敗しちゃうしね。あくまでも最終手段ってことだよ」

「うっ……はい……」

イリスにまで注意されて少し頂垂れるステラに、マスターは再びケラケラ笑い声を上げる。

「あつはつはつ、さすがは先輩ってとこね。まあこいつはある程度魔力を籠めたら負傷しなくても使えるから、ヤバいと思っただらすぐに使いなさい。開拓地域って言っても、まだ未発見の場所とか魔物も多いしね」

マスターはそう言うと、テーブルに置いてあった酒をグイッと飲み干した。大ジョッキをイッキである。

「……プハアーツ！それじゃあ伝達事項はこれくらいね。許可証と必要な物は後で纏めて渡すわ。あとは……はい、これ」

マスターはアレンに何かが書かれた紙切れを渡した。

受け取ったアレンは、そこに書かれた文字を読んで不思議そうに首を傾げる。

『ヴォルケーノ招待券』？どこの招待券ですか、これ？」

「んふふー……イ・イ・ト・コ・ロ」

マスターは茶目つ気たつぷりに艶あでやかな声を出した。

『三日目・夜』

「うっはあー！見るよノア、リオン！いろんな種類があるぞ！」

「はしゃぎ過ぎだ、みっとも無い」

「あはは……初めての温泉ですから、気持ちは分かりますけどね」

マスターの指示でアレン達が向かった場所は、港街ヴァルカノで最も大きな温泉宿だった。

「でもラッキーですね。まさかこんな良い宿代がタダになるなんて」

「当初の予定では最安価の宿に泊まって温泉だけ別のつもりだった

からな。頂ける物は頂いておいても罰は当たらないだろう」

ガーデンの試験と言えどクエスト中は基本的に野宿が当たり前で宿を取る場合は勿論実費であり、アレン達も普段のクエストではそれに従っている。

ところが先程マスターから貰った紙切れがなんと高級温泉宿の宿泊券だったので、早速とばかりに温泉を堪能しに来たという訳であった。

「ああ、良い湯だなあ……」

アレンが額にタオルを乗せて気持ち良さそうにプカプカ浮いていると、

「まったく、相変わらず騒がしい奴だな君は」

ガララツ、と引き戸が開き、脱衣所からアルベルトが現れた。

「お、アルベルト。お前もこの宿だったのか」

「気が抜け過ぎだろう、どう見ても」

アレンの気の抜けた声と表情に、アルベルトは呆れ果てて溜め息を吐いた。

「ノア先輩……アレ、どう思います？」

「むっ？」

リオンの視線の先にあったのは、アルベルトの腰にしっかりと巻かれたタオルだった。因みにリオンがいつもしっかりと巻き付けている藍色のマフラーは勿論脱衣所の籠の中である。

「……正直「許せませんよね、男しくないのにアレは」

どうでも良い、と言おうとしたノアはそっちのけで、リオンの中の何かに火が点いていた。

「大体だな、風呂という物はもっと静かに入る物で　うわあッ！
？な、何だいきなり！？うっ、体が動かな……ええい、離せ！！や、
やめろ、タオルを取るな！うわあああああ！？」

くどくどと講釈を垂れるアルベルトに素早くリオンが襲い掛かり、その動きをノアが半ば無理矢理魔法で止めさせられ、面白がったアレンに勢い良くタオルを剥ぎ取られたアルベルトの絶叫が響き渡っ

た。

「何やってんだか……」

「ふふっ、みんな楽しそうだね」

一方、シャル達はその騒ぎを薄い柵越しにある女湯で聞いていた。「まったく、子供じゃ無いんだからもう少し静かに……きゃっ!？」「しなさいよ、と言いつけられたところで、邪魔にならないように長い髪を纏めたシャルの横っ面にお湯が跳ねた。

「あ、すみません、シャルせんぱきゃあ!？」

「あははは!それえ〜!」

謝罪するステラごとイリスのお湯攻撃が炸裂し、シャルとアクアにも盛大に被害が及ぶ。

「……………い、イリス〜!？」

「やあ〜!シャルが怒ったあ〜!!」

「あつ、二人とも、あんまり走ると危ないよ!？」

「きゃあ〜!?!こっちに来ないでください〜!」

ガラガラッ。

いつの間にか大乱闘の現場になっている女湯の引き戸が不意に開かれ、全員の動きが止まった。

ガラガラッ、ピシャッ。

と思ったら、すぐにまた閉じた。

「今のって……」

呆然としている女性陣の中で、イリスの顔がやけにイイ感じになっていた。

脱衣所でタオルを握るアリスは思っていた。

(あ、あんなに……人がいる……なんて……聞いてない……)
ただでさえ人見知りなうえに女湯こしにはアルベルトもアレンもいない。しかも何故か揉みくちやになっている。

自分にはハードルが高過ぎる、やはり皆みなが寝静まった深夜に浴びようと考えを改めた直後

「アリスー！一緒に入るー！」

いきなり引き戸が開き、イリスが抱き着いてきた。こちらは髪を纏めていないので、その際に辺りに盛大に水を撒き散らした。

「ひゃうッ　！？」

あまりに突然濡れた体で抱き着かれたので、アリスは思わずすっ頓狂な声を上げてしまった。

「えへへへ。今ね、シャルとステラとお湯の掛けっこしてたの！アリスもやるっ？」

「　！？ま　ま　！」

『待つて』の一言が言えず(言えたところで止まりはしないのだろうが)、アリスはどどん阿鼻叫喚が待ち受ける死地(女湯)へと引き摺られていく。

「待ちなさい、イリス！あんたタダで済むとプハアツ！？」

「甘いよシャルっ！ここは既に戦場なのだよっ！」

「こ、こっちにまで掛けないでくださいよお！」

「みんな、あんまり走ったら駄目だよ？」

「　%　#　！！！！！！？」

声にもならない悲鳴は、誰にも聞こえなかった。

「はあ、極楽極楽う」

ようやく収まった第一次ヴァルカノ戦役（イリス命名）は、最終的に停戦協定を結ぶ形で終結した。

「ふふつ。イリスちゃん、おばあちゃんみたい」

疲れた身体を温泉に浸かって癒すイリスを見て、アクアは可笑しそうに微笑んだ。

「もう、余計に疲れたじゃない」

「ですが、楽しかったです」

同じく湯船に浸かるシャルとステラも、何処と無くやり切った表情を見せていた。なんやかんやと文句を垂れているシャルが一番ノリが良かったのはご愛嬌。

「……………」

途中から巻き込まれて今はぐったりしているアリスは、何故かイリス軍尖兵（主にイリスの身代わり）として大活躍した。必殺技は『アリスガード』。

「そう言えばアリス、他の子はどうしたの？」

イリスがふと気付いたように尋ねた。

良く考えればアルベルトのパーティーの女子がアリス一人とは考え難いのだが、今のところその姿は見えなかった。

「……………お買い物」

まだ慣れないのか壁にされて疲れたのか、本当に小粒程度の呟きだった。

「なあんだ、つまんないの」

その返答にイリスは心底つまらなそうな声を上げた。

「イリス、あんた人見知りはどうしたのよ？」

「さすがにもう女の子だったら大丈夫だよ。あとなんとなく取っ付きやすそうな男の子とか、屋台のおじさんとかも」

つまりアルモニアで出会ったオルコット兄弟は、イリス曰く『取っ付きやすそうな男』だったらしい。屋台のおじさんは食べ物を買れるからだろうか。

「……イリス先輩、人見知りだったんですか？」

「まあ、最近の様子じゃ普通そうは見えないわよね」

今更ながら驚いているステラにシャルは肩を竦めた。

「むうー……」

突然、イリスは何故か不機嫌そうに頬を膨らませていた。

「どうかしたの、イリスちゃん？」

「……ステラ？」

「はっ、はい？」

小首を傾げるアクアには答えず、イリスはステラに呼び掛けた。

「前々から思ってたんだけど、わたしはそろそろ言っても良いかなって思ってることがあるの」

「な、何でしょう……？」

なんだか嫌な予感しかしないステラは、自然とお湯の中で後退っていた。

「初めて会った時、わたしが何て言ったか覚えてる？」

「初めて、ですか……？」

その言葉に考えを廻らせる少女に、イリスはボソツと呟く。

「……………敬語」

「あっ……………！」

ステラはしまった、とばかりに口を覆った。

初めて顔を合わせた時、イリスは同じ年なので敬語は要らないと言っていたのだ。

「最初はね、さすがに初対面でいきなりそれは無理かなって思ってた何も言わなかったんだよ？ 仮にも先輩だし。でもね、もう三週間も経ったんだよ？ そろそろ普通に喋ってくれても良いんじゃないかな？」

ギリギリと詰め寄るイリスに、ステラはひたすら苦笑いを浮かべる。

「い、いえっ、そうは言いますが、イリス先輩……………」

「ほら、また言ったあ！」

「あ、やつ、そのつ……シャル先輩っ！」

困り果てたステラはシャルに助けを求めた。

流石に放って置く訳にもいかず、シャルは短く溜め息を吐く。

「はぁ……ステラ？要するにイリスは、ステラともっと仲良くなり
たいって言うてるのよ。敬語って何だかよそよそしいじゃない？」

シャルの解説にイリスはコクコクと頷く。

「で、ですが、私はこの口調が一番話し易くて……」

「うーん、じゃあ……」

シャルはまだ渋るステラに何やら耳打ちをする。

「ねっ？ほらっ」

「うう……」

やがて笑顔で送り出されたステラは、意を決したように身体に力
を入れてイリスと向き合った。

期待に満ち溢れた顔のイリスに、ステラは一度大きく息を吸って
口を開いた。

「……………い、イリス……………さん……………っ！」

途端に、顔を真っ赤にして背を向けた。

「や、やはり駄目です！今更過ぎて恥ずかしいですよ！」

と、今にも泣きそうな声を上げた。

「うーん、流石に呼び捨ては無理みたいね。でもほら、見なさいよ」

言われてもう一度向き直すと、

「えへへ」

イリスはニコニコ笑っていた。

「『イリスさん』かぁ。『さん』付けも悪くないかなあ」

余程嬉しかったのか、イリスは何度も自分の名前を『さん』付け
で連呼する。

「良かったね、イリスちゃん？」

「うん！」

無邪気な笑顔を浮かべるイリスに、アクアはにっこり微笑んだ。

「どう？恥ずかしい思いをしただけはあった？」

「……あんなに嬉しそうにされたら、次から『先輩』だなんて呼べませんよ」

その無邪気さに釣られて、ステラは困ったように微笑んだ。

「アリス！」

「……………なに？」

一段落着いたところで、イリスは今度はアリスに急接近した。

「あのねっ、わたしはアリスとももつと仲良くなりたいの！だから

……………」

「……………？」

イリスの雪のような手が、お湯の中でアリスのそれをガツチリ掴んだ。

「背中が流しっこしょっ！」

「流しっこ……………？……………あっ」

「そっ、流しっこ！」

きょとんと小首傾げるアリスに微笑んだイリスは、温泉から上がるとその手を引っ張って洗い場へ向かった。

「私達も行きましょうか」

それに苦笑しながら、シャルも湯から上がる。

「流しっこ、する？」

微笑ましい光景ににこにこ笑いながら、アクアが言った。

「冗談。子供のやる事よ」

シャルはやれやれと肩を竦めた。

「じゃあステラちゃん、わたしたちだけでやるっか？」

「えっ？あっ、あのっ……………！？」

アクアは戸惑うステラの手を引いて洗い場へ向かった。

「あっ、ちよっと！」

「どうしたの、シャルちゃん？」

引き留めたシャルに、アクアは待っていましたとばかりにわざとらしく首を傾げた。

シャルはその笑顔にしまった、と顔を引き攣らせる。

「……………偶たまに思っただけど、あんたって良い性格してるわよね」
「ふふっ、どう致しまして。それで、どうかしたの？」

あくまでも言わせるつもりかと悟ったシャルは、やっぱり良い性格だと心中で苦々しく苦言を吐露する。

「……………私もやるわよっ！」

「うん。じゃあ、いこっか」

顔を真っ赤にして視線を背ける少女に、アクアはにっこり微笑んだ。

「わっ、改めて見たらアリスってすごい肌綺麗なんだね！」

とそこへ、アリスの背中を洗っていたイリスから感嘆の声が上がった。

「……………そ、んなこと……………ない……………」

「ええ、そうかなあ？こんなにすべすべなのに」

「ひゃうっ、んっ ……！」

スルツ、とイリスの白い手がアリスの横腹に伸びて、アリスは顔を赤くして小さな悲鳴を上げた。

「……………シャル先輩。イリス……………さん、ひよっとして自覚が無いんですか？」

「あ、放つときなさい。どうせ持つてる子には解あんないのよ」

桶にお湯を溜めながら、シャルは呆れた顔をした。

「あそこまで綺麗で白い肌だと、妬けるって言うよりは尊敬しちゃうよね」

そう言っただけにこにこ微笑むアクアだが、こちらも充分に艶もやかで白い肌をしていた。

「シャル先輩は、肌もそうですけど特に髪が綺麗ですよ。色合いや艶が絶妙と言うか……………」

ステラはシャルの艶あやかに濡れた緋色の髪を羨ましげに眺める。

「ありがと。でもこれ、手入れが面倒なのよ」

シャルは邪魔にならないように纏められた髪を解ほいて溜め息を吐いた。押し付けられていた水に濡れた髪が、重々しく床に着く。

「すごく長いもんね、シャルちゃん。大変そう」

アクアは憂鬱そうな表情をするシャルに苦笑する。

「長いと言えば、イリス……さんとアリス先輩もかなり長いですね」

ステラは二人にちらりと視線を向ける。

二人とも今は身体を洗う為に纏めているが、普段の姿を見る限りでは腰まで伸ばしているシャルよりも長かった。

「ふえ？どうかしたの、ステラ？」

その視線に気付いたイリスがアリスの背中を洗う手を止めた。

「二人とも、長くて綺麗な髪だよ、って話してたの」

「髪？」

アクアの言葉に、イリスは視線だけを頭に向ける。

「前々から思っていたのですが、イリスせんぱ……さんの髪と瞳の色は珍しいですよ。他に見た事がありませんし」

ステラの何気無い一言に、イリスとシャルの肩がビクウツ、と跳ね上がった。

「そう言えばそうだよ。今までそんなに気にしてこなかったけど

……」

「……すごく……綺麗」

アクアとアリスもそれに同意して頷くので、二人の頬から水滴に混じって汗が流れる。

「ほ、ほらっ、わたしって昔病気で入院してたからっ……！」

「に、入院する前はアレみたいなのよ……！？」

あたふたと慌てる二人に、アクア達は揃って首を傾げる。

実際設定として他の人（教員など）にもそう説明してあるが、こればかりは中々に無理のある設定だった。

銀髪銀眼になる加護など誰一人として見た事も聞いた事も無く、では入院の原因であるその病気はと聞かれれば答えようが無い。

そもそもイリス自身が謎だらけなのだから、矛盾だらけの設定になるのは無理も無い事だった。

「そ、そんなことより、アリスの髪も長くてすっごく綺麗だよねっ！？」

「そっ、そうよね！手入れが大変なんじゃない!？」

二人は無理矢理話題を逸らそうとするが、焦り過ぎて思い切り目が泳いでいた。

「……………別に」

ポソツ、とか細い声が、浴場のお湯が流れる音に混じって聞こえた。

「何も……………してない……………アルが、褒めてくれたから……………伸ばしてる……………だけ」

小さくゆつたりとした呟きの端々には、暖かさが滲み出ていた。

「何もしてないって……………イリスと言いあんたと言い、羨まし過ぎるわよ」

自分がこの髪の状態を維持するのにどれ程の手間暇を掛けているか、一度身を以て教えてやりたいとでも言いたげな溜め息を吐く。

そんなシャルに、アリスはゆつくりと視線を向ける。

「……………アレンも……………褒めてくれた」

「へ、へえ……………」

シャルの眉がピクツ、と反応する。

「……………シャーロットは……………アレン……………好き……………?」

「なっ……………!？」

突然過ぎる質問に、顔が一気に赤くなった。

「ななな何言ってるのよ!？別に私はそんな……………!」

「そっ……………なの?」

「うっ、いや、そうじゃない訳じゃ無いけどそれはそれで色々アレと言っかそもそも……………」

まさに噴火寸前のように顔から火を吹きながら、ゴニョゴニョと呟くシャル。良く見ると先程からずっと右腕を洗っている。

結局どちらか解らなかつたようで、アリスは小首を傾げながら身体を覆う泡をお湯で流した。

「ねえねえ……アリスはさ、アルベルトのことが好きなんだよね？」
「うっつ　！？」

前後を入れ替わる際に放たれたイリスの言葉を聞いたアリスからボン、という爆発音が聞こえた気がしたと思ったら、滑って思い切り尻餅を搦いてしまった。

「だ、大丈夫？」

「……………ん」

かなり痛そうだったが、アリスは顔を真っ赤にしながらこくりと頷いた。

「良かったあ。……それで、どうなの？」

それを確認したイリスが再び尋ねた。

「……………うん」

辛うじて肯定の言葉を紡ぐと、アリスは気を紛らわすようにイリスの背中を洗い始めた。

「じゃあじゃあ、具体的にどんなところが好きなの？顔とか、性格とか、そういうの！」

イリスは水を得た魚のように次の質問をする。

「例えば好きになる切っ掛けになった壮大なエピソードのような物が！？」

二人の傍にやって来たステラも含めて、恋する乙女オーラ全開であつた。

「ん……………」

慣れない状況にたじたじしながら、アリスは言葉を選ぶようにイリスの背中を洗っていた手を止める。

「……………アルは……………暖かいの」

「あつたかい？」

何を言いたいのかイマイチ伝わらず、イリスとステラは不思議そうな顔をする。

アリスは止まっていた手を再び動かしながら口を開く。

「……………寒かったわたしを……………暖めてくれたのが、アル……………」

イリスの背中を洗いながら、その灰色の瞳には別の何かが映っていた。

「良くわかんないけど、それが切っ掛け？」

アリスはまだ顔を赤くしながらこくりと頷いた。

「アレンも……同じだから……好き」

「って二股!？」

「い、いけませんよ、そんな……!」

イリスとステラはまさかの二股疑惑に驚愕した。

突然叫んだ二人にびっくりしたアリスは、普段よりも少しだけ強く首を横に振る。

「一番は、アル……アレンは……似てるの」

「似てる?二人が?」

どうにもそうは思えないイリスは、少し怪訝な顔付きをした。

「アレンも……暖かいの……だから……好き」

「えーっと……」

何と言えば良いのか解らず、イリスは言葉に詰まった。

(ステラ、こういう時って何て言えば良いのかな?二股はダメだけど恋愛するのは自由だし……)

(あの、恐らくアレン先輩に対しては恋愛感情の好きでは無いのでは?アルベルト先輩の時とは反応も違いますし……)

(ああ、なるほど!)

ひそひそ話に納得したイリスは、どこかすっきりした表情をする。
「……………」

状況が読めないアリスは不思議そうに小首を傾げた。

それを見てイリスは両手を振って苦笑いをする。

「あ、こつちの話だから気にしないで。えっと、それじゃあアリスはもう好きって言ったの?ずっと一緒なんですよ?」

イリスは遂に核心に迫った。

一瞬きよとしたアリスは、次にその白い顔を再び真っ赤に染め、そして徐々に俯いていった。

「……………まだ」

顔から立ち上る煙は湯気だけでは無いのだろう。

「　　っああゝ、もう！アリス可愛過ぎるよう！」

「ふむっ……………」

その姿に何か底知れぬ可愛らしさを感じたイリスは、感極まってアリスを抱き締めた。

「アリス、いまさら言うことじゃないかも知れないけど、聞いてくれる？」

アリスは改まって断るイリスを不思議そうに見る。

「わたしと、友達になって！」

アリスの灰色の瞳が、抱き締められた事で目の前に現れたイリスの銀色の瞳をきよとんと見つめる。

「……………とも……………だち……………？」

まだ意味が理解出来ていないのか、アリスは聞き返すように呟いた。

「うん！友達！こうやって一緒に遊んだりお話したり、ご飯食べに行ったりするの！……………いや？」

不意にイリスは少し不安げな顔をする。

それを見てはつと我に帰ったアリスは、ゆっくりと首を振る。

「……………ううん……………うれしい……………」

そう言って、小さく微笑んだ。

「あ……………」

イリスは初めて見るその表情に思わず見惚れしまった。

「あっ、あのっ！私もっ……………！」

自信の胸に手を当てて身を乗り出すステラに、アリスは小さな微笑みのまま頷く。

「……………うん……………わたしも……………みんなと……………友達になりたい……………シヤーロットと……………アクアとも……………」

言いながら、アリスは尋ねるようにシャル達を見る。

「わたしも、アリスちゃんとお友達になりたいな」

先程からずっと話を聞いていたのか、アクアはにっこり微笑み返した。

「良かったね、アリス！シャルももちろん……」
と視線を向けると、

「そもそも私とアレンは幼馴染みって言うか腐れ縁って言うかそう保護者なのよ私はだから……あ、な、何、もう上がるの？そうね、あんまり長風呂するのは良くないわ」

まだブツブツ呟いていたシャルは、こちらに気付くと一度お湯を被ってさっさと出て
つてしまった。

「……あー、まあシャルのことだから大丈夫だよ」

アリスは脱衣所の方を見ながら頬をポリポリと掻いた。

「わたしたちもそろそろ出よっか？」

「そうですね。アレン先輩達を待たせては申し訳ありませんし」

いつの間にか静かになっていいる男湯に目を向けて、アクアとステラも脱衣所に向かった。

「わたしたちも出よっ、アリス？」

「……うん」

泡を洗い流して、イリス達もその後に行く。

「……イリス」

「ん？」

イリスは突然呼び止めたアリスに振り返る。

「イリスは……誰？」

誰がどうなのかはつきりしないが、イリスは先程の会話からそれを推測する。

「わたしはねえ……お兄ちゃんが好きっ！」

羞じらう事も無く、朗らかに答えて出ていった。

「……………違う」

一人残ったアリスは、先程とは全く別の感情の薄い声を出した。

「イリスは……………なに？」

第六話：『旅に思わぬ出来事は付き物』（後書き）

久しぶりの更新になります。

今回は1つの話を幾つかに分けて小タイトルみたいなのを付けてみました。まあそこまで意味は無いっていう（笑）

ただちよくちよく場面が転換するんで、そのところが解りやすくなればなあと思つて付けました。

次話からは通常通りに戻します。

第七話：『意志と責務』

「ここは、どこ？」

何も見えないそこは、暗く深い闇の中だった。

『ひっく……っく……』

不意に女の子の声が聞こえた。

誰？

姿は見えない。ただ泣きじゃくる声だけが聞こえる。

『……グスッ……どうして……？』

どうして、泣いてるの？

声が届いていないのか、返事は無い。

『……ひっく……もお、いやあ……』

何が？

何故だろう。凄く胸が痛い。

『なんで、わたし……こんな……ひっく……』

ねえ、泣かないで？

辛い。苦しい。痛い。まるで女の子の感情がそのまま流れて来ているように。

『……………うう……………やっぱり……………わたし……………』

お願いだから。

やがて、少しずつ闇が晴れていく。

そこに居たのは

火の大陸到着の翌日、アレン達は『紅蓮華』採集の為に朝から宿を発っていた。

「それじゃあ、良い？」

目的地のキネリキア山までは距離がある為午前中は馬車で移動し、七人は現在、岩山の中を歩いていた。

「……………せーのっ！」

ゴツゴツとした山道を進む一同が最初に何をしたかと言うと……………

「ぬわああああ！外れたああああ！！」

またしてもくじ引きだった。今度はアマダでは無く細長い棒切れを引くタイプだったが。

「ホントあんたつてくじ運無いわよねえ」

何の変哲も無い棒切れを持って頭を抱えるアレンに、先端が尖った物を持っているシャルが呆れたように言った。

「そう言えば、去年の闘技大会の決勝トーナメントでもお兄ちゃん、

いきなり準優勝した先輩と当たってたもんね」

イリスはその様子を見て思い出したように苦笑する。

「その前の年は、確か予選で優勝した先輩と当たってたよね？」

「うう……」

同じように苦い微笑みを浮かべるアクアに、アレンはガツクリと頂垂れた。

「まっ、それじゃあこれで決まりね。ノア、どっちが先にやる？」

「……………任せる」

シャルと同じく尖った棒切れを持ったノアは、さぞどうでも良さそうに答えた。

「じゃあ私から先ね。私達が見本を見せたら今度は二人の番よ？」

言って、シャルは視線を後ろに向けた。

「はい」

「が、頑張ります……………！」

リオンは至って常の通りに、ステラは少し緊張した声を返した。

「そんなに緊張しなくても大丈夫よ、ステラ。二人とも、魔物は初めてよね？」

「は、はい」

苦笑するシャルに、ステラはやはり緊張した表情で応えた。

「あのー、僕は一応経験あるんですけど……………」

藍色のマフラーをこれでもかというくらいぐるぐるに巻き付けたリオンが、頬をポリポリ掻きながら言った。

「あら、そうなの？ 戦闘の経験も？」

「ええ、まあ……………」

「へえ〜。その歳じゃ珍しいな」

シャルを含め、アレン達も意外そうに驚いた。

「ふふーん……………じゃオリオンには援護無しね」

「えっ……………」

シャルのニヤリとした笑みにリオンの表情が固まった。

「良いじゃない。どうしてもヤバそうだったら助けてあげるわよ」

「……言わなきゃ良かった」

リオンは溜め息を零して頂垂れた。

「やっちまったな、リオン。……にしても、キネリキア山って新しく開拓された地域の割りには近かったな。ヴァルカノから三時間くらいか？」

それを笑いながら、アレンは岩だらけの山道をヒョイヒョイ進む。

「あら。ここ、まだキネリキア山じゃ無いわよ？」

「へっ？」

しかし、シャルの何気無い一言にキョトンとなった。

「お兄ちゃん、ここはまだウォール山脈の入口くらいだよ？」

イリスはやれやれと肩を竦めた。

それを見てアクアがくすくすと笑う。

「火の大陸は、北部と南部の間にすごく大きな山脈の集合体があるの。その中の一つがキネリキア山脈で……」

火の大陸中央部には、広大な山脈群が存在している。

その規模は大陸の実に三分の一を占め、北部と南部を隔てるように出来たこの山脈群を通称ウォール山脈と呼び、キネリキア山脈はその中程に存在していた。

アレン達を乗せた馬車は、道がある程度舗装された、山脈の入口を過ぎたところで一同を降ろしたのだった。

「要するにまだまだ掛かるって事。アレン、あんたまた馬車での話聞いてなかったでしょ？」

シャルは懲りずに人の話を聞かないアレンをジロツと睨み付ける。

「いやあ、今日は曇ってるから昨日よりは涼しいよなあ！」

アレンは在らぬ方向へと顔を逸らした。

「まったく、この馬鹿はホントに……」

悩ましげに額に手を当てるシャルに、リオンが乾いた笑いを零す。

「あ、あはは……それで、ここからどのくらい掛かるんですか？」

「そうねえ……」

シャルはギルドで貰った地図を広げると、少し考え込む。

「キネリキア山に着くのは大体二日半つてとこかしらね。でも『紅蓮華』の採集ポイントはたくさんあるみたいだけど、三十キロも採れる場所つてなると山頂辺りまで行かなきゃいけないから、そこからさらに一日半つてとこかしら？」

「そんなに掛かるんですか？」

リオンは往復するだけで八日も掛かると聞いて驚愕した。

「だから私達だけ他の班より一週間も早く出発したんじゃない。ガーデンに帰るのも合わせるとほぼ二週間掛かるわよ？」

「……………クエストつて、大変なんですね」

クエストの過酷さを改めて思い知って憂鬱そうな声を出すステラに、アレンは苦笑いする。

「あー、あんまりこれを基準に考えない方が良さそう？Sクラスだし普通なら長くて一週間くらい」

しかし、不意にその言葉を止めた。

「……………ノア」

「解っている」

ノアは常に無い程真剣な表情で呼び掛けるアレンに視線は向けずに頷くと、漆黒の光の中から身の丈以上の長さの愛刀を取った。

「シャル、お前一人の予定だったけど俺たちもやるぞ。この数は…

……………

「来るぞ」

言葉を遮って、ノアが左手で刀を構えた。

「なっ ……!？」

それとほぼ同時に、両脇にある崖から、茶褐色の狼型の魔物達が襲い掛かってきた。

金色こんじきの光の中から両刃の剣を構えたアレンは、自らの予想を上回る数に一瞬、息を飲んだ。

その数、三十余り。

「ガラムか！行くぞ、ノア！シャル、援護頼む！イリスとアクアはステラ達を護ってくれ！」

息を飲んだのもほんの一瞬、アレンは他のメンバーに指示を出す
と、ノアと共にそれらを迎え撃つ。

「……【闇影の剣】」
シャドウフレイム

ガルムの大群が飛び掛かる中、ノアが小さく呟いて刀を薙いだ。
その軌道に合わせて漆黒の刃がガルム達に襲い掛かり、その勢い
を殺していく。

「ナイス！【煌龍牙】！」
こうりゅうが

叫びと共にアレンが剣を素早く上下に振ると、そこから放たれた
二本の金色の光の刃が軌道上で合わさり、その姿を巨大な龍の顎へ
と変える。

金色の龍に飲み込まれたガルム達は、次々と地面に叩き落とされ
ていった。

しかし、

「いつ　！？」

ガルム達は地面に足を着けた瞬間、怯む事無く再び襲い掛かって
きた。

「効いてないよ！？」

後方でその様子を窺っていたイリスが、驚愕の声を上げた。

「危ないです！」

ステラが悲鳴のように叫ぶ。

「くそっ！」

が、
躲し切れないと判断したアレンは、剣を構えて防御の姿勢を取る。

「退きなさい、アレン！」

「っ！」

不意に後ろから声が聞こえ、咄嗟に横へと跳び退く。

直後、アレンの居た場所を、紅蓮の業火が通過した。

燃え盛る火炎はそのまま目前にいたガルム達を焼き尽くす。

「これなら……」

ギリギリで炎を避けたアレンは、立ち上がって頬に伝う汗を拭っ

た。

しかし、

「……おいおい、冗談だろ？」

全身に火傷を負いながら、それでもガルムの群れは立っていた。

「流石に効いていない訳では無さそうだが、これは……」

ノアは再び刀を構えながら、敵の様子を窺う。

少なくとも、中級魔法レベルの攻撃が三発、確実に命中した。

しかし、前にいる何体かは少し蹠踉よろめいてはいるが、後方の数体はその素振りすら見せなかった。

「これが、魔物……」

初めて見るその強さに、ステラは只々息を飲むしか無かった。

「……変だよ、あれ」

ふと、その前方にいたイリスが呟いた。

「ガルムって下級の魔物だよ？いつもなら最初のお兄ちゃん達の攻撃で終わってるのに……」

「数も、あんなに群れてるのなんて見た事ないよね……」

その隣にいたアクアも厳しい面持ちをしていた。

「どういう事ですか……？」

「わかんない……けど」

言い淀むイリスの言葉を、

「普段より手強い、ってことですね」

ステラの隣にいたりオンが引き継いだ。

イリスはそれに頷くと、前方で剣を構えているアレンに向き直す。

「お兄ちゃん！」

それに気付いたアレンは、視界にガルム達を入れたままイリスに視線をやる。

「……」

イリスの言わんとしている事を察して、ほんの一瞬だけ熟考する。討ち漏らすつもりは無いが、万が一この強さのガルムがアレン達を掻い潜って後ろの四人に向かってしまえば、今初めて魔物を見た

ばかりのステラと力が未知数のリオンに戦闘をさせるのは危険過ぎる。

アクアは防御系統の魔法は得意だが攻撃系統は苦手なので、そうなるに敵を迎撃出来るイリスをこちらの戦闘に集中させるのは不味い。

戦闘に於いては、常に最悪のケースの為に保険を掛けておく必要があるのだ。

(……つっても考えが甘過ぎたか。予想より多かつたけど、この三人なら初手で決められると思ったんだけどな………こうなったら) 自らの考えの甘さを再認識して、改めて作戦を練り直す。

しかし、

「……！」

ガルトム達が、突如一斉に吠え始めた。

「やべえ、避ける！」

アレンは咄嗟に叫んで真横に大きく跳んだ。

直後、地面から鋭く尖った岩の棘が次々と突き出し、アレン達目掛けて一直線に岩棘がんきよくの道を作った。

それは後方に居たイリス達にも襲い掛かる。

「こちらにも来ました！」

「大丈夫！」

慌てて剣を構えるステラ。しかしその目前で、イリスが庇うように立ち塞がった。

「アクア！」

「うん！【水鏡スプラッシュウォールの盾】！」

アクアが叫ぶと正面に紺青色の魔方陣が現れ、そこから水が滝のように落ちて岩棘を塞ぎ止める。

「【瞬煌ランスクリントの槍】！」

叫びと共に右手を突き出したイリスの正面に銀色の魔方陣が現れ、一筋の閃光が水の壁ごと岩棘を貫き砕いた。

「……………凄い！」

完璧な連携でいとも簡単に攻撃を防いだ二人に圧倒されたステラは、感嘆の声を漏らした。

「くそつ、魔法の威力まで上がってんのかよ……」

それを見ていたアレンは、体勢を立て直しながら悪態を吐いた。

「作戦変更だ！シャル！イリスと交替してステラ達を守ってくれ！」
その指示にシャルが異を唱える。

「ちよつと待ちなさいよ！私じゃ！」

「理由はお前自信が誰よりも理解しているだろう？」

噛み付くように叫ぶシャルを、ノアが温度の低い声で制した。

「つ！………解つたわよ！イリス！」

言葉を詰まらせたシャルは、自分に言い聞かせるように叫んで後退していった。

「……サンキュー、ノア」

「お前の判断は正しい。この状況ではやむを得ないだろう」

「……ああ、ありがとう」

察してくれる親友に、アレンはもう一度礼を述べた。

「お兄ちゃん」

シャルと交替してこちらにやってきたイリスが声を掛けた。

「イリス、俺とノアが食い止めるから上級魔法を頼む」

「うん」

頷くイリスに、アレンはしゃがんで顔を近付ける。

（ノア達が知ってるやつ以外で詠唱破棄は使うなよ。最近は上級自体使ってないし、ステラとリオンもいる）

（うん、わかった）

アレンはしっかりと頷くイリスの頭を軽く撫でる。

「よし、頼んだぞ？行くぞ、ノア！」

再び剣を構えたアレンは、ノアと共にガルムの群れに駆けていった。

「二人とも、解ってるとは思っけど肉体強化は解いちや駄目よ？」
後ろに下がったシャルは、視線を前に向けながらステラとリオンの注意を促した。

「それから、特にステラは武器が似てるからアレンとノアの動きを良く観察する事。予想外の事ばかりだけど、ぼけっとするのは時間が勿体無いわよ？」

「は、はい……！」

こんな時でも注意と向上心を怠らないシャルの言葉に、ステラは気を引き締めて注意深く前衛の二人の動きを観察する。

「アクア、さっきのより強いのが来る前に……」

「わかってる。上級魔法の詠唱、やっておくね？」

アクアは頷くと、目を閉じて呪文の詠唱に入った。

「待機詠唱ですか？」

シャルは尋ねたりオンに頷く。

「ええ、いちいち攻撃された後に詠唱してたんじゃ間に合わないもの。まあ、攻撃が来る前に片が付けばそれが一番なんだけど」

予め詠唱を完成させておく事で魔法の詠唱に付き物の常に後手に回るというデメリットを回避する技術を、待機詠唱と呼ぶ。

これは主に前衛で闘う戦士タイプ、魔導戦士タイプの者が詠唱放棄の修得が困難な上級魔法を攻撃の連携に使用する際に用いられるが、今回のように敵の攻撃を高威力の魔法で即座に防ぐ為にも利用される。

「でも、なんで上級なんですか？シャル先輩もいるし、二人で中級を使った方が詠唱放棄も使えて消費魔力も少ないんじゃない？……？」

もつともな意見に、シャルは顔を顰める。

「水属性程じゃ無いけど、地属性と同系統の火もそこまで有効じゃ無いのよ。もしさっきの中級レベルよりも強いのが来たら、どっちかが上級を使わないと駄目ね」

「じゃあ、シャル先輩が使った方が相関関係的にいいんじゃないですか？」

「それは……」

それを言うなら風属性が得意な自分が使えばいいのだが、リオンは解っていて敢えてそこは切り出さない。

「シャル先輩？」

言葉を濁すシャルに怪訝な目を向けるリオン。しかしシャルは一向に答えようとしないので、すぐに前方の戦いに意識を戻した。

「……………」

ギリツ、と歯軋りが聞こえた気がした。

「らあッ！」

イリスが詠唱をしている間ガルム達を引き付けるというアレンとノアの手筈は、結果的に成功していた。

ガルム達は完全に二人を獲物に特定し、包囲していたのだ。

しかし、二人は三十体ものガルム達を相手に苦戦を強いられていた。

「くそっ、何なんだよこいつら！」

「魔法や耐久力も含めて、基本的な能力が中級の高レベルまで上がっているようだな」

互いに背を合わせて武器を構えながら、頬に付いた返り血を拭う。

辺りには既にガルムの死体が何体か転がっていた。

「こりゃ、いよいよイリス頼みだな」

言って、アレンは若干引き攣り気味に笑った。

「……来るぞ」

その直後、様子を窺っていたガルム達が再び襲い掛かってきた。

「ハアッ！」

アレンは正面から跳び掛かってきた一体を、剣で攻撃を受け止め

ると同時に右足で蹴り飛ばした。

そのまま今度は右手から襲い掛かってきた別のガルムを回し蹴りで弾き飛ばし、その勢いを利用して別の一体を突き刺す。

「ッ！」

突き刺したまま、思い切り剣を横に振ってその一体を他のガルムにぶち当てた。

「伏せろ」

「っ！」

不意に声が聞こえ、咄嗟に頭を低くする。

直後、アレンの頭上をノアの刀が掠めた。

長いリーチを活かして弧を描くように薙かれた一撃はその軌道上にいたガルム達を一気に吹き飛ばし、何体かを絶命させた。

「……シャルもそうだったけどさ、何でお前らはいっつもギリギリになつて避けるとか言うんだよ」

一歩間違えれば自分が餌食になり兼ねない援護に、アレンが抗議する。

「ああ、お前がギリギリまで引き付けてくれると楽に仕留められるからな」

「困かよ！」

非情の言葉に叫ぶアレンに、ノアは小さく溜め息を吐く。

「大体、お前は乱戦になると隙が出来易過ぎる。その尻拭いをしてやっっているだけだ」

そんな事より、と続けて、ノアは周囲を見渡す。

「始業式での学園長の言葉を、覚えているか？」

「何だよ、いきなり？始業式……？」

脈絡の無い問いに、アレンは眉を寄せた。

「魔物の凶暴化についてだ」

それを聞いたアレンは、はっと真剣な表情で息を飲んだ。

「……俺、寝てた」

あまりの間抜けさに、ノアは溜め息すらも出なかった。

「……なら、この話は無しだ」

さつさと刀を構えるノアの台詞は心無しか冷たかった。

「ちょ、ちょっと待ってっ！気になるだろ!？」

アレンは慌ててそれを引き留めた。

それを見て仕方が無いといった風に溜め息を吐いたノアは、アレンに背を預けたまま口を開く。

「……近年、魔物が凶暴化しているらしいという事が、五大大陸と『ガーデンガールデンの庭』の調査で判明したそうだ」

「でも、今までのクエストじゃ普通だったぞ？いつからなんだ？」
眉を寄せるアレンに、ノアも頷く。

「話では五年程前から観測されていたそうだが、少なくとも前回の六者定例会の時点ではこれ程までの例は確認されていなかっただろうな。で無ければ、始業式の際にもっと警告する筈だ」

「……どっちにしろ、今回のクエストは結構やばそうだな」

アレンは剣を握る手に力を込めて、さらに気を引き締めた。
身構える二人に、残っている二十体程のガルトム達がジリジリと距離を縮める。

(……本能でわかってんのか、ノアの間合いを?)

ガルトム達は、ノアの長大な間合いの僅か一歩手前で様子を窺っていた。

「はっ、来ないならこっちから……」

アレンは迎え撃つのをやめて自ら攻撃を仕掛けようとする。しかし、

「っ！やべえ、ノア！こいつら……!」

気付いた時には、既に手遅れだった。

ガルトム達が再び大きく吠え、二人の周囲に幾つもの茶褐色の魔方陣が現れた。

アレンは咄嗟に防御魔法を展開しようとするが、

「クソッ、間に合わ……」

魔法陣から現れた夥しい数の岩の槍が、二人を飲み込んだ。

アレン達の戦闘を後方で見ていたシャル達のうち、最初に異変に気付いたのはリオンだった。

「どうしたんですかね？ガルム達が動かない……」

先程までの猛攻が嘘のように、今はただ低く唸るのみであった。「多分、ノアの間合いが長いから迂闊に近付けないんでしょうね」答えながら、シャルはイリスに視線を向ける。

れ、解き放つは

詠唱が後半に入ったようだ。イリスの魔力が徐々に高まっていくのが解る。

（この分なら、こっちは要らないかもね）

そう思った時だった。

「シャル先輩！」

突然、リオンが嘗て無い程に叫んだ。

「まずいですよ、あれ！」

何をそんなに焦っているのか、シャルはリオンの視線の先を追う。そこにいたのは、未だ低く唸り続けるガルムの群れだった。

「一体どうした まさかっ!？」

気付いて、シャルは即座に瞳に魔力を集中させる。

視えたのは、ガルム達の膨大に高まった魔力だった。アレンとノアはまだその事に気付いていない。

「アレン！」

シャルはすぐにガルム達に炎を放たんと右手を掲げる。しかし、

（駄目！ここからじゃ二人に当たる……!）

二人を護るにはガルムだけに攻撃を当てるか、二人の周囲に結界を張る以外方法が無かった。

「……何で、こんな時にっ……!」

シャルは爪が食い込む程強く拳を握り、歯軋りする。

(何か、何か別の……！)

しかし、考えている時間は無かった。

「……！」

アレン達の周囲に魔方陣が現れ、無数の岩槍がその尖端を二人に向ける。

「アレン……！」

直前で気付いた二人に防ぐ術は無く、岩槍の弾幕は無情にもその肉体に襲い掛かった。

今此処に、彼の者達を護る盾と成らん！【断絶の氷界】アイスリジェクション！

「……………氷の、壁？」

攻撃が当たる瞬間に目を覆っていたステラが、その場を包む冷気を目の当たりにして呟いた。

無数の岩槍は、二人の周囲に現れたドーム型の透き通った氷に依って阻まれていた。

シャルはすぐに事態を理解して、隣に顔を向ける。

「アクア……！」

「……………ぎりぎり、間に合って良かった」

泣きそうな声に、アクアはにっこりと微笑んだ。

「……………でも……………出来たら早く……………何とかしてほしい、かな？」

しかし、両腕をアレン達に向けたまま、それは少しずつ辛そうなものへと変わっていった。

シャルが視線を前方に戻すと、徐々にだが確実に、岩の槍が氷の壁に減り込んでいった。

「維持型だから……………魔力を籠めたらある程度は、何とかなるけど……………水属性だとかっぱり……………長い間は、駄目みたい……………」

微笑みを浮かべるその額には、僅かだが汗が浮かんでいた。

「解ったわ！アレン、ノア！早く何とかしなさい！」

シャルは頷き、二人に向かって叫んだ。

「……………だそうだが？」

「……………無茶言っただけの」

九死に一生を得た二人は、シャルの叱咤に溜め息を吐いた。

「……………これ、中から何かやったらどうなるかな？」

アレンは未だに岩槍を食い止めている透明な壁を見て呟いた。

「氷が崩れた瞬間、二人とも串刺しだろうな。これだけの量だ、俺達が使える防御魔法では防ぎ切れまい」

淡々と答えるノアに、再び溜め息を吐く。

「……………ってことは、やっぱりイリス待ちか？」

「そう悠長な事も言っただけでいいん様だが？」

ノアは視線を氷の壁の向こうに移していた。

「げっ……………」

その先で、魔法を発動し終えたガルド達が再び襲い掛かろうと身構えていた。

「差し詰め、俺達は蜘蛛の巣に掛かった虫か、はたまた網に掛かった魚か……………」

「悠長なこと言っただけじゃねえっ！」

呑気に顎に手を当てているノアを見て、アレンは頭を抱えて泣き叫んだ。

「シャル！外からこの岩、何とか出来ないか！？」

「……………って言ってますけど？」

「無理よ、私じゃ氷を溶かすだけなもの！ステラ、何とか出来る？」

「わ、私もあの数を一度にどうにか出来る魔法はちよっと……………」
ステラは申し訳無さそうにシユンとなった。

「……………はあ。分かりました、僕がやりますよ」

すると、見兼ねたように溜め息を吐いたりオンが言った。

「出来るの？」

「まあ風属性は得意ですし、なんとかしますよ」

不安げな表情をするシャルにそう言うと、リオンは一步前に出て右手を突き出した。

「っ」

リオンが短く息を吐くとその右手に暗緑色の光が集まり、そこから細長い何かを抜き出した。

「……………弓？」

現れたのは、小柄なりオンには大き過ぎる翠の弓だった。

「シャル先輩……………あの弓、弦が……………」

ステラの言葉に気付いて、シャルはもう一度良く見た。

確かに、弓に必要な不可欠な弦が張られていない。それどころか、放つ矢すら見当たらなかった。

(どうするつもり……………?)

シャルは怪訝な顔でリオンを見るが、今はただ見守る他無かった。

「……………ん」

リオンは弦の張られていない弓を少しだけ見つめながら、どこか物憂げに何かを呟いた。

(……………?)

小さ過ぎて良く聞き取れず、シャルは首を傾げた。

それを余所に、弓を構えたリオンはまるで弦と矢があるかの如く腕を引く。

すると暗緑色の光が弦となり、矢となってその手中に収まった。

そして狙いを氷の壁に阻まれている無数の岩槍に定め、口を開く。

「……………【爪襲スラストゲイルの疾風】」

リオンが光の矢から手を離すと、ブワツと風が吹き荒れ、藍色のマフラーの尾が激しく揺れた。

「きゃっ　!？」

突然の突風に、ステラが驚いてスカートと髪を抑えながら声を上げた。

シャルも同様にそれらを押さえるが、目は閉じずに光の矢の行く

末を見守る。

光の矢はまさに疾風の如く駆け、岩の槍にぶつかって爆ぜた。すると無数の風の刃が現れ、一気に全ての岩槍を細かく切り刻んでいった。

「凄い……」

「……リオン、あんた……」

呆気にとられながら、シャルは前を向いて顔が見えないリオンを見る。

それと同時に、アクアの氷の壁が甲高い音と共に崩れ落ちた。

「よし！サンキュー、リオン！行くぞ、ノア！」

再び自由になったアレンは剣を構える。

「いや、待てアレン。来るぞ」

しかし、ノアはそれを遮った。

「来るつて、何がだよ？」

首を傾げるアレン。その耳に、ふと声が届く。

その力、我が意志と共に！その意思、我が力と成って！遙かなる天上より、彼の者達に聖光の裁きを齎さん！もたら

振り返ると、銀色の魔方陣の上に立ったイリスが目を閉じながら詠唱を続けていた。

魔力の波動に依って巻き起こる風に長い銀髪を摩かせながら、右手の人差し指を天高くと突き上げたイリスの銀の双眸が、敵を捉える。

「ディヴァインエクスキュージョン【断罪の天梯】！」

直後、空に広がる灰色の雲に、巨大な銀色の魔方陣が浮かび上がった。

それに気付いたガラム達が一斉に空を見上げる。

「……！」

やがて雲の隙間を通して幾筋もの眩い光が射し込み、アレンとノアの周りを包み込んだ。

「……天使の梯子」

ポツリと呟いたステラは、眩しいにも関わらずその光景から目が離せなかった。

それは、雲から漏れた光の筋が、まるで地上にいる天使達が天に掛け登る為にし伸べられた光の梯子のように見える事からそう呼称される自然現象と、酷似していた。

ただ違うのは

「……………えっ？」

ようやく光が収まったところで、ステラが今度はそんな声を出した。

アレン達を囲っていた二十数体、死体を含めれば三十弱もいたガラム達が、一体足りとも見当たらなかった。

「はい、おしまいっ」

イリスが手を降ろして笑顔で息を吐いた。

「おしまいって……………あんなにいたガラム達は？」

リオンも何が起きたのか理解出来なかったらしく、呆気に取られていた。

「うーん、詳しく説明するとなるとちょっと難しいんだけど……………」

イリスは人差し指を頬に当てると、

「簡単に言っちゃえば、分解しちゃった」

さらっと明るく、とんでもなく恐ろしい事を言った。

「光に触れた魔法生物の体内魔力を利用して、魔力の量に比例した分だけ肉体を分解する魔法なの。結構強力なんだけど色々制約があつて、例えば……………」

「い、いえ、もう結構です……………！」

聞くだけでも恐ろしいが、それがこんな無邪気な笑顔から放たれたと思うと、ステラもリオンも今後のイリスに対する態度を改める必要性を感じていた。

「でも、あんなすごい魔法を使えるんならなんでさっさと使わなかつたんですか？」

「それは俺も聞きたいとこだな」

剣を仕舞ったアレンとノアがそこにやってきた。

「後で詠唱始めたはずのアクアの方が早かったし、結構ギリギリだったんだぞ？」

「それは、その……」

言い淀むイリスは、視線を横に逸らした。

「……ち、ちよつと久しぶりだったから、思い切つて魔力強化の魔法も使つてたら思ったより時間掛かっちゃつて……あ、あはは。ほら、あれつて詠唱文長いから……」

顔を赤くして苦笑いを浮かべるイリスに、アレンは呆れて溜め息を吐く。

「お前な……それであんな凶悪な威力になつてたのか。普通あのくらしいの奴らなら跡形もなくなるまでならないだろ」

「だつてえ……」

少し拗ねた顔をするイリスの頭に、アレンは仕方無いなといった風に笑つて手を置く。

「まつ、何はともあれ助かったよ。ありがとな」

「うん！」

イリスは嬉しそうに頷いた。

「アクアとリオンもありがとな。つてかりオン、お前すげえな」

「あー、まあ、いや、はい、それほどでも……」

急に褒められて恥ずかしくなつたのか、リオンはもぞもぞとマフラーに顔を埋めた。

「アレン、そろそろ移動するぞ。また襲われても面倒だ」

アレンはノアの言葉に頷いて、全員を見渡す。

「初っ端から苦戦したけど、とりあえず進もう。さすがにあんなに群れてるのはもういないだろ。アクア、俺とノアの治療は休憩の時に頼む」

「うん。ステラちゃんも手伝つてくれる？」

「は、はい……！」

アクアのにつこりした微笑みに、ステラは慌てて頷いた。

「大丈夫か？この後はステラとリオンを中心に戦うことになるから、結構きついぞ？」

心配げに尋ねるアレンに、ステラははっきりと頷く。

「大丈夫です。私も何かお役に立ちたいですし……」

先程の戦闘で何も出来なかった自分が嫌なのだろう。どこか悔しさが窺える声色だった。

それを察して、アレンは穏やかな表情を向ける。

「そっか。シャル、戦闘は予定変更して三、四に分けて良いよな？」

「仕方無いわね。あんなの相手に二人だけっていうのもね……」

溜め息を吐いたシャルは、地図を持って先頭に立った。

「とにかく、予定外に遅れちゃったわ。先を急ぎましょう」

一同は、気を取り直して再び先に進んだ。

二日後。

最初にいきなり苦戦を強いられた一同は、その後特に問題無くキネリキア山の手前まで辿り着いていた。

「やあッ！」

掛け声の直後、肉を裂く音と共に、生命いのちの終わりを告げる叫びが木霊する。

「ハアッ、ハアッ……」

「お疲れ、ステラ」

息絶えたガルムの前で息を切らしたステラに、イリスが近付いて声を掛けた。

「だいぶ慣れてきたみたいだな」

「だが、未だ動きが堅い。常に相手の動きの先を読んで行動しろ」

「はっ………はい……！」

賛否両論を口にするアレンとノアに、巨大な剣を仕舞ったステラ

は顔に付着した血を拭って頷いた。

「みんな、シャルちゃんが見つけたから来てっつて〜！」

ふと、そこから少し離れたところからアクアの声が届いた。

「おっ、じゃあ行くか」

それに気付いたアレンが、ガルムの死体を担いでそちらに向かう。

「わたしたちも行こつ、ステラ。今日は水場あるかなあ？」

「昨日は途中から土砂降りでしたし、少し水浴びをしたいですよね。私なんて身体中から血の臭いがして……」

あまり期待を含んだ顔はせず、二人もそれに続いた。

「……………」

最後尾に行くノアは、無言のままに歩を進める。

しかし不意に立ち止まると、遠くを見るように西に視線を向けた。ちょうど岩山の間を縫うように、茜色の光がその場をチリチリと照らしていた。

「……………そろそろ日が沈むな」

呟いて、ノアは再び歩き出した。

「じゃ〜ん！今日はシチューにしてみましたあ〜！」

山に入って三度目の夜を迎えた七人は、崖下に出来た洞窟の中で火を焚きながら食事に入っていた。

「おおっ、美味そー！……………あつ」

鍋から漂う食欲を誘う匂いに、アレンの腹の虫が豪快に鳴った。

「ふふつ。アレン君、そんなに空腹空いてたの？」

「あんだ、今日はステラの戦闘見てただけじゃない」

くすくす笑うアクアの隣で、シャルが呆れた声を出した。

「お兄ちゃん、慌てなくてもすぐに装ってあげるから……………あつ」

今度はシャルと同じく呆れたように笑うイリスの腹の虫が盛大に

響いた。

「この兄妹は……」

「……すいません」

それを聞いてやはり呆れたように溜め息を吐くシャルに、二人は申し訳無さそうに俯いた。

「ま、まあ良いじゃないですか。それより冷めるから早く食べませんか？」

リオンが苦笑しながら言った。

「それもそうね。せつかくイリスが作ってくれたんだし、冷めないうちに頂きましょうか」

それに頷いたシャルは、イリスと共にテキパキとシチューを配っていく。

全員に行き渡った事を確認すると、シャルに倣ってアレン達も手を合わせた。

「それじゃあ……頂きます」

「おかわり！」

「早過ぎだろ（でしょ）！！」

ほぼ同時におかわりを求めたイリスに、アレンとシャルが全力でツッコんだ。

「明らかにおかしいだろ！今のやり取りのどこに食う時間があったんだよ！」

「あんたね、前から思ってたけどちょっと非常識にも程があるわよ！？」

一気に捲し立てる二人に、イリスは少し嫌そうな顔をする。

「まあ、二人とも細かいこと気にし過ぎだよ。ねえ、アクア？」

「えっ？えっと、細かい……のかな？」

振られたアクアは、何と言って良いのか解らず苦笑いを浮かべるしか無かった。

「そ、それよりも、このお肉はどうしたんですか！？昨日はありませんでしたが！」

微妙な雰囲気になんか耐え切れなくなったステラが、出し抜けに尋ねた。実際、山に入って最初の昼食こそ街で買っておいたおにぎりだったが、それ以降は簡素なスープや干し肉だったので気になつてはいないのだ。

「おいおい、何言つてんだよ。さっき自分で仕留めたんだろ？」

アレンがやれやれと肩を竦めた。

「……………仕留めた？」

まさか、とステラの顔が硬直していく。

「これ、さっきのガルムのお肉だよ？」

「ゴフツ　！？」

言つた途端、ステラは思い切り噎せた。

「お、おいステラ、大丈夫か？」

「ステラ、はいお水！」

ステラは慌てて差し出された水筒を受け取ると、それを勢い良く口に付けて水を飲んでいく。

「　ゴホツ、ゴホツ……………！あ、ありがとうございます……………」

何とか支えを直すと、息を切らして礼を述べた。

「そ、それで、すみませんが先程、何の肉と……………？」

あくまでも聞き間違いを望むステラ。

「だからガルムの肉だつて、ステラがさっき倒した」
しかし現実には腑しかなかった。

「ま、魔物の肉というのは食べられる物なんですか？」

俄には信じ難いようので、ステラは怪訝な表情をする。

「毒さえ無きや大概のものは食えるさ。なあ、ノア？」

「……………流石に昨日戦つたストーンガルムの肉は硬くて食えんがな」

ノアはそう言つて躊躇いもなく肉の入つたシチューを口に運んだ。ストーンガルムとはガルムの亜種で、名前の通り身体が岩で覆われている為その肉も非常に硬く、とても食べられた物では無い。

どうやらあの辺りの殆どのガルムが一昨日の一戦にいたらしく、今日の昼に出逢うまではずっとそのストーンガルムが現れていたの

だった。

「ステラ、食べないの？」

「うっ……………」

イリスが尋ねると、ステラは苦い顔をして隣を見る。

そこには、何の問題も無くシチューを平らげているリオンがいた。

「……………頂きます」

結局、観念したように口に運んだのだった。

「魔物って言えば、一昨日のあれ以降に出逢ったのはみんな普通でしたね」

「そうだな。まあそれに越したことはないんだけど、何だったんだろな？」

ふと口を開いたりオンに、アレンは手を止めて考え込む。

「解らない事は考えない主義じゃ無かったか？」

「そりゃ自分に直接関係ない時だけ。今は直接関わってんだから、ちよつとは考えねーと」

珍しく皮肉を籠めた言い方をするノアに、アレンはスプーンの先をクルクルさせながら反論する。

「お兄ちゃん、お行儀悪いよ？」

「おっと……………！」

透かさず注意されて、慌てて手を止めた。

「まっ、いくら考えても無い頭じゃ程度が知れてるわよ」

「じゃあ、学年トップクラスのイグニス様のご意見はどうなんだよ？」

「やれやれと肩を竦めるシャルに少しむっとして、アレンは嫌味な声を出した。

「……………」

「シャル？」

てつきり噛み付いてくると思っていたアレンは、どこを見るでもなくぼーっとしたシャルに首を傾げた。

「えっ？あっ、ああ、そうね。サンプルでもあれば何か解ったかも

知らないけど……」

はっ、と気付いたシャルは慌てたように取り繕った。

「うっ、ごめんなさい」

その言葉にイリスがシユンとなった。

「ああ、別にイリスを責めてる訳じゃ無いわよ？でも群れてたのは強引にでも説明出来るかも知れないけど、やっぱりあの異常な強さを解明するとなるとねえ……」

うーん、とその場に重い沈黙が流れた。

「ああ、もう！やめだ、やめ！今んとこあいつら以外出てないんだから、この件は保留！」

アレンは頭を掻き^{むし}りてシチューを飲み干した。

「そうね、帰ったらレポートと一緒に報告しましょう。また出たらその時よ」

シャルは肩を竦めると、空になった器を置いた。

「イリス、アクア、ステラ。食べ終わったら着替えの準備しときなさい」

「何で？」

イリスはいつの間にか装っていた三杯目のおかわりを平らげている！首を傾げた。

「洞窟の奥に温泉が湧いてたのよ。後で湯浴びに行きましょう？」

「本当ですか!？」

それを聞いたステラが、瞳をキラキラと輝かせて歓喜の声を上げた。

「良かったね、ステラ」

「はい！」

余程嬉しかったのか、ステラはガルムの肉などモノともせずシチューを平らげていく。

シャルはその様子に苦笑しながら、アレン達男子に視線を向けた。「アレン達も制服出しておきなさいよ？昨日の雨もあったし、皆が入った後に全員分まとめて洗っておくから。アクア、手伝ってちょ

うだい？」

「うん。特にノア君たちののは、返り血の臭いがすごいもんね。あっ、そうだ、アレン君」

アクアは何かを思い出したようにアレンを見た。

「後でちよつと話したいことがあるんだけど……温泉に入った後でいいから」

「別に良いけど……何だ、改まって？」

「ちよつとね……」

不思議がるアレンには答えず、アクアはただ意味深な声のみを返した。

話が纏まったところで、シャルがパン、と両の掌を合わせた。

「じゃあこの後はそんな感じで。明日の昼過ぎにはキネリキア山に入るから、あんまり夜更かししちゃう駄目よ？」

はい、と遠足に来た子供のような返事が上がった。

深夜。

月明かりに照らされた岩山にて、影が一つ、動いた。

「ふぁ……っ」

皆が寝静まった頃に突然目が覚めたアレンは、これまた突然尿意に襲われたので洞窟を離れて用を足しに来ていた。

「……さむっ」

肌を刺すような寒さに腕を抱えて、ブルツと身を震わせた。その際に吐いた白い息から現在の気温が窺える。

「……月が綺麗だなー」

腕を擦りながら空を見上げると、先日の雨が嘘のように澄み切った空から、幻想的とも言える光が地上を照らしていた。

「ん？」

ふと、視界の端が明るくなったような気がしてそちらに視線を向ける。

すると再び、洞窟のある方角が明るくなった。

「……………何だ？」

眉を寄せながら、アレンはそこに近付いていく。その際にも何度か同じ現象が起きた。

やがてその明かりが洞窟のある崖の上から漏れている事が判り、どうしたものかと立ち止まって周囲を見渡すと、

「おっ、あそこからなら……………」

ちょうど手で掴めるくらいゴツゴツとした部分を見付けたので、そこから上へと登っていく。

「よっ、と……………おっ」

少し高めの崖を登ると、岩に遮られた向こう側が再び明るくなった。

「ゴッそりと、岩の陰から様子を窺うと、

(……………シャル?)

その先に居たのは、普段のポニーテールとは違い、緋色の髪を腰まで伸ばしたシャルの横顔だった。今は制服では無く、動き易そうな裾の長いパンツと長袖の上着に身を包んでいる。

(何やってんだ、こんな時間に……………?)

アレンは息を潜めて少し様子を窺う事にした。

「……………もう、一度……………」

少し息を切らしているシャルは、突き出した右腕を左手で掴みながら何かを呟き始めた。

やがてシャルの身体を緋色の魔力が包み込み、右の掌の上に炎が集まり始める。

「……………ゴッ!?!?」

しかし、炎は突如弾け飛び、シャルの身体を吹き飛ばした。

「……………まだ、まだよ」

シャルは倒れた身を起こすと、再び先程と同じ行動を取る。

同じように構え、同じように眩き、同じように吹き飛ばす。そして、同じように身を起こすのだった。

「……………」
アレンは、ただその光景をじっと見続けた。
その脳裏に、夕食の後のアクアとの会話が蘇る

洞窟を離れて誰も居ないところまで来た二人は、大きな岩の上に並んで腰掛けた。

「……………で、話って何だ？」

単刀直入に、アレンが問い掛けた。

「うん……………」

問われたアクアは、膝に手を置きながら少しだけ間を作った。温泉に浸かった後だからか、唇や頬にほんのりと朱が差していて普段より色つぼく見える。

その艶やかで艶やかな唇が、ゆっくりと開いた。

「シャルちゃんのことなんだけど……………」

言われて、アレンの手がピクリと反応した。

「多分、アルモニアでの騒ぎからかな？ちよつと、様子が変だと思
うの」「……………」

傍らでじっと黙ったままのアレンに、アクアはそのまま言葉を続ける。

「確かにシャルちゃんは、普段からちよつと怒りやすいし、気に入らないことには真正面から文句を言うし、ギルドで会ったような人
たちには多分、ああいう風になつちやうんだろうけど」

「……………まあ、な」

中々ぶつちやけるアクアに、アレンは心中で苦笑いを浮かべる。

「でも、少なくとも普段のシャルちゃんは、みんなを巻き込むような喧嘩はしないし、一見無鉄砲に見えても、頭の隅でちゃんと冷静に考えて対処してると思うの」

アクアは指先を弄びながら、じっとそれを見つめる。

「極めつけは一昨日の戦闘の後。シャルちゃん、空元気、って言うのかな？明るく振る舞ってるけど、すごく元気がないの。多分、付き合いが長いアレン君やイリスちゃんは気付いてると思うけど……そこまで仲が良いわけじゃないノア君でも気付いてるくらいだから相当だと思う」

「……ノアもそう言ってたのか？」

アレンの問いに、アクアはゆっくりと首を振る。

「直接聞いたわけじゃないけど、見てればだいたいわかるよ。いつもより溜め息多いし、顔だってしょっちゅう顰めてるもの」

あの鉄面皮がそんなにしょっちゅう顰めつ面を作っていたとは驚きだが、恐らく幼い頃からの付き合いであるアクアだからこそ判るくらい微妙な変化なのだろう。

「それでね？その原因って……」

俯いたまま窺い見るような視線を送るアクアに、アレンは少し溜め息を吐く。

「……他にもあるんだろうけど、多分根っこの部分はアレだろうな」

「やっぱり……」

納得して、アクアは右手を胸に置いて顔全体をアレンに向けた。

「あのね？わたしやノア君はそのことについて詳しくは知らないし、無理に聞くつもりはないんだけど、シャルちゃんが元気がないところも見たくないの」

深い夜空のような紺青色の瞳が、アレンの金色の瞳をまっすぐに見つめる。

「でも、シャルちゃんに何かしてあげられるのは、事情を詳しく知ってる人だけ。だから……」

「わかってる」

言葉を遮って、アレンは後頭部を搔く。

「あいつが無理してるってことも、俺がやんなきゃいけないってこととも、これでもわかってるつもりだよ。あいつがああなったのは、俺の所為だから……」

そこで、アレンは言葉を止めた。

「……何があつたかは、やっぱり話せないんだよね？」

「……悪い」

謝るアレンに、アクアは目を閉じてゆっくりと首を振る。

「気にしないで。誰にだって、言いたくないことくらいあるもの」

再び覗いた瞳から放たれる優しい光に、アレンはただ一言だけを告げる。

「……ありがとう」

（……って言ったのは良いけど、どうすっかなあ……）

岩陰に隠れながら、アレンは後頭部を搔いて溜め息を吐く。

このままでは駄目だという事も、自分がやらなくてはならないという事も、先刻話した通り解っている。

そう、やりたいという意志以上に、これはやらなくてはならない責務なのだ。

（それはわかってる。もちろんやることはやるさ。でも、それだけじゃ根本的な解決にはならないんだよなあ……）

声には出さずに、心中で再び溜め息を吐く。

（まっ、それを今ここで考えてもどうにもならないか。今は先に……）

「……あんだ、そんなとこで何やってんの？」

「おおっツ！？」

突然声を掛けられて、思わず素っ頓狂な声を上げて尻餅を搗いて

しまった。

視線を上げると、シャルが左手を腰に当ててこちらを見下ろしていた。どうやらいつの間にか意識を思考に集中し過ぎていたらしく、シャルが近付いてきた事に気付かなかったようだ。

「よ、よお、シャル……」

「だから、何やってんのって言ってるのよ」

慌てて上手い言い訳が出来ないアレンに（そもそも言い訳をする必要など無いのだが）、シャルはもう一度問い質した。

「……アレン、あんた見たわね？」

ビクウツ、とアレンの肩が跳ね上がった。

「な、何言ってるんだよ？俺はただ散歩を……」

「ただ散歩してた奴がこんな高台に、しかも崖を登って来る訳無いでしょ。あんた、自分が嘔吐くの下手だって自覚あんの？」

ズバツと切り捨てられて、ぐうの音も出なかった。

「まあ良いわ。じゃ、私もう寝るから」

「あつ、お、おいシャル!？」

背を向けてさっさと去っていくシャルを慌てて引き留める。

「………何よ？」

「あ、いや……」

ジロツと睨まれて、思わずたじろいでしまった。

シャルの全身から「何も言うな」と聴こえてきた気がしたが、アレンとの約束もあると言い聞かせ、アレンは何を言うでも無く口を開く。

「………あの髪留め」

口を突いて出たのは、何の脈絡も無い言葉だった。

（………俺の馬鹿野郎）

「？」

いきなり何を言っているのかと心中で泣きながら自分を罵倒するアレンに対し、シャルは唐突な台詞に顔を顰めていた。

兎にも角にも喋ったからには続けなくてはならないと思い、アレ

ンはそこから話を繋げる。

「……………プレゼントした時も、こんな風に寒かったっけ……………」

気不味さから逃げる為に空を見上げたアレンから、シャルは視線を逸らす。

「……………あの時の方が寒かったわよ、馬鹿」

吐いた白い息が、寒空の中に漂って消えた。

「そうかあ？」

予想外にも返事が返ってきたので、アレンは視線を戻して首を傾げた。

「そうよ。だいたいあの時って真冬で雪まで降ってたのよ？」

「あれ、そうだったっけ？」

首を傾げるアレンに、シャルはやれやれと溜め息を吐く。

「あんだ、そんな事も忘れたの？じゃあその時に私に絶対服従を誓ったのは？」

「それは嘘だろ！」

どさくさに紛れてとんでもない事実改竄を行おうとするシャルに、アレンは思い切りツッコんだ。

「冗談よ。まったく、すぐ本気にするんだから」

肩を竦めるシャルに、アレンは少し意地の悪い顔をする。

「あのな、俺だってちゃんと覚えてんだぞ？お前が氷の張った地面に滑って大泣きしたこともな」

「なっ　！？」

「あれえ？もしかして覚えてないのかあ？」

「お、覚えてるわよ！第一あれは……………！」

「ほおー、あれは？」

「うぐっ……………！」

挑発するように顔を近付けるアレンに、シャルは顔を真っ赤にして俯いた。

「……………けよ」

「ん〜？」

ボソツとした呟きに、アレンは耳に手を翳して再度促した。
次第に耐えきれなくなったシャルは、顔を上げて思い切りアレンを睨み付ける。

「いつ、良いじゃない、何だつて！大体あんた、何が言いたい
のよ！あんまり調子に乗つてると燃やすわよ！」

シャルは右手を掲げてその掌に炎を灯した。

「おつ、やっと調子が戻ってきたみたいだな」

それを見たアレンは、いつもとは違つて明るく笑い掛けた。

「はあ？何言つてんのよ？」

怪訝な表情をするシャルに、アレンは一步步寄りつてその頭に軽く手を置く。

「お前はそうやって、理不尽に怒つたりしてた方がらしいってことだよ。しょげて空元気振り回してるなんて、どう考えてもお前の役じゃないだろ？」

「……………随分な物言いね」

口調は不機嫌だったが、視線を外したまま頭を撫でられているその表情は、恥ずかしくも嬉しそつだった。

「もう、良い加減やめなさいよ、子供じゃ無いんだから……………」

「はいはい」

いつまでも手を退けないアレンにシャルは再び不機嫌そつな口調で文句を垂れたが、自分から退けようとはせずにアレンが苦笑しながら離れるのを待った。

少し名残惜しそつに押し黙り、シャルは背を向けて歩き出す。

「……………さつさと行くわよ」

「はいよ」

明日寝坊したらホントに燃やすから、という不穏な発言は聞かなかった事にして、アレンも後ろに続いた。

(……………ま、最初の予定とは違つたけど何とかなつたかな？)

金髪の後頭部を掻きながら、やれやれといった風に息を吐く。

「アレン」

と、シャルが不意に立ち止まった。

「あんだ、どうせ自分の所為とか言っただけで責任感じてるんでしょ、どう、一つ言っとくわ」

振り返ったシャルは、睨み付けるでも目を逸らすでも無く、しかしいつもの凜とした力強さが宿ったものでも無い瞳を向けた。

「これは私の問題で、こうなったのは私の所為よ。あんだが責任を感じる事じゃ無いわ」

しばらくして、シャルは再びアレンに背を向けた。

「でも……心配してくれてありがとう」

長い緋色の髪に隠れて見えなかったが、耳までその色に染まっているに違い無かった。

「……さ、さっさと寝るわよ！」

恥ずかしさを紛らわすように、シャルは駆け足で高台を下った。

「……そういうわけにもいかねーんだよ、馬鹿」

吹き付ける風に晒されながら呟いた言葉は、そのまま寒空の下へと攫さらわれていった。

時は少しばかり遡る。

ここはアレン達の居る地点から西に移動した、岩山の中。

「全員寝たか？」

焚火で薪が爆ぜる音に混じって、小さく足音が響いた。

「うん……」

焚火の前に座っていた黒髪の少女は、足音の主を見て頷いた。

「……みんな……疲れてる」

少女はそう言っただけを振り返った。

火の灯りが僅かに届くそこには、数名の男女が地べたに身体を預けていた。

「無理も無い。今日も移動と連戦の繰り返しだったからな」

足音の主は少女の隣に腰を降ろすと、焚火に新しい薪を焼く。

少女は隣に座った金髪の少年に顔を向ける。

「アルも、休んで……？広めに……上級の結界を張ったから……疲れてる」

「それを言うなら全員の治療を担当して疲れているお前が休め、アリス」

少年は迷う事無く少女の願いを却下した。

「……いや」

しかし、少女の方もそれを断った。

「休め」

「いや」

「何度も言わせるな」

「何回でも……言う」

少女は視線を前に戻して頑なに断り続けた

「お前に倒れられたら面倒だと言っているんだ」

少年は少女に向き直って冷たく言い放った。

「アルが休んだら……休む」

「主人の命令が聞けないのか？」

「主人を護るのが……従者の仕事……だから……アルが、先……」

「僕は念の為もう少し見張っておくから駄目だ」

「じゃあわたしも……一緒にいる」

お互いに一步も譲らない不毛な争いに、アルベルトはお手上げとばかりに溜め息を吐く。

「……解った、好きにしる」

「……うん」

アリスは嬉しそうに頷いて、気付かれないくらいほんの少しだけ

身を寄せた。

「……それで、何か解ったか？」

新たに薪を焼べながら、アルベルトが徐おもむろに口を開いた。
アリスはゆっくりと首を振る。

「……詳しいことは……まだ」

でも、と続ける。

「死体で確かめたら……魔力が変質してた……」

「魔力が？」

アルベルトはその言葉に眉を顰めた。

アリスは再びゆっくりと、今度は縦に首を振る。

「全く……別のものじゃなくて……前よりも強くて……密度が濃くなってた」

「……どういう事だ？」

「わからない……でも」

アリスは幼さを残しつつも整った顔をアルベルトに向ける。

「キネリキア山に入ってから……確実に増えてる」

パチツ、と薪が爆ぜるまで、二人の間に沈黙が流れた。

「……そうか」

アルベルトは溜め息を吐きながら長い金髪を掻き乱した。

（これが学園長の言っていた魔物の凶暴化というやつか？アリスが確かめたのだから魔力が変質しているというのは間違い無いだろうし、もしこのまま更に強力な魔物と出で会わしたら……）

「……アル？」

押し黙るアルベルトに、アリスは心配げな視線を向けた。

「……いや、何でも無い」

アルベルトは小さく首を振って答えた。

「お前は引き続き調べてくれ。ただし、くれぐれも他の奴らには気取られるなよ？」

「……うん……わかってる……」

二人の表情には、重苦しい何かが纏わり付いていた。

「……明日も早い。そろそろ寝るぞ」

短く息を吐きながら、アルベルトは立ち上がった。

「……アルが」

「同時に寝れば問題無いだろう？」

言い掛けたアリスに被せるように、仕方が無いと言わんばかりの声が放たれた。

「……うん」

アリスは、やはり嬉しそうに頷いた。

突如、

「……！？」

「な、なに……？」

遠くから、何かの唸り声のような音が聞こえた。

（馬鹿な！この結界は内と外の情報を完全に隔てる魔法だぞ！？外からの音が聞こえる筈……！）

直後、アルベルトに電気が走るような感覚が伝わった。

「くっ！！」

「アル……！？」

突然膝を着いたアルベルトに、アリスは慌てて声を掛けた。

「……結界が、破られた……！？」

アルベルトは少し苦しげに息を切らせながら、視線を前に向ける。そして、そのまま顔を驚愕の色に染めた。

「……あ、アル……！！」

「馬鹿な……！？何故あんな奴が……！？」

火は、いつの間にか消えていた。

第八話：『それぞれの想い』

翌日の昼が少し過ぎた頃。

「あ、暑い……」

午前中に何度か魔物に遭遇しながらもキネリキア山脈へと辿り着いていたアレン達は、身を焼かれるような暑さに既に心が折れそうだった。

「き、昨日までと全然違うんですけど……？」

歩を進めながら、こんな話は聞いてないとも言つようにアレンが呻いた。

「どつちかかっていうと、これが普通なんじゃないかな？ヴァルカノもこんな感じだったし……」

アクアは弱々しい微笑みを浮かべながら手ではたはたと扇ぐが、汗だくの顔に吹き付けるのはただの熱風以外の何物でも無かった。

「ひよつとして、ヴァルカノより暑いんじゃないですか、これ？」

「まあ、活動は殆ど無いが、一応は火山地帯だからな」

流石のノアもこの暑さには参ったようで、リオンに返した言葉にはいつもの鋭さが感じられなかった。

「イリスせん……さん、大丈夫ですか……？……イリスさん？」

まだ慣れない呼び方で掛けた声には返事が無く、ステラはゆっくりと後ろを振り返った。

「……」

一行からかなり離れた場所に、銀色の何か落ちていた。

「きゃあああああ！！イリスさん！しっかりしてくださいっ

！……」

「……あ……つい……」

それが何なのか理解して一気に青ざめたステラは、叫び声を上げて慌てて駆け寄った。

「もう、仕方が無いわねえ。ステラ？イリスのリュックを貸してちょうだい」

それを見たシャルが溜め息を吐いて言った。

「確か……」

シャルはリュックを受け取ると、探るように手をつ突っ込んだ。

「……あつた！ほらイリス、飲みなさい」

「それは？」

差し出されたのは、薄い水色の液体が入った小さな小瓶だった。

「『冷水薬』よ。身体を冷やしてくれる魔法薬。準備期間中にイリスに作らせておいたの」

「うゝん……」

肩を竦めながらそれを飲ませると、イリスが僅かに呻き声を上げた。

「あつ、気が付きましたよ」

「ステラ……？」

ステラは意識を取り戻したイリスの様子を覗き込むように窺う。

「気分はどうですか？」

「あ……なんか、涼しいかも……っていうか」

イリスはムクツと身を起こし、確かめるように自分の身体を眺めると、

「……おお〜！暑くないよ！全然！これっぽっちも！」

歡喜の声を上げて飛び跳ねた。

再び元気になったイリスを見て、ステラは安堵の息を漏らす。

「……ですが、あんな物があるならどうしてもっと早く使わなかったんですか？」

それこそヴァルカノに着いた当日に使っても良かったのでは？と首を傾げるステラに、シャルが答える。

「あまり時間が無かったからそんなに数が無いのよ。だから本当はもう少し進んでから使うつもりだったの。まあ、作った本人は存在自体忘れてたみたいだけど……」

流石のシャルも、倒れられては使わざるを得なかったようだ。

「はっ！自分で作つといて言うのもあれだけど、すごい効くよこれ！」

完全に回復したようで、イリスは満面の笑みを浮かべながらまだピョンピョン跳ねていた。

その様子に、シャルはニヤリとした笑みを浮かべる。

「じゃあイリス、私達の荷物お願いね？」

「ええっ!?!」

「当たり前じゃない、一人だけ涼しい思いしてるんだから。はい、これ」

完全に意表を突いた言葉に愕然となるイリスに、シャルは容赦無く背負っていたリュックを突き付けた。

「えっと……ごめんなさい、イリスさん！」

「ステラも!?!」

僅かに逡巡するも、ステラも自分の荷物を手渡して逃げるように先へ進んだ。

「……アクアあゝ」

「ごめんね、イリスちゃん。わたしのはそんなに重くないから」

「そんなあ……!?!」

僅かな希望を抱いて微笑みの女神に助けを乞うたが、女神は荷物を差し出しながらにっこりと微笑んだ。

「いやあ、悪いなイリス」

それに続いてアレンもリュックを肩から外そうとするが、

「何言ってるのよ。あんた達は自分で持ちなさい」

「ええっ!?!」

シャルにピシヤリと止められた。

「まさか、ウチの男共は女の子に荷物を持って貰うような情けない連中じゃあ無いわよねえ？」

ボウツ、と掌に宿った炎に、アレンとリオンの顔から血の気が引いていく。

「……さ、さあ！先を急ぐかあ、リオン！」

「そ、そうですね！まだまだ先は長いですしね！」
即座に方向転換し、二人は足早にその場を離れていった。

「……………」

特に何を言うでも無く、ノアは常の通りにそれに続いた。

キネリキア山は開拓こそ最近に行われたが、実際に人が足を踏み入れ始めたのはかなり昔の事である。

火の大陸の北部と南部を行き来する為にウォール山脈を通らなくてはならない事に起因するのだが、殆どが未開拓地域のこの巨大な山脈にある幾つかのルートのうち、実はかなりの数がこの山を通る道を選んでいたのである。

その最たる理由が、『紅蓮華』である。

『紅蓮華』は魔草という魔石と同じ仕組みを持つ植物に属し、その根や葉には火属性の魔力が蓄えられている。

その用途は実に様々で、単純に暖を取る際にも役立つが、薬草や魔法薬の材料として調合される場合が多い。その為市場でもそれなりに価値の高い代物なのだ。

現在では根ごと採取する事は禁じられているが、葉の部分は時間を掛ければ再び生えてくるので、今回のようにギルドに採集依頼が舞い込む事もしばしばあるのだった。

「で、キネリキア山って名前の由来はあれよ」

歩きながら説明するシャルは、登り坂の一番上で立ち止まると、その先を指差した。

「……………っ！」

その隣に立ったステラは、その瞳に映った光景に息を飲んだ。
そこにあっただのは、一面に広がる薄い灰色の山だった。

「雪……じゃないですよね？」

リオンは坂を下って灰色の土を少し摘まむ。

「これは……」

「灰、だな」

継ぐように、ノアが呟いた。

「如何やら火山灰が降り固まって出来た様だな。成る程、『灰色の山』とは良く言った物だ」

ノアの言葉を聞きながら、アレンはふと道端に生えている少し赤み掛かった野草を見付けた。

「おつ、これが『紅蓮華』じゃないか？でも名前ほど『紅蓮』って感じじゃないな……」

早速採取しようとするが、自分の想像とは少し違って眉を寄せた。

「ああ、それはまだ未成熟なやつね。成熟したやつはもつと燃えるみたいに真つ赤よ」

「何だ、ハズレか」

それを聞いて、残念そうに声と肩を落とした。

「ですが、三十キロも何に使うのでしょうか？魔法薬を作るのにそれ程の量が必要なんですか？」

「さあ？私も専門じゃ無いから詳しい事は知らないわ。得意な子に聞いてみれば？」

首を傾げるステラに肩を竦めて、シャルは遙か後方に視線をやる。

「イリサー、普通『紅蓮華』の葉って一度にどのくらい使うのー？」

「……ゼエ、ハア……」

問われたイリサーは、四人分の荷物を背負った事で完全に息を切らせていた。

「み、みんな……ひどいよ……四人分って……結構、重いんだよ……？」

アレン達のリュックには空間拡張の魔法技術の他に若干の軽量化（勿論それも魔法技術なので大分軽くなっている）も施されているのだが、流石に四人分を運びながら険しい山道を進むともなれば、

それはもはや罰ゲーム以外の何物でも無かった。

「ハアツ、ハアツ……………つ、着いたあ……………」

「はい、お疲れ様。ここからはみんなで持つから」

ようやく一行に追い付いたイリスに、アクアが労いを込めて水筒を渡した。

「プハアツ！……………で、何だっけ？」

水分補給で生き返ったイリスは、改めて先程問われた内容を聞き返した。

「『紅蓮華』の葉の、一度の使用量はどのくらいなのでしょう？
ステラの言葉に、イリスは顎に人差し指を当てる。

「んー、作る物にもよるけど、一つに対して十グラムもあつたら大概の物は作れると思うよ？どうして？」

「いえ、三十キロも何に使うのか気になって……………」

「うーん、確かに個人で使うには多いけど、他の大陸の人が依頼したんじゃない？こっちみたいにしよっちゅう採れないし」

と、イリスは肩を竦めた。

「どっちにしろ、ギルドの依頼に詮索はタブーよ」

似たような表情をして、シャルは再び歩き出した。

「はい……………」

まだ納得がいかないようだったが、ステラは表情を曇らせながらも前方を歩くリオンの隣に並んだ。

「で、これからどうするんだっけ？」

「……………あんたは黙って付いて来なさい」

「何でだよ」

諦めに近い溜め息を吐くシャルにアレンは納得がいかないようだったが、

「お前に話してもどうせ夕方には忘れていくからだろう」

その理由を自覚していない事に、ノアが短く息を吐いた。

「ちえっ、何だよ。良いよ良いよ」

二人の反応にいじけてしまったアレンは、少し足を速めて先頭に

立つ。

「二人とも、次は俺が戦^やるから休憩な」

「えっ？ですが……」

「ステラ、言う通りにさせてあげなさいな」

「はぁ……」

唐突な台詞に戸惑うステラに、すぐ後ろからシャルの声が掛かった。

「……どうしたんですか、アレン先輩？」

少し歩調を緩めてシャルの傍にやってきたリオンは、ステラ同様不思議そうな顔をしていた。

「ちよつと拗ねてるだけよ。軽く運動でもさせてあげれば気が晴れるでしょ」

「なんか、ペットみたいですね」

シャルの慣れた扱いに、リオンは苦笑いを浮かべた。

「あつ、早速来たよ」

イリスが指差した先から、翼を持った二本足の赤い蜥蜴のような魔物が三体、こちらに向かって飛んできた。

「あれは……？」

「ドレイクだな。竜族の一種だ」

ノアの返答にステラは少し慌てる。

「さ、三体もいますが大丈夫なんでしょうか？」

「竜族と言っても下級種だからな。先日のガルムのような事が無い限り問題は無いだろう」

淡々とした言葉には、全くと言って良い程懸念が含まれていなかった。

その会話が届いていたのかどうかはともかく、前方に居たアレンは剣を召喚する。

「さあてと、いきますか！」

金色の光に身を包んで颯爽と駆け出したアレン目掛けて、飛翔する三体のドレイクの口から炎弾が放たれた。

次々と地面に穴を空けていくそれらを軽々躲し、アレンは左足に魔力を集中させる。

「っ！」

短く一息入れて膝を曲げると、通常では考えられない高さまでその身を跳躍させた。

「ハアッ！」

一番上に居たドレイクのさらに上から胸を斬り付け、落下していく背中を踏み台にして別の一体へと跳び移る。

「おっとと……！」

真上を陣取られたドレイクはアレンを振り払おうと暴れるが、
「でりやつ！」

成す術無く、その頭蓋に血に濡れた剣尖が突き刺さった。

「ラスト！」

そのまま残りの一体に再び跳び移ろうとするが、

「うおっ!?!」

頭を貫かれた一体ごとアレンを焼き払わんと炎弾が放たれ、咄嗟に剣を引き抜いて飛び降りた。

「にやろっ！」

再び地面目掛けて落下していくアレンは、反転しながら剣に魔力を籠め、叫ぶ。

「【三日月】!!!」

横に薙がれた剣閃から、その名の通り弧を描いた光刃が放たれた。下から襲い掛かった光刃は易々とドレイクの首を両断し、灰色の地に血飛沫を撒き散らした。

「一丁上がり、っ」と

見事に着地して剣の血を払うアレンの後方で、三体のドレイクの亡骸が次々と地面に激突した。

「凄……！」

一撃一殺。

改めて目の当たりにする少年の力に、ステラは感嘆の声を上げた。

が、

「まだまだ甘いな。特に最後の一撃は予定外だろう?」

「いやあ、急に撃ってくるからさあ」

どうやらこの二人にとっては、今の戦闘評価は及第点にすら達していないようだった。

「アレן先輩って、確か戦士タイプですよ?正直魔導戦士って感じなんですけど……」

ふと、リオンが不思議そうに尋ねた。

「アレן君は、普段は剣を媒介にした魔法くらいしか使わないから、でも、確かに魔法を使いながら戦えるから、魔導戦士とも呼べるのかな?」

それにアクアが答え、

「ややこしいのが嫌いなんだよ、お兄ちゃんは。だからオリジナルの魔法の名前もわかり易いんじゃない?」

イリスが朗らかな笑顔で付け足した。

「あー、スッキリした!」

「あつ、お疲れさま」

と、そこへアレןが戻ってきた。言葉通りスッキリした面持ちをしている。

「さっきの『技』、新しいやつだよな?」

「ん?……ああ、【煌龍牙】は空中じゃ使えないからな。前々からそれ用に考えてたんだよ」

剣に付着した血を拭いながら答えるアレןに、ステラが首を傾げる。

「何故、空中では使えないんですか?」

「創る時にそういう『条件』にしたんだよ」

しかし、その言葉にさらに不思議そうな顔をした。

「あれ?一年ってまだそこ習ってなかったっけ?」

「確か、『条件』と『特性』はクエストが終わってからじゃないかな?」

逆に首を傾げるアレンとアクアの言葉に、ステラは益々訳が解らないといった風に顔を顰める。

「『条件』っていうのは魔法を発動するのに必要な約束事みたいなもので、『特性』っていうのはそれによって得られる効果みたいなものなんだけど、」

その疑問を解消すべく開いたのは、イリスの口だった。

「下級や一部以外の中級魔法にはそんなに意識しなきゃいけないやつはないんだけど、上級以上の魔法にはかなり限定的で特殊なものが多いんだよ。この間わたしが使った上級魔法も、『上空に一定量以上の雲がある時』っていうすごく限られた時しか使えないけど、代わりに『肉体の分解』っていう強力な効果を持つてるし」

「では、先程アレン先輩が使われた『技』も、その一部の中級魔法、もしくは上級魔法だったという事ですか？」

それには剣を仕舞ったアレンが答える。

「いや、【煌龍牙】も【三日月】もベースは下級魔法だよ。【煌龍牙】は『空中じゃ使えない』代わりに『威力を強化』させたし、【三日月】はその逆の『条件』で同じ『特性』を持たせたんだよ」

「で、二つとも元になった魔法が違うから、それぞれが最初から持つてる『追撃』と『斬撃』の効果が加わってるんだよね？」

「そういうこと」

「?????……えっと、『条件』によって『特性』が……あれ?ですがそれとは別に元々の効果があつて……」

どうやらより一層混乱してしまつたらしく、ステラの頭上に多数の疑問符がせめぎ合っていた。

アレンはその様子を見て苦笑する。

「まあ、そこんこは今度ゆっくり教えてやるよ。それよりそろそろ行かないと置いてかれるぞ？」

気が付けば、他の面々は既に先へと進んでいた。

「今夜も夕飯はお肉を使った料理にするね？」

「一匹はもう丸焼きになつてるけど、さすがに持ってけないよなあ」

どうやら、今夜のステラはドレイクの肉に挑戦する事になりそうだった。

アレン達は、ドレイクが放った炎弾とは違うモノに焼かれた魔物の骨に、気付いていなかった。

事は、その日の夕方頃に起こった。

山の中枢まで来たアレン達は、いつものように寝床と水場を探す班と薪を集める班に別れて行動していた。

岩山と言っても所々に枯れ木が点在しているので少し遠出をすればその日分の薪を集める事に問題は無く、この日の担当になったシヤル、ステラ、アクアも、例の如く集合場所から離れた場所までやって来ていた。

「これが普通の山なら、果物とかも沢山採れるのですが……」

「無い物ねだりをしては仕方無いわ。さっさと集めて戻りましょう。ぼやくステラに、シヤルは肩を竦めて薪を拾う。」

背の低い岩壁で出来た狭い谷間に生い茂る枯れ木を見付けた三人は、そこで今晚使う薪を集めていた。

「今夜はさっきのドレイクのお肉があるから、またシチューかな？」

「この期間って、食事が片寄るのが難点よねえ。確かに美味しいんだけど……」

「太っちゃう？」

「……言わないでください」

年頃の女の子にとって最大級の悩みに、三人は揃って溜め息を吐いた。

「そっいえば」

不意に、アクアが思い出したように言った。

「山頂に行つて『紅蓮華』を採集するのはいいんだけど、もし先にアルベルト君たちがいたらどうするの？」

二組合わせて六十キロもの量は、流石にその場には無いだろう。そうなれば当然どちらかは採集出来ずに来た道を引き返す事になるのだが、それではクエストが達成出来ない上に評価も付かない。

問われたシャルは再び肩を竦める。

「まあ、その時は勝負するか、諦めて帰り道に生えてるのを集めるしか無いんじゃない？」

随分楽観的に言うが、シャルの性格的にまず後者は無いだろう。あるとすれば一行が到着する前にあちらが採集を終えている場合のみか。

「さ、これだけあれば今日の分は大丈夫でしょ。戻りましょう？」

腕一杯に薪を抱えたシャルに、アクアも頷く。

「ステラちゃん」

「あつ、はい」

呼ばれたステラは、返事を返すと一度後ろを振り返った。

「……ここ、崖になっていたんですね」

枯れ木に遮られて気付かなかつたが、谷間から少し突き出たその先はかなりの高さの崖になっていた。

それに自然と息を呑んで、先に行く二人に続く為再び前を向く。

「ステラー!!」

「!?」

しかし、突然シャルの叫び声が聞こえたと思ったら、視界の端に影が差して何かに押し倒されてしまった。

「ま、魔物……!?」

一体のガラムが、ステラの首を喰い千切らんとその牙を剥き出しにして迫っていた。

「くうッ……!!」

咄嗟に間に割り込ませた薪のおかげで何とかそれだけは防いだが、

申し掛かられた不利な状況を覆すのは難しかった。

「ステラを、放しなさい!!」

薪を握ったシャルの不意打ちがガルムの横っ腹に命中し、崖側の枯れ木まで弾き飛ばした。

「ステラちゃん、大丈夫……!?!」

「は、はい……!」

剣を召喚しながら、ステラの脳裏に不吉な予感が過る。

(精霊の加護があるのに、腕力で押し退けられなかった……?)

「一匹で掛かってくるなんて、良い度胸してるわね」

体勢を整えたガルムを睨むシャルの掌に、炎が灯った。

「待ってくださいシャル先輩!そのガルムは!」

「燃えなさい!」

ステラが言い切るよりも一瞬早く、ガルム目掛けて炎が放たれた。猛る炎は見事命中し、茶褐色の毛で覆われたガルムの肉体を枯れ木ごと包み込んだ。

が、

「うそっ!?!」

身を包む炎を振り払って、ガルムは怯む事無くシャルに襲い掛かってきた。

「危ないです!」

咄嗟にシャルに飛び付いて伏せたステラの頭上をガルムが通過した事で、茶色い髪が強く靡いた。

「あ、ありがとう、ステラ……」

「いえ……ですが、やはり先日の異常な強さのガルムと同じようです」

予感が的中し、攻撃に備えて身を起こす。

アレンとノアは苦戦こそしていたものの、それは多対二という不利な状況下での話だったのでこの場に居たのが二人のうちのどちらかであればどうにかなったのだが、この三人だけでは一体だけでも厳しい相手だった。

防御重視のアクアは勿論の事、シャルの炎が効かない事は実証済み。

唯一、ステラの巨大な剣と豪腕なら何とかなるかも知れないが、先日の戦いを見ていた本人は、果たして自分の剣がこの異常な強さの敵に通じるのかと萎縮してしまっていた。

「逃がすつもりは、無いみたいだね……」

後ろは崖。両脇には岩壁。

行く手を阻むようにガルムが立ち塞がった事で、三人は逃げ場を失ってしまった。

「……ステラ、私とアクアで援護するから、あいつをありったけの力で斬って」

「えっ？」

突然の指示に、戸惑いを隠せなかった。

「で、ですが……」

「今通用する手はそれしか無いの！死にたくなかったら言う通りになさい！」

一喝して、シャルはステラの前に立つ。

「……ごめんなさい、危険な役を任せて。私が、何とか出来たら良かったんだけど……」

「シャル先輩……」

ふと、シャルの拳が強く握られている事に気付いた。強過ぎて、血が滴る程に。

シャルの性格から考えれば、危険な役を他人に任せるなど本来なら選択肢にすら入らない行為なのだ。況ましてやそれが後輩で、一歩でも間違えれば死を伴う行為であれば尚の事。

それでも、今はそれに頼るしか無かった。全ては自分の非力さ故に。

その悔しさを察して、ステラも覚悟を決める。

「……分かりました。お二人に、私の命を預けます」

「……ありがとう」

僅かに頷いて、シャルは前を見据える。

「アクア、ステラに向かつてくる攻撃は任せたわよ」

「うん。シャルちゃんは、敵の気を逸らす事に集中して？」

いつもと同じ口調でありながら、アクアの言葉には力強さが感じられた。

「良い？地属性相手じゃ、アクアの防御魔法は一瞬しか持たないわ。だから敵の魔法が来たら全て躲すつもりで動きなさい。目の前まで近付いたら炎で視界を塞ぐから、その隙を突いて。この前の戦いで思ったけど、あいつは横腹が他の所よりも若干弱いみたいだからそこを狙いなさい」

「はい……！」

シャルの指示に頷いて、ステラは二人の間に立つように巨大な剣を構える。

「……行きます」

ほんの一瞬間を置くと、濃い茶色の光に身を包み、ガラム目掛けて一直線に駆け出した。

それを見たガラムが大きく吠え、ステラ目掛けて幾つもの岩の棘が突き出す。

（来た！）

それを視認したところで、目の前に氷の壁が現れて岩を防いだ。ステラはすぐさま横に跳び退き、再び前に進む。

直後、氷の壁が砕けて、先程まで居た場所を岩の棘が貫いていった。

それに息を飲みながら、ただひたすらに前を目指す

再びガラムが吠えた時、今度はステラの隣を炎が通過した。

炎はダメージを与えるまではいかなかったが、どうやらガラムの魔法を中断させる事に成功したようだった。

（もう少し……！）

一歩でも多く、一瞬でも速く、敵に近付く。

再び現れた岩の棘を避け、牽制の炎が通過してあと数歩のところ

まで辿り着いたステラは、前を向いたまま叫ぶ。

「シャル先輩！」

「喰らいなさい！」

掛け声と同時に、ガルムの姿が見えなくなる程の炎の渦が、一直線に放たれた。

「今よ！」

「ッ！」

ステラを見失ったガルムの視界の外から、持てるすべての力を剣に込める。

そのまま、その横腹を巨大な刃が斬り刻む。

筈だった。

「!?!」

ステラを見失った筈のガルムの岩の槍が、突如炎を突き抜けて襲い掛かってきた。

「ステラ!!!」

完全に勢いに乗ったステラ目掛けて、その鋭く尖った先端が迫る。あまりに突然過ぎて、全身が強張っていくのを感じた。

(全て、躲すつもりで!)

それを頭で認識する前に、ステラは咄嗟に身を抜っていた。

その際に岩の先端が脇腹を掠めて顔が歪んだが、瞳だけは変わらず敵を捉える。

(ありったけの、力で!!!)

そのまま全神経を集中させ、今度こそ放つ。

渾身の一撃を。

「 ああああああああッ!!! 」

肉が裂け、骨が碎ける感触が、両手に伝わる。

それと同時に、悲痛の叫びが、鼓膜を貫いていく。

やがて、脇にあった岩壁が、派手な音をぶち撒けて崩れ落ちた。

「 ハッ、ハッ、ハッ……!!! 」

まだ昂る鼓動を抑え切れず、ステラは目を見開いたまま強く短く

息を吐き続けていた。

ほんの一瞬の出来事が、無限にも感じられる程長く、薄皮一枚で首が繋がったような危うさを感じさせる。それ程に死と隣り合わせのやり取りだった。

「ステラあ！！」

不意に声が聞こえ、ゆっくりと振り向くと、

「シャル、先輩……きゃっ!？」

突然シャルが飛び付いて来て、ドサツと地面に倒れた。

「痛たたた！痛い、痛いですう!!」

その際に先程掠めた脇腹に強烈な痛みが走り、柄にも無い叫び声を上げてしまった。

それを見たシャルは慌てて飛び退く。

「あつ、ごめんなさい……！でもやっぱりあなた凄いわ！もし今のノアが見てたら、絶対あの仏頂面の口が馬鹿みたいに開きっぱなしになってたわよ！」

再び飛び付きそうな勢いで歓喜の声を上げるシャルに、ステラはゆっくりと目を閉じる。

「いえ……シャル先輩の、おかげなんです」

「私の？」

援護も結局あまり意味を成さなかったのに、何が自分のおかげなのかとシャルは首を傾げた。

「あの時は無我夢中で、ですが、シャル先輩の仰っていた事が頭の中でずつと響いていたんです。そうしたら考えるよりも先に身体が動いていて、自分でも良く解らないうちに生き延びていたんです。ですから、シャル先輩のおかげなんです」

ありがとうございます、と頭を下げるステラに、シャルは慌てて両手を振る。

「よ、止してよ！私なんか、結局目眩ましも意味無かったし、アクアの方がよっぽど役に立ってたわよ！」

そう言って立ち上がると、シャルは逃げるようにその場を離れた。

「シャル先輩？」

「薪、拾ってくるわ」

声のみが返つてくると、その背はステラが落とした薪を拾うべく崖の方へと遠ざかっていった。

「照れてるだけだから大丈夫だよ。それじゃあ、治療するね？」

苦笑混じりの微笑みを浮かべて、アクアはステラの脇腹に手をやる。

「……アクア先輩」

「どうかしたの？」

不意に尋ねられて、アクアは首を傾げた。

「シャル先輩は、座学も実技もトップクラスの方なんですよね？」

「……うん」

ピクリと、その手が止まった。

「この期間に何度か見せて頂きましたが、実際シャル先輩は難無く魔物を倒していました」

相手が下級種だったとはいえ、驚く程圧倒的に、思わず見惚れてしまう程華麗に、緋色の炎は敵を蹂躪していた。

「なのに、どうして今回も前回も、あの凶暴化したガルムには、私の剣より明らかに強力な上級魔法レベルの炎ですらも効かなかったのでしょうか？それに、アレン先輩達はシャル先輩があガルムと戦う事を避けているように思えるのですが……」

「それは……」

言葉に詰まり、暫しの沈黙が流れた、その時だった。

ドゴアアアア！！

「……！？」

突然轟音が鳴り響き、地面が大きく揺れた。

二人が顔を上げると、今まで見たのとは比べ物にならない程巨大な岩石が地面に突き刺さっていた。

「なっ ……！？」

それは不吉な音と共に身を沈め、灰色の地に亀裂を刻んでいく。

ステラ達が居る場所と、シャルが向かった崖とを隔てるように。

「シャルちゃん！」

隣から、普段では決して聞く事の無いアクアの叫び声が聞こえた。その視線の先、巨大な岩の脇から見える遙か後方に、緋色の髪が地面に横たわっていた。

「っ！」

「ステラちゃん!？」

考えるよりも先に、否、考える時間すら貰えず、ステラは土色の光に自らを包んで駆け出していた。

亀裂が走る地面を全速力で駆け抜け、みるみる沈んでいく岩の脇の、僅かに空いた隙間をすり抜ける。

その先に倒れ伏している少女の元に辿り着いた時には、既にそこは支えを失って空中へと放り出されていた。

「シャル先輩!しつかりしてください！」

意識を失っているシャルの肩を担いで、ステラは崩壊していく瓦礫を跳び移っていく。

「つつ、く……!!」

宙を跳び、瓦礫に足を着ける度に、負傷した脇腹から血が滲み、痛みが身体を走り抜けた。

「もう、少し……!!」

ようやく、あとほんの数メートルという距離まで到達し、安堵が心の中を先行く。

「えっ?」

しかし、無情とはいつも、そういった隙を突くものだった。

全く突然、先程の岩石に比べれば小枝のような大きさの岩の槍が、シャルを支える腕を掠めた。

その拍子にバランスを崩し、支えていた身体ごと、再び宙に投げ出される。

「っ！」

遠ざかる崖を見送る絶望の眼が、不意にその両脇の岩壁の上に、幾つもの影を映し出した。

(そんな……アクア先輩……)

二人は、成す術も無く奈落へと落ちていった

翌早朝。

シャル達が落ちた崖に、霧の中から一つの影が現れた。

「……ここか」

僅かに白い息を吐いて、ノアは正面を見据える。

その先には、地面の所々がひび割れて崩れ落ちた崖があった。

そこに近付きながら、自分の周囲に視線を向ける。

両脇にある背の低い岩壁はあちこちが崩れ、熾烈な戦いの痕跡が刻まれていた。

そのまま、今度は身を乗り出すように崖下を見る。

眼下に広がるのは、霧に包まれた深い谷底だった。

「……………」

ノアは無言のまま目を閉じて身を翻し、再び歩き出してその場を立ち去った。

しばらくすると日が昇り、誰も居なくなつたそこに光が差し込んでいく。

立ち籠める霧が徐々に晴れると、朝日が何かに反射し煌めいた。

そこには、無数の魔物達が、透き通った氷塊の中で悠久の時を刻んでいた。

場所は移り、キネリキア山脈中枢にある溪谷の、とある場所。

「あつ、戻ってきた」

岩壁が削れて出来た奥行きのある空間にて、朝食の乾パンとスープを口にしながら、リオンがふと足音に気付いて振り向いた。

「……如何だ？」

何がと言わず、ノアが尋ねた。

パンを掴む腕を止めて、リオンは首を振る。

「まだ寝てますよ。もう昨日みたいに魔まされたりはしてないみたいですけど」

「そうか……」

返した声には、本人の意図とは裏腹に僅かながら安堵の情が滲み出していた。

それに気付かず、ノアは朝日に因って出来た日陰へと足を向ける。少し進むと、地面に敷かれた布の上で、紺青色の少女が小さく寝息を立てていた。

余程怖い夢を見たのだろう。魔まされていたという少女は今安らかに眠っているが、その目尻にはまだ僅かに涙が溜まっていた。

それを遅しくも細い指先で、舞い散る羽根に触れるようにそっと拭う。

「ん……」

少女はほんの少しだけ身動みじろいで、再び小さな寝息を立てた。

それに常の無表情を崩し、他者には決して見せる事の無い小さな微笑み向けると、再び表情を戻してさらに奥へと視線を移す。

そこには、同じく地面に敷かれた布に金髪の少年が仰向けに横たわり、その隣に座った銀髪の少女が覆い被さるように身を預けていた。

まだ寝ているようなのでそっとその場を立ち去ろうとすると、

「……………どうだった……………？」

不意に呟くように尋ねられた。

「……………霧に包まれて見えなかったが、かなりの深さの崖だった。彼処から降りるのは無理だろう」

常に何事にも動じない漆黒の少年が不覚にも驚いてしまったのは、突然声を掛けられたからではなく、普段自分が話し掛けても逃げるように誰かの後ろに隠れてしまうこの少女が、自ら話し掛けてきたからであった（無論表立って表情や言動には出さなかったが）。

「転移の魔石があるから即死では無い限り最悪の事態にはならないだろうが、あの高さだ。まず無傷では済まないだろう」

「……………そう」

それだけ言うと、俯いたままの少女は再び沈黙した。

そのまま、二人の間に何とも言い難い空気が流れた。

耐え兼ねたノアが（彼にしては珍しく）心無しかおずおずと口を開く。

「……………イリス」

返事は無い。ただ聞こえてはいるだろうと考え、そのまま続ける。

「……………その、もっと気の利いた事を言うべきだった。済まない。アレンの事に関してももう少し「謝らないで」

突き刺すように、イリスが言葉を被せた。

「……………さっき言ったことも、お兄ちゃんのこと、あなたがやったことは間違っていない。だからそれを自分で否定するのはやめて」

言葉はノアに向けられていたが、まるで自分にそう言い聞かせようとしているかのように聞こえた。

「……………ああ」

そこにある感情を察して、しかしノアは、そんな単純な言葉しか

返せなかった

「アクア!どうしたの!？」

いつまで経っても集合場所に帰ってこない三人を心配してまさにこれから捜しに行こうとした矢先、アクアがボロボロになった身体を引き摺りながら帰ってきた。

駆け寄ったノア達に囲まれて倒れるように寄り掛かったアクアは、制服にしがみ付きながら嗚咽を漏らす。

「……ごめ、なさい……わたし……何も、できなかった……」

「何があった?シャルとステラは如何した?」

しがみ付かれたノアは、あくまでも冷静に、錯乱しているアクアの耳にしっかりと聞こえるように尋ねた。

「魔物、出て……二人とも……崖、落ちて……わたし……助けられ、くて」

途切れ途切れに話ながらより一層強く制服を握り締めたアクアは、ノアの顔を見上げる。

「ノア君……わたし、助けられなかったよお……!」

涙と灰でぐちゃぐちゃになった顔が、嗚咽を漏らしながら上げた声が、二人を救えなかった自身の無力さを呪っていた。

「……何処だ?」

尋ねると、アクアは顔を埋めながら来た道を力無く指差す。

「……向こうの……小さな、谷……」

「解った……」

頷いて、すっかり乱れてしまった頭に手を置いた。

「【親愛の揺り籠】」

ディアクレイドル

掌の先に現れた漆黒の魔方陣から光が放たれ、その下にある身体を優しく包み込んだ。

「あ…………ノア、く…………」

抵抗するように名前を呼びながら、アクアの意識は深い眠りへと落ちていった。

「ノア先輩…………？」

「眠らせたただけだ。これ以上起きていても自分を責め続けるだけだからな」

眉を寄せるリオンに言いながら、ノアは制服の上着を地面に敷いてアクアをそつと寝かせた。

「イリス、治療を頼む」

「うん…………」

言われて、イリスはアクアの傍らに腰を降ろして治療を始めた。それを確認して、ノアは言葉を探るように口を開く。

「さて、これからどうするかだが…………」

「そんなの二人を助けに行くに決まってるんだろ！」

決まり切った答えに、アレンが怒鳴るように言った。
しかし、

「…………いや、今は駄目だ」

ノアは常の通りの声色でそれを却下した。

瞬間、アレンが今にも殴り掛からん勢いでノアの胸倉を掴んだ。

「…………お前、暑さで頭がどうかしちまったのか？仲間が崖から落ちたんだぞ」

睨み付けてくるアレンに、ノアも怒気を孕んだ瞳を向ける。

「お前こそ頭に上った血を下ろせ。直に日も沈む。夜の搜索が危険を伴う事ぐらい解るだろうが」

「わかんねえよ！今こうしてる間にも死に掛けてるかも知れねえんだぞ！助けを求めているかも知れねえんだぞ！自分の危険なんか知ったこつちやねえんだよ！！」

「お前一人の為に、此処に居る全員に危険が及ぶと言っているんだ！アクアが負傷している以上イリスと二人で置いていく訳にはいかないんだぞ！良い加減頭を冷やせ、阿呆が！！」

「ふ、二人とも落ち着いてくださいよ！」

今にも怒鳴り合いが殴り合いに変わりそう、リオンがとにかく落ち着けようと間に割って入った。

「……クソッ！」

胸倉を乱暴に突き放すと、アレンは背を向けて歩き出した。

「待て、何処へ行くつもりだ」

「二人が落ちた崖だ。お前らはそこで待ってる、俺一人で行く。それなら文句ねえだろ」

「駄目だ、許可出来ない」

「お前は……ッ!？」

キレて振り向いたアレンの鳩尾みそめちに、ノアの拳が減り込んだ。

「この、やろう……!」

「お兄ちゃん!!」

悪態を吐いて睨みながら、アレンは意識を失って地面に倒れていた。

「……悪く思うな」

それを支えながら呟いて、ノアは再びリオンとイリスに向き直る。

「今は兎に角、安全な場所で朝が来るのを待つしかない。日が昇り次第俺が現場を見に行く」

気付けば、茜色の空が深い闇に覆われ始めていた

その後すぐに予め見付けておいたこの場所へ移動したノア達は、眠れない夜を過ごして時が経つのを待った。

アクアの治療を終えたイリスはそれっきり黙り込んでしまっって意識を失ったアレンの傍を片時も離れようとはせず、リオンが何度か

時間を置いて念話の魔法を使ってはみたが、距離が遠過ぎるのか意識が無いのか、結局二人との連絡は着かず終いだった。

強めの結界を張りながらアクアの傍に付いていたノアは、空が白むと同時にそこを離れてシャル達が落ちた崖に向かった訳だが、結果は全くと言って良い程予想を裏切ってはくれなかった。

（せめて俺かアレンと一緒に行くべきだったか……。全く……）
気を抜き過ぎていたと、心中で自らを叱責する。

ほんの三日間例の凶暴化した魔物が一度も現れなかっただけで、完全にそれと遭遇する可能性を失念していたのだ。

本来なら殴られるべきは自分だと言いたいところだったが、生憎今はそんな愚痴を吐く事は許されない（許されたとしても決して吐かないのだが）。

今はとにかく、二人と合流する為に最善の道を示さなければならなかった。

そして、実は崖の様子を見に行ったノアには、懸案事項が一つ増えていた。

谷間の崖に広がった、あの異常な光景。

群れの数からして恐らく例のガルト達なのだろうが、その全てが氷漬けにされていたのだ。

（あれは、状況から察するにやはりアクアか？あいつがあれ程の事を出来るとは思えないが……）

そもそも、彼女は積極的に他者を傷付ける事を嫌うだけで攻撃魔法が使えない訳では無いのだが、ノアが知る限りあれ程の力を有している訳でも無かった。

だからこそ、あの場を目の当たりにした時に推測と疑念が思考の渦を描き、それが今でも彼の頭に凭れ掛かっているのだった。

再びそれに囚われそうになり、ノアは心中だけで頭を振る。

（何れにせよ、今は他の奴らに知らせるべきでは無いな。そういう意味では、無理矢理にでもアレンを止めたのがある意味功を奏したか……）

流石のノアも、この状況では他の事柄に廻す気は残っていないかった。

「ノア先輩」

ふと、声を掛けられてそちらに視線を向けた。

「これから、どうするんですか？」

どうするか、とは生きているかも定かでは無い二人を捜すのか、それともクエストを続行して山頂を目指すのか、その二択に限られていた。

「……今所、転移が発動した形跡は無い」

言つて、首に提げた魔石に視線を送った。

ギルドで渡された転移の魔石には、離れた所に居る仲間の意識に転移が発動した事が伝わるよう仕掛けが施されている。

しかし昨晩は仮眠も取らずにいたが、一向にその気配は感じられなかった。

「この魔石は生死に関わらず致命傷以上のダメージに反応する。その形跡が無いという事は十中八九、二人は生きている筈だ」

「じゃあ……」

「だが、ここから山を下るつもりは無い」

その言葉に。リオンは顔を曇らせた。

「二人が落ちた場所に行くには、来た道を戻らなければならない。だがそれでは時間が掛かり過ぎる」

「なら、放っておくんですか？」

「そうは言っていない。入り組んだ山を迂回するのは時間を無駄に浪費すると言っているんだ。二人が其処に留まっている保証も無い。だから……」

「……どうして、そんなに冷静でいられるの？」

不意に、イリスが呟いた。

「時間を無駄にするとかいる保証がないとか、そんなのどうでもいいよ！もう充分待ったじゃない！わたしもリオンも二人を」
「待ってくれ、イリス……」

糾弾にも似た声を制したのは、その隣で横たわっていたアレンだった。

「……お兄ちゃん」

アレンは身を起こすと、息巻くイリスの背後に身体を向け、

「……！」

そのまま、勢い良く頭を下げた。

「……昨日は悪かった。つい焦って周りが見えなくなっちゃってた」
その姿に、イリスは再び、今度は目の前の光景を否定するように声を荒らげる。

「でも！お兄ちゃんは二人を捜したかっただけじゃない！何も悪くなんかないよ！」

しかし、アレンは首を横に振る。

「それはノアだって同じなんだよ。でもな、それで俺たちが怪我して、シャルとステラが喜ぶわけないだろ？」

「それは……！」

まっすぐに見据えてくる金色の瞳に、イリスは言葉を詰まらせた。
「ノアはそれをわかってたから、みんなが反対するのもわかって止めてくれたんだよ。本当はポロポロになったアクアのために、すぐにでも飛び出していきたくはすななのにな」

何よりも大切な人が傷付き、大粒の涙に頬を濡らしながら縋り付いてきたのだ。それに耐える事がどれほどの苦痛を伴うか、頭の冷えた今のアレンには容易に察する事が出来た。

そして、今こうして憤慨するイリスの想いも。

だからアレンは、泣きそうな顔をしているその頭に、そっと手を置く。

「もちろんイリスの気持ちもわかってる。俺だって昨日は二人を助けに行くことで頭がいっぱいだったしな。でも、やっぱりいまは後先考えずに行動しちゃいけないんだと思う」

「……うん」

顔を伏せて、イリスは呟くように頷いた。

それで本当に納得したのかは分からなかったが、ひとまずどうに
なつたと判断したようで、再びノアに視線が向く。

「ノア、何か考えがあるんだろ？」

確信に近い問いに、やはりノアは首を小さく縦に振る事で答えた。

「ああ。実は」

『 どうして……わたしだけ、こんな……』

ああ、またこの夢なの。

何も見えない深い闇の底。そこにポツンと、一人の少女が膝を抱
えて泣いている。

『 ほら、あの子じゃない？例の……』

するとどこからか、啜り泣くのは別の声が聞こえてきた。

『 なんでまだいるんだろ？何回やってもダメなのに』

『 ほら、やっぱり貴族のプライドってやつじゃない？』

違う、そんなんじゃない。

『 いやだよね、実力もないのにプライドばかり高くて。そりゃ、
最初の頃はすごかったけど……』

『 なんて言うんだっけ、そういうの？フタを開ければってやつ？』

『そうそう、それ！あはは！』

幾つもの笑い声が、水面みなもに広がる波紋のように闇の中に響き渡る。

やめて！

思わず耳を塞いでも、隙間をすり抜けるように入り込んでくる。

『……わたし……やっぱり、駄目な子なのかな……？ここにいちや、いけないのかな……？』

そんな事無い！そんな事言わないで！

闇の中に膝を着いて、必死に否定の言葉を叫ぶ。

まるで自分に言い聞かせるように。

恰あたかもそうあって欲しいと願うように。

その先に待っている、言うてはいけない言葉を、消し去る事の出
来ない過去を、否定したいが為に。

だが、少女の言葉は止まらない。

『もう……いなくなった方が……いいのかな……？』

「 やめて!!!! 」

「 きゃっ!?! 」

叫びと共に勢い良く身を起こすと、すぐ傍で小さな悲鳴が聞こえた。

「 ……ステ、ラ? 」

隣で尻餅を搗いている少女を見て、シャルはきよんとした声を出した。

「 痛たたた……き、急に起きないでくださいよお…… 」

腰の辺りを擦りながら、ステラが恨めしそうな声を上げた。

「 ですが、目が覚めて良かったです。だいぶ魔されていましたから 」

「 アクアは? ……ってどうか 」

もう一人の少女の姿が見えずふと周囲を見渡すと、薄暗い影に覆われたそこは、どうにも記憶に無い場所だった。

「 ここは……痛っ!?! 」

身体を動かそうとすると、所々から痛みが電気のように身体を駆け巡った。

「 あっ、駄目ですよまだ動いては! 昨夜は熱も出ていましたし、安静にしてください! 」

それを慌てて寝かし付け、ステラは手拭いを水筒の水に濡らして額に乗せた。言われてみれば、少し身体が火照っていたようで汗も掻いている。

「 ここはキネリキア山の下部の、岩壁が削れて出来た小さな洞穴ほらあなのような所です。とにかく安全に治療出来る場所が欲しかったので、かなり移動してしまいましたか…… 」

「 ま、待って! どうして私達だけそんな所に居るの? 確かガルムを倒して……! 」

状況が理解出来ずに慌てるシャルに、ステラは表情を曇らせる。

「 その後、恐らく別のガルムが放った魔法で足場が崩れて、崖から落ちたんです 」

「崖から……?」

途端に、薪を拾って戻ろうとした時に突然巨大な岩が現れて吹き飛ばされた光景がフラッシュバックした。

「そうだったわ……私、それで意識を失って……」

「すみません……私があと少しの所で油断したせいで……」

額に腕を寄せたシャルに、ステラが申し訳無さそうに俯いた。

「な、何言ってるのよ!元はと言えば私が気絶なんてしたからこうなったんだし、寧ろステラが居なかったら今頃とっくに死んでたんでしょ?ありがとう、助けてくれて」

「シャル、先輩……」

自責の念に駆られる少女を慰め、命を救ってくれた事に感謝を述べて微笑み掛けた。

それを見たステラは顔を歪ませる。

「ちよ、ちよつと、泣く事無いでしょう?」

「……すみ、ません」

またしても謝ってきたので、ホントに泣き虫なんだから、と溜め息を吐いた。

「グスツ……治療は一通り終わったので、もうしばらく休めばとりあえず歩く事くらいなら出来ると思いますよ」

そう言つて、ステラは柔らかい微笑みを浮かべた。まだ鼻を嚙りながらだったが。

「それにしても、よくあの高さから落ちて無事だったわね。普通死ぬわよ?」

「あ、いえ、肉体強化を限界まで高めながら魔法でクッションを作ったんです。地面と一緒に落ちてくれたのが幸いしました」

「そうだったの……」

あの窮地で良くそれだけの芸当が出来たものだ、感心せざるを得なかった。

「……アクア先輩、無事でしょうか?」

少し間を空けて、ふと呟いた。

崖から転落する際に、ステラは確かに何体ものガルト達が岩壁の上立っているのを見ていた。

先日の群れ程多くは無かったが、アクア一人である数を相手取れるとはとても思えなかった。

「大丈夫よ。あの子はあるでしつかりしてるし、一人なら隙を突いて逃げるくらい出来るわよ」

励ますように言葉を掛けるシャルも、やはり不安は拭い切れないようだった。

「とにかく、これからどうするかを考えないとね。最悪、転移で戻る事も考えないと……」

「あの、その事なんですが……」

と、何やら言い難そうな声を返してきた。

「その、崖から落ちた際に、魔石もどこかに落としてしまったみたいで……」

「うそ！？痛たたた……！」

思わず身を起こしてしまい、痛みでまた地面に倒れた。

「……はあ、仕方無いわ。そっち方面は諦めて、皆と合流する事だけを考えましょう」

「ですが、どのように？」

ステラは不安を隠せずに首を傾げた。

「方法はあるわ。一番手っ取り早いのは念話の魔法で連絡を取る事ね。って言っても私は使えないんだけど……」

「私もです……」

「じゃあ向こうからの連絡を待ちましょう。多分リオン辺りが使えるわよ」

最終手段でイリスが使うという選択肢もあるが、光属性しか使えないという設定上それは望み薄だろう。

「それで、念話はあまり距離が遠すぎると使えないから、当初の予定通り山頂を目指すのがベストだと思うの」

「そうですね。それなら遅かれ早かれ皆さんに追い付けますし」

それに賛同して、ステラがシャルのリュックから地図を取り出す。「昨日私達が居た崖がこの辺りで、移動する際にちょうど日が沈むのが見えたので、現在地は西のこの辺りだと思えます」

「結構離れたわね。皆を追い掛けるなら大きく迂回しなきゃならないわよ。……待って」

横になりながら地図を見たシャルは、不意に何かに気付いて指差した。

「ここ、山頂付近に繋がってるんじゃない？」

シャルが指差したのは、二人の現在地からもう少し西へ行ったところにある溪谷だった。

「そう言えば、マスターさんも山脈の所々に抜け道があると仰っていました！もしここがそうなら、半日も掛からずに皆さんに追い付けそうです！」

「行ってみる価値はあるわね」

希望の光が差し込み、二人の周囲に群がっていた陰鬱な空気が晴れていく。

「じゃあ早く出発しましょう」

「い、いけませんよ、まだ安静にしなくては！」

早速身を起こして発とうとすると、ステラが慌てて止めに入った。「もう大丈夫よ。ステラのおかげでね」

「ですが……」

先程まで身すら起こせなかったのに、信じるという方が無理だろう。

しかしシャルは安静にするつもりなど毛頭無く、

「それにほら、善は急げって言うじゃない」

と言って、日の光の下へとその身を晒した。

「……急がば回れとも言つと思つのですが」

ステラは半ば諦めたように項垂れた。こうなってはもう自分では止められないと、この短い期間に理解したのだらう。

「心配しなくても無茶はしないわよ。それよりも魔物と出遭わない

事を祈りましょう」

まだ疲労の色が窺えたが、シャルは努めて常の通りに力強い微笑みを浮かべた。

それに溜め息を吐いて、ステラも立ち上がるべく膝を立てる。

「はぁ、そうですね　っ!?!」

しかし、立てた膝が突然ガクツと崩れ落ち、地面に身体を投げ打った。

「ステラ!?!」

それを見たシャルが慌てて駆け寄る。

「あ……れ……?体が……」

事態を把握出来ないように、濃い茶色の瞳に動揺の色が加わっていた。

「あなた、凄い熱じゃない!ちよつと仰向けになって!」

先程までの様子が嘘のように息を荒らげる少女に触ると、思わず手を引っ込めてしまう程に熱く、シャルは俯せになった身体を返させる。

その時、気付いた。

ステラの制服の脇腹に生じた裂け目と、暗がりに出て来た血溜まりに。

「っ!?!」

驚愕して、すぐに上着を脱がせてシャツを捲り上げた。

「うっ……!?!」

肉は大きく裂け爛れ、抉れた部分から血が湧き水のように溢れていた。

「……っ、とにかく止血しないと!」

グロテスクな光景に思わず口を覆ってしまったが、すぐに込み上げてくるモノを飲み込んで自分のリュックから治療道具を取り出した。

「まず消毒して、それから……」

以前アレンから教わった応急処置の方法を思い出すように呟きな

がら、水に濡らしたタオルで脇腹の血を拭っていく。

その最中、シャルは下唇をきつく噛み締めた。

(迂闊だった……！)

治癒魔法は、術者本人には使用出来ない。

だからこそ昨日の戦闘で負傷したステラの治療にはアクアが当たっていたのだが、その前に新手が来たのだ。治る訳が無かった。

崖から落ちた時も無傷でいられたとは思えない。それが傷をより悪化させたのだろう。

そして恐らく、自分の意識が戻った時には心配を掛けまいと血溜まりを隠して、必死に痛みを押し殺していたに違いない。

意識を失っていたとはいえ、それに全く気付かなかった自分の頭を疑った。

「……すみません、シャル先輩」

「しっかりとしなさい！謝る気力があるんなら生きる気力に廻しなさいよ！」

弱々しく微笑むステラに懸命に呼び掛けるが、想いとは裏腹に息切れは激しくなり、熱も上がっていく。

考えて見れば、昨日の戦闘からかなりの時間が経っているのだ。

今の今まで倒れずにいられた事が信じられなかった。

「……やっぱり、私って……駄目ですね……迷惑掛けて、ばかりで

……」

「馬鹿、何言ってるのよ！そんな事無いわよ！」

必死に否定するシャルに、ステラはやはり微笑を浮かべる。

「……ありがとうございます……っ、ちょっと……休みますね……」

……」

そう言うと、短く呼吸しながら眠るようにゆっくりと目を閉じた。

「ちよつと！ステラ！！」

再び叫ぶように呼び掛けたが、反応は無かった。

「……何か、何か無いの！？」

シャルは必死にリュックを漁るが、そもそも医術の心得が無いの

で応急処置が出来る程度の物しか入っていなかった事に気付いた。

「あつ……！」

ふと、拡張された空間に詰め込まれた荷物の中から、一つの小瓶が目にと留まった。

「これ、確かイリスがくれた……」

随分奥に仕舞われたそれを取り出すと、何とも無しに呟いた。

そして、小瓶の中で揺れる透き通った緑色の液体に、昨日の出来事を思い出す

「シャル、一応これも渡しとくね？」

キネリキア山に入っすべくに『冷水薬』を全員に二本ずつ配っていたイリスが、ついでにとシャルに別の小瓶を差し出した。

「……何、この見るからに怪しげな液体は？」

小瓶の先を指先で摘まんだシャルは、澄んだ緑色の液体を疑わしげに眺めながら尋ねた。

「いいからいいから。もし負傷した時に治療できる人が傍にいなかったら、騙されたと思って飲んでみて？」

「騙されたと思って、ねえ……」

全力で拒否したいが、気にもなるので一応取っておく事にする。

後でそこらの枯れ木にでもやってみようなどと考えながら。

「まっ、そんな事態にはならない事を祈るわ」

「そんな事態、なっちゃったわね……」

あの時の自分の台詞を思い出して、つい先日のやり取りなのにま

るで何年も昔の事のように感じられて嫌気が差した。

同時に、怪しげな笑みを浮かべていた少女の言葉を再び思い出す。
「騙されて、やるわよ……」

今は藁だろうが何だろうが縋り付きたい思いなのだ。怪しげな薬品だろうと試してみない事には始まらない。

シャルは小瓶を握り締め、今も尚小さく息を荒らげているステラに向き直る。

「皆と合流したら、アクアに謝らなきゃね……」

飲み易いように頭を膝に乗せ、意外と緩く塞がれた小瓶の栓を引っこ抜いた。

「それからとつとクエストを終わらせて、もう一度皆で温泉に入りましょう」

そのまま、少しだけ開いた口に小瓶の口先を宛がい、ゆっくりと傾ける。

「絶対に、死なせるもんですか」

「という訳で俺達はこのまま山頂を目指す」

襲い掛かってきたドレイクを左手に持った刀で斬り倒し、ノアが再度確認するように言った。

「抜け道か。確かにそれなら山を下るより早いかもな」

「ついでに『紅蓮華』も集められますしね」

納得しながら、アレン達は進む足を速める。

「でも、二人とも気付きますかね？地図を見た限りじゃかなりわかりづらかったですけど……」

もし気付かずに山を迂回してしまえば、近付くどころか遠ざかる

事になってしまっただろう。

「いや、シャルなら絶対気付く」

「ああ、まず間違いない」

しかし、アレンもノアもその事に全く疑いを持っていなかった。

断言した二人に、リオンは驚きにも似た不思議そうな顔をする。

「シャルは昔っからそういうの見付けるのが得意なんだよ。あんなの見逃すわけないって」

幼いあの日に神殿の隠し扉を見付けた事を思い出しながら、アレンは苦笑するように言った。

「それに、あいつはあれでそれなりに頭も回る。此方の思考を推測すれば、必ずあの抜け道を通るだろう」

「褒めるんならもつと素直に褒めてやれよ」

そして、対照的に無表情のまま続けるノアにやれやれと溜め息を吐いた。

「別に褒めたつもりは無い。それに向こうも俺にだけは褒められたく無いだろう」

ノアはそれにも変わらず無表情のまま、しかし短く鼻を鳴らした。

「まあ、そりゃそうだ。下手したら発狂するんじゃない？」

少なくとも全力で悲鳴は上げるだろうなと、アレンは苦笑した。

「……なんか、二人とも全然普通ですね」

昨日の殺伐とした雰囲気はどこへ行ったのか、リオンがふと呟いた。

「まあ、過ぎたことをいつまでも引き摺るほど俺たちはガキじゃないしな」

「そんなものですか？」

首を傾げるリオンに、ノアが視線を向ける。

「今重要なのは、迷う事でも喧嘩をする事でも無いという事だ。それに仮に引き摺るとしても、それはこいつだけだ」

「あっ、何自分だけ外してるんだよ！」

全く以て普段通りに接する二人。

そこから、リオンは視線をほんの少しだけ後ろに移す。

(こつちも一晩で治れば良いんだけど……)

視線の先、暗澹あんたんとした空気の中に身を置く少女は、輝く銀髪を前に垂らしながら最後尾を務めていた。

どうしたものかと思案するが、アレンが何もしない事から今はこれが次善の処置なのだろうと結論付け、リオンは再び前を向く事にした。

「……なあ、ノア」

不意に、アレンが周囲を見渡しながら呼び掛けた。

「さつきからやけに魔物の骨が多くないか？」

「……確かに。地面まで焦げているという事は火属性の魔物の仕業なのだろうが、数が多過ぎる。また群れか？」

アレン達が急ぎ足で進む灰色の山道の至るところに、朽ち果てた魔物の骨が散らばっていた。そして、そのどれもが所々で黒ずんでいる。

それは紛れも無く、炎が灰色の土ごと襲い掛かった跡だった。

「どうする、いまのうちに無理矢理にでもアクアを起こすか？大勢で来られたら背負いながらじゃ戦えないだろ？」

警戒心を強め、アレンはノアの背中に視線を送る。

そこには、まだ眠りから醒めないままのアクアが身体を預けていた。

「……いや、このままで良い。いざとなったら降ろして戦う」

ノアは少しだけ逡巡して首を横に振った。

「それに、そうしている間にいつらが魔物に襲われる可能性もある。二人とも負傷している筈だから今は一刻を争うべきだ」

「……そうだな。特に今のシャルじゃ、あの強いのはヤバいか……」
それに納得しながら、アレンは眉を寄せて呟いた。

「疑問だったんですけど、なんでシャル先輩の炎は効かないんですか？威力的には充分なはずですよ？」

その呟きが聞こえ、リオンはそう言えばと疑問に思っていた事を

尋ねた。

属性の相対関係では、火属性と地属性は同程度の強さの筈だ。しかし通常の強さのガラムにさえ、シャルは全力の炎で挑んでいた。否、挑まなければ勝てなかったのだ。

共に戦ったリオンがそれに疑念を抱くのは当然だった。

「……これを知っているのは、基礎学院から一緒に連中と教員のみだが」

「ノア！」

徐に口を開いたノアに、アレンが即座に割って入った。

「流石にこの状況では話さざるを得んだろう。それに、最初から成果が見えなかったら話す予定だった筈だ」

「……ああもう、わかったよ！俺から話す！」

しかし、結局刺すような言葉に観念したように、頭を掻きまわった。「えっと、話が見えないんですけど？」

益々訳が解らないといった風に首を傾げるリオンに眉を寄せながら、アレンは口を開いた。

「……あいつは、シャルは、魔法が使えないんだよ」

その言葉を、リオンはすぐには理解出来なかった。

「魔法が使えない？だって現に……」

シャルは何も無いところから炎を生み出し、操っている。

それは紛れも無い事実で、もしそうでないのならリオンは幻覚でも視ていた事になる。

しかし、顔を顰めるリオンに、アレンは歩を進めながら首を振る。「あれは、言ってみれば炎を垂れ流してるだけなんだよ。魔法の定義、覚えてるよな？」

「魔法の定義……」

魔法とは、魔力の性質を変化させる事で引き起こされる現象を指す。

そして、魔力の性質変化は、属性と効果の二つに分類される。

「シャルは、その内の属性までしか完璧に変化出来ないんだ」

後天性不完全魔法症。

後天的に属性、効果のどちらか、或いは両方を性質変化出来なくなる病で、大概は大きなトラウマが原因となっている。

トラウマを克服しても治らない症例もある事から、今のところ明確な治療法は判明していない。

「最近火の玉とか槍みたい簡単な形状変化なら出来るようになったけど、最初の頃は属性変化も出来なかったから一時期は学園自体辞めるかって話になってさ。上級学院に上がる時も魔法学部はやめとけって言われたぐらいなんだよ」

魔法が使えない。

この世界では全ての人々がアレン達のように自在に魔法を使える訳では無いし、魔法を使わない職業も数多く存在する。

しかし、『火の一族』たる大貴族イグニス家に生まれた者にとつて、その事實は翼をもがれた鳥に等しかった。

「魔法での攻撃は剣等の物理的な物とは勝手が違うからな。中身の伴わない不完全な魔法では、下級の魔物ならまだしもあのレベルの相手に通用しないのは当然だ」

「じ、じゃあSクラスなんて受けること自体無茶じゃないですか！」

ノアの淡々とした言葉に、リオンは思わず声を上げてしまった。

「それでも無茶をやる価値はあったんだよ。火の加護が強いこつちなら、何かの切っ掛けぐらいにはなってくれる可能性があったからさ。だから教官や学園長も許可してくれたんだと思う」

精霊の加護は、人間に様々な影響を与えている。

自身の授かる加護が特に強い土地では、普段よりも魔法の威力や自己治癒力が上がり、重い病が治った例もあった。

だからこそ、今回のクエストはシャルの治療という名目も兼ねて

いたのだ。もつとも、アルベルトが挑発などしなければ受ける事も無かったのだが。

「……それでも、やっぱり無茶ですよ。そんな状態で魔物と戦うなんて……」

疑問は解けた。それでも敢えてここに来た理由も判った。

しかし、やはりリオンには、危険を犯してまでそうする意味は理解出来なかった。

「……あいつはさ、リオン」

まだ納得していないリオンに、アレンは視線と声だけを向けて話す。

「一回完全に魔法が使えなくなつて、こうやって話しても伝わらないぐらいすげえ辛い思いしたんだけどさ」

突然失つた力に、戸惑わない筈が無い。

幾度も呼び掛け、喉が干切れる程に叫んだ。

それでも、緋の灯火は応えてくれなかった。

「ある事件が切っ掛けでまた炎を出せるようになって、それでも魔法部の先生にウチには入れないって言われた時に、どうしたと思っ？」

「……どうしたんですか？」

訝しむ少年に振り向いたアレンは、ニヤリと笑った。

「『入学試験で魔法学の実技以外全てSランクを取ったら入学を許可して下さい』って条件突き出したんだよ」

「それって、首席レベルじゃないですか……！」

数えるのも馬鹿らしくなる程の人数の新入生の中でトップの成績を修める。そんな生徒を、学園側も逃す手は無いだろう。

「しかも今魔法学部ってことは……」

「もちろんオールSランク。実技ですらあの状態でAランクだったよ。あり得ねえだろ？」

楽しそうに、アレンは苦笑する。

「あいつはそういう奴なんだよ。無茶だろうが何だろうが、やると

決めたら必ずやり抜く。不完全魔法症だっけいつか必ず治してみせるって、入試の時の面接官に宣言したらしいしな」

「……命の危険を伴っても、ですか？」

まだ顔を顰めたまま、リオンは呟いた。

何故、そこまで出来るのか。

魔法が使えないなら、使えないならの生活をすれば良い。

確かに大貴族である以上何かしらの不都合は生じるだろうが、それでも死ぬよりはマシな筈だ。

「だって、たった一つの命なんですよ？魔法が使えなくなったら死ぬわけじゃないのに、わざわざ死に急ぐような真似しなくて良いじゃないですか！」

「たった一つの、命だからだよ」

いつの間にか荒らげていた声に被せるように言い放ったアレンは、立ち止まって今度は身体ごと振り向いた。

そしてそのまま、何かを思い出すように目を閉じた。

「あの時の、魔法が全く使えなくなった時のシャルはさ、死ぬより辛そうな眼をしてたんだ」

瞼の裏に浮かんだのは、暗い部屋に閉じ籠もり、膝を抱えて俯いている幼馴染みの姿だった。

「確かにさっさと諦めて魔法を使わない生活に入っちゃえば、今回みたいに命を危険に晒すこともなかったろうな。でもさ、あいつにとってそれは生きてるって言えないし、俺もあれをそうとは思えない」

再び現れた金色の瞳が、リオンの暗緑色の瞳をまっすぐに捉える。

「たった一度の短い人生で、もうあんな思いはしたくない。だからあいつは、たった一つの命を削って、今を必死に生きてるんだよ」

ほんの少しだけ、風が弱々しくその場を横切った。

それに合わせて、暫しの沈黙が訪れる。

「……って、最後のはほとんど受け売りみたいなもんだけだな」
風が止むと同時に、アレンは表情を崩した。

「受け売り、ですか？」

「そつ。大体俺がそんな『人生説く』みたいなこと言えるわけないだろ？まだ十六だつての」

先程までの真面目な雰囲気はどこ吹く風、アレンはいつもの気楽な笑顔で手をひらひらさせる。

「それに、不完全な魔法しか使えないあいつを護る為に俺達がいるんだし……ってまあ、説得力ないか」

今度は苦笑いを浮かべながら、無言を貫いていたノアに視線を向けた。

それを受けて短く鼻を鳴らしたノアは、止めていた足を目の前にある坂道に向けて進める。

「抑、そもそも本来この山の魔物程度なら問題は無かつたんだがな」

Sクラスと言つてもそれはあくまでも学生用に指定されたレベルであり、殆どの魔物が下級と中級のこの山は実際にはBクラスの上位程度に指定されている。

そのランク付けも上級の魔物が確認されたからであつて、それさえ無ければせいぜいCクラス、学生用ならBクラス上位程度の物だつた。

ところが、例の凶暴化した魔物達である。

予想を遙かに上回るあの強さは、もはや一般用のSクラス近い危険度を持つていたのだ。

「まあ凶暴化のこともあるし、さつさと二人と合流しますか。もうすぐ山頂だしな」

気を取り直して、アレンは先へ進むノアに続いて坂道を登つていった。

「……やっぱり、僕にはわかりませんよ」

その後ろで物憂げな表情をしたリオンは、誰にも聞こえないくらい小さく呟いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5423q/>

銀色の虹の果てに

2011年12月29日03時55分発行